牛頸ハセムシ窯跡群 I

福岡県大野城市大字牛頸所在窯跡群調査報告

大野城市文化財調査報告書
第23集

1988

大野城市教育委員会

牛頸ハセムシ窯跡群 I

福岡県大野城市大字牛頸所在窯跡群調査報告

大野城市文化財調査報告書
第23集



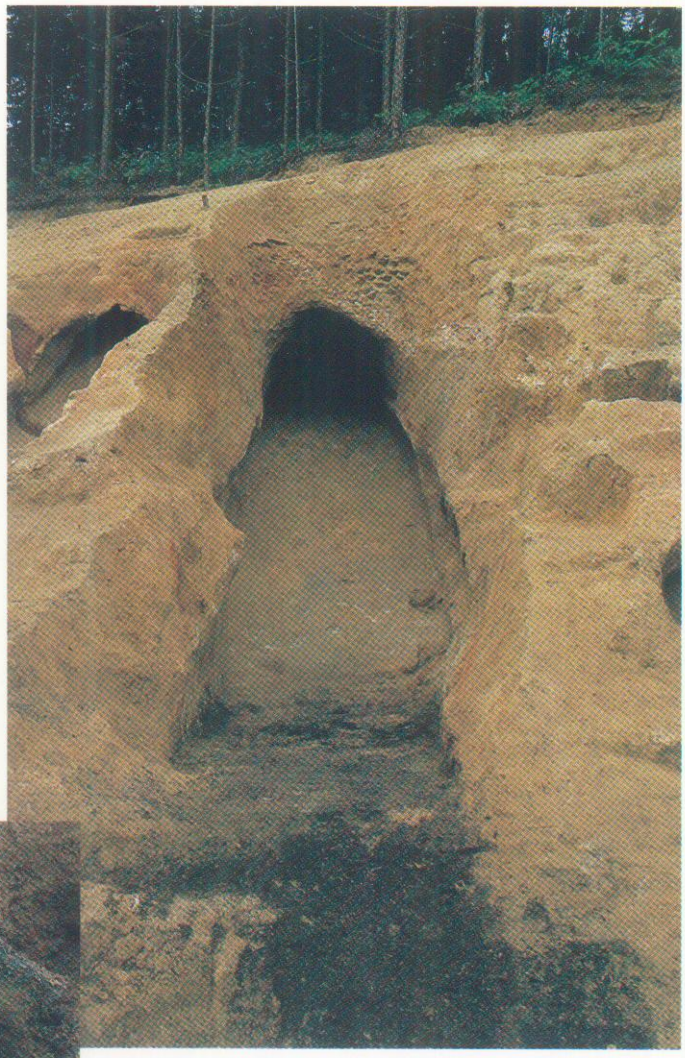
18地区全景



18—Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ号窯全景



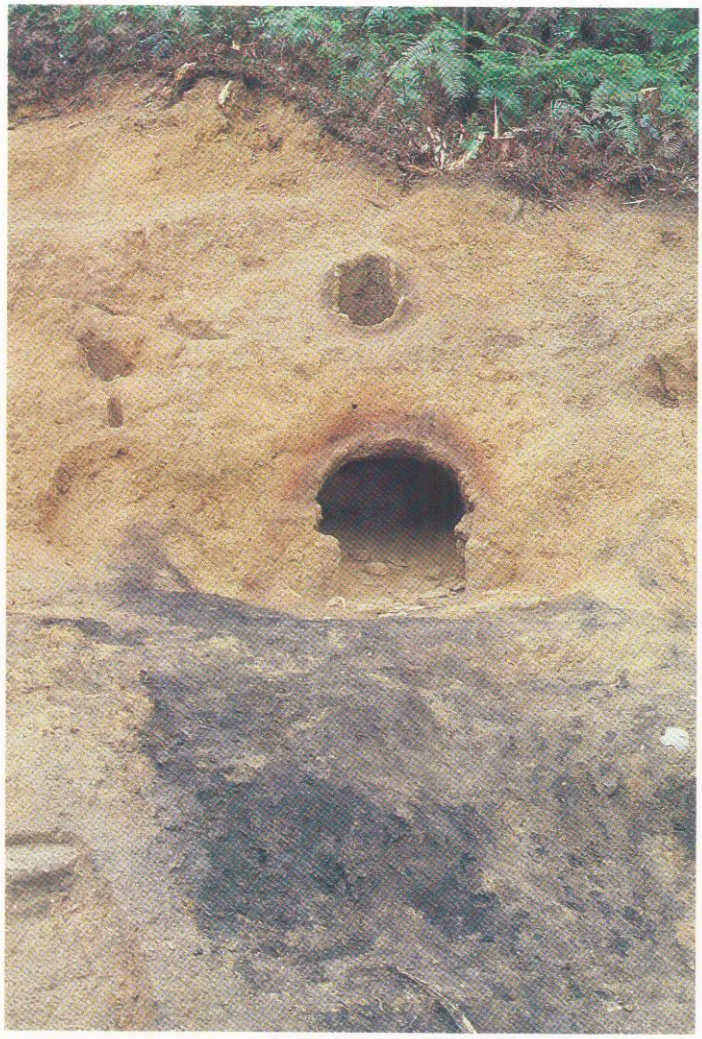
18—Ⅵ、Ⅶ号窯全景



18－Ⅰ号窯全景



19号窯
煙道(煙突)部分たちわり細部



18—Ⅲ号窯全景 ▶

18—Ⅲ号窯焚口閉塞部分
▼





20—Ⅲ号窯、Ⅵ号土坑全景 ▲



◀ 20—Ⅲ号窯
舟底ピットと焚口側壁

（右側壁の焼土の状況から
焚口のほのおの状態が推定される）

序

ハセムシ窯跡群は平野中学校と大野貯水池間の丘陵に存在する窯跡群です。この丘陵が39haにわたって宅地造成されることになり、それに先立ち昭和62年7月に第1回めの調査を実施しました。この報告書はその調査の結果を記したものです。

ハセムシ窯跡群の属する牛頸窯跡群はその規模の大きさから北部九州のみならず全国的に見ても有数の窯跡群で、調査も数多く行われていますが、陶邑等に比べて実態がよくわからないという研究者の声も聞きます。これは牛頸窯跡群のほとんどを占める本市においてその努力が足りないということもあげられますが、調査・報告が各行政体、大学ごとに行われて統一体制のないことが最大の原因と考えられます。

このたび須恵器、窯跡の研究者として著名な大谷女子大学助教授中村浩先生に調査をお願いしたのは、牛頸窯跡群が正当な評価を得られるようにとの希望からでした。ハセムシ窯跡群の調査はまだ続きますが、調査が進むにつれハセムシ窯跡群の全容がつまびらかになるものと期待しています。

最後に調査を快諾され、困難な仕事に当たっていただいた中村先生、および学生諸氏、遠路お見えいただいた福井大学教授中村正志先生、大阪夏原技研夏原信義氏、調査費を負担され、また調査に最大限の便宜を図られた（株）西洋環境開発、そして（株）鹿島建設、更に地元牛頸区の皆様に対して心から感謝の意を表するしだいです。

昭和63年3月31日

大野城市教育委員会

教育長　久　野　英　彦

例　　言

一、本書は昭和62年７月から同年８月まで実施した福岡県大野城市所在牛頸窯跡群の発掘調査の報告書である。

一、調査は、大野城市教育委員会舟山良一、大谷女子大学中村浩が担当した。調査体制および調査補助員など参加者については後に掲げる。

一、遺物整理は、昭和62年９月から63年３月まで、大谷女子大学資料館において実施した。

一、遺物は、通し番号とし図版での統一をはかった、なお挿図は、この限りではない。

一、遺物写真は阿南辰秀氏の協力を得た。

一、本書の執筆は、各担当者が行い、各々文末に名前を記した。なお用語は原則として執筆者の意見に従っているが、一部統一したものもある。編集は、中村が行い、大谷女子大学資料館職員海住智子、同嘱託広田実の協力を得た。

本 文 目 次

序、例言

第1章　調査経過……1

1．調査に至る経過

2．発掘調査の経過

3．遺物整理の経過

4．日誌抄

第2章　位置と環境……9

第3章　遺跡の調査……14

1．調査遺跡の概観

2．各地区の調査

(1)　18地区の調査

①　分布の状況

②　須恵器窯跡

1）18—Ⅰ号窯跡　2）18—Ⅱ号窯跡　3）18—Ⅲ号窯跡　4）18—Ⅴ窯跡

5）18—Ⅵ号窯跡　6）18—Ⅶ号窯跡　7）18—Ⅷ号窯跡

③　土坑およびその他の遺構

1）18—Ⅳ号土坑　2）18地区下方灰原　3）18地区灰原のピット

(2)　19地区の調査

①　分布の状況

②　須恵器窯跡

1）19号窯跡

(3)　20地区の調査

①　分布の状況

②　須恵器窯跡

1）20—Ⅰ号窯跡　2）20—Ⅱ号窯跡　3）20—Ⅲ号窯跡

③　土坑およびその他の遺構

1）20—Ⅳ号土坑　2）20—Ⅵ号土坑　3）20—Ⅴ号窯（焼土坑）

第4章　出土遺物……50
1．概観
2．遺物観察
第5章　牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定……75
1．考古地磁気年代推定の原理
2．試料の採取と測定
3．熱残留磁気側定結果
4．推定年代
あとがき……82

図　版　目　次

カラー図版１　18地区全景．18—Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ号窯全景．18—Ⅵ、Ⅶ号窯全景

カラー図版２　18—Ⅰ号窯全景．19号窯煙道（煙突）部分たちわり細部

カラー図版３　18—Ⅲ号窯全景．18—Ⅲ号窯焚口閉塞部分

カラー図版４　20—Ⅲ号窯、Ⅵ号土坑全景．20—Ⅲ号窯舟底ピットと焚口側壁

図版１　遺構実測図　18—Ⅰ号窯遺構実測図

図版２　遺構実測図　20—Ⅲ号窯遺構実測図

図版３　遺物実測図　18—Ⅰ号窯煙出し右排水溝埋土中．窯体内最終ベース上．窯体内出土遺物

図版４　遺物実測図　18—Ⅰ号窯窯体上遺構出土遺物

図版５　遺物実測図　18—Ⅱ号窯窯体内最終ベース上．窯体内埋土中．焚口灰原灰層中出土遺物

図版６　遺物実測図　18—Ⅲ号窯窯体内最終ベース上出土遺物

図版７　遺物実測図　18—Ⅲ号窯灰原灰層中出土遺物

図版８　遺物実測図　18—Ⅲ号窯灰原灰層中出土遺物

図版９　遺物実測図　18—Ⅲ号窯北拡張部．灰原灰層中出土遺物

図版10　遺物実測図　18—Ⅲ号窯右側灰原灰層中．前方灰原灰層中．灰原灰層中出土遺物

図版11　遺物実測図　18—Ⅲ号窯灰原灰層中出土遺物

図版12　遺物実測図　18—Ⅴ号窯窯体内最終ベース上．窯体内埋土中出土遺物

図版13　遺物実測図　18—Ⅴ号窯焚口埋土中．灰原灰層中．18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中出土遺物

図版14　遺物実測図　18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中出土遺物

図版15　遺物実測図　18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原採集遺物

図版16　遺物実測図　18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原採集遺物

図版17　遺物実測図　18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中出土遺物

図版18　遺物実測図　18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中出土遺物

図版19　遺物実測図　18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中出土遺物

図版20　遺物実測図　18—Ⅵ号窯窯体内最終ベース上．窯体内埋土中．灰原灰層中出土遺物

図版21　遺物実測図　18—Ⅶ号窯窯体内焚口付近．下方灰原採集出土遺物

図版22　遺物実測図　18—Ⅷ号窯窯体内最終ベース上．窯体内埋土中．灰原灰層中出土遺物

図版23　遺物実測図　18地区灰原Ａ区、Ｂ区、Ｃ区出土遺物

図版24　遺物実測図　18地区灰原Ｄ1区出土遺物

図版25　遺物実測図　18地区灰原採集遺物

図版26　遺物実測図　18地区下方灰原採集．灰原採集遺物

図版27　遺物実測図　18地区灰原採集．19号窯窯体内最終ベース上．窯体内埋土中．灰原採集遺物

図版28　遺物実測図　20—Ⅰ号窯下層ベース上．窯体内最終ベース上．窯体内埋土中．灰原採集遺物

図版29　遺物実測図　20—Ⅱ号窯体焚口．灰原灰層中．灰原採集．20—Ⅲ号窯灰原採集遺物

図版30　遺物実測図　20—Ⅲ号窯体内最終ベース上出土遺物

図版31　遺物実測図　20—Ⅲ号窯１次床面．２次床面．窯体内舟底ピット（第７．８層）窯体内埋土中．灰原灰層中出土遺物

図版32　遺構写真　18地区伐採後．19地区伐採後．17地区伐採後

図版33　遺構写真　18地区遠景．18—Ⅵ、Ⅶ号窯遠景

図版34　遺構写真　18地区遠景．18地区下方灰原

図版35　遺構写真　18—Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ号窯遠景．18—Ⅵ、Ⅶ号窯遠景

図版36　遺構写真　18地区遠景．18—Ⅴ号窯

図版37　遺構写真　窯体内（埋土）セクション（18—Ⅷ、Ⅵ、Ⅴ、Ⅱ、20—Ⅰ、Ⅱ）

図版38　遺構写真　18—Ⅰ号窯全景．たちわり後全景

図版39　遺構写真　18—Ⅰ号窯窯体上遺構

図版40　遺構写真　18—Ⅰ号窯窯体上遺構Ｂ—Ｂ′ライン断面．未焼成土器群

図版41　遺構写真　18—Ⅱ号窯遠景．同全景

図版42　遺構写真　18—Ⅲ号窯遠景．同全景

図版43　遺構写真　18—Ⅵ号窯全景．18—Ⅶ号窯全景

図版44　遺構写真　18—Ⅷ号窯全景．たちわり後全景

図版45　遺構写真　18—Ⅷ号窯焚口部側景．焚口部下層ピット

図版46　遺構写真　煙道たちわり（18—Ⅱ、Ⅵ、19号窯）

図版47　遺構写真　18—Ⅳ号土坑全景．Ｂ—Ｂ′ライン断面．Ａ—Ａ′ライン断面

図版48　遺構写真　19号窯全景．たちわり後

図版49　遺構写真　19号窯最終ベース上土器群

図版50　遺構写真　調査前（20地区、19地区）

図版51　遺構写真　20—Ⅰ、Ⅱ号窯煙道部．たちわり後全景

図版52　遺構写真　20—Ⅰ号窯全景．焚口部側景．焚口細部

図版53　遺構写真　20—Ⅱ号窯全景．たちわり後全景

図版54　遺構写真　20—Ⅲ号窯全景及びⅥ号土坑．Ⅳ号土坑

図版55　遺構写真　20—Ⅳ土坑全景．Ⅵ号土坑全景

図版56　遺物写真　18—Ⅰ号窯窯体内最終ベース上．窯体内．窯体上遺構出土遺物

図版57　遺物写真　18—Ⅰ号窯窯体上遺構．18—Ⅱ号窯窯体内最終ベース上．窯体内埋土中．18—Ⅲ号窯窯体内最終ベース上出土遺物

図版58　遺物写真　18—Ⅲ号窯灰原灰層中出土遺物

図版59　遺物写真　18—Ⅲ号窯灰原灰層中．北拡張部出土遺物

図版60　遺物写真　18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中出土遺物

図版61　遺物写真　18—Ⅲ号窯灰原灰層中．18—Ⅴ号窯窯体内最終ベース上．18—Ⅴ号窯窯体内埋土中．

18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中出土遺物
図版62　遺物写真　18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中．灰原採集．18—Ⅵ号窯窯体内最終ベース上．窯体内埋土中出土遺物
図版63　遺物写真　18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中出土遺物
図版64　遺物写真　18—Ⅵ号窯灰原灰層中．18—Ⅶ号窯窯体内焚口付近．18—Ⅷ号窯窯体内最終ベース上．窯体内埋土中．18地区灰原Ａ区出土遺物
図版65　遺物写真　18地区灰原Ａ区．Ｂ区．Ｃ区．Ｄ1区出土遺物
図版66　遺物写真　18地区灰原採集．19号窯窯体内最終ベース上．窯体内埋土中．20—Ⅰ号窯窯体内埋土中．20—Ⅲ号窯窯体内最終ベース上出土遺物
図版67　遺物写真　18地区灰原Ｄ1区．灰原採集．下方灰原採集．19号窯窯体内最終ベース上出土遺物
図版68　遺物写真　20—Ⅱ号窯焚口．灰原灰層中．灰原採集．20—Ⅲ号窯灰原採集．窯体内埋土中出土遺物

挿　図　目　次

図1　調査作業風景
図2　調査作業風景
図3　調査作業風景
図4　遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図
図5　18地区地形図
図6　18—Ⅰ号窯煙道部およびたちわり写真
図7　18—Ⅰ号窯未焼成土器の一群
図8　18—Ⅰ号窯窯体上遺構実測図
図9　18—Ⅰ号窯出土遺物拓影および実測図（須恵器、甕）
図10　18—Ⅱ号窯遺構実測図
図11　18—Ⅲ号窯遺構実測図
図12　18—Ⅴ号窯遺構実測図
図13　18—Ⅵ号窯遺構実測図
図14　18—Ⅶ号窯遺構実測図
図15　18—Ⅷ号窯遺構実測図
図16　18—Ⅳ号土坑遺構実測図
図17　18—Ⅳ号土坑出土遺物
図18　18地区灰原横断、縦断セクション実測図
図19　重ね焼の状況（熔着遺物）

図20　19地区地形図
図21　19号窯遺構実測図
図22　20地区地形図
図23　20－Ⅰ号窯遺構実測図
図24　20－Ⅱ号窯遺構実測図
図25　20－Ⅲ号窯舟底状ピット実測図
図26　20－Ⅳ号土坑遺構実測図
図27　20－Ⅳ号土坑出土遺物実測図
図28　20－Ⅵ号土坑遺構実測図
図29　20－Ⅴ号窯遺構実測図
図30　西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた過去2000年間の地磁気永年変化

表　目　次

表1　牛頸周辺遺跡地名表
表2　牛頸ハセムシ窯の残留磁化測定結果
表3　牛頸ハセムシ窯の考古地磁気測定結果
表4　九州地方の須恵器窯の考古地磁気測定結果

第1章　調査経過

1．調査に至る経過

平野中学校の南36haの開発計画が持ち上がったのは昭和60年のはじめであった。本市教育委員会はその年の末から開発施主である（株）西洋環境開発（当時は西武都市開発）と協議を重ねることとなった。当該地には『福岡県遺跡等分布地図』によればハセムシ1～4号窯跡と井手1～3号窯跡が記載されているだけであったが、その南西で行われている県営牛頸ダム築造に伴う調査で窯跡が数十基（最終的には約70基）検出されていたため、相当数の窯跡の存在が想定された。61年1月には会社から発掘届の提出があった。教育委員会としては窯跡の員数が不明では調査期間、予算ともに算定できないためまず分布調査が必要あると回答した。そのため61年5月に5日間にわたって分布調査を行った。その結果、窯跡がほぼ確実にあるだろうと思われる所が11カ所、可能性のある地点が4カ所、更に平安時代の祭祀遺構の可能性が考えられる所1カ所をリストアップした。その年の12月に開発計画の事前審査会が大野城市役所で開かれた。開発面積は最終的に39haとなった。当時教育委員会では牛頸土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査を昭和57年から継続して行っていたし、住宅建築に伴う国庫補助関係の調査、整理を数多くかかえていたため、調査にとりかかれるのは早くとも62年秋頃であろうと考えた。しかし、その予定も牛頸の土地区画整理事業の進展によっては更に遅らせなければならない状況だった。そこで、62年春になって、須恵器の研究者として著名な大谷女子大学助教授中村浩先生に調査応援の可能性について問い合わせたところ、長期休暇の間ならば可能とのご返事をいただいた。そのため、さっそくその年の夏休みに来ていただこうということで、中村先生、教育委員会、（株）西洋環境開発の間で協議を行った。その結果、本調査は7月1日から8月初めまでの予定とし、6月中旬に調査地点を確定するための試掘を行うという方針を決定した。

調査に際しては中村先生の所属する大谷女子大学の学生はもちろん、早稲田大学、九州大学の学生、院生、研究生、そして韓国からの留学生にも参加していただいた。先生にはもちろん遠くから来ていただいた学生諸氏、地磁気の測定をお願いした福井大学中島正志先生、大阪の夏原信義氏に心から感謝したい。また、調査に全面的にご協力いただいた（株）西洋環境開発、（株）鹿島建設、各種便宜を図っていただいた地元牛頸区の皆様にも厚く感謝したい。

調査体制は以下のとおりである。

大野城市教育委員会	教育長	久野英彦
同	教育部長	池田嘉門
同	社会教育課長	船越美直

同	社会教育課長補佐	青木克正
同	社会教育課主査	高橋裕司
同	社会教育課技師	舟山良一
同	社会教育課技師	向　直也
同	嘱託	徳本洋一
同	嘱託	秀嶋和子

現地調査

大谷女子大学	助教授	中村　浩
同	卒業生・学生	
	藤野　辰美・山口弘美子	
	恩知　志江・南　美千子	
	岡田　朋美・宮崎　知子	
	寿崎めぐみ・西岡　　直	
	池辺巳智代・西村　典枝	
	吉方　裕子・安井かをり	
早稲田大学	大学院生	網　　伸也
	学生	余語　琢磨
九州大学	大学院生	郭　　錘喆
	聴講生	中島恒次郎
	学生	太田　　睦
孝古地磁気測定		
	福井大学助教授	中島　正志・長谷川千恵
	夏原技研	夏原　信義

遺物整理（現地調査と重複する者は除く）

大谷女子大学	資料館館長	小川　修三
同	職員	海住　智子
同	嘱託	広田　　実
同	学生	
	芦田　早苗・東　　尚美	
	池田　晴美・大杉　知子	
	清原　敬子・中野　純子	
	渡辺喜美子　他	
写真家	阿南　辰秀　他	

2. 発掘調査の経過

7月1日、ハセムシあるいは通称ハゼムシ地区の須恵器窯跡発掘調査の開始。調査資材の搬入を行う。ダム工事によって新たに進入路ができており、この道に最も近い18地区から調査を開始することになった。すでにトレンチで窯跡の位置の確認は行っているが、それが全てではない。伐採後の状況は、それ以前とは大きく異なっている場合が多いのである。調査前の現状の写真撮影を行ったのち、重機（ユンボ）によって表土除去作業が開始された。まもなく窯跡の一部と見られる焼土が確認された。

当初から複数の窯跡が所在するものと考えており、予想通りの状況となった。このため窯跡の名称については、確認された順に18—Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ……号窯跡と呼称することにし徹底をはかった。従って18—Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ…は各々の形成順ではない。表土除去作業は3日には、ほぼ完了した。やがて全体の清掃を経て、窯体の検出作業にとりかかった。

18—Ⅰ号窯跡は、調査を進めていく過程で、かなり深い位置に埋っていることが明らかとなった。また後出段階の窯跡が上部に構築されている可能性もあったので、これについては後回しにし、まず上層部分に位置する窯跡の調査を行った。

窯の構築あるいは廃棄か、放棄かの判断を行うために窯体内にセクションを設定した。まずⅡ号窯跡について、実施した。この過程を経て全体を検出することができたのは、着手以来5日目のことであった。同じく平行して作業を進めたⅢ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ号窯跡についても同様に進行していった。



図1　調査作業風景

なお調査期間中は、集中豪雨こそなかったが梅雨末期特有の天候に妨げられ、充分な進渉状況ではなかった。18地区の調査が進んでいくうちに、先行して19地区、17地区、20地区の各々立ち木の伐採が行われていった。

18—Ⅳ号については、窯跡ではなく土坑であることが明らかになった。しかし窯跡との関係は明らかであることから、平行して調査の結果は、後で記述するが、内部からは須恵器の未焼成品なども出土しており、また時期が前後して２つの土坑が重複することなどが確認された。

調査開始から10日目には19、20地区の表土除去作業が開始された。この間、18地区窯跡調査が完了した人員が、それらの担当として従事した。19地区では当初マークされていた個所から灰の痕跡が認められていたこともあり、トレンチで確認した部分とともに調査を行った。しかし灰状のものはごく一部分にしか認められず、かつ炭、遺物の包含が認められなかった。従って、これらは窯跡に伴う痕跡ではないと判断し、この時点で調査を打ち切った。このような状態のものは、16地区でも同様で、黒い灰状の堆積物が認められたが、いずれも窯跡とは全く関係のないものであった。

また17地区については表土除去後、同様にトレンチを設定して遺構、遺物の確認に努めたが、僅かに流入遺物と見られる須恵器の細片が見つかったのみで、とくに窯跡などは確認されなかった。

19地区では表土除去の後窯跡の検出を開始した。この結果、１基の須恵器窯跡が確認された。規模は比較的小型のもので、排水溝を伴う登窯である。これにともなう灰原は自然流出のため失われており、僅かに焚口部分で、その堆積の一部を確認したにとどまった。

20地区についての表土除去が予定より、若干遅れたが７月22日に漸く完了し、窯体検出作業を開始した。これにより、Ⅰ、Ⅱ号窯跡を確認した。これらは近接して平行に位置していた。とくに両者ともに天井部が当初残存していたが、内部の埋土を除去するのと同時に崩落し危険があったので、いずれも天井部を除去して調査を進めた。また両窯跡より離れてⅢ号窯跡が確認された。しかし当該窯跡の表土除去範囲が遺構面より小さかったため、追加して伐採、及び表土除去作業を実施した。この作業の完了をまって窯体部分の調査を開始した。

18—Ⅰ号窯跡は、最も深い位置にあったため調査が遅れていたが25日から本格的に開始した。地山がもろいため検出作業は天井部分の除去と平行して進めた。とくに窯体上遺構の存在が明らかとなった。これは焼成が開始される以前の状態で確認されたものと考えられるものである。これは未焼成土器の検出、粘土塊の確認などがあり、

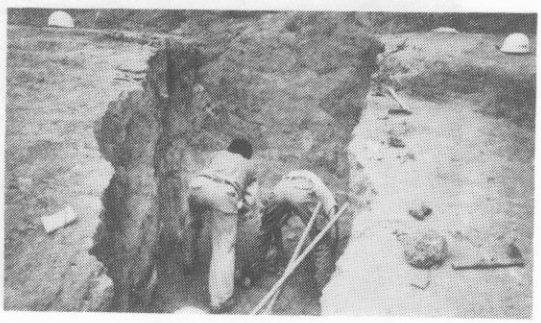


図２　調査作業風景

今後の議論に話題を与えるものと考えられる。18、19、20地区の地形測量を実施し、さらに地磁気測定についても18—Ⅲ号窯跡を除く大半の窯跡について完了した。

18、19、20地区の各窯跡について調査作業が、ほぼ完了した8月2日に現地説明会を行った。当日はあいにくの天候であったが、地元の方々始め多数の見学者で賑わった。

なお20地区については、その後天候の回復を待ちながら調査を断続的ではあったが進めた結果8月14日をもって全て完了し徹収を終えた。

3. 遺物整理の経過

発掘調査が完了後、遺物整理の作業を大阪大谷女子大学資料館で実施することとなり、これに伴う委託契約の締結後本格的な作業を開始した。とくに整理作業の委託に当っては次の点を作業の目安とした。すなわち1、水洗は全ての遺物を対象とする。2、註記は、原則として細片は除くこととする。この細片とは、完形に復元した場合の4分の1以下を一応の基準とし、器形が少ないものやとくに重要なものについてはこの範囲外とする。3、復元の範囲についても2、に準じて行うものとする。4、実測、観察の実施対象については、3の範囲を超えないものとして行う。以上が大まかな実施項目である。もちろんこの内容は、当然実施すべき最小限の内容であることは論をまたない。

これらの要項にしたがって行った整理作業は、ほぼ年度一杯にあたる3月末にまで及んだ。この内容は、すべて本書の中に盛り込むように努力したが、明年度にも同地域の窯跡調査が計画されており、重複をさけるためあえて結論部分についてはこれに譲り、事実報告のみ行ったことは否めない。読者諸氏の諒解を乞う次第である。

4. 日誌抄

昭和62年（1987）

7月1日　ハセムシ18地区表土除去（上半部分）。7基の窯及至は遺構確認。写真撮影（作業着手前・上半部分表土除去後）。Ⅲ号窯灰原灰層中遺物採集。蓋杯、Ⅲなど小型遺物集中。

2日　天候不順のため現場作業行えず。状況視察。写真撮影（現状）。

3日　ハセムシ18地区表土除去完了。清掃作業（Ⅰ～Ⅲ号窯）。窯体検出作業（以下18—Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ号窯とする）。Ⅰ号窯とⅢ、Ⅴ号窯（以下18—Ⅴ号窯とする）との間に炭の堆積および熱を受けた痕跡確認。写真撮影（18—Ⅰ・調査状況）。18—Ⅲ、Ⅴ号窯灰原灰層中遺物出土。

4日　18—Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅵ、Ⅶ号窯窯体検出作業。18—Ⅱ号窯窯体内セクション設定、床面検出。窯体内埋土中、ベース上遺物出土。18—Ⅲ号窯床面検出。灰原灰層中出土遺物採集。写真撮影（18—Ⅰ′、Ⅱ号窯）。午後、天候悪化のため現場作業行えず。中村勝氏、酒井氏（西洋環境開発）来訪。

5日　18—Ⅰ号窯天井部の一部検出、拡張。18—Ⅱ号窯窯体検出ほぼ完了。割り付け、18—Ⅲ号窯窯体検出、写真撮影。窯体内埋土中、焚口から前庭部での出土遺物の一部と灰原灰層中出土遺物採集。18—Ⅴ号窯窯体側壁線確認、窯体検出作業開始。18—Ⅵ号窯窯体検出ほぼ完了。窯体内セクション実側。18—Ⅶ号窯窯体検出作業。18—Ⅵ、Ⅶ号窯窯体内埋土、終ベース上遺物出土。写真撮影（18—Ⅵ、Ⅶ号窯窯体内セクション）。

6日　18—Ⅱ号窯実測。清掃、終ベース上遺物検出。写真撮影。18—Ⅳ号土坑を確認。18—Ⅴ号窯窯体内セクション設定。写真撮影。18—Ⅵ、Ⅶ号窯割り付け写真撮影。18—Ⅳ号土坑、18—Ⅴ号窯窯体上方より遺物出土。

7日　天候不順のため現場作業行えず。

8日　18地区清掃及び各窯跡の精査。18—Ⅱ号窯実測図補足、レベリング完了。18—Ⅳ号土坑下層に新たに土坑を確認。18—Ⅴ号窯窯体内側壁補修痕確認。窯体内流れ込み木材の採取。18—Ⅵ、Ⅶ号窯実測図のレベリング完了。18—Ⅱ号窯終ベース上・18—Ⅳ号土坑・18—Ⅴ号窯窯体内埋土・終ベース上・焚口・灰原に遺物出土。

9日　18地区全域清掃。丘陵下端堀り下げ。遺構確認されず。18—Ⅲ号窯割り付け、実測作業。写真撮影（18—Ⅴ号窯）。18—Ⅵ、Ⅶ号窯灰原出土遺物採集。

10日　18地区丘陵下方清掃。18—Ⅳ号土坑実測作業。18—Ⅲ号窯実測図完了、レベリング。18—Ⅴ号窯割り付け、写真撮影。19、20地区表土除去。18—Ⅵ、Ⅶ号窯灰原、20地

区表土遺物採集。

11日　18—Ⅵ、Ⅶ号窯実測作業、18—Ⅴ号窯割り付け、実測作業。写真撮影（Ⅳ号土坑）。19地区表土除去。上方部で灰原確認。福岡市教育委員会吉永氏他３名来訪。

12日　18—Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ号窯エレベーション図完成。19地区窯１基のみ確認。（以下19号窯とする）

13日　18—Ⅳ号土坑、切り合い関係を確定し、ベルトを残し堀り下げる。写真撮影。18—Ⅱ号窯終ベース、18—Ⅳ号土坑埋土出土遺物採集。20地区表土除去。

14日　天候不順のため現場作業行えず。

15日　ＢＭからレベル移動。全体写真撮影。灰原セクション設定。

16日　18—Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ号窯たち割り、割り付け。灰原Ａ、Ｂ、Ｄ区出土遺物採集。

17日　18—Ⅱ、Ⅵ、Ⅶ号窯たち割り。18—Ⅲ号窯実測図補足完了、清掃。灰原Ａ、Ｂ区遺物採集。途中降雨のため中止。

18日　18—Ⅱ号窯たち割り、焚口を除き完了。写真撮影。18—Ⅲ、Ⅴ号窯たち割り作業。18—Ⅳ号土坑清掃、実測作業。写真撮影。18—Ⅵ、Ⅶ号窯たち割り完了。写真撮影。19号窯、実測作業。レベリング。全体写真撮影。18—Ⅲ号窯窯体内終ベース上遺物採集。

19日　天候不順のため現場作業行えず。

20日　18—Ⅱ、Ⅵ号窯たち割り、実測作業。19号窯終ベース上遺物採集。写真撮影。

21日　18地区Ⅷ号窯確認。（以下18—Ⅷ号窯とする）下方灰原土層図作成。写真撮影。18—Ⅶ号窯左側灰原がピット状となる。19号窯、たち割り、写真撮影。18—Ⅲ号窯前方灰原灰層中、灰原Ｄ区遺物採集。

22日　18地区たち割り作業。実測図補足完了。写真撮影。下方灰原遺物出土。焼土ピット実測完了。写真撮影。18—Ⅷ号窯窯体検出、窯体内（18—Ⅲ号灰原層中）出土遺物採集。写真撮影。20地区表土除去完了。南側斜面清掃、３基の窯体確認、検出作業。表採遺物採集。

23日　18—Ⅷ号窯検出作業。窯体内に18—Ⅲ号窯炭灰層が充満、写真撮影。20地区ビデオ撮影。Ⅰ号窯窯体検出（以下20—Ⅰ号窯とする）、実測完了、写真撮影。Ⅱ号窯窯体検出作業（以下20—Ⅱ号窯とする）、写真撮影。Ⅲ号窯遺物、窯壁散布（以下20—Ⅲ号窯とする）。

24日　18—Ⅷ号窯窯体右方灰層除去、黄褐色粘質土をはさんで下層に18—Ⅷ号窯に伴う灰層検出。大量の完形遺物出土。写真撮影。20—Ⅰ、Ⅱ号窯窯体検出作業ほぼ完了。20—Ⅱ号窯実側作業。遺物採集。20—Ⅲ号窯窯体検出作業。窯体未確認、流出消失の可能性あり。19地区から20地区へＢＭの移動。

25日　18—Ⅰ号窯窯体検出作業。20—Ⅲ号窯灰原検出作業。途中降雨のため中止。

26日　18—Ⅰ号窯窯体検出作業。18—Ⅷ号窯写真撮影。20—Ⅰ、Ⅱ号窯清掃、写真撮影。20—Ⅲ号窯窯体確認。

27日　18—Ⅰ号窯窯体検出作業、上層より白色粘土を張った面確認、この面上に焼成前の土器が多数分布、土師器、甕も出土。恐らく18—Ⅰ号窯廃絶後、土器の乾燥場として機能したのであろうか。18—Ⅷ号窯実測、レベリング完了。たち割り割りつけ。20—Ⅰ、Ⅱ号窯実測作業完了。17地区表土除去開始。

28日　18—Ⅰ号窯窯体床面検出。多量に遺物出土。18—Ⅷ号窯エベレーション図完了、たち割り作業。20—Ⅰ、Ⅱ号窯たち割り作業。20—Ⅲ号窯窯体検出作業。

29日　18—Ⅰ号窯アトリエ遺構実測作業。恐らくは最終段階窯の焼成に伴うものと考えられる。写真撮影。全く粘土のままの土器及び置台検出。20—Ⅰ、Ⅱ号窯たち割り作業。20—Ⅲ号窯窯体検出作業。冨加見氏他２名（大阪府埋蔵文化財協会）、中島正志氏他２名（福井大学）来訪。

30日　18—Ⅰ号窯窯体検出ほぼ完了。写真撮影。18—Ⅷ号窯たち割り作業。平板測量。20—Ⅰ、Ⅱ号窯たち割り作業。写真撮彰。Ⅲ号窯窯体検出。窯体内セクションを設定。写真撮影。夏原氏（夏原技研）来訪。

31日　18—Ⅰ号窯割り付け、実測作業。18—Ⅷ号窯たち割り実測、下層検討、写真撮影。平板測量。19地区平板測量。20—Ⅰ、Ⅱ号窯たち割実測、写真撮影20—Ⅲ号窯窯体検出。窯体内実測。

8月1日　18—Ⅷ号窯たち割り実測作業。20—Ⅲ号窯検出作業。平板測定。途中降雨のため中止。

2日　18—Ⅷ号窯たち割り実測作業。写真撮影。20—Ⅲ号窯窯体験出作業。写真撮影。20—Ⅰ、Ⅱ号窯窯体焚口周辺精査。現地説明会。



図３　調査作業風景

第２章　位置と環境

ハセムシ窯跡群は九州最大の規模を有する牛頸窯跡群中の一支群であるが、群中でも南部に位置する。平野部から見ればかなり奥まった場所である。牛頸は標高477.9ｍを測る牛頸山を最高所に北にのびる丘陵と牛頸川、平野川、平田川などが造り出した狭長な低地が複雑に入り込んだ地形をなしている。このため数多くの小谷が造り出され、窯を築くに適している。須恵器窯跡は牛頸を中心に北は春日市、東は太宰府市の一部を含む東西約４㎞、南北4.6㎞の範囲に分布する。その総数は調査が行われるにつれて増え、昭和41年の分布調査では35ケ所、昭和48年段階では70数基であったのが、現在（昭和63年１月）では調査されたものだけで既に200基を越える状態である。従って、総数は300を越えることはほぼ間違いないであろう。年代的には６世紀中頃（ⅢＡ期）から８世紀後半（Ⅶ期）までのものが知られている。<註１>時期ごとの数は正確には出ていないが、<註２>６世紀後半～７世紀初め（ⅣＢ～Ⅳ期）のものと、８世紀（Ⅶ期）のものが多く、両者の中では後者の数が圧倒的に多い。

牛頸に窯が築かれる前史はなかなかわからなかったが、大野城市に隣接する春日市においては春日地区土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われ、牛頸川中流域の様相がだいぶ判明してきた。それによれば窯跡やその同時代の集落はもちろん、牛頸で須恵器が焼かれる以前の５世紀後半代の集落（円入遺跡）、更には弥生時代の集落も見つかっている。一方上流域に当たる大野城市側では牛頸土地区画整理事業に伴って牛頸川流域の段丘上の調査が始まり、徐々にではあるが判明してきている。先土器時代、縄文時代のほとんどはまだ不明であるが、62年春の塚原遺跡の調査で夜臼期の方形住居跡が１基検出された。弥生時代については、有名な須玖岡本遺跡から４㎞、鋳型を多く出した大谷遺跡からは３㎞しか離れていないにもかかわらず本格的な遺跡は知られていない。古墳時代に入っても前期の遺跡は現在のところない。以前は牛頸が本格的に開発されるのは須恵器生産が始まる６世紀中頃からと考えていたが、水田下から５世紀後半～６世紀初めに築造された塚原古墳群が発見された。同様に、牛頸最古の窯跡であった野添窯跡群のある平田川流域でも上園遺跡から５世紀後半の住居跡が検出された。<註３>このため、牛頸の本格的開発の時期については考え直さなければならなくなった。

須恵器生産が行われていた６世紀中頃から８世紀後半までの時期の集落については、前記塚原遺跡、上園遺跡の他、春日地区でいくつか見つかっているが、拠点集落というべきものがあるのか、須恵器の集積地はというような検討はなされていない。

古墳については前記塚原古墳群が５世紀後半～６世紀初めの年代を考えられる他、19基からなる中通古墳群が６世紀後半～７世紀後半、<註４>11基からなる後田古墳群（６世紀後半～７世紀後<註５>

半）等が調査されている。

平安時代以降になると遺跡の実態はまた不明となる。古墳の石室内から瓦器が発見されたりする程度である。ただ、上園遺跡から瓦器と瓦がやや多めに出土する溝が検出されたため近くに関連する遺構の存在が推定できる。

最後に窯跡支群の名称についてであるが、学史的に小字名をとって呼ばれてきた。野添、大浦、平田、中通等である。明らかに、決して合理的な支群名ではない。検討を加えたいが、呼びならわされてきたものなのでより良きグルーピングができるまでは従いたい。

＜註１＞福岡教育事務所池辺元明氏の調べを基礎にしている。

＜註２＞小田富士雄氏らの分類による。

＜註３＞『上岡遺跡Ⅱ』大野城市教育委員会1987

＜註４＞『中通遺跡群』大野城市教育委員会1980

＜註５＞昭和57・61年大野城市教育委員会調査

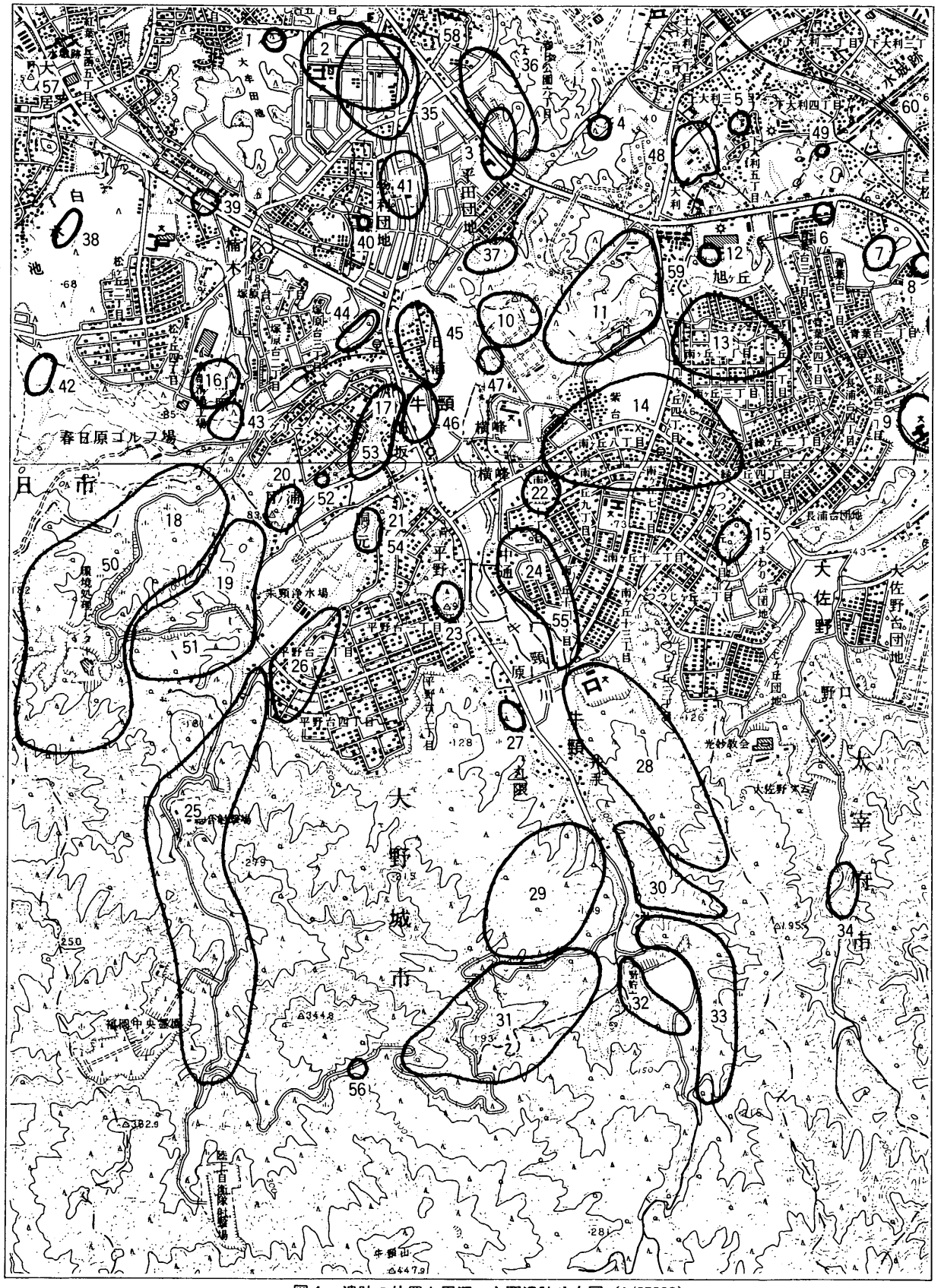


図4　遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図（1/25000）

表1 牛頸周辺遺跡地名表

記号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
1	大牟田池窯跡	春日市大字春日 1524—57	窯跡1基以上(須恵器)	
2	惣利窯跡群	〃 〃 字惣利	窯跡15基以上(須恵器)	昭和52～55年春日市教委調査(9基)
3	春日平田窯跡群	〃 〃 字平田	窯跡21基 (須恵器)	昭和57～60年春日市教委調査(21基)
4	梅頭窯跡	大野城市大字上大利字梅頭	窯跡1基 (須恵器)	消滅
5	出口窯跡	〃 〃 字出口	窯跡1基 (須恵器)	
6	神の前窯跡群	太宰府市大字吉松 字神ノ前	窯跡2基 (須恵器 瓦)	昭和53年太宰府市教委調査(2基)
7	篠振窯跡	〃 〃 字篠振	窯跡2基	昭和59・60年太宰府市教委調査(2基)
8	尊田窯跡	太宰府市大字吉松 字尊田	窯跡	
9	宮ノ本窯跡群	太宰府市大字向佐野 字宮ノ本	窯跡8基 (須恵器)	昭和54年太宰府市教委調査(3基) 昭和59年7月太宰府市教委調査(5基)
10	華無尾窯跡群	大野城市大字牛頸 字華無尾	窯跡2基 (須恵器)	消滅
11	野添窯跡群	〃 大字上大利 字野添	窯跡10基以上(須恵器)	昭和44年福岡県教委調査(2基) 昭和61年大野城市教委調査(3基)
12	谷蟹窯跡	〃 〃 字谷蟹	窯跡1基 (須恵器)	消滅
13	大浦窯跡群	〃 〃 字大浦	窯跡5基 (須恵器 瓦)	昭和43年福岡県教委調査(2基)
14	平田窯跡群	〃 大字牛頸 字平田	窯跡9基 (須恵器)	昭和47年立正大学調査(4基) 昭和54～56年大野城市教委調査(4基)
15	上平田窯跡群	〃 〃 字上平田	窯跡4基 (須恵器)	昭和47年福岡県教委調査(4基)
16	浦ノ原窯跡群	春日市大字下白水 字浦原	窯跡10基以上(須恵器 瓦)	昭和53年春日市教委調査(8基)
17	畑ケ坂窯跡群	大野城市大字牛頸 畑ケ坂	窯跡3基 (須恵器)	1基消滅
18	後田窯跡群	〃 〃 字後田	窯跡15基以上(須恵器 瓦)	昭和61年大野城市教委調査(16基)
19	小田浦窯跡群	〃 〃 字小田浦	窯跡14基以上(須恵器)	昭和51年立正大学調査(4基) 昭和57～61年大野城市教委調査(9基)
20	月ノ浦窯跡群	〃 〃 字月ノ浦	窯跡2基 (須恵器)	昭和57年大野城市教委調査(1基)
21	胴ノ元窯跡群	〃 〃 字胴ノ元	窯跡2基 (須恵器)	
22	東浦窯跡群	〃 〃 字東浦	窯跡3基 (須恵器)	昭和43年国士館大学調査(3基)
23	城の山窯跡	〃 〃 字城の下	窯跡1基以上(須恵器)	窯本体が空洞で露出している
24	中通窯跡群	〃 〃 字中通 字入道堂	窯跡12基以上(須恵器)	昭和54・55年県教委・大野城市教委調査(6基)
25	石坂窯跡群	〃 〃 字石坂	窯跡20基以上(須恵器)	昭和58年大野城市教委調査(2基)
26	大谷窯跡群	〃 〃 字大谷	窯跡12基以上(須恵器 瓦)	昭和46年国士館大学調査(4基)
27	原窯跡群	〃 〃 原	窯跡3基 (須恵器)	土取りで灰原の一部を残すのみ
28	ハセムシ窯跡	〃 〃 字ハセムシ	窯跡30基以上(須恵器)	昭和62年大谷女子大学・大野城市教委調査(15基)
29	井手窯跡群	〃 〃 字井手	窯跡39基以上(須恵器)	昭和57～61年県教委調査(31基) 昭和63年大野城市教委調査(3基)
30	道ノ下窯跡群	〃 〃 字道ノ下	窯跡10基以上(須恵器)	昭和57～61年県教委調査(10基)

記号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考
31	足洗川窯跡群	大野城市大字牛頸 字足洗川	窯跡5基以上(須恵器)	昭和57～61年県教委調査(4基)
32	笹原窯跡群	〃 〃 字笹原	窯跡4基以上(須恵器)	同上 (4基)
33	長者ケ原窯跡群	〃 〃 字長者ケ原	窯跡16基 (須恵器)	同上 (16基)
34	野口窯跡群	太宰府市大字吉松	窯跡2基以上(須恵器)	
35	惣利遺跡群	春日市大字春日 字惣利	古墳～歴史時代住居跡	昭和54・55年春日市教委調査 縄文～中世
36	向谷遺跡群	〃 〃 字向谷	甕棺・方墳、弥生～歴史時代 住居跡	昭和54～57年春日市教委調査
37	春日平田遺跡群	〃 〃 字平田	弥生～歴史時代 住居跡古墳	
38	大堤古墳群	〃 大字白水 字大堤	円墳3基	(満水時水没)
39	楠木遺跡	〃 大字下白水 字楠木	甕棺墓	弥生(中期)
40	惣利古墳	〃 大字春日 字惣利	円墳1基	消滅(横穴式石室・須恵器出土)
41	イケ谷古墳群	〃 大字上白水 字イケ谷	円墳3基以上	(春日原ゴルフ場内)
42	円入遺跡		古墳時代 住居跡	昭和56年春日市教委調査
43	浦ノ原遺跡	〃 大字下白水 字浦原	散布地	土師・須恵器
44	塚原古墳群	〃 大字春日 字塚原	円墳4基	前方後円1基・円墳2基か？
45	日ノ浦遺跡	大野城市大字牛頸 字日ノ浦	散布地	縄文～中世
46	塚原遺跡群	〃 〃 字塚原	円墳10基以上 古墳時代奈良時代住居跡	昭和62年度大野城市教委調査
47	華無尾遺跡	〃 〃 字華無尾	散布地	旧石器～縄文(ナイフ形石器 石鏃等出土)
48	上園遺跡	〃 大字上大利	散布地	昭和60年～大野城市教委調査
49	吉松古墳	太宰府市大字吉松	円墳1基	
50	後田古墳群	大野城市大字牛頸 字後田	円墳11基	昭和57・61年大野城市教委調査
51	小田浦古墳群	〃 〃 字小田浦	円墳3基	昭和51年立正大学調査(1基) 昭和62年大野城市教委調査(2基)
52	月の浦古墳	〃 〃 字日の浦	円墳1基	消滅(横穴式石室)
53	畑ケ坂古墳	〃 〃 字畑ケ坂	円墳1基	
54	胴ノ元古墳	〃 〃 字胴ノ元	円墳1基	
55	中通古墳群		円墳19基	昭和47・48年福岡チブサン会調査(13基) 昭和50年県教委調査(1基) 昭和54・55年県教委大野城市教委調査(5基)
56	足洗川遺跡	〃 〃 字足洗川	散布地	旧石器(石刃出土)
57	大土居水城跡	春日市大字上白水 字大土居	土塁	(国指定史跡)
58	春日水城	〃 〃 字春日	土塁	
59	上大利水城	〃 〃 字横提	土塁	(国指定史跡)
60	水城	太宰府市・大野城市	土塁	(国指定特別史跡)
61	長浦窯跡	太宰府市大字向佐野 字長浦	窯跡1基 (須恵器)	昭和47年福岡県教委調査(1基)
62	向佐野窯跡群	〃 〃 字前田	窯跡3基 (須恵器)	同上 (3基)
63	ウトグチ窯跡群	春日市	窯跡2基以上(瓦)	昭和62年春日市教委調査(2基)

第３章　遺跡の調査

1.　調査遺跡の概観

今回調査の対象となったのは、牛頸窯跡群ハセムシ地区の一部である。分布調査で確認されていた16、17、18、19、20の五地区である。これらは、丘陵の最も奥にあたるが、ダム工事に伴って新しい道がつけられており、比較的物資の搬入出には便利な地域であった。

各地区の地理的関係は、16、17、19、20の地区が同一丘陵に位置する。とくに16、17は同一斜面に位置するものである。また19地区は17地区の南に接しており、同様に20地区は、距離は離れているが、位置関係は19とは尾根をはさんで接している。すなわち丘陵と谷の関係から見れば、これら四地区は同じ丘陵に位置するものであることが判る。

一方、18地区は、17地区の対面に谷をはさんで位置する。両者の直線距離は約40ｍである。これら各地区での調査の結果、16、17地区では遺構が確認されず、18地区では８カ所、19地区では１カ所、20地区では６カ所の遺構が各々検出された。

このうち窯跡は18地区で７基、19地区で１基、20地区で４基が確認された。ただし20地区の１基は須恵器の窯跡ではない。須恵器の窯跡以外の関連遺構は、18、20地区で検出された。先の20地区では小型の平窯跡、他には土坑が２カ所認められた。また18地区では土坑１カ所が認められた。いずれも須恵器の窯の操業と関連するものと考えられる遺構であるが、その用途についての確実なものは得られなかった。

以下、各地区毎に調査を実施した遺構について記述する。

2.　各地区の調査

(1)　18地区の調査

①分布の状況

すでに記述したように当核地区では、須恵器窯跡７基、土坑１カ所が検出された。窯跡は検出順に18―Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷと命名したが、Ⅳについては土坑の呼称としたため、窯跡では欠番となる。

18―１号窯跡は、標高139ｍから144.5ｍに築かれており、地区では最も規模が大きく、かつ中心部に位置する。当該窯跡の左（南）に接してⅡ号窯跡が位置する。とくに前者が地下式で深い位置にあるため、当該窯跡はその上部に造られた印象がある。しかし両者に切り合い関

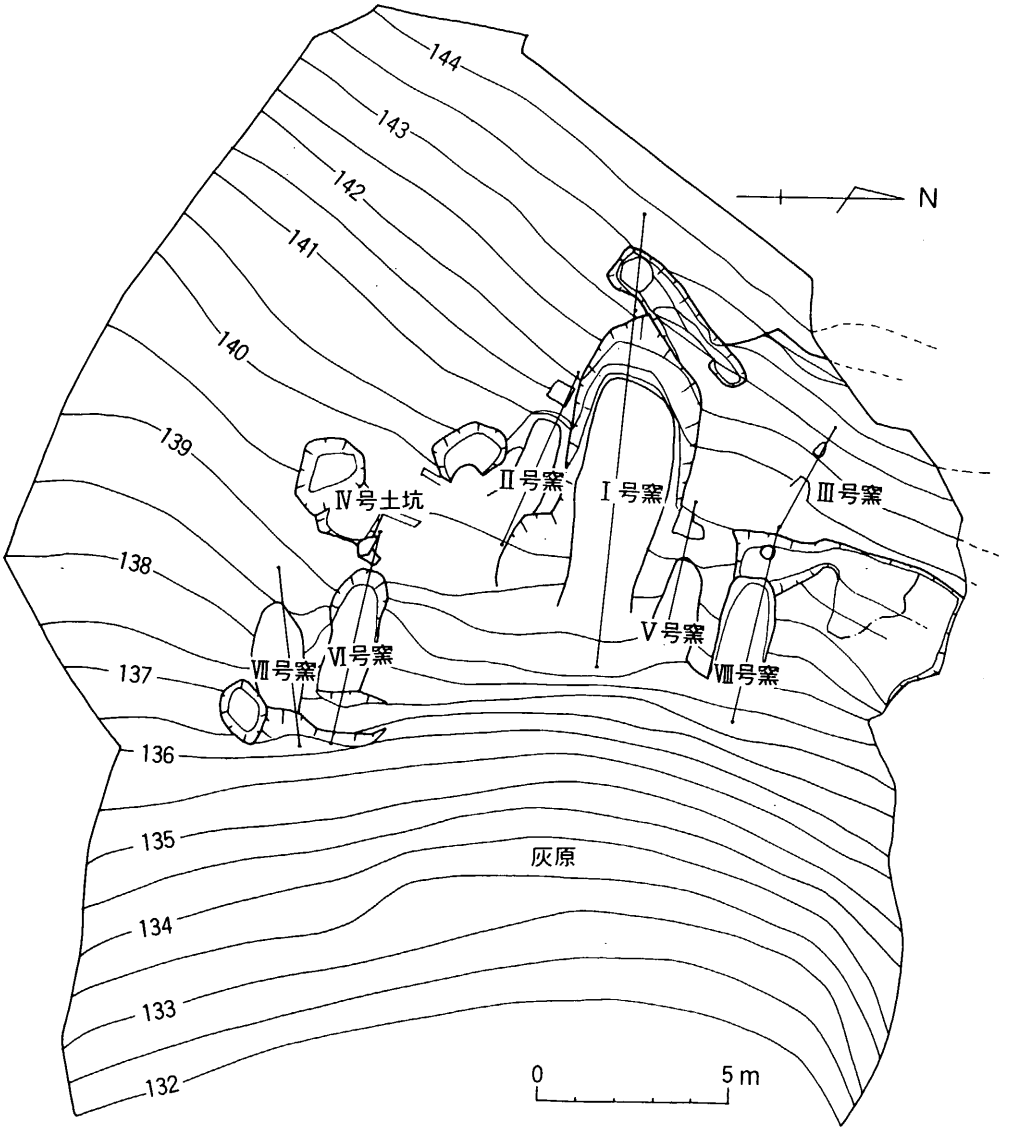


図5　18地区地形図

係は認められない。

18—Ⅲ号窯跡は、Ⅰ号窯跡の右（北）4.5mに位置し、標高140mから142mに構築された小型の窯である。灰原が焚口から前方に広がっているが、その下層にⅤ、Ⅷ号窯跡が位置する。またⅤ号窯跡は18—Ⅰ号窯跡の北1.5mに接して位置し、Ⅷ号窯跡は同じく18—Ⅰ号窯跡の北4mに位置する。Ⅴ、Ⅷ号窯跡は側壁間では僅か50cmの間隔で接しており、両者はほぼ平行している。

なお、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅷ号各窯跡の灰原は、下方に広がる斜面に混在するように見られる。

斜面の状況がスムースなものではなく、中間で大きくえぐられたような状態を呈している。このため灰原の主として灰、遺物が堆積しているのはかなり下方になる。従って、灰原での遺物を窯跡毎に細分するのは、灰原そのもののもつ性格とともにかなり困難である。

Ⅵ、Ⅶ号窯跡は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅷ号各窯跡とは僅かに離れて位置し、その立地する標高は137ｍから139.5ｍ前後である。この数値は、前四者が標高138ｍから144ｍに分布することを考えると、やや低い位置に占地することがわかった。

Ⅵ号窯跡は、Ⅰ号窯跡の南6.5ｍに位置する。Ⅶ号窯跡とは切り合い関係をもっており、Ⅶ号窯跡がⅥ号窯跡の焚口部分を削平した状況で確認されている。しかし両者ともに当該部分の残存度は不良であり、必ずしも窯構築の際に削平されたものかどうかは不明である。ちなみにⅦ号窯跡は、Ⅵ号窯跡の南1.5ｍ、側壁の距離では40㎝をはかるにすぎない。

Ⅵ、Ⅶ号窯跡の灰原は、すでに大半が自然流出しており、下方部分にも灰の厚い堆積は認められなかった。また先に見たⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅷ号各窯跡下方灰原とも最も基底部分では共通するかもしれないが、それを区分するのは困難である。

Ⅳ号土坑は、Ⅵ号窯跡の西に接して位置する。標高は139ｍから139.5ｍ前後をはかり、Ⅵ号窯跡との距離が余りにも接近しており、当該窯跡に判う遺構の可能性は少ないと考えられる。

②須恵器窯跡

1）18—Ⅰ号窯跡

焚口を標高138.8ｍ付近に持つ今回の調査において最大クラスの登窯で、窯体の長さ約9.4ｍ、最大幅約２ｍを測り、主軸方向はＮ－84°－Ｗである。残存状態は良好で、焚口から煙道まで地山を堀り抜いて作られた地下式である。

窯体の構造

Ａ．焚口、燃焼部

焚口の末端幅1.3ｍ、傾斜変換点での幅1.4ｍ、焚口端部より傾斜変換点までの主軸線上の長さ1.6ｍを測り、中心線が焼成部に比べ幾分南へ振れている。燃焼部の床面はほぼ水平で、焚口付近は赤色の酸化層、燃焼部では黄褐色の半還元層を呈し、青灰色還元層はみられない。燃焼部に設定した、たちわりＣ－Ｃ′では床、側壁とも一枚で、左側壁は地山ではなく貼られたものと思われる。

Ｂ．焼　成　部

奥壁までの主軸上の長さ7.3ｍ、最大床幅1.8ｍ、床面傾斜角は中央で21°をはかり、奥壁に近い部分は若干弓なりに反り上っている。床の平面プランは、燃焼部より大きく床幅を広げることなく上方に伸び、奥壁より２ｍほど手前から緩やかに狭まりながら煙道の下まで至る。

焼成部にはA－A′、B－B′の2個所のたちわりを設定したが、A－A′では不明瞭ながらも2層の床の存在が推測された。1次面、2次面ともに、焼固した青灰色還元層が殆んど残存していないことから、1次面焼成後に青灰色還元層をある程度除去したのち、次の焼成を行なったと考えられる。側壁の遺存状態は良好で、左右とも1枚の堅緻な青灰色還元層をもつ。最終ベース直上には、わずかな遺物しか検出されず、大形の甕片が殆どであった。

C．奥壁、煙道部

奥壁と煙道部はほぼ原形のまま残存し、煙道部の上部には北北東の方向に堀り落した溝を伴う。煙道部は焼成部奥端の天井部よりほぼ垂直に立ち上がり、直径76cm、床面最奥部から2.1mの高さをもつ円筒形をなしている。奥壁及び煙道は一枚で、周囲はあまり焼固しておらず、半還元の黄褐色ないしは、赤ヤケの状態を呈している。上部には、煙道を中心にひとまわり大きい方形の掘込みがあり、北東側の一辺が溝に接続する。溝は、底面の幅約60cm、山側からの平均の深さ60cm、長さ3.3mをはかり、下端部には、60×40cmほどの炭化物を多量に含む面が検出された。溝の覆土下層からは、窯体とほぼ同時期と思われる杯片・甕片が少量出土している。

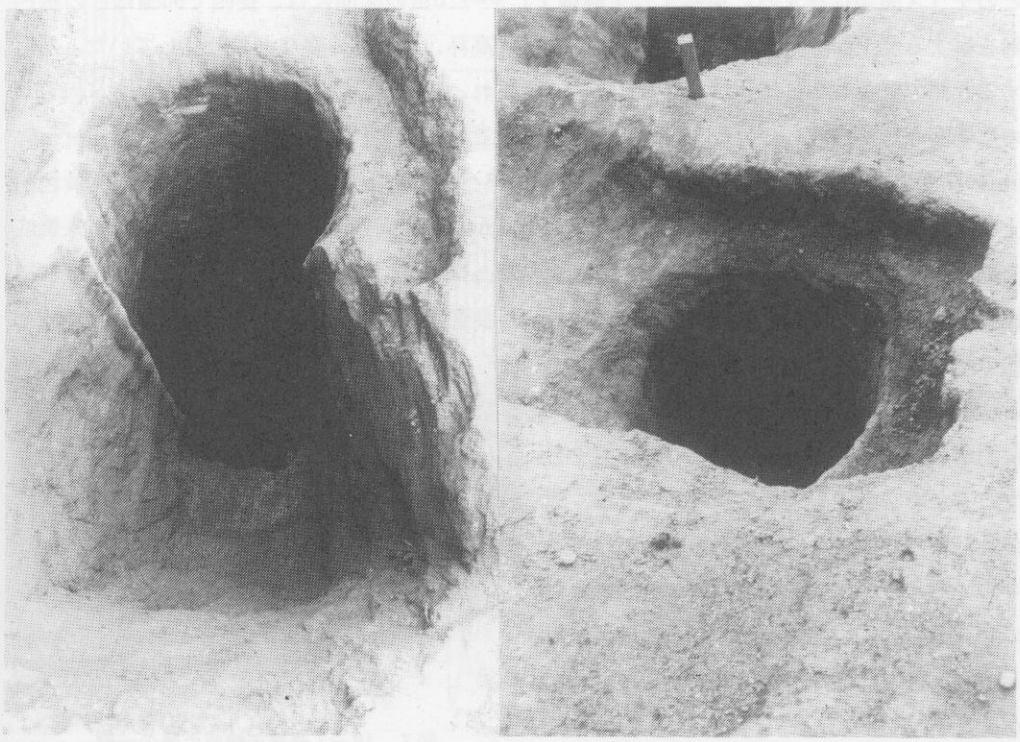


図6　18—Ⅰ号窯煙道部およびたちわり写真

溝の性格については明確ではないが、煙道の保護と排水を兼ねた道状の遺構ではないかと推測される。牛頸窯跡群においては、排水溝が直接煙道上部と接続する例（註１）が、比較的多いようである。

灰　　原

灰原は焚口から斜面の下方に広がっているが、Ⅰ号窯のものとして明確に残存している範囲は、斜距離で主軸方向に0.6ｍほどである。又、この灰原の上層を覆うようにしてⅡ号窯、Ⅴ号窯の灰原の灰層部が存在した。

窯体上遺構

本窯の調査中、最終ベース直上より約1.2ｍ（傾斜変換点における数値）上部において、ほぼ水平な床を形成する硬化面を確認した。この床面は、最終焼成ののち天井崩落等の理由で放棄された窯体下半部の上に、人為的に盛り土して形成されたものと思われ、主軸上の長さ4.7ｍ、最大床幅1.8ｍをはかる。

床の平面プランは、下部の窯形に規制された逆Ｔ字形で、西端（山側）は、下部窯体の奥壁より3.1ｍの地点で、最終ベース床面に接続している。東端（谷側）には、主軸と直交する幅50㎝ほどの道状の張り出し部を南北両側に伴い、南側張り出し部の一段下には、１ｍ×２ｍほどのテラス面が存在する。東端より主軸線上1.3～2.0ｍの床面には、長軸で90㎝ほどの楕円形を呈する焼土面が検出され、周囲には、蓋杯、高杯、土師器の甕などが散乱していた。対応する北側の壁面も２ｍにわたって弧状に掘り込まれ、床面が拡張されていることから、何らかの作業面として機能していたと思われる。また、これより奥側、主軸線上東端より3.5ｍ～5.5ｍの床面においては、床面奥部から下部窯体最終ベース斜面の一部を覆うように、灰黄色粘土による貼り床が確認された。この貼り床の上部からは、南側の壁面に添うようにして未焼成土器群が検出された。この土器群は、床面より20㎝ほど浮いた状態で、押し潰されたような様相を呈しており、確認できる器種及び個体数は、長頸壷３、杯蓋４、杯身１である。未焼成土器の胎土は、軟質の粘土で、貼り床を構成する粘土と酷似している。下部窯体の焼固した壁面が、上部を覆うようにオーバーハングしているため、土圧を大きく受けることなく遺存したものと推測され、事例的にみて珍しいものであろう。ピット等の存在が予測されたので、床面、左右両壁面、及び上部地山に対して、精査を行なったが、検出するに至らなかった。

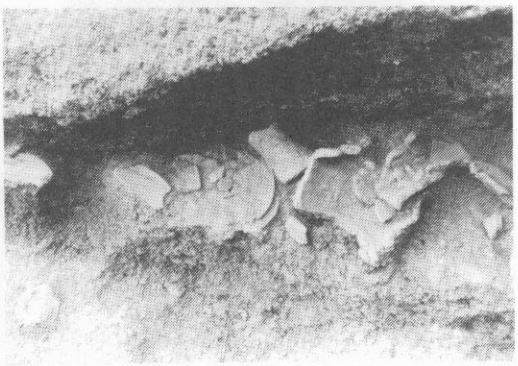


図７　18—Ⅰ号窯未焼成土器の一群

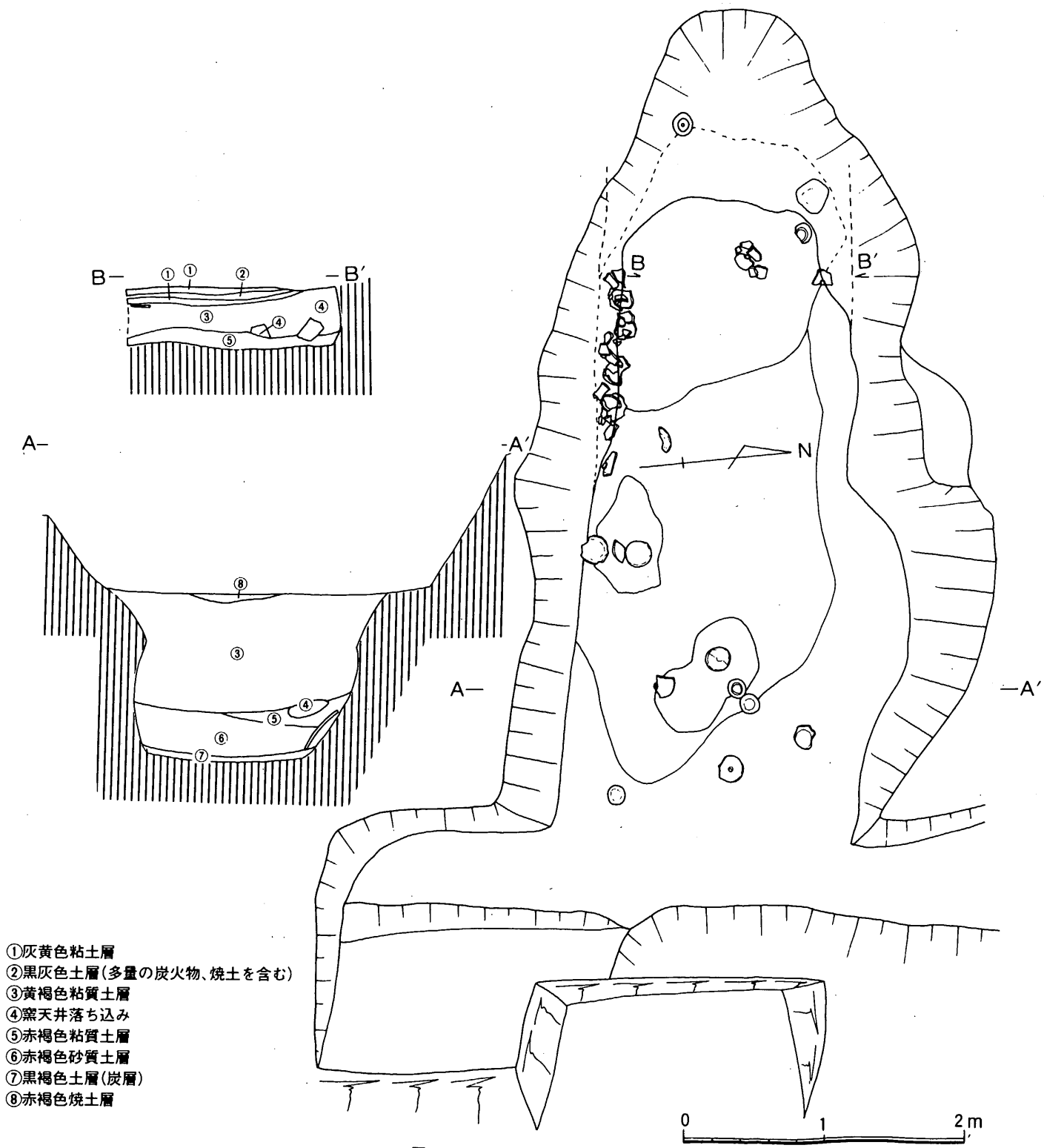


図8　18—Ⅰ号窯 窯体上遺構実測図

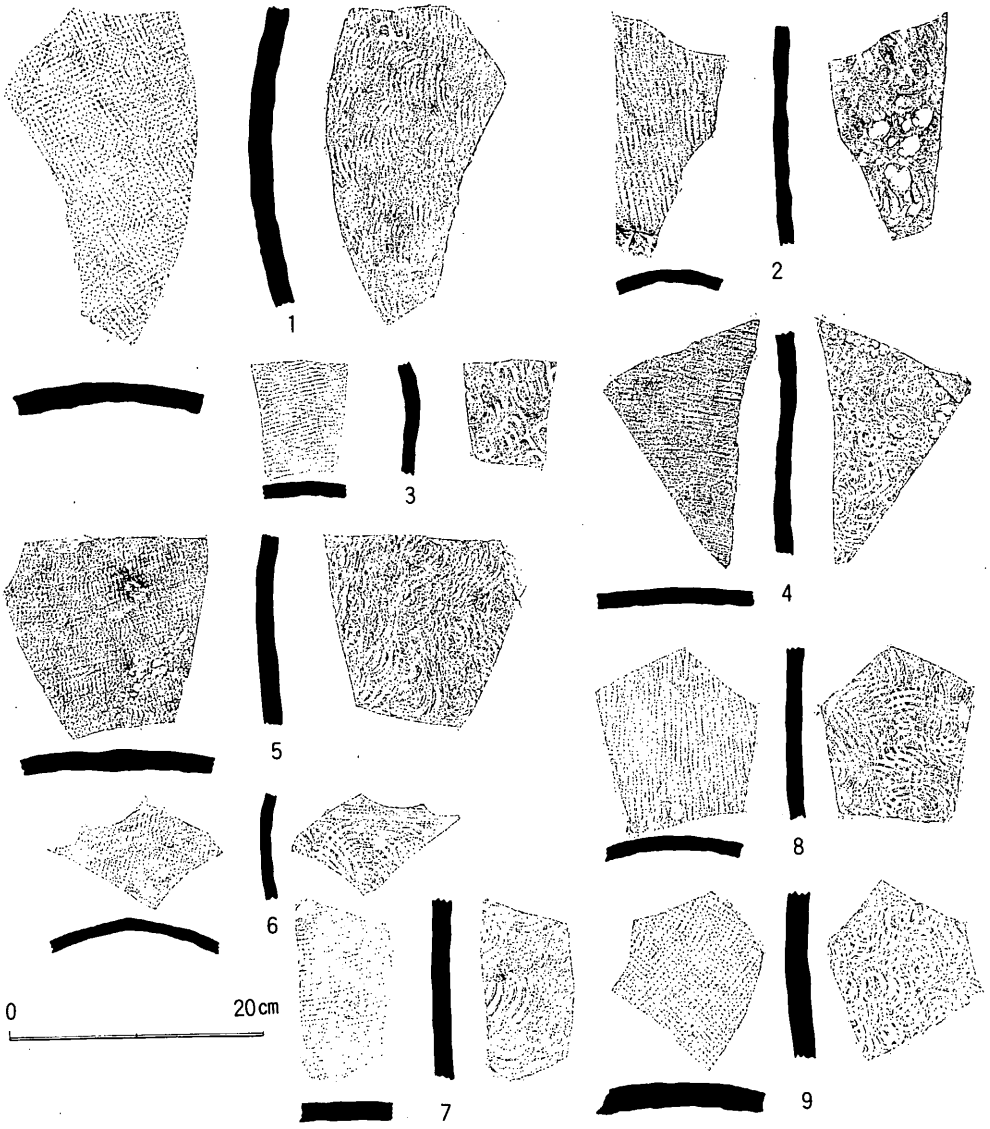


図９　18—Ｉ号窯出土遺物拓影および実測図(須恵器、甕)

この遺構の性格は複雑な様相を示しているが、下部窯体が放棄された後、残存していた焼成部上半部と煙道を、新たな窯として再利用しようとしたものと推測することができるであろう。大形の窯を縮めて再利用する例は陶邑にもみられ（註２）、本窯の場合は、粘土からの成形・調整・乾燥が全て終了した未焼成土器が、新たな窯体内に置かれた後、焼成が行なわれる以前に、再び天井崩落等の理由で放棄されたものと思われる。新たな焚口の位置は、燃焼部と焼成部とのバランスから考えると、東端（谷側）より３ｍ付近に求めるのが最も自然なので、焼土

面を中心とした作業面が、前庭部としての機能を果たした可能性が高い。本来、焼成を行なう場合、燃焼部には土器を置かないのが通常であるが、未焼成土器群は原位置からかなり移動していると思われるので、必ずしも前記の推測に矛盾するものではないだろう。

註 (1)『牛頸中通遺跡群』(1980) A－1窯、A－2窯、B窯、C窯 『牛頸中通遺跡群Ⅱ』(1982) 中通D－1窯跡、中通D－2窯跡 「福岡県小田浦窯跡の調査」『考古学ジャーナル』№146 (1978) 小田浦A－2窯など。

(2)『陶邑』Ⅲ (1978) TK87号窯、TK94号窯など。

(余語琢磨)

2) 18—Ⅱ号窯

位置と状況

等高線に直交して構築された東に開口する登窯である。遺構の遺存状況は良好であったが、崩落の危険があったため天井部をある程度カットして調査を進めた。焚口が広く、焼成部では若干狭まり、焼成部に移るにしたがって徐々に広がっている。灰原はほとんど下に流出していた。窯体は主軸方向N－67° －Wで、全長3.2m、最大幅1.15m、床面傾斜角度30° を測る。

窯体の構造

A. 焚口、燃焼部

焚口の幅は0.95mで、前方にむかってやや八の字状に開いている。焚口端部から傾斜変換点までの主軸線上における長さは約0.8mで、変換点での床幅は0.85mを測る。燃焼部床面は焚口から若干くぼんでいる。燃焼部に、たちわりC－C′ を設定し、下層の検討を行なったが、床は1枚であった。

B. 焼 成 部

焼成部は、床面傾斜変換点からの主軸線上の長さ2.4m、最大幅1.15m、窯尻との比高差1.5mを測る。床面の傾斜は奥に向かうに従って増しており、変換点から1.8mの所からは床面傾斜角度60° となる。床は主軸線より若干南にずれている。たちわりB－B′ を設定して下層の検討を行なったが、やはり床は1面であった。

C. 奥壁、煙道部

焼成部床面と奥壁の差異は明瞭でなく、焼成部床面が登り切ったところから屈曲して、ほぼ垂直に煙道が立ち上がる。煙道は径30～40cmの楕円形を呈し、周囲はかたく焼けていた。残存長40cmを測る。

灰 原

焚口左に灰が多く堆積した土坑が大小2基確認された。どちらも隅丸方形状の楕円形で、大きい方は長径2m、短径1.4m、小さい方は長径1.8m、短径1.2mを測る。レベルがⅡ号窯焚口

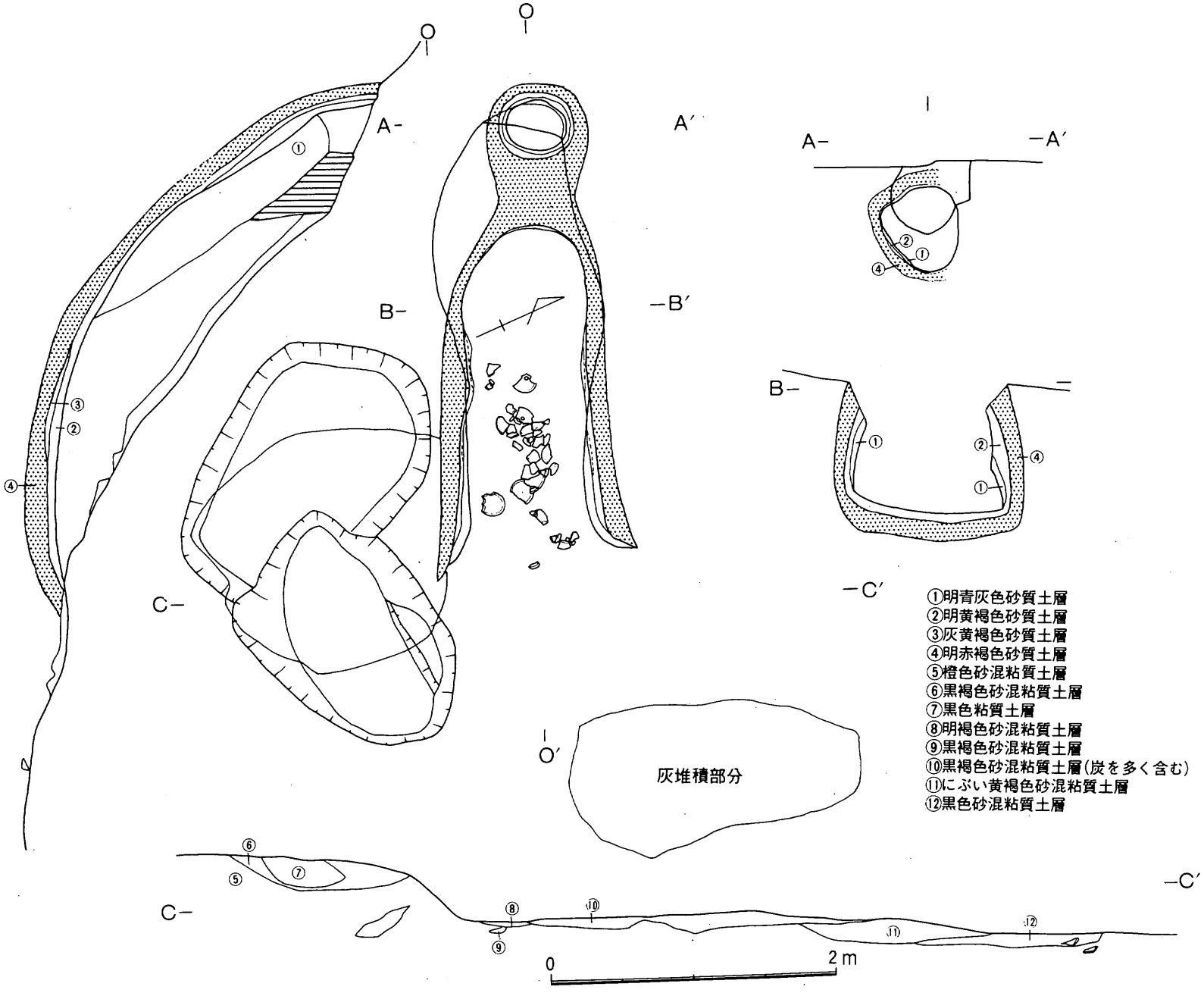


図10　18—Ⅱ号窯遺構実測図

よりも高く、Ⅱ号窯にともなうものとは考えられない。形態的には後述するⅣ号土坑に類似するものである。

遺　　物

燃焼部から焼成部床面にかけての最終ベースで、蓋杯を中心とした遺物が検出された。そのほかの遺物は皿などの小物である。

（網　　伸也）

3）18—Ⅲ号窯

位置と状況

今回の調査地区では小型級の登窯で、煙道部の上端が一部欠落していたが、全体的に遺存状態は良好であったため、窯体の各部位に対するたちわりは設定せず保存することにした。

窯体の平面プランは、焚口で床幅が狭くなっているが、焼成部からは幅が開き、奥壁まではほぼ変化がない長方形を呈する。窯体の全長2.3m、焼成部での最大床幅0.9m、主軸方向はN－62°－Wを各々はかる。

窯体の構造

A．焚口、燃焼部

焚口での堆積状況をみると、上層部は窯の上方からの流れ込みと見られる花崗岩バイラン土

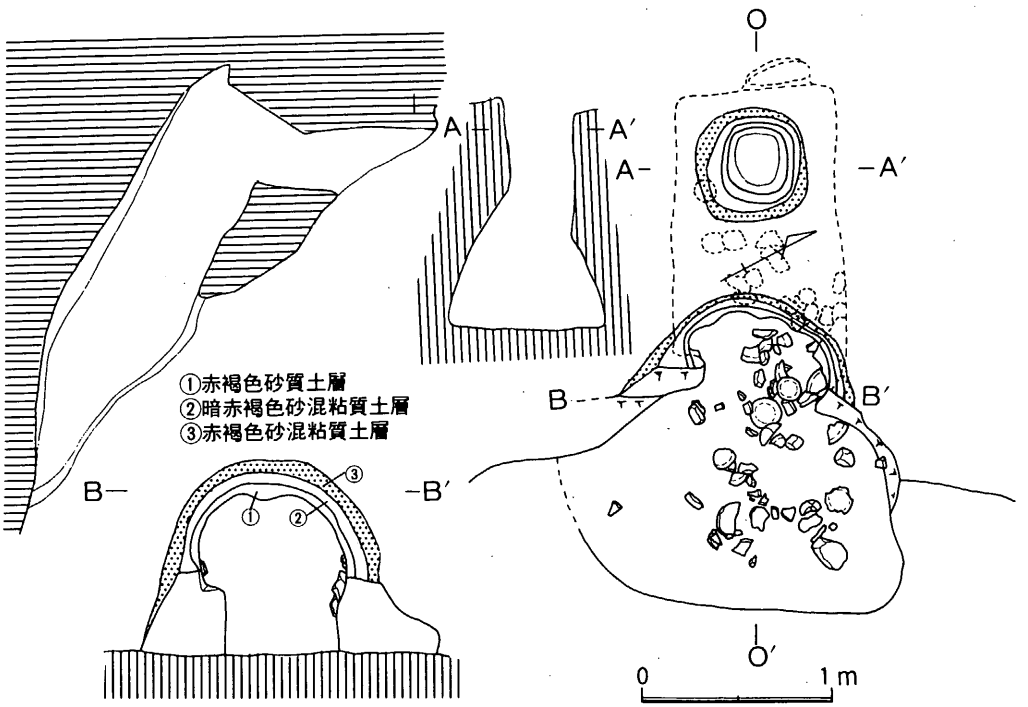


図11　18—Ⅲ号窯遺構実測図

層が何枚か水平に、下層部はブロック状の窯体壁片が無秩序な状態で堆積していた。焚口でのセクション（図11）は他の窯体と同様である。焚口部には幅を縮小するために石材で両側の壁を内側へ突出させており、その内側と焼成部側では焼成の際に焚口を閉塞したような状態が認められた。焚口から燃焼部までの床面はほぼ水平であり、床幅0.6m、傾斜変換点までの主軸上の長さ0.85m、燃焼部と焼成部のなす角度は25°をはかる。

B．焼　成　部

床面は傾斜変換点から奥へほぼ直線的にのびる。主軸上の延長1.45m、床面傾斜角度32°をはかる。

C．奥壁、煙道部

焼成部と奥壁のなす角度はほぼ直角であるが、立ち上るところでは若干オーバーハングしており、高さ0.6m、煙道部の直径約0.35mをはかる。奥壁付近の床面で1枚の花崗岩製の割石が検出されており、煙道部からの落ち込み状態を示す。

前　庭　部

焚口の前方に八の字状に開いており、中央部がわずかにくぼんだテラス状となっている。主軸上の延長1.2m、左右1.7mをはかる。

灰　　原

窯体の焚口から扇形に開いて下方にひろがっている。それら下方の灰原は、Ⅴ、Ⅷ号窯のものと重複しており区分するのは困難である。

なおⅤ、Ⅷ号窯の上部および内部にⅢ号窯の灰が混入している。位置的上下関係を考え併せると本Ⅲ号窯がⅤ、Ⅷ号窯より後出段階であることが判る。

遺　　物

窯体内の主として焼成部の中位から前庭部にかけて焼き台、須恵器（蓋、皿）などが岩干移動して検出された。

器種は、大半が小型器で蓋杯（蓋）、杯、皿などがみられた。量は多くなく、その殆んどが破片化していた。

（郭　鍾　喆）

4）18—Ⅴ号窯

位置と状況

今回の調査地区では、小型級の登窯である。焚口から焼成部の半分まで天井部が欠落しているが、ほぼ本来の状態が残っている。焚口から燃焼部にかけて床幅はほぼ変わりなく、焼成部で次第にひろがり最大幅に達した後、再び狭くなる。主軸の長さ2.9m、焼成部において最大幅1.5m、主軸方向はN－78°－Wをはかる。

窯体の構造

A．焚口、燃焼部

焚口での堆積状態（図12）をみると、土層は窯体天井の落ち込み以前と以後の２つの層に分けられる。これは、本窯が花崗岩バイラン土（床面直上）の流れ込む際か、それ以前に放棄された後、窯体壁の崩落とⅢ号窯からの灰等が流れ込む過程を経た状態を示すものと考えられる。焚口の両側壁は、Ⅲ号窯のそれと同様に石材で構築している。燃焼部たちわりＣ－Ｃ′での床、側壁の状態とを合わせてみると、本窯には全般的な補修、改築等は認められないが、部分的な補修はあったと考えられる。燃焼部までの床面はほぼ水平に近く、燃焼部と焼成部のなす角度は20°である。焚口の標高38.5m、床幅0.8m、傾斜変換点までの主軸上の長さ１mを各々はかる。

B．焼　成　部

床は傾斜変換点から奥へ向かって弓なりに反りあがっている。主軸上の延長約２m、床面傾斜角45°をはかる。

C．奥壁・煙道部

焼成部と奥壁のなす角度は30°で、煙道部につながる。煙道部の残存高は0.4m、直径0.4mをはかる。Ⅲ号窯と同様に、奥壁に近いところの床面で、１枚の花崗岩石材が検出されている。

前　庭　部

ほぼ水平に近い断面をもち、堆定された範囲からみれば、主軸上の延長0.6mをはかる。設定したたちわりでは、下層にピットが検出されており、そこにはにぶい黄褐色砂質土（遺物含有）の堆積がみられた。同様のピットはⅧ号窯にも見られる。

灰　　原

灰原は、Ⅲ号窯の灰とともに大部分が下方に流れ落ちており、Ｖ号窯の灰原を確定することは困難であった。

遺　　物

窯体内では終ベース上に残存し、焼き台、須恵器等が認められた。主に小型器種で、蓋、杯等が中心であった。また、焼成部の終ベースでは甕片が出土している。

（郭　鍾　喆）

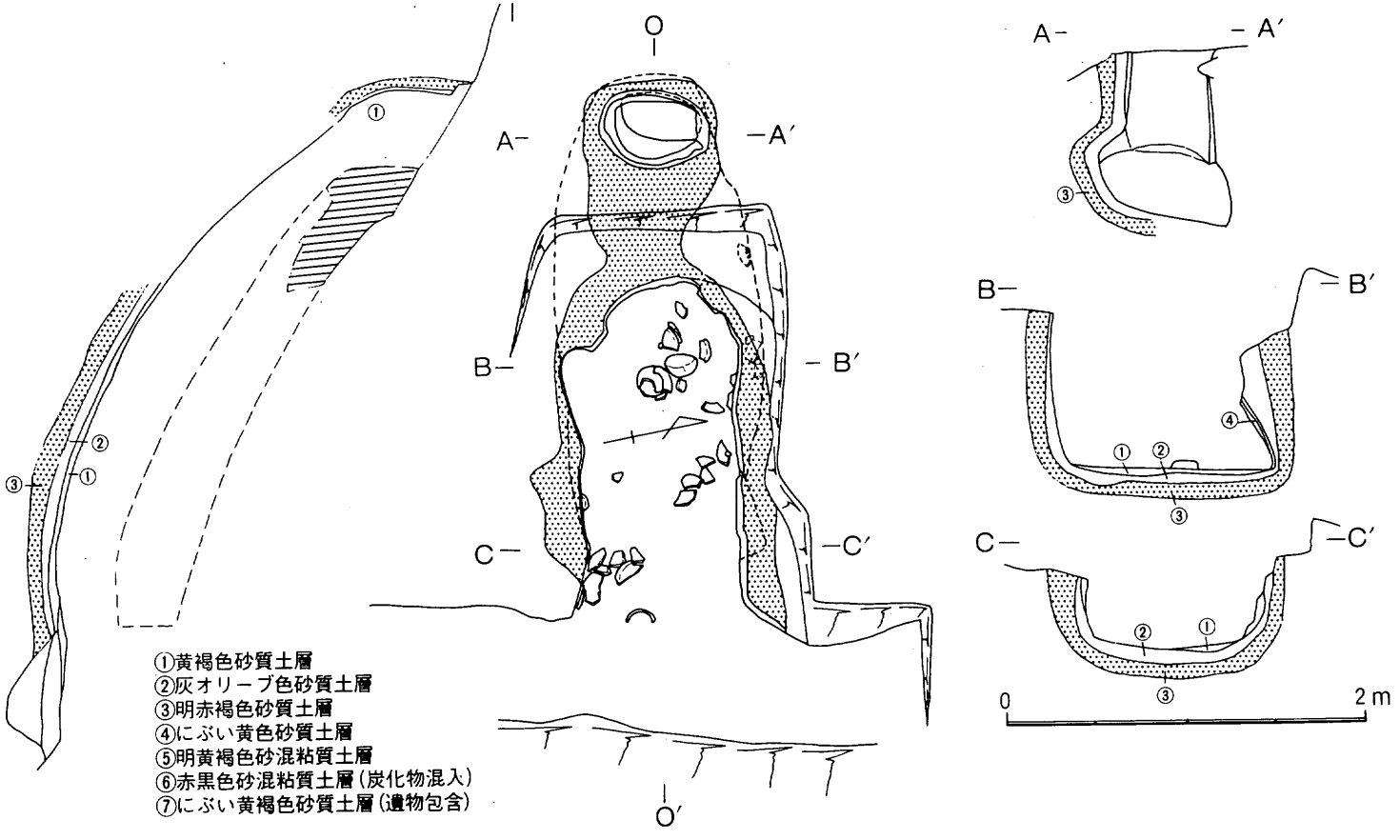


図12　18−V号窯遺構実測図

5）18—Ⅵ号窯跡

位置と状況

窯体の遺存状態は良好で、焚口から煙道まで残存していた。また煙道直下には天井の一部が認められた。窯体の全長3.2m、最大床幅は焼成部で見られ、1ｍをはかる。焚口部での標高は136.5ｍで、主軸方向はＮ－78°　－Ｗをはかる。

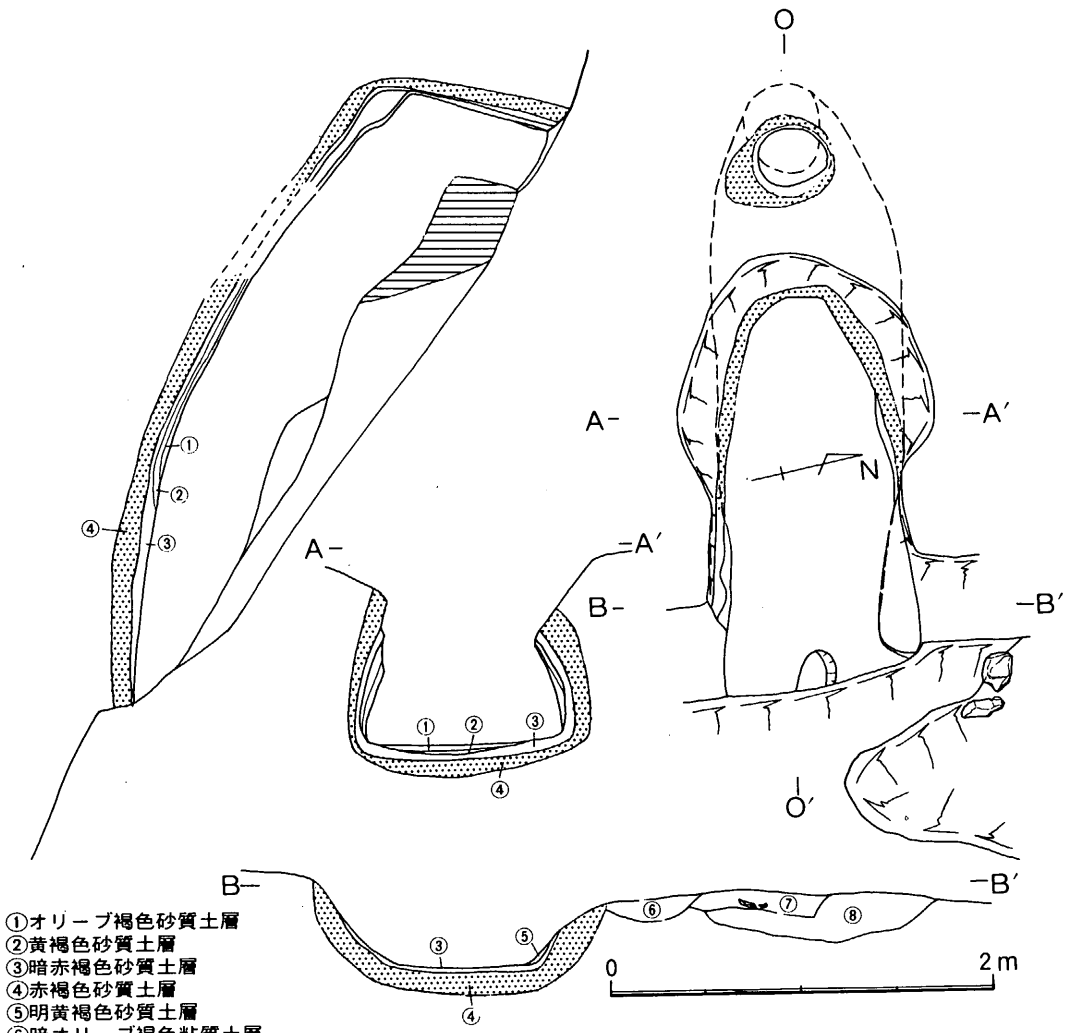


図13　18—Ⅵ号窯遺構実測図

窯体の構造

A．焚口、燃焼部

焚口幅0.8m、傾斜変換点までの主軸上での延長は1.2mをはかる。燃焼部の床面は、ほぼ水平であり、燃焼部と焼成部とは3°の角度をなす。焚口の端部は、自然流出および表土除去に伴う削平により失われている。

B．焼　成　部

主軸上での延長は2m、床面傾斜角32°、焚口から2.1m地点での天井までの高さは0.6mを各々はかる。

焼成部に設定したたちわりA－A′では壁の重なり2枚、床1枚が数えられた。

C．奥壁、煙道部

奥壁は床面から65°の角度でたちあがり、煙道につながる。煙道の直径は0.35mをはかる。床面の最奥部分には主軸線上で若干の段差を認める。

前　庭　部

すでに見たように焚口先端が失われており、当該部分についても検出できなかった。

灰　　原

焚口下右側におちこみが見られ、その中に花崗岩、炭化物、窯壁塊、遺物などが認められた。

（太田　睦）

6）18—Ⅶ号窯跡

位置と状況

Ⅵ号窯跡の南に接するかたちで位置する。窯体の遺存状態は良好で、焚口から奥壁まで残存するが、天井は残っていない。全長2.45m、最大床幅は焼成部で見られ、0.8mをはかる。焚口部での標高は136.5mで、主軸方向はN－97°－Wをはかる。

窯体の構造

A．焚口、燃焼部

焚口はすでに失われており、その位置は現状の先端部分から余り隔っていないと思われる。傾斜変換点までの主軸上での延長は0.7mをはかる。燃焼部の床面は、ほぼ水平であり、燃焼部と焼成部とは7°の角度をなす。

たちわりC－C′での観察によると、壁は2枚、床は1枚を各々数える。

B．焼　成　部

主軸上での延長は1.75m、床面傾斜角27°をはかる。

たちわりB－B′では壁2枚、床は1枚を各々数えた。さらにたちわりA－A′では、窯の床面が上下に重複しており、つくりかえが行われたことが判る。上下の床間には約10cmの堆積

層が認められる。床は上下ともに1枚ずつで、壁は1枚、各々に補修の痕跡は見られない。

C．奥壁、煙道部

奥壁は床面から13° の角度でたちあがる。奥壁の高さは0.5mである。

前　庭　部

前庭部はすでに焚口部分が失われているため検出できなかった。

灰　　原

焚口の左側に炭化物および遺物を包含する土坑状遺構が見られる。この土坑状遺構は下層に炭化物のみの層があり、その上部に遺物の包含層が見られる。1次窯の焼成後に形成されたものと考えられるが、その時期についての明確な判断資料はない。

（太田　睦）

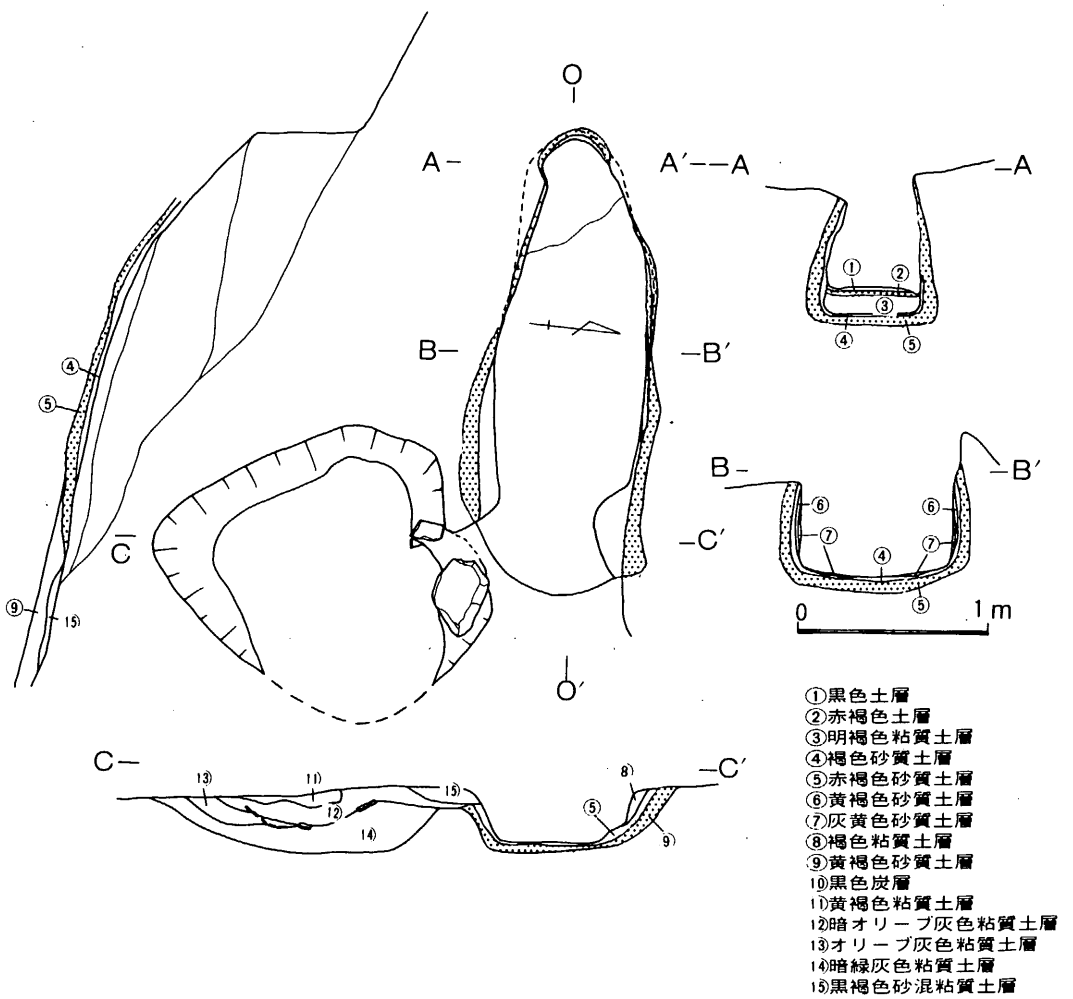


図14　18－Ⅶ号窯遺構実測図

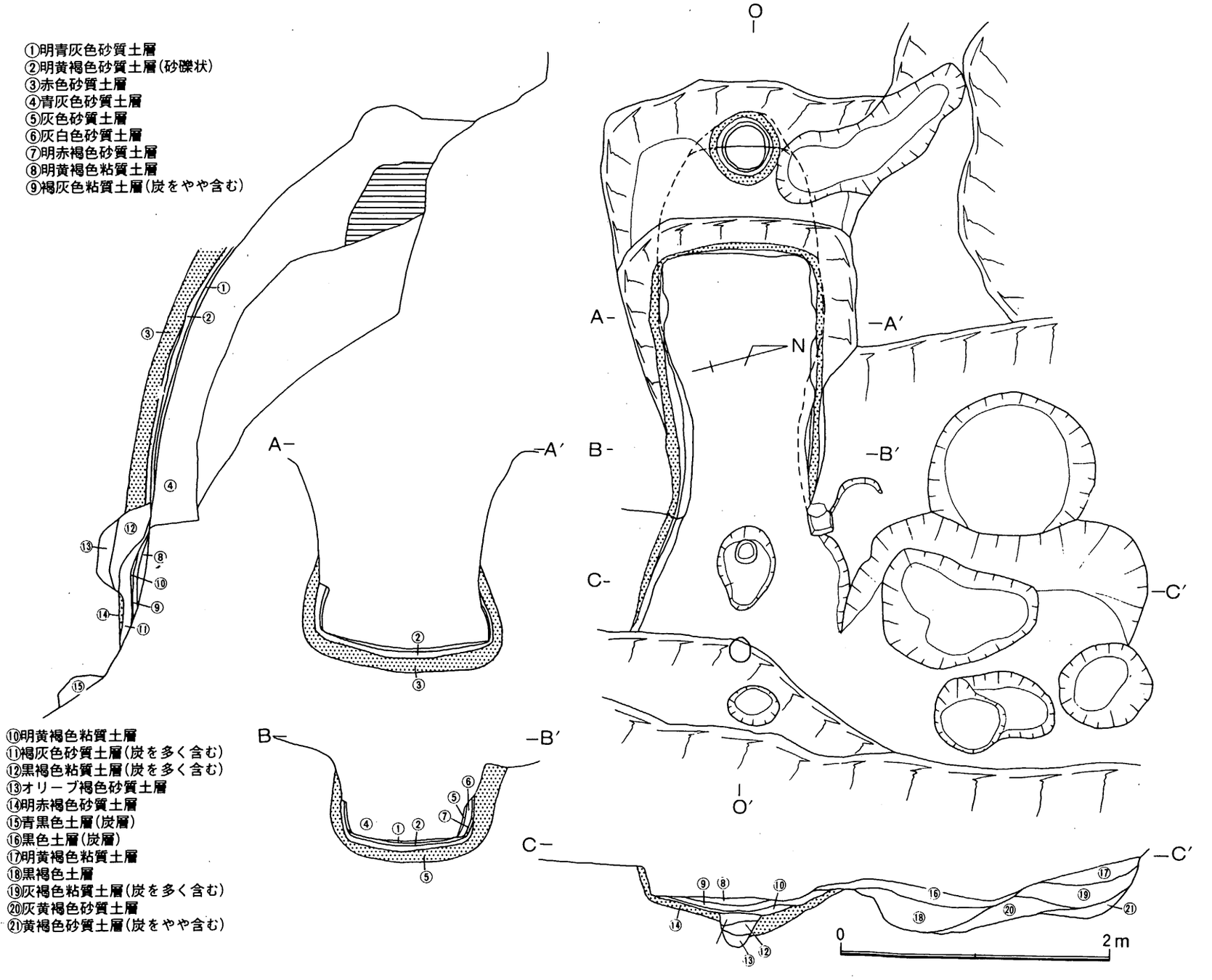


図15　18—Ⅷ号窯遺構実測図

7）18—Ⅷ号窯

位置と状況

Ⅲ号窯灰原の除去作業中に灰層の下から検出された。斜面の等高線に直交して東に開口しており、Ⅴ号窯の北に平行して構築されている。焚口の幅は広く、燃焼部では徐々に狭まり、焼成部へ移るにしたがってまた広がっていく。窯体は主軸方向N－76°－Wで、全長3.2m、最大幅1.2m、床面傾斜角度30°を測る。なお、第2次焼成時に焚口から前方1mほど前庭部が窯体として拡張されている。

窯体の構造

A．焚口、燃焼部

焚口から燃焼部は、全体に緩いハの字を呈する。焚口の幅は0.95mを測り、焚口端部から主軸線上0.8mの所で幅0.8mと最小となる。燃焼部床面はほぼ水平である。燃焼部にたちわりC－C′を設定し、下層を検討した。その結果、床を2枚確認し、側壁についても右側で壁を貼り足した痕跡が認められた。たちわりA－A′あるいはたちわりD－D′で確認されたとおり、第2次焼成時には第1次焚口からさらに前方1mほどハの字形に窯体が拡張されており、それに伴なうピットが下層から検出されている。ピットは長径65cm、短径43cmを測り、西寄りに径15cmの浅い柱穴が認められる。第2次焚口部については削平されており詳細不明である。

B．焼　成　部

焼成部は、主軸線上の長さ2.4m、窯尻との比高差1.4mを測る。床面傾斜は奥へ行くほど増しており、煙道付近では傾斜角度は50°となる。たちわりB－B′を設定して下層の検討を行なったが、床は1枚だけであった。第2次焼成時には焼成部は補修がなされなかったと考えられる。

C．奥壁、煙道部

焼成部床面は、最奥部で奥行25cm、高さ50cmほど袋状にオーバーハングして奥壁となり、ほぼ垂直に煙道が立ち上がる。煙道は、径30cmの円形を呈し、周囲は固く焼けている。残存長40cmを測る。

灰　　原

灰原は、窯体前面に若干の灰の堆積が見られただけで、ほとんど下に流れ落ちていた。この灰層の下で、径30cmの灰の詰まったピットが検出されている。

そ　の　他

焚口の右側に土坑やピットをともなったテラスが検出されている。Ⅷ号窯と同じくⅢ号窯の灰層の下から検出され、Ⅷ号窯操業時の作業場として機能していたと考えられる。

遺　　物

遺物は、蓋杯、Ⅲなどである。　　（網　伸也）

③土坑およびその他の遺構

1）18—Ⅳ号土坑

1号窯の南に位置する土坑である。上層に灰が厚く堆積しており、はじめは窯の灰原であると考えていたが、調査が進むにしたがい土坑であることが伴明したのでⅣ号土坑とした。2基の土坑が切りあっており、新しいほうをA土坑、古いほうをB土坑とする。A土坑は長径2.4m、短径1.9mを測る楕円形の土坑で、深さは1m強である。底部からほぼ完形の蓋杯が4個体検出された。埋土上層に大量の灰が堆積していた。B土坑はA土坑に切られているが、長径1.8m、短径1.4mの隅丸方形に近い楕円形であったと考えられる。深さは0.7mを測る。西側の壁がオーバーハングしており、それに覆われる形で底部西端には完形の杯身1個と窯壁片2個が据えられていた。そのほかに流れ込みと考えられる黒耀石片が底部より発見されている。

遺物は、土坑底部のもののほかに、埋土中より多くの蓋杯が検出されている。

（網　伸也）

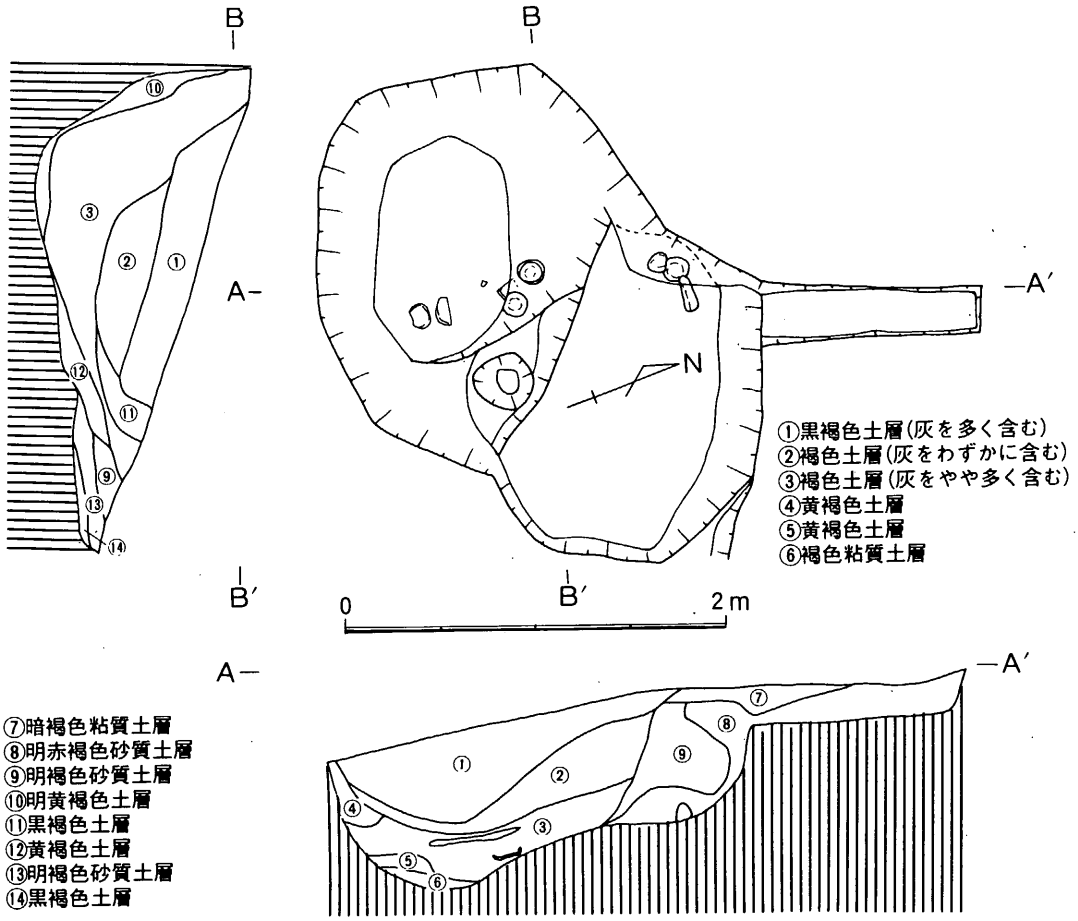


図16　18—Ⅳ号土坑遺構実測図

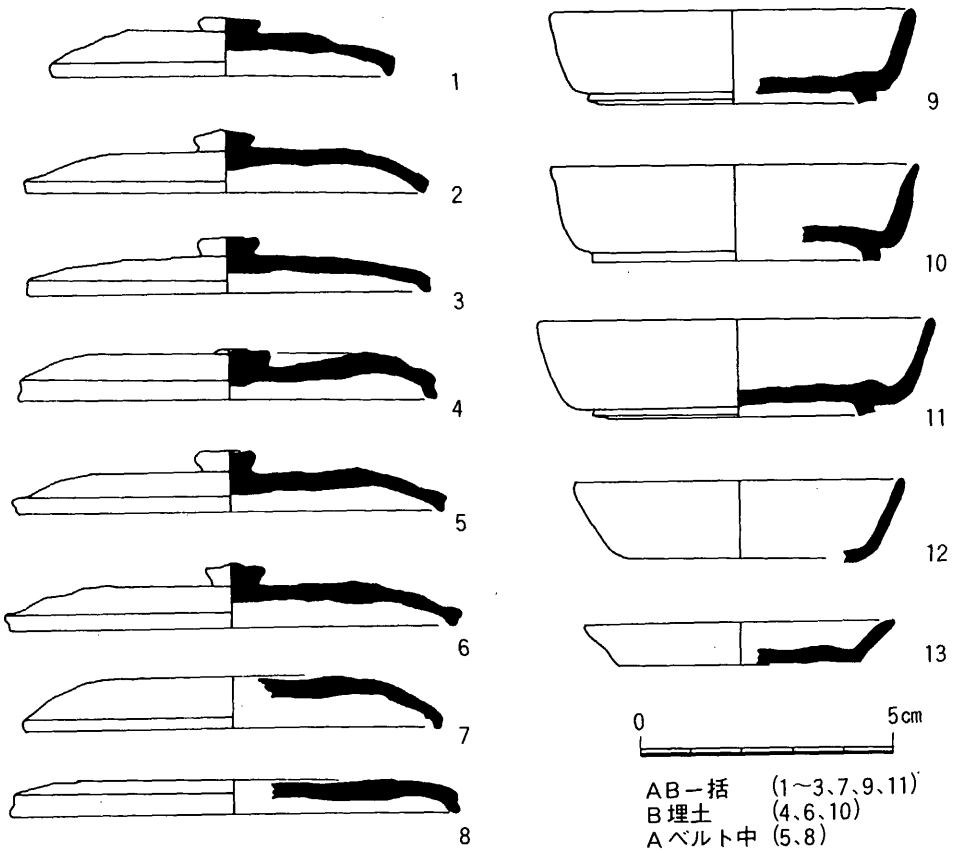


図17　18—Ⅳ号土坑出土遺物

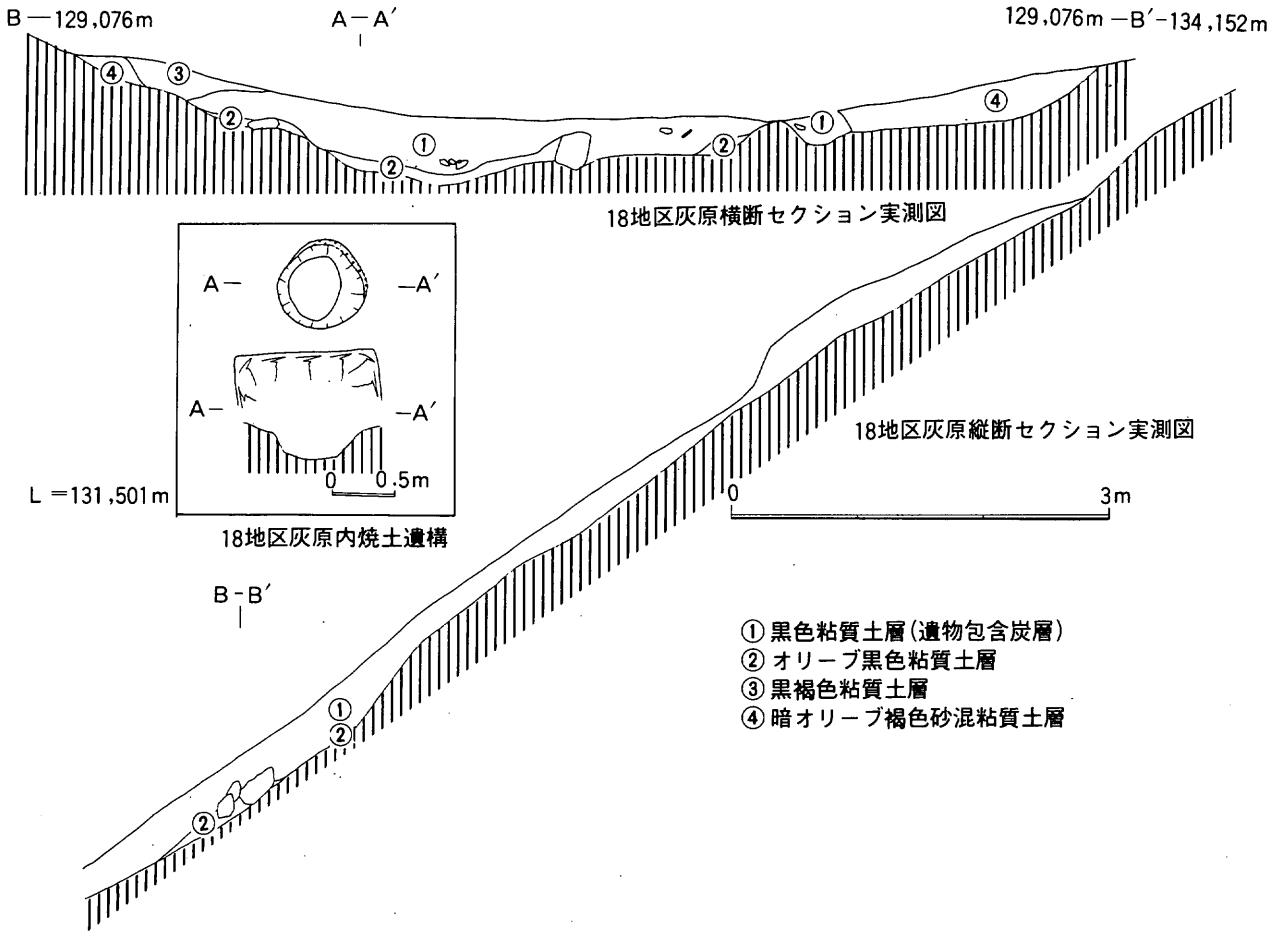


図18　18地区灰原横断、縦断セクション実測図

2）18地区　下方灰原

18地区に存在する7窯跡下方に広がる傾斜面に堆積しており、傾斜の僅かに緩やかな東南部にやや偏在する形で、花崗岩の基盤上に堆積している。

堆積状況は、垂直分布において三層ならびに、平面分布において基盤の突出により二つの部分に弁別できたものの、上方に位置している各々の窯跡へ帰属する灰層を弁別することは、窯体と灰原との間において層的に空白部分があり困難であった。さらに、堆積傾向としては最も深い中央部において遺物ならびに炭化物が多く、周辺へゆくにつれて遺物包含の度合が減少する。盆状構造の堆積傾向をとっている。

灰層中からは多量の炭化物とともに、杯身・杯蓋を主として、少量ながら甕・窯壁片等の遺物を多量に検出した。

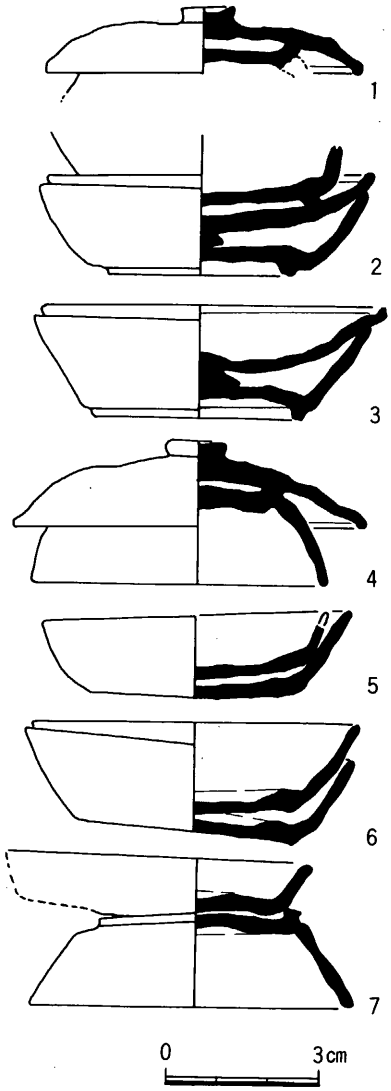
なお、下方灰層が堆積している部分において、その下位には遺構は何ら認められなかった。

（中島恒次郎）

3）18地区　灰原部のピット

本ピットは、Ⅲ・Ⅳ号窯の下方の丘陵斜面で確認されたやや不整の円形のもので、直径0.7mをはかる。ピットの一部に焼けられた痕跡があり、ピット内セクションは最下層より炭層、花崗岩バイラン土（石混り）、土器片・焼土・炭の固まり層の順となっている。遺構の性格は不明である。

（郭　鐘　喆）



18-Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中(1～4、5～7)
18-Ⅲ号窯灰原灰層中（5）

図19　重ね焼の状況（熔着遺物）

(2) 19地区の調査

①分布の状況

18地区の南東　mに位置する。当初19地区としてマークされていたものからは少し北にずれて窯跡が確認されたため、その確認部分を中心にして伐採、表土除去を行った。その範囲は南北22m、東西14mで、標高136mから146.5mの丘陵斜面である。

検出遺構は、窯跡1基のみで、その灰原などはすでに自然流出によって失われていた。

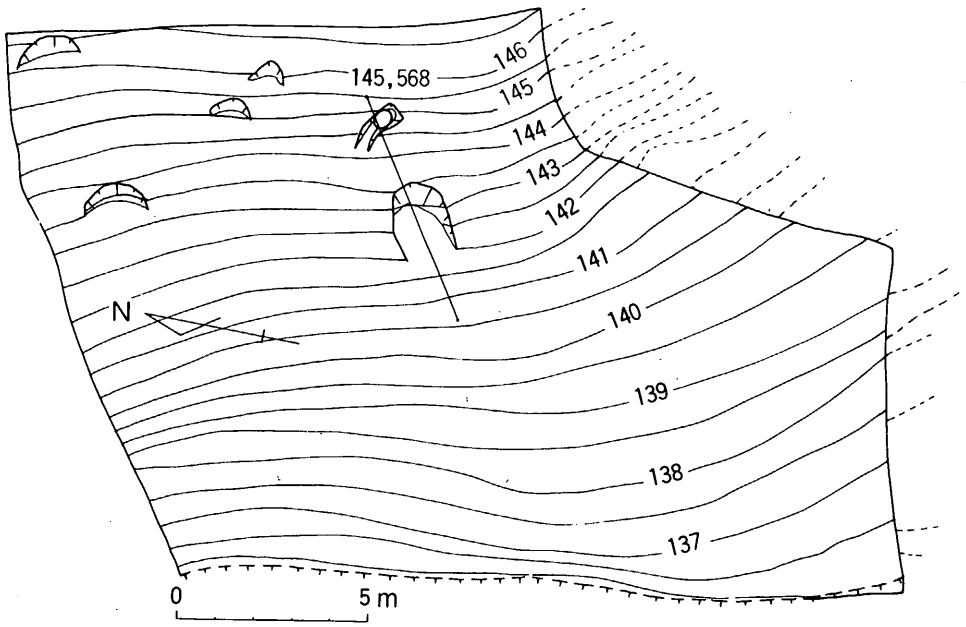


図20　19地区地形図

②須恵器窯跡

1）19—1号窯

位置と状況

19地区のほぼ中央に単独で位置する。窯体の残存状態は極めて良好で、焚口から煙道まで残存し、煙道から2.5mまでは天井も残存していた。全長4.2m、最大床幅は焼成部にあり1m、焚口での標高約142mをはかる。主軸方向はN－58°－Eである。

窯体の構造

A．焚口、燃焼部

焚口幅0.85m、傾斜変換点までの主軸上の長さ1.6mをはかる。燃焼部の床面はほぼ水平で、

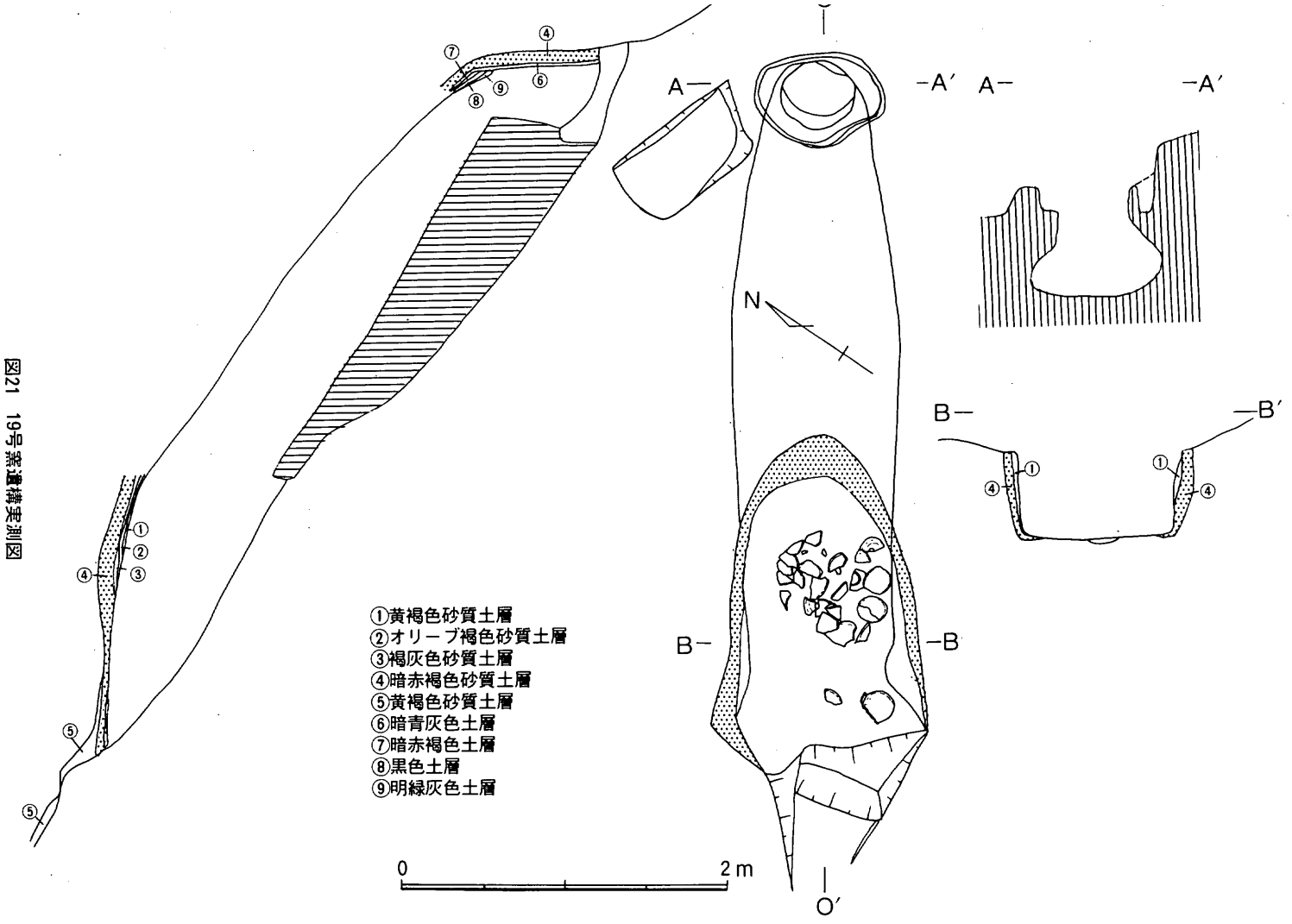


図21　19号窯遺構実測図

燃焼部と焼成部は25°の角度をなす。床面上で杯蓋、杯身等の遺物が検出された。たちわりB－B′では壁2枚、床4枚がみられる。

B．焼　成　部

主軸線上における焼成部の長さ2.6m、床面傾斜角38°をはかる。焚口から主軸上で1.6mの地点での天井の高さは0.75mである。主軸での断面をみると、床面の重なりが2枚みられる。遺物の出土状状や天井の遺存が良好なことから、この窯は使用後廃絶したものと思われる。

C．奥壁、煙道部

奥壁は床面から40°の角度で立ち上がり煙道につながる。奥壁の高さは0.65mである。煙道は最初方形のプランで作られ、一度焼かれたのちに、円形につくりかえられている。床面最奥部では床面の重なりが2枚みられる。煙道に付設する遺構として、煙道左側に北西にのびる溝状遺構が検出された。恐らくは、類似例と同様排水溝として機能したものと考えられる。

前庭部・灰原

明確に検出されなかった。

（太田　睦）

(3) 20地区の調査

①分布の状況

19地区の所在する同一丘陵の反対斜面に位置する遺構群である。従って直線距離では、19地区から90m、18地区からは約160mをはかる。予備調査のトレンチで複数の窯跡が分布するものと考えられていたため調査の範囲を少し広く設定したが、さらに拡大するという状況となってしまった。

伐採の範囲のほぼ半分が調査の対象となった部分である。これは進入路の問題あるいは遺物散布が広いという関係から生じたものである。また植林が進んでいた分、伐採、搬出に手間取ったことは否めない。

ちなみに調査範囲は、南北17m、東西25m、面積425㎡をはかる。須恵器窯跡3基、土坑2カ所、小型平窯跡1基が検出された。窯跡などは18地区と同じく、検出順に20—Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ号窯跡と命名した。なお土坑2カ所、小型平窯跡についてもこの番号に続けてⅣ、Ⅵ号土坑、Ⅴ号窯跡と呼称する。

20—Ⅰ、Ⅱ号窯跡は、調査区の西側部分で検出されたもので、標高155mから153mの丘陵斜面に位置する。Ⅰ、Ⅱ号窯跡とは平行して位置しており、両者は切り合い関係にはない。両者の距離は1.6mで、側壁間では0.5m離れているのみである。なおⅡ号窯跡は、Ⅰ号窯跡に比較して小型であり、調査開始段階では天井部が残っており、窯体内の空間はきわめて少ないものであった。

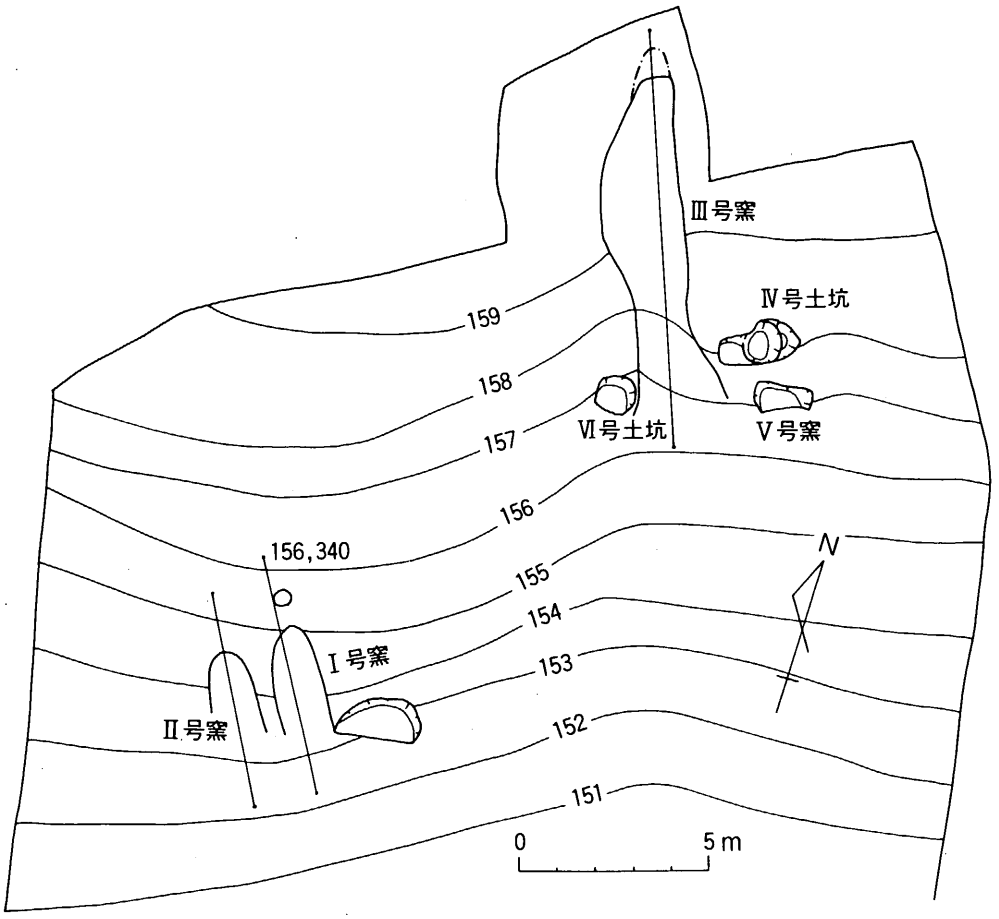


図22　20地区 地形図

両窯跡の灰原は自然流出などによって失われており、調査段階では殆ど確認できなかった。

Ⅲ号窯跡は20—Ⅰ号窯跡の北東15m、標高157mから160mに位置する比較的大型の窯跡である。予備調査の際に散布が確認されている甕片などの大型器種は、当該窯で焼成されていたものと考えられる。

Ⅳ、Ⅵ号土坑およびⅤ号窯跡は、いずれも20—Ⅲ号窯跡の焚口の周囲に位置している。まずⅥ号土坑は焚口の右（西）に接しており、標高157m前後の斜面を掘りこんで造られている。詳細は後述するので省略するが、内部から窯壁などが採集されており、当該窯跡との関係が濃いものと思料される。

Ⅳ号土坑は焚口の左（東）2.5m、標高158m前後の斜面を掘りこんで造られており、前者とは4m離れている。2個の土坑が重複して確認されている。

Ⅴ号窯跡は、20—Ⅲ号窯跡の焚口左（東）3m、標高157mに造られた小型の平窯である。

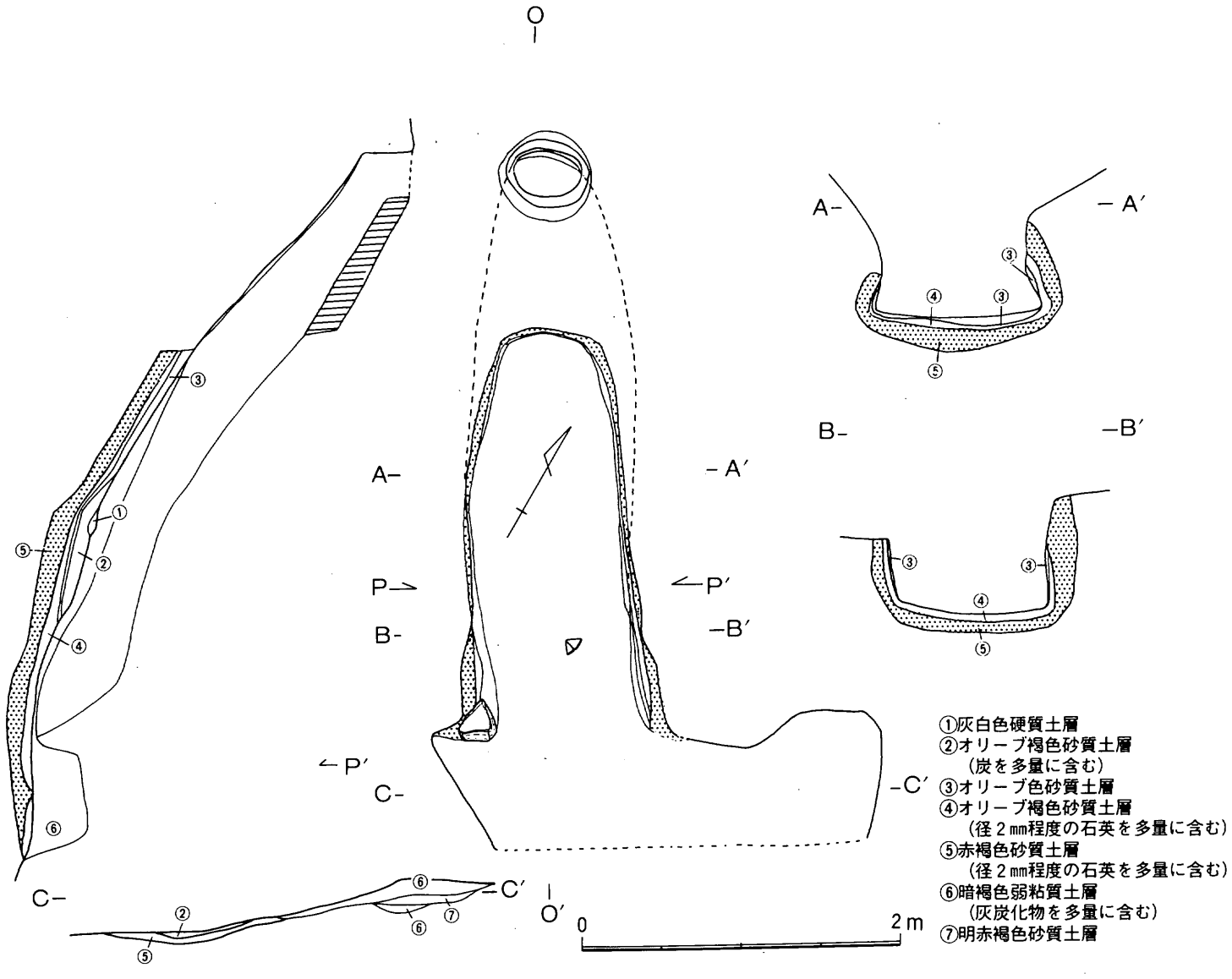


図23　20－Ⅰ号窯遺構実測図

とくに周囲の壁が赤く焼固しており、なんらかの焼成に供されたことは疑いない。内部からは遺物の検出がなく、20—Ⅲ号窯跡といかなる関係にあるのか不明な点が多い。

②須恵器窯跡

1）20—Ⅰ号窯

位置と状況

20地区の南西に位置する。窯体の残存状態は良好で、焚口から煙道まで残存し、煙道から1.1mのところまでは天井も残存していた。全長3.7m、最大幅は焼成部にあり0.95m、焚口での標高約153mを測る。主軸方向はN－30°－Wである。

窯体の構造

A．焚口・燃焼部

焚口幅は0.9mで傾斜変換点までの主軸上の長さは0.9mである。焚口端部左側には花崗岩石が置かれているが、この石は焼成を受けた痕跡はみられない。たちわりB－B′では壁・床ともに1枚で補修痕跡はみられない。

B．焼　成　部

主軸線上における焼成部の長さ2.8m、床面傾斜角35°を測る。たちわりA－A′では壁、床が2枚ずつみられる。主軸線上2.6mの地点の天井の高さは0.6mである。燃焼部に遺物1点みられるほかは遺物がみられないことと、天井部の遺存が良好なことから、この窯は使用後廃棄されたと思われる。

C．奥壁・煙道部

奥壁は床面から40°の角度で立ち上がり煙道へつながる。奥壁の高さ0.3mである。煙道部は惰円形を呈し、長径0.4m、短径0.3mである。

前　庭　部

前庭部末端は機械により削られ全身は不明であるが、焚口の下方に幅2.6m、残存長0.7mが検出された。主軸をはさんで両側に炭化物を多量に含む層（第6層）がみられるが、これは吹き上げと考えられる。遺物は杯身、杯蓋がみられる。また窯体東側にはテラスがあり、床面には薄く青灰色の粘土がみられ、上面には炭化物と遺物がわずかにみられた。

灰　　原

灰原は自然流出などによって流れており確認できなかった。前庭部灰層がⅡ号窯焚口付近まで広がっているのが認められた。このことからⅡ号窯がⅠ号窯に先行するものと考えられる。

（太田　睦）

2）20—II号窯

位置と状況

20地区Ｉ号窯のすぐ西側に位置する。残存状態は良好であったが、天井が焚口から約１ｍの地点で0.4ｍと低く、また極めてもろかったため掘り進める過程で天井が崩壊した。全長2.4ｍ、最大幅は焼成部にあり0.9ｍ、焚口での標高約153ｍを測る。主軸方向はＮ－28°－Ｗである。

窯体の構造

Ａ．焚口、燃焼部

焚口は幅0.75ｍ、傾斜変換点までの主軸上の長さ0.5ｍを測る。床面はややくぼんでおり、燃焼部と焼成部は10°の角度をなす。たちわりＢ－Ｂ′では壁、床ともに１枚であり、補修痕跡はみられない。

Ｂ．焼　成　部

主軸線上における焼成部の長さ２ｍ、床面傾斜角度35°を測る。たちわりＡ－Ａ′は壁、床

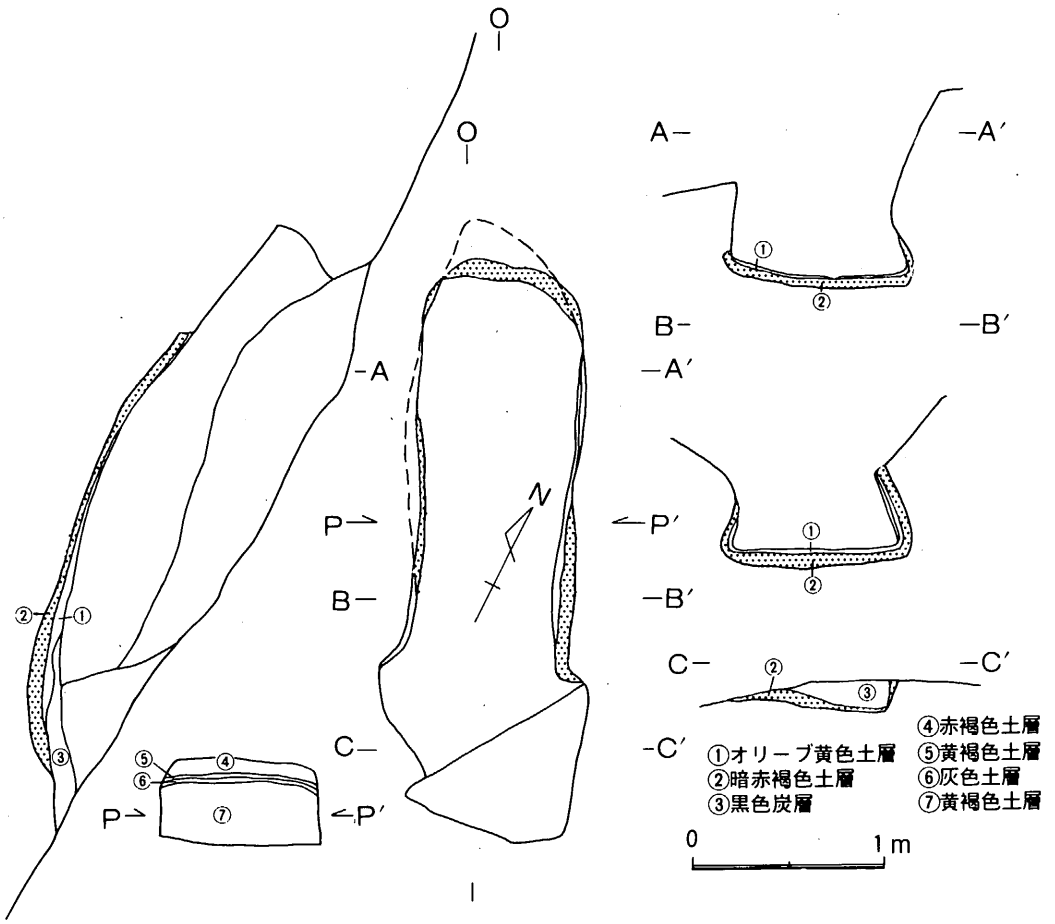


図24　20—Ⅱ号窯遺構実測図

ともに１枚である。

Ｃ．奥壁・煙道部

奥壁は床面から100°で立上り、煙道は奥壁最奥部から焚口方向に0.3ｍの位置につく。煙道は主軸よりやや西側によっている。

前　庭　部

焚口下に検出された前庭部は主軸上の長さ0.8ｍで幅１ｍである。主軸上のたちわり断面でみると焚口より0.5ｍの地点まで赤焼けがみられる。

灰　　原

明確には検出されなかった。

（太田　睦）

３）20—Ⅲ号窯

位置と状況

20地区の東部、同地区Ⅰ・Ⅱ号窯からは北東部約15ｍの位置に離れて存在しており、窯体主軸方向はＮ－20°－Ｗ、主軸上の残存長8.6ｍ、床面最大幅は焼成部において1.8ｍ、焚口の標高は約157ｍを測り、等高線に直交する比較的規模の大きな登窯である。

窯体の構造

Ａ．焚口・燃焼部

焚口の最大床面幅は約1.7ｍ、傾斜変換点までの主軸上における長さ2.5ｍ、燃焼部と焼成部のなす角度12°を各々測る。焚口部左右の焼土は、左側がやや長く、右側の壁は赤焼け部分と灰色に還元された部分に分かれ、灰色の部分は床面から約20°の角度をもって上方へ上っている。

この部分からは、杯身・杯蓋を主として甕等の遺物が出土した。

焚口部より傾斜変換点へ向けて床面幅が狭くなり、傾斜変換点付近における床面幅が最も狭く、この部位を境として、焼成部へ向けては次第に床面幅を増していく。この傾斜変換点付近の左側壁面には、一回補修の痕跡が見られる。

またこの部分を最も深部とする長さ2.2ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.5ｍを測り盆状形を呈する舟底状ピットが形成されている（第26図）。この舟底状ピットを縦断（Ｏ－Ｏ′）・横断（Ｃ－Ｃ′）する形で設定したたちわりでは、最終焼成床面より下位に二層の赤焼けの土層（図版２・第４・６層）が確認できた。この各赤焼けの土層は、第６層は第４層に切られ、第４層は最終焼成床面（第２層）に切られるという関係にある。また各赤焼け土層直上層である第３層には甕が（第26図）、第５層には杯身・杯蓋・甕等の遺物が包含されていた（第26図）。

舟底状ピット最下層である第７・８層は、複数の土質から構成され、角礫等の混入から考え

ると攪乱された土層と考えることができ、さらに、この二層の境界付近において最も高い頻度をもって、杯身・杯蓋・壷・甕等の遺物が包含される形で出土した。また窯体各部の床面および壁面に分布している第10層は、この舟底状ピット最下部には分布しておらず、むしろ第10層を切る形で舟底状ピットは形成されている。

B．焼　成　部

主軸上における長さは6.1m、床面傾斜角度は27°である。

この部分においては、主軸上のたちわり（O－O′）および、主軸に直交するたちわり（A－A′・B－B′）を設定したが、これらのたちわりでは補修の痕跡は確認できなかった。しかし、これらのたちわり設定箇所以外の部分であるたちわりA－A′下方（燃焼部側）において、1回補修痕跡の貼壁が剝げかかった状態で、部分的にではあるが確認できた。他の部分においては、床の重なりや壁の補修等の痕跡は認められなかった。

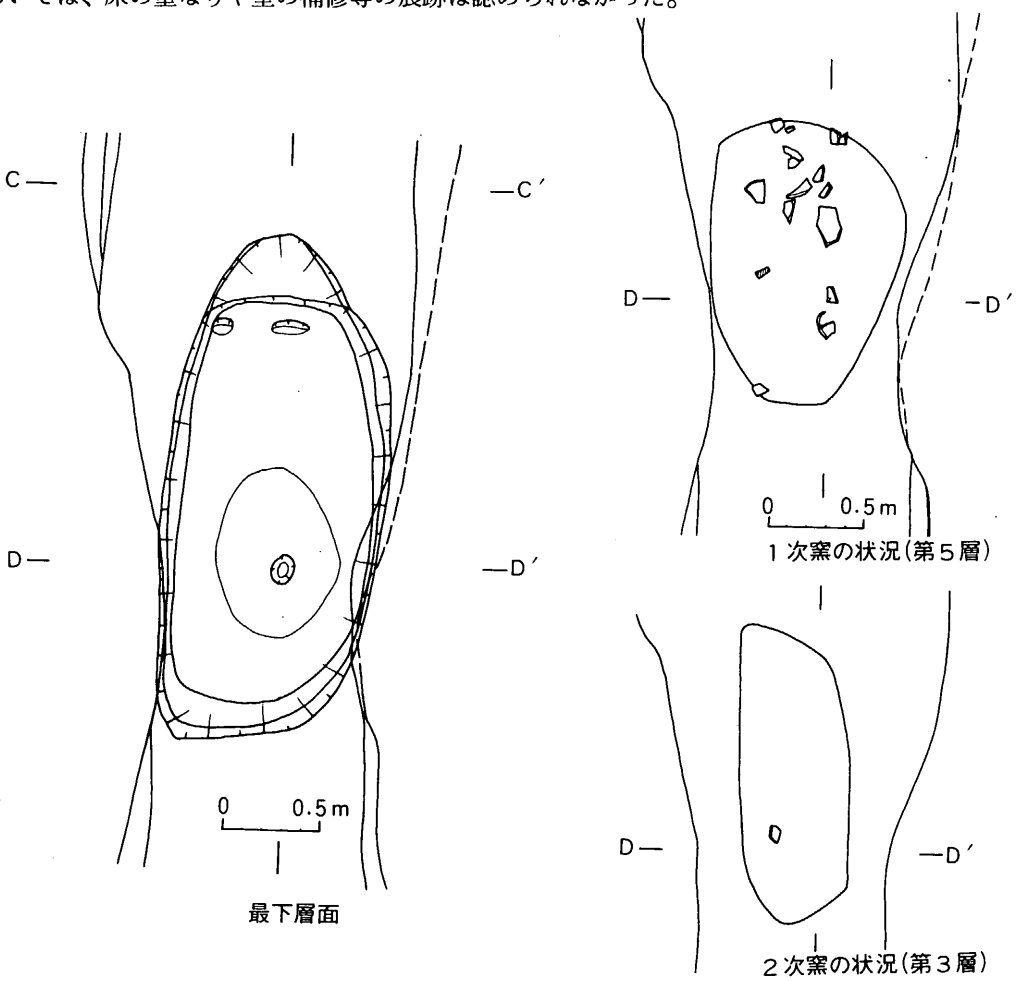


図25　20—Ⅲ号窯舟底状ピット実測図

焼成部には、ほぼ全面に甕を主として極少量の杯身・杯蓋等の遺物が出土し、特に甕に関しては焼き台とともに平坦な胴部の破片のみが出土していることから、製品としてではなく焼き台として転用されたものと考えられる。さらに焼成部および燃焼部において、杯身および杯蓋以外の遺物に定形品がみられない、さらに窯体内における土層の観察（図版２）を考慮すると、使用後に廃絶または西方から東方へ向かって土砂が流入し崩壊したものと考えられる。

Ｃ．奥壁・煙道部

ユンボにより消失し、煙道部の確認はできなかったものの、焚口部より主軸延長線上9.5ｍの部分に窯壁が残存しており、この部分を、傾斜角度ならびに焼成部壁面の狭まりの度合から判断して、奥壁と考えて大過無いだろう。

前　庭　部

前庭部と判断できる部分は、明確な形では検出できなかった。

灰　　原

Ⅲ号窯下方斜面のやや谷状になった部分に堆積しており、焚口部より連続する灰層の分布ならびに、20地区Ⅰ・Ⅱ号窯焚口部より高位にあり、さらに遺物の接合関係から考えてⅢ号窯単独の灰原であると考えられる。

灰原からは、杯身・杯蓋・甕等の遺物、ならびに炭化物が出土した。

（中島恒次郎）

③　土坑およびその他の遺構

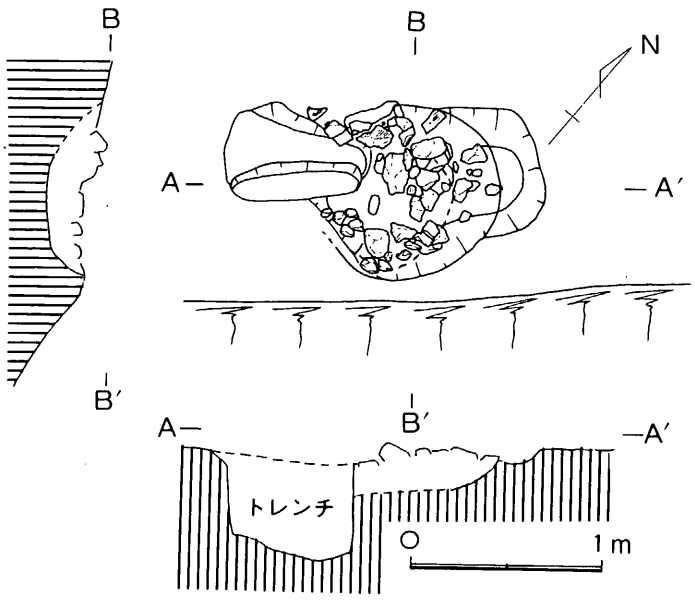
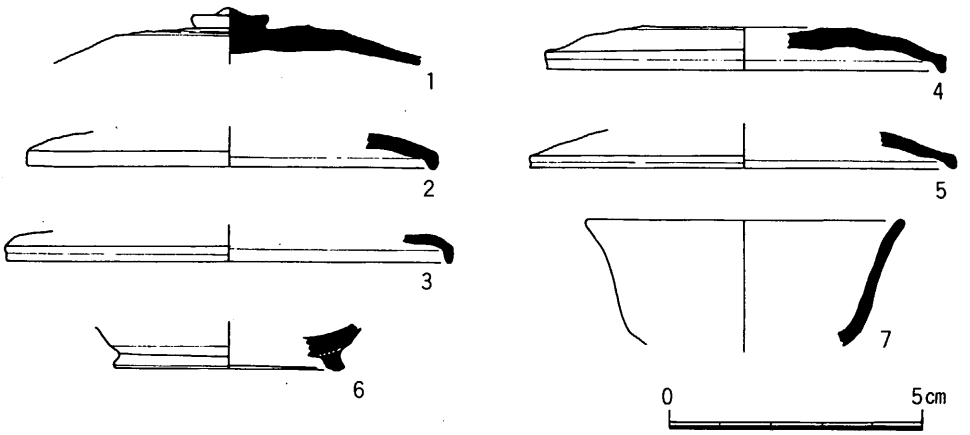


図26　20—Ⅳ号土坑遺構実測図

１）20—Ⅳ号土坑

Ⅲ号窯の東方2.2ｍに位置する。確認された上線からみて、直径0.95ｍをはかる円形に近い平面プランをもち、その深さは浅い。土坑の壁と底には焼かれた痕跡は認められない。土坑内のセクション（第27図）をみると、その下層は明黄色のやや砂混りの粘質土だが、上層には大部分の窯体壁片と、少数の須恵器大甕片・蓋・焼き台等が雑然として検出されている。（郭）



20－Ⅳ号土坑出土遺物

図27　20—Ⅳ号土坑出土遺物実測図

2）20—Ⅵ号土坑

Ⅲ号の西方1.5mのところに、若干の花崗岩盤片が混じっている赤色粘質土を掘って構築されている。やや不整の円形プランをもつ浅い土坑で、直径0.95mをはかる。土坑内セクションが、最下層より明黄色のやや砂混りの粘質土層、窯体壁片・炭・大甕片・焼土の混合層、花崗岩のラン土層の順となっており、土坑の壁・底に焼かれた痕跡が認められず堆積相とその内容物、平面プランとその大きさ等からみて、Ⅳ号土坑のそれとほぼ同様で、Ⅳ号土坑と共にⅢ号窯に付属するものと考えられる。しかし、Ⅳ・Ⅵ号土坑の性格は明らかではない。出土須恵器は大甕の胴部片・口縁部片、蓋・杯等で、その量はかなり多い。窯体壁片と熔着した大甕片、歪んだ蓋の出土は注目される。　　（郭　鐘　喆）

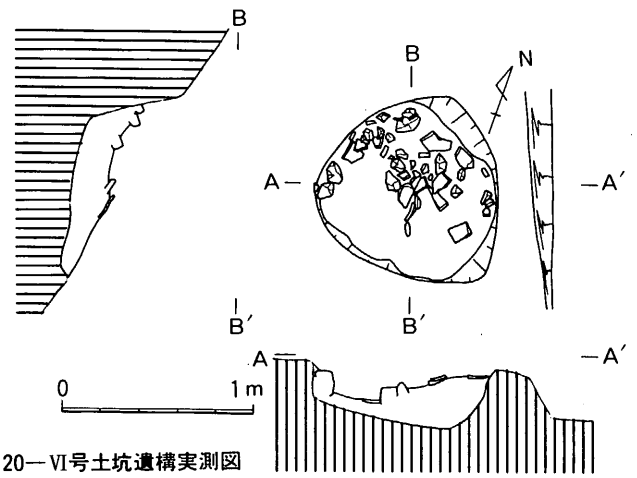


図28　20—Ⅵ号土坑遺構実測図

3）20—Ⅴ号窯（焼土坑）

20地区東方にあり、Ⅲ号窯の南下方、標高約157ｍに位置している。

南部分以外の三辺を焼き締められた、短軸長0.5ｍ、長軸長1.2ｍ、深さ0.75ｍの長方形を呈する土坑壙状の遺構で、最下部より一面に炭化物を検出した他は無遺物であった。遺構内の土層については、炭化物が極少量混じる程度の粘質土の単一層であり、分層不可能であった。さらに、遺構内最下部の炭化物の下位は焼け締められておらず、基盤である花崗岩の風化生成物であった。（中島恒次郎）

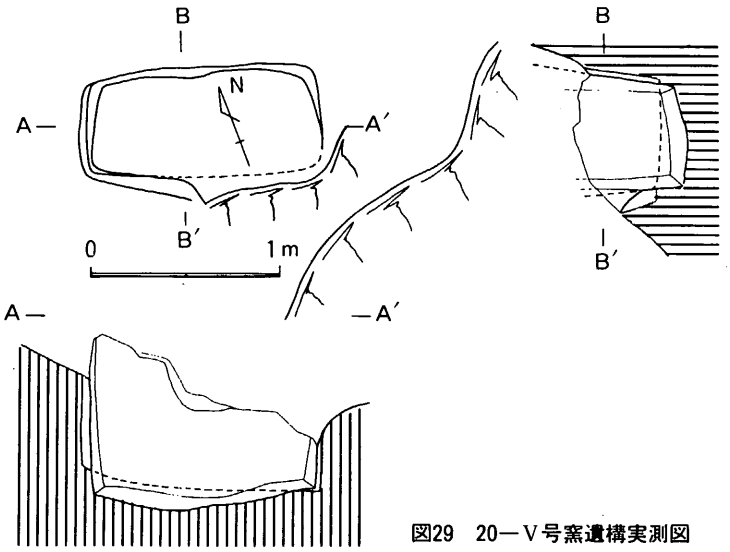


図29　20—Ⅴ号窯遺構実測図

第4章　出土遺物

1.　概観

遺物は、その大半が須恵器であり、とくに一部を除いてひずみを有する、あるいは破片、細片化したものなど流通する製品としては不適切なものである。これは生産地という遺跡の性格上やむをえないものである。これらの殆んどについて旧形、すなわちひずみの生じる以前の状態に推定復元して図化した。従って、遺物写真にみる現物と実測図のそれとが一見して形状が異なるものも見られるのはこのためである。

器類には、蓋杯、杯、高杯、椀、鉢、皿、長、壷、瓶子、甕など比較的多様なものが見られたが、大半を占めたのは蓋杯、皿、杯、の出土は全ての窯跡で見られたが、甕などの大形器種は、限られた窯からしか、確認出来なかった。

土師器は、18—Ⅰ号窯窯体上遺構出土のものを除いて細片化しており、量も少ない流入品として理解しており当該窯での焼成品ではないと考えられる。

各器種のうち、蓋杯などの量的分析の可能なものについての検討、さらにそこから派生する型式編年の問題など様々な問題については、本書では扱わずに、次年度の最終報告の総括としてまとめることにした。従って本書では観察を主とした事実報告にとどめている。この点ご諒解願いたいと思う。

2.　遺物観察

遺物の観察は別紙表としてまとめたのでこれを参照されたい。

18－Ⅰ号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	1	排水溝埋土	口径 16.6 器高 2.1	口縁部は、短くほぼ垂直に下がった後やや外反し、端部は丸い。 天井部は低く、中心で凹んでいる。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、ナデ調整。他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、暗オリーブ灰色。
同上	5	窯体内最終ベース	口径 16.1 器高 2.4	口縁部は、短く内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、なだらか。 つまみ無し。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ削り。 天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、暗赤褐色。
杯	4	同上	口径 9.9 器高 4.8 底径 7.3	口縁部は、上外方に伸び、端部はやや鋭い。 底部は深く、やや丸味を帯びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、若干ナデ調整。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、赤灰色。
蓋杯（蓋）	7	窯体内	口径 15.3 器高 2.4	口縁部は、短く内傾後、外反し、端部は丸い。 天井部は低く、ややなだらか。 扁平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、および天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、甘い。 色調、灰白色。
同上	14	同上	口径 13.2 器高 1.8	口縁部は、短く内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、ややなだらか。 つまみ無し。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 天井部内面½、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、粗。砂石を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、明緑灰色。
同上	12	同上	口径 18.0 器高 1.6	口縁部は、短く垂直に下がった後、下外方へ屈曲する。端部は丸い。 天井部は低く、中央で凹む。 扁平な凹状のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面¾、回転ヘラ切り。 天井部内面⅓、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
蓋杯（身）	20	同上	口径 13.5 器高 4.1 底径 9.0	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。底部端よりやや内側に逆八の字形の高台を付す。 内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、未調整。底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、緑灰色。
同上	27	窯体上遺構	口径 14.2 器高 4.2 底径 10.5	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く平ら。高台は短く、垂直に下がり、全面で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り、未調整。 底部内面、ナデ調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	29	同上	口径 14.8 器高 4.5 底径 9.2	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。高台は短く八の字形に付し、内側で接地。端面は凹状をなす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好。 色調、青灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（身）	37	窯体上遺構	口径 12.6 器高 3.9 底径 7.9	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで若干外反する。端部は丸い。 底部はやや浅く、なだらか。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好。 色調、灰白色。
短頸壺（蓋）	38	同上	口径 12.8 器高 2.6	口縁部は、やや外傾ぎみに下がり、端部は外傾する面をなす。 天井部は低く、平らで、つまみは付かない。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ切り未調整。 残り½は回転ヘラ削り調整。 天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好。 色調、青灰色。
皿	39	同上	口径 21.2 器高 2.7 底径 15.7	口縁部は、短く上外方に伸び、端部付近で若干外反する。 底部は浅く、なだらか。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面は、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好。 色調、灰白色。
高杯	40	同上	口径 18.4 器高 8.3 底径 10.6	杯部口縁は、垂直に短く立ち上がり若干外方へ屈曲する。端部はほぼ水平な面をなす。杯部底部は低く平ら。脚部は低く、ラッパ状に開いた後、若干持ち上がって端部となる。端部は鋭く、外反ぎみに短く下がる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯部底部外面½、回転ヘラ削り調整。 杯部底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 脚部にしぼり目残る。	胎土、密。白色砂粒を少量含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、明青灰色。
土師器（甕）	41	同上	口径 18.9 器高 16.7	口縁部は、短く外反ぎみに開き、端部は丸い。 体部は丸く、球状を呈する。 最大径は口縁部に求められる。	輪積み成形？ 口縁部内、外面ともナデ調整。体部外面ハケメ調整。体部内面上部½は横方向のヘラ削り調整。下部½、縦方向のヘラ削り調整。底部、ユビオサエ。	胎土、粗。砂粒を多く含む。 焼成、良好。 色調、黄燈色。 外面に赤彩有り。

18—Ⅱ号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	42	窯体内最終ベース	口径 14.9 器高 2.7	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや低くなだらか。 扁平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ切り、天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、淡黄色。
同上	46	同上	口径 15.7 器高 2.8	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低くなだらか。 扁平な擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅓、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、甘く軟質。 色調、灰白色。
同上	48	同上	口径 15.4 器高 3.0	口縁部は、短く内傾し、端部は丸い。 天井部はやや低く、上部は平ら。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ切り後、ナデ調整。天井部内面½、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、甘く軟質。 色調、淡黄色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	50	窯体内最終ベース	口径 13.8 器高 3.6 底径 8.2	口縁部は、やや内弯ぎみに上外方に伸び、端部は丸い。 底部は、やや浅く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや粗。砂粒を含む。 焼成、甘く軟質。 色調、黄橙色。
蓋杯（身）	49	同上	口径 12.7 器高 3.9 底径 8.1	口縁部は、内弯ぎみに上外方に伸び端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。 高台は、やや細く、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。 外面は灰をかぶっている。
皿	53	同上	口径 18.2 器高 2.1 底径 14.8	口縁部は、上外方に伸び、やや外反する。 端部は丸い。 底部は、浅く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好。 色調、灰白色。
蓋杯（蓋）	56	窯体内埋土	口径 15.5 器高 2.2	口縁部は、短く、下内方にやや肥厚する程度で、端部は丸い。 天井部は細く、なだらか。擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り後、ナデ調整。天井部内面⅔、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、浅黄色。
杯	58	同上	口径 12.7 器高 3.3	口縁部は、内弯ぎみに上外方に伸び端部近くでやや外反する。 端部は丸い。 底部は、やや深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
皿	61	同上	口径 14.6 器高 2.0 底径 10.0	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は、浅く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色微粒子を若干含む。 焼成、やや不良。 色調、灰白色。
蓋杯（身）	66	焚口灰原灰層	口径 11.3 器高 3.5 底径 7.8	口縁部は、内弯ぎみに上外方に伸び端部近くでやや外反する。端部は丸い。底部は、やや深く、八の字形の高台を付し、内側で接地する。 底部高台の内側より欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口縁部、回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、やや粗。白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰白色。
蓋杯（蓋）	63	同上	口径 14.9 器高 3.0	口縁部は、短く垂直に下り、やや外反する。端部はやや鋭い。 天井部はやや低く、なだらか。口縁部近くで外方へ屈曲し、段をなす。 擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、明褐灰色。
蓋杯（身）	67	焚口左	口径 17.1 器高 4.7 底径 10.4	口縁部は、内弯しながら、上外方に伸びる。端部は丸い。 底部は、やや深く、平ら。 高台剝離。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、やや密。白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調は青灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（身）	65	焚口灰原灰層	口径 14.1 器高 4.3 底径 9.7	口縁部は、上外方に伸びた後、やや外反する。端部は丸い。 底部は深く平ら。八の字形の高台を付し、その内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り、 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰白色。 外面に灰がかぶる。

18－Ⅲ号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	68	窯体内最終ベース	口径 14.0 器高 3.1	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はなだらかで、中央に小さく高い擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ切り、天井部内面、スリケシ状ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	69	同上	口径 13.0 器高 2.9	口縁部は、短くやや内傾し、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらかで、中央に擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	71	同上	口径 15.0 器高 1.0	口縁部は、短く外上方へ伸びた後、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、中央部でやや凹む。 やや小さい扁平つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ切り。 天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、粗。 焼成、良好。 色調、灰色。
皿	74	同上	口径 13.3 器高 2.3 底径 10.9	口縁部は、上外方へ伸び、端部は丸い。 底部は浅く、やや丸みをおびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、スリケシ状ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
同上	85	同上	口径 14.7 器高 2.3 底径 12.2	口縁部は、上外方へ伸び、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	89	同上	口径 16.0 器高 2.9 底径 14.1	口縁部は、上外方へ伸び、端部近くで外弯し、端部は丸い。 底部は浅く、丸みをおびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、ヘラおこし後、ナデ調整。 底部内面⅘、スリケシ状ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰色。
同上	96	同上	口径 20.2 器高 2.5 底径 17.3	口縁部は、上外方へ伸び、端部近くで外弯し、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	134	灰原灰層	口径 15.5 器高 2.5	口縁部は、短くほぼ垂直に下った後、やや外反する。端部は丸い。 天井部はやや低く、なだらか。 薄い擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を少量含む。 焼成、良好。 色調、灰白色。
蓋	136	同上	口径 15.8 器高 3.3	口縁部は、内弯気味に下外方に下がり、端部近くで、やや外反する。端部は外傾する面をなし、外側で接地 天井部はやや浅く、くぼんでいる。 扁平つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ切り後、回転ナデ調整。天井部から口縁部に移る肩部外面、回転ヘラ削り調整。天井部内面は不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、青灰色。
短頸壺（蓋）	137	同上	口径 15.8 器高 3.5	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部近くでやや外反する。端部は外傾する面をなし、外側で接地、天井部はやや浅く平ら。大きい擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。天井部内面¾、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。外側、灰かぶり
瓶子	139	同上	口径 3.8 器高 8.4 底径 6.7	たち上がりは外反しながら伸び、端部近くで大きく外反し、段をなす。 端部は鋭い。体部上方に最大径をなし、若干肩部に張りがある。 底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口縁部、体部共に回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切り。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。 灰をかぶっている。
同上	140	同上	口径 3.7 器高 8.1 底径 6.1	たち上がりは外反しながら伸び、端部近くで大きく外反し、段をなす。 端部は鋭い。体部下方に最大径をなし、若干肩部に張りがある。 底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。 底部は回転ヘラ切り。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、明青灰色。 灰をかぶっている。
同上	141	同上	口径 8.1	たち上がりは外反しながら上外方向に伸び、端部近くで大きく外反し、段をなす。 端部はやや鋭い。（体部欠損）	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、オリーブ灰色。
鉄鉢（仏鉢）	143	同上	口径 20.1 器高 12.1	口縁部は、内弯して伸び、端部で外側に肥厚する。体部は円孤を描いて上外方に伸び、底はとがっている。	マキアゲ、ミズビキ成形。 体部下方⅔、回転ヘラ磨き。 体部内面⅓、斜方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰オリーブ色。
蓋杯（蓋）	145	北拡張部	口径 13.9 器高 2.4	口縁部は、内側に玉状の短いかえりを付しており、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらかで、小さい擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り後、ナデ調整。天井部外面⅔、不整方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、青灰色。
同上	148	同上	口径 13.2 器高 3.6	口縁部は、短くほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は高くなだらか。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り後、ナデ調整。天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を少量含む。 焼成、良好。 色調、青灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（身）	150	北拡張部	口径 12.9 器高 4.25 底径 7.3	口縁部は、上外方へ伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く平ら。八の字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、やや密。 焼成、不良軟質。 色調、淡黄灰色。
杯	152	同上	口径 10.4 器高 3.9 底径 7.3	口縁部は、上外方へ伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。 底部はやや浅く、若干なだらか。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
蓋杯（身）	153	同上	口径 10.9 器高 3.75 底径 5.4	口縁部は、上外方へ伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く平ら。底部端より、やや内側に八の字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、内面ともに不整方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
同上	167	灰原灰層	口径 14.0 器高 3.9 底径 8.9	口縁部は、上外方へ伸び、端部近くで、外反する。端部は丸い。 底部は浅く、平らで、底部端より、やや内側に八の字形の細い高台を付す。内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を少量含む。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	170	同上	口径 12.8 器高 3.7 底径 9.9	口縁部は、上外方へ伸び、端部近くで若干外反する。端部は丸い。 底部は浅く、平ら。底部端に短い高台を付す。ほぼ全面で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、不整方向のナデ調整。底部内面、不整方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。白色砂粒をやや多く含む。 焼成、良好。 色調、青灰色。
同上	172	同上	口径 13.4 器高 6.05 底径 7.8	口縁部は、上外方へ伸び、若干外反する。端部は丸い。 底部は深く平ら。底部端よりやや内側に八の字形の高台を付す。 内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、ナデ調整。底部内面、ナデ調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰色。
同上	175	同上	口径 18.0 器高 5.35 底径 11.2	口縁部は、上外方へ伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。 底部端よりやや内側に、八の字形の高台を付す。内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、板状圧痕、底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、緑灰色。
蓋杯（蓋）	204	同上	口径 12.6 器高 1.7	口縁部は、短く外傾し、端部は丸い。 天井部は凸凹を成し、低く、ほぼ平ら。中央やや右よりに高い擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り後、ナデ調整。内面、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。
同上	208	同上	口径 13.4 器高 3.4	口縁部は、短く内傾し、端部は丸い 天井部は高く、なだらか。中央よりやや左よりに高い擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	235	灰原灰層	口径 15.1 器高 1.8	口縁部は、短く外反し、端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 凹状つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り。内面¾、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。 表面に灰がかかっている。
同上	205	同上	口径 13.6 器高 2.2	口縁部は、短く垂直に下り、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 高い擬宝珠様つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面¾、回転ヘラ切り。内面¾、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。
蓋杯(身)	179	同上	口径 11.1 器高 3.3 底径 7.7	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は低く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、ナデ調整。 底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。
同上	180	同上	口径 11.7 器高 4.0 底径 8.3	口縁部は、上外方に伸び、少し内弯し、端部は丸い。 底部はやや高く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。口縁部、回転ナデ調整。内面端部より⅓、灰かぶり。 他はナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
同上	184	同上	口径 11.6 器高 3.6 底径 8.4	口縁部は上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや高く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 口縁部は、回転ナデ調整。 他はナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
同上	185	同上	口径 12.5 器高 4.3 底径 6.8	口縁部は、上外方に内弯して伸び、端部近くで外弯し、端部は丸い。 底部はやや丸味を帯びている。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、ナデ調整。 板状輪痕有り。 内面、中央より⅔までナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好、堅緻。 色調、明オリーブ灰色。
皿	201	同上	口径 18.5 器高 2.28 底径 13.8	口縁部は、上外方にやや内弯し、端部は丸い。 底部はやや低く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、ヘラ起しのあとナデ調整。 口縁部、回転ナデ調整。 他はナデ調整。	胎土、密。 焼成、甘く、軟質。 色調、白灰色。
同上	202	同上	口径 14.6 器高 2.7 底径 11.8	口縁部は、いったん直上に伸び、すぐに角度を変えて上外方に内弯ぎみに伸び、端部は丸い。 底部は丸味を帯びている。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、中央より⅔まで回転ヘラ切り後、ナデ調整。 内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。
杯	97	同上	口径 12.9 器高 4.1 底径 9.3	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 カキ目痕あり。 他は回転ナデ調整。	胎土、粗。白色砂粒を含む。 焼成、やや甘く軟質。 色調、灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	98	灰原灰層	口径 12.0 器高 3.7 底径 7.7	口縁部は、やや内弯ぎみに上外方に伸び、端部近くでわずかに外反する。端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 カキ目痕あり。 底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、明緑灰色。
同上	110	同上	口径 12.8 器高 3.8 底径 8.4	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面不整方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。底部外面に、やわらかいうちに土の上に置いたような痕跡あり。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、明緑灰色。
同上	113	同上	口径 11.7 器高 4.2 底径 7.6	口縁部は、やや外弯ぎみに上外方に伸びる。端部は丸い。 底部はやや深く、丸味をおびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。底部内面、不整方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、甘く軟質。 色調、淡黄色。
皿	116	同上	口径 12.8 器高 2.3 底径 10.5	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は浅く、やや丸味をおびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り、カキ目痕あり。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、明緑灰色。

18－Ⅴ号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	238	窯体内最終ベース	口径 14.2 器高 2.1	口縁部は、短く垂直に下り、端部近くで外反する。端部はやや丸い。 天井部は低く、なだらか。 扁平つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。
同上	239	同上	口径 15.5 器高 1.2	口縁部は、短く外傾し、端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 扁平な凹状のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り。天井部内面、¾、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰黄色。
同上	246	同上	口径 21.2 器高 3.1	口縁部は、短く垂直に下り、端部近くで外反する。端部は丸い。 天井部は、高く、平ら。 中央部欠損のため、つまみは不明。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ切り。 天井部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、粗。白色砂粒を含む。 焼成、やや甘く軟質。 色調、灰白色。
同上	252	窯体内埋土	口径 12.4 器高 3.0	口縁部は、短く内傾し、端部は丸い。 天井部はやや高く、丸味をおびる。 高い擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、、ミズビキ成形。 天井部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。 内面と口縁部に灰がかぶる。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	256	窯体内埋土	口径 19.1 器高 3.9	口縁部は、短く、内傾をした後、垂直に下る。 端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 中央部欠損のため、つまみは不用。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、やや甘く軟質。 色調、灰白色。
蓋杯(身)	257	同上	口径 12.5 器高 4.5 底径 7.1	口縁部は、上外方に伸び、上部でやや外反する。端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。八の字形の高台を付す。内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、カキ目調整。底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、粗。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰白色。
同上	260	同上	口径 12.3 器高 4.9 底径 7.2	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反する。底部は深く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰白色。
同上	261	同上	口径 15.0 器高 5.9 底径 9.0	口縁部は、内弯ぎみに上外方に伸び、端部近くで外反する。 底部は深く、平ら。八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面、不整方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好、堅緻。 色調、明緑灰色。

18—Ⅲ～Ⅴ号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	274	灰原灰層	口径 11.9 器高 3.0	口縁部は、短く、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は高く、丸い。扁平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ切り。天井部内面½、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、粗。小石を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、黒褐色。
同上	276	同上	口径 11.8 器高 2.5	口縁部は、短く、やや内傾して下り、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。やや高い凹状のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ切り。天井部内面⅓、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。 内面及び口縁部に灰がかぶる。
同上	279	同上	口径 12.8 器高 1.5	口縁部は、短く内傾し、端部は丸い。 天井部は、低く平ら。 扁平つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り。天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
同上	290	同上	口径 17.7 器高 1.3	口縁部は、短く、やや外傾して下り、端部は丸い。 天井部は低く平ら。 やや高いボタン状のつまみを付す。	マキアゲ、ミズヒキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り。天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、明オリーブ灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	299	灰原灰原	口径 13.0 器高 2.6	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は高く、なだらか。 小さい擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面上部に放射状のカキ目、 天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰色。
同上	293	同上	口径 11.3 器高 2.8	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り後、ナデ調整。天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、明青灰色。
同上	312	同上	口径 15.5 器高 2.3	口縁部は、内傾ぎみに下りた後、外反し、後、短く内傾する。端部は丸い。 天井部は低く平ら。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り、天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰色。
同上	314	同上	口径 12.1 器高 3.2	口縁部は、短くやや内傾して下り、端部は丸い。 天井部は高く、なだらか。 小さい擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、ヘラ切り後、ナデ調整。内面ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、口縁部近く外面、内面ともに重ね焼跡がみられる。 色調、灰色。
同上	349	同上	口径 13.3 器高 3.5	口縁部は、短く垂直に下り、端部は丸い。 天井部は高く、なだらか。 端部近くで外反して下る。 高い擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り。内面⅔、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、明オリーブ灰色。
蓋杯（身）	355	灰原採集	口径 9.8 器高 4.1 底径 5.8	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 高台は八の字形で、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、内面ともナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰色。
同上	361	同上	口径 12.4 器高 4.4 底径 6.7	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。 高台は八の字形で、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り、内面、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	364	同上	口径 12.4 器高 4.2 底径 6.8	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反し、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。 高台は八の字形で、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。内面、不整方向ナデ調整。 高台面⅓、ヘラ削り、 他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	胎土、粗。 焼成、良好。 色調、灰色。
同上	381	同上	口径 14.7 器高 4.1 底径 10.0	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。 底部は浅く、平ら。 高台は八の字形で、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り、内面、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、粗。 焼成、良好。 色調、灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（身）	380	灰原採集	口径 15.6 器高 5.2 底径 8.4	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。 高台は八の字形で、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り、内面、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	382	同上	口径 15.1 器高 5.4 底径 8.7	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、ややなだらか。 高台は短く、逆八の字形に付し、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面は、回転ヘラ切り。底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	385	同上	口径 15.7 器高 5.9 底径 8.7	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。 底部は深く、なだらか。 高台は低い八の字形で、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部内外面ともナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰白色。
皿	389	同上	口径 15.7 器高 2.5 底径 12.9	口縁部は、短く上外方に伸び、端部近くで外反する。 底部は浅く、なだらか。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面はナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好。 色調、緑灰色。
同上	396	同上	口径 13.4 器高 1.9 底径 11.5	口縁部は、短く上外方に伸び、端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 底部内面はナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色微砂粒を少量含む。 焼成、良好。 色調、緑灰色。
短頸壺（蓋）	399	同上	口径 9.7 器高 1.8	口縁部は、外傾ぎみに下がり、端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 高い凹状のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面端部側⅔、回転ヘラ削り調整。天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、青灰色。
高杯	400	同上	残存高 10.9 底径 11.0	杯部欠損。 脚部は、細く高く、下外方にラッパ状に開く。 端部は短く、ほぼ垂直に下がる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脚部上部にしぼり目が残る。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、青灰色。
杯	401	同上	口径 12.0 器高 3.8 底径 7.9	口縁部は、外弯ぎみに上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、なだらか。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面カキ目調整。底部内面ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	402	同上	口径 12.4 器高 4.2 底径 8.5	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、なだらか。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、淡黄色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	411	灰原灰層	口径 11.7 器高 3.8 底径 8.2	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、カキ目調整。 底部内面ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
同上	412	同上	口径 11.8 器高 3.7 底径 8.4	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、ややなだらか。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ切り後、若干ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好。 色調、青灰色。
同上	426	同上	口径 12.5 器高 4.3 底径 8.7	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、若干丸味を帯びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を少量含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰白色。
同上	430	同上	口径 11.9 器高 3.8 底径 8.5	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ切り後、若干ナデ調整。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を少量含む。 焼成、良好。 色調、青灰色。
同上	431	同上	口径 12.3 器高 3.6 底径 7.9	口縁部は、上外方に伸び、端部近くでやや外反し、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
同上	445	同上	口径 12.9 器高 3.8 底径 9.2	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで若干内弯する。端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、カキ目調整。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を少量含む。 焼成、良好。 色調、にぶい黄橙色。

18—VI号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	448	窯体内最終ベース	口径 14.9 器高 2.4	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、なだらかで、擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅘、回転ヘラ切り後、若干ナデ調整。天井部内面⅔、ナデ調整。他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰白色。
杯	449	同上	口径 12.4 器高 3.5 底径 8.3	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、淡黄色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	454	窯体内埋土	口経 15.7 器高 3.2	口縁部は、短く内傾ぎみに下がった後、外反し、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。やや大きい擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好。 色調、青灰色。
蓋杯（身）	457	同上	口経 14.4 器高 4.8 底径 8.5	口縁部は、上外方に伸びた後、端部近くで若干外反し、端部は丸い。 底部は深く、平ら。 高台は、低く、ほぼ垂直に下がり、全面で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	458	同上	口径 15.4 器高 3.5 底径 11.8	口縁部は、上外方に伸びた後、端部付近で若干外反する。端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。高台は短くほぼ垂直に下がり、端面は凹状。 外側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、甘く軟質。 色調、灰白色。
皿	461	同上	口径 17.8 器高 2.9 底径 15.7	口縁部は、上外方へ短く伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。 底部は浅く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
蓋杯（蓋）	468	灰原灰層	口径 15.3 器高 2.5	口縁部は、短く、ほぼ垂直に下がり端部は丸い。 天井部はやや低く、平ら。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 カキ目圧痕を施す。 天井部内面¾、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、にぶい橙色。
鉄鉢（仏鉢）	471	同上	口径 21.2 器高 10.15	口縁部は、内弯しながら短く上内方に伸び、端部は丸い。 体部は、なだらかに下内方に伸びている。 底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 体部外面、全体に回転ヘラ削り調整。 体部内面、下方⅔、タテ方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を少量含む。 焼成、良好。 色調、灰白色。
窯道具	472	同上	口径 16.4 器高 3.1	口縁部は、内傾ぎみに下がり、端部近くで外反する。端面は外傾し、外側で接地。 天井部はやや高く、平ら。天井部の縁に円孔をうがつ。つまみ欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、明緑灰色。

18－VI号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	475	窯体内焚口付近	口径 14.3 器高 2.6	口縁部は、短くやや外傾し、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 小さい扁平つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好。 色調、灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	478	窯体内焚口付近	口径 16.4 器高 2.8	口縁部は、短く、外傾ぎみに下がり端部は丸い。 天井部はやや高く、平ら。 薄く扁平なつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅗、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を多く含む。 焼成、やや不良。 色調、明黄褐色。
蓋杯(身)	480	同上	口径 13.1 器高 4.3 底径 8.6	口縁部は、上外方に伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。 底部中よりに八の字形に高台を付す。内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り痕をナデ消す。底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。白色砂粒をやや多く含む。 含む。 焼成、良好。 色調、明青灰色。
同上	485	同上	口径 20.6 器高 6.4 底径 12.0	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、丸味を帯びる。 底部中よりに高台を八の字形に付し、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部内面、外面ともにナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、緑灰色。
杯	486	同上	口径 14.2 器高 4.9 底径 10.2	口縁部は、上外方に伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。 底部はやや深く、なだらか。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、若干ナデ調整。 底部内面ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、やや不良。 色調、暗灰黄色。
高杯	487	同上	口径 22.5 残存高4.8	口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がり、わずかに外反する。端部は丸味を帯びる。 杯部底部は浅く、平ら。 脚部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面½、回転ヘラ切り。 底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、粗。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
蓋杯(蓋)	492	下方灰原	口径 20.3 器高 3.8	口縁部は、外傾し、端部はやや鋭い。 天井部は高く、なだらか。 中央部に扁平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を含む。 焼成、やや不良。 色調、灰白色。
蓋杯(身)	494	同上	口径 13.5 器高 4.2 底径 9.0	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、丸味を帯びる。 高台は、逆くの字形で低い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、ヘラ切り後、ナデ調整。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を含む。 焼成、やや不良。 色調、灰白色。

18—Ⅷ号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	497	窯体内最終ベース	口径 14.8 器高 3.0	口縁部は、短く内傾後、鋭く外反し端部は丸い。 天井部は高く、なだらかで、中央に低い扁平つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り後、ナデ調整。内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。 ひずみ多し。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	502	窯体内最終ベース	口径 19.6	口縁部は、短く内傾後、やや外反し端部は丸い。 天井部は高く、なだらか。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや密。砂粒を多く含む。 焼成、良好。 色調、青茶色。
蓋杯（身）	503	同上	口径 12.5 器高 4.2 底径 8.9	口縁部は、上外方に伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。 底部は深く平ら。八の字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。白色微砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、明緑灰色。
同上	507	窯体内埋土	口径 12.9 器高 4.4 底径 13.4	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、やや丸味を帯びる。 高台は低い逆八の字形で、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰オリーブ色。
同上	508	同上	口径 15.3 器高 5.8 底径 10.3	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、やや丸味を帯びる。 高台は低く、八の字形で内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、ナデ調整。内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、淡黄色。
杯	510	同上	口径 11.5 器高 3.5 底径 7.6	口縁部は、内弯ぎみに上外方に伸び端部は丸い。 底部はやや浅く、若干丸味を帯びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、カキ目調整。 内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、明緑灰色。
皿	512	同上	口径 17.7 器高 2.6 底径 14.7	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は低く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、カキ目調整。 内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、淡黄色。
蓋杯（蓋）	506	同上	口径 12.6 器高 2.4	口縁部は短く、ほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 擬宝珠様の小さいつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井外面⅔、回転ヘラケズリ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、緑灰色。

18地区灰原

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	520	灰原A区	口径 19.0 器高 2.1	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 大きな扁平つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒をやや多く含む。 焼成、良好。 色調、暗赤褐色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（身）	521	灰原A区	口径 14.7 器高 4.0 底径 9.2	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。 底部はやや浅く、平らで、短い八の字形の高台を付す。高台端面は凹状で、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、若干ナデ調整。底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、明緑灰色。
杯	536	灰原B区	口径 13.6 器高 3.6 底径 10.7	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、ヘラ起こし後ナデ調整。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、暗灰黄色。
高杯	537	同上	口径 15.2 器高 7.3 底径 9.2	杯部口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸い。杯部底部は浅く、平ら。脚部は低く、下外方に外反しながら下がり、端部で若干内側に肥厚する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯部、底部外面、回転ヘラ削り調整。 杯部、底部内面不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を少量含む。 焼成、良好。 色調、暗青灰色。 ひずみ多し。
甕	538	同上	口径 14.2 残存高4.3	口縁部は、上外方に伸び、端部で外側に肥厚する。 体部以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口縁部は、内、外面とも回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒をやや含む。 焼成、良好。 色調、にぶい褐色。
高杯	540	灰原C区	口径 21.1 残存高2.1	杯部口縁部は、短く垂直に立ち上がった後、端部近くで若干外反する。端部は内傾する面をなす。 杯部底部は浅く、平ら。 脚部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。底部内面⅘、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、暗青灰色。
短頸壷（蓋）	541	同上	口径 13.8 残存高3.8	口縁部は、ほぼ垂直に下がった後、端部近くで外反する。端部はやや鋭い。 天井部はやや低く、平ら。 つまみは欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅘、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、暗オリーブ灰色。
短頸壷	542	同上	口径 13.7 残存高 11.4	口縁部は、短く垂直に立ち上がった後、端部近くで外反する。端部は内傾する面をなし、外側にやや肥厚する。 体部は丸く、肩部で最大径となる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 体部内面下方、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。砂粒を少量含む。 焼成、良好。 色調、青灰色。
同上	544	同上	口径 10.3 残存高5.1	口縁部は、短く上外方に伸び、端部で肥厚する。端部はやや凹んだ外傾する面をなす。 体部は球状をする。 体部下方欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内、外面ともに回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
蓋杯（蓋）	549	灰原D_1区	口径 16.3 器高 1.8	口縁部は、短くほぼ垂直に下がり、端部近くで外反する。端部は丸い。 天井部は低く、平ら。扁平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り。 天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。	胎土、密。 焼成、甘く軟質。つまみの良好。 色調、淡黄色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	550	灰原D1区	口径 12.6 器高 2.8	口縁部は、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらかに下向する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、天井部内面¾ともに不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。砂粒を多く含む。 焼成、良好。 色調、灰白色。 ひずみあり。
蓋杯（身）	551	同上	口径 12.3 器高 4.0 底径 8.0	口縁部は、やや外弯ぎみに、上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや深く、平ら。八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ切り、底部内面不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、やや甘い。 色調、灰白色。
高杯	552	同上	口径 12.3 残存高4.0 底径 8.0	杯部口縁部は、上外方に内弯ぎみに立ち上がり、端部は丸い。 杯部底部は浅く、やや平ら。 脚部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯部底部外面、回転ヘラ削り調整。 杯部底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、粗。 焼成、良好。 色調、青灰色。
同上	553	同上	口径 24.8 残存高8.1	杯部欠損。 脚部は、外反しながら下外方に開き下部で水平方向に角度を変え、外方に伸びた後、小さく垂直に屈曲して端部にいたる。端部は丸く、下方に突出する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯部底部内面、不整方向のナデ調整。 脚部、回転ナデ調整。内面にしぼり目がみられる。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。
同上	554	同上	口径 12.1 器高 7.1 底径 9.2	杯部、口縁部は、垂直に短く立ち上がり、端部は丸い。杯部、底部は浅く、平ら。 脚部は外反ぎみに下外方へ開く。 脚端部は欠損。	杯部底部外面⅘、回転ヘラ削り調整。 杯部底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 脚部内面にしぼり目がみられる。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。 ひずみが大きい。
杯	555	同上	口径 11.2 器高 2.8 底径 8.4	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り、底部内面不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。
蓋杯（身）	559	同上	口径 17.4 器高 6.2 底径 9.5	口縁部は、やや内弯ぎみに上外方に伸び、端部は丸い。低い八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り、底部内面は不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、黄灰色。
甕	561	同上	口径 41.7 残存高 13.7	口縁部は、やや外弯ぎみに上外方に伸び、端部近くで稜を成して内傾し端部は丸い。 体部以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内、外面ともに回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
土師器甕	597	下方灰原	口径 18.5 残存高 10.4	口頸部は、上外方へ伸びた後、口縁部で屈曲して外反する。端部は丸い。 体部は丸味を帯び、最大径を体部上位に求める。 体部下部以下欠損。	輪積み成形。 体部外面、タテハケ調整。体部内面ナデ調整。ユビオサエの痕跡あり。 頸部内面、ヨコハケ調整。口縁部はヨコナデ調整で、外面にタテハケの痕跡残る。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、橙色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
短頸壷	598	灰原灰層	口径 11.5 残存高3.2	口頸部は、上外方に伸び、口縁部に至る。端部は丸い。 肩部は丸く、張りを持つ。 体部以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内、外面とも回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰白色。
盤	600	同上	口径 20.0 器高 2.5 底径 18.8	口縁部は、上外方に伸び、外反する。端部は丸い。高台は垂直に下がり、端面は凹状をなす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面は回転ヘラ切り後、外方⅔を回転ヘラ削り調整。底部内面⅓、ナデ調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰色。
皿	601	同上	口径 19.5 器高 3.0 底径 16.5	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反する。端部はやや内傾する面をなす。 底部は浅く、やや丸味を帯びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面½、回転ヘラ削り調整。残り½はナデ調整で。木の枝状の痕跡あり。底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、黄灰色。
同上	604	同上	口径 19.5 器高 2.9 底径 18.0	口縁部は、上外方に伸び、端部は水平な面をなす。 底部はやや浅く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面½、回転ヘラ切り。その外方¼、回転ヘラ削り調整。底部内面ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰黄色。
壷	605	同上	残存高 12.5 底径 11.0	口縁部、肩部欠損。 体部は、ゆるやかに内弯し、底部に至る。最大径は上位に求める。底部は平らで、八の字形の高い高台を付す。高台は全面で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 上部で粘土つぎあり、底部外面½、回転ヘラ切り後、ナデ調整。その外方½と体部下方½、回転ヘラ削り調整。底部内面ナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰色。
鉢	606	同上	残存高 11.4 底径 19.8	口縁部から体部上位にかけて欠損。 体部は、下内方になだらかに下がった後、屈曲して底部となる。 底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 体部下方外面から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整。底部内面は不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、粗。 焼成、良好。 色調、灰色。
蓋杯（蓋）	565	灰原採集	口径 16.3 器高 3.35	口縁部は、短く垂直に下がった後、やや外反する。端部は丸い。 天井部はやや高く、なだらか。 大きな扁平つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、外面はオリーブ灰色。内面は、にぶい黄褐色。
同上	566	同上	口径 18.0 器高 3.25	口縁部は、短くやや内傾して下がり端部は丸い。 天井部は低く、平らで、擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	570	同上	口径 16.0 器高 3.0	口縁部は、短くやや外傾して下がる。端部は丸い。天井部はやや高く、なだらかに下がり、口縁部近くで屈曲して外方横に伸びる。擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。砂粒を多く含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	576	灰原採集	口径 20.0 器高 4.1	口縁部は、やや外傾し、端部は丸い。天井部はやや低く、平らで、宝珠つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、ナデ調整。他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。砂粒を少量含む。 焼成、良好。 色調、暗灰色。
蓋杯（身）	580	同上	口径 11.9 器高 4.1 底径 7.1	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。短い八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り、底部内面は不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。
同上	582	同上	口径 15.4 器高 3.8 底径 13.0	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで、外側にやや肥厚する。端部は丸い。底部は浅く、平ら。 短い八の字形の高台を付し、外側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り、底部内面不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、粗。 焼成、良好。 色調、外面暗緑灰色。 内面極暗赤褐色。 ひずみが著しい。
同上	585	同上	口径 19.1 器高 5.8 底径 11.5	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部はやや深く、平ら。底部端よりやや内側に、短く八の字形に高台を付す。端面は凹状を呈し、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、不整方向のナデ調整。底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、にぶい黄橙色。
杯	586	同上	口径 13.4 器高 4.2 底径 9.3	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り、中央にカキ目。底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、やや甘い。 色調、オリーブ灰色。
同上	588	同上	口径 11.4 器高 3.2 底径 6.4	口縁部は、上外方に伸び、端部近くでやや外反する。端部は丸い。 底部はやや浅く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。 他は回転ナデ調整。	胎土、粗。 焼成、やや甘い。 色調、灰白色。

19 号 窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	607	窯体内最終ベース	口径 14.6 器高 2.3	口縁部は、ほぼ垂直に短く下がり、端部は丸い。 天井部はやや低く、なだらか。 扁平つまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不整方向のナデ調整 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、甘く軟質。 色調、灰白色。
蓋杯（身）	621	同上	口径 12.4 器高 3.3 底径 8.3	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。底部は浅く、平ら。低い八の字形の高台を付し、内側で接地する。 底部中央部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、粗。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	623	窯体内最終ベース	口径 17.4 器高 4.9 底径 18.5	口縁部は、やや内弯ぎみに、上外方へ伸び、中位で角度を変え段をなしさらに上外方へ伸びる。端部は丸い。底部はやや深く、丸味を帯びる。八の字形の高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り。底部内面不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、明青灰色。
蓋杯（蓋）	626	窯体内埋土	口径 21.3 器高 2.5	口縁部は、短くやや外傾ぎみに下がり、端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、粗。 焼成、やや甘く軟質。 色調、外面、黒色。 内面、灰白色。
同上	629	同上	口径 16.9 器高 2.5	口縁部は、短く垂直に下がった後、外傾する。端部は丸い。 天井部は低く、なだらか。 扁平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、やや甘く軟質。 色調、外面、灰色。 内面、灰白色。
同上	630	同上	口径 18.2 器高 3.4	口縁部は、短く垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は、やや高くなだらか。高い擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、端部より½の位置。幅2㎝にわたり、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。砂粒を若干含む。 焼成、甘く軟質。 色調、灰白色。
皿	633	同上	口径 15.3 器高 2.8 底径 11.2	口縁部は、上外方に内弯しながら伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ削り調整。底部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、黒褐色。
短頸壺（蓋）	634	同上	口径 13.0 器高 2.4	口縁部は、垂直に下がり、端部は内傾する面をなす。 天井部はやや高く、平ら。 天井部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面、回転ヘラ削り調整。 天井部内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。

20—Ⅰ号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	635	下層ベース	口径 16.5 器高 2.8	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。天井部はやや低く、なだらか。中央にやや扁平な擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面½、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、青灰色。
同上	641	窯体内埋土	口径 15.5 器高 2.8	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。天井部はやや低く、平ら。中央よりややずれた位置に薄い扁平なつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰白色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(蓋)	647	窯体内埋土	口径 13.2 器高 1.8	口縁部は、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 つまみはなし。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰白色。
杯	650	同上	口径 11.7 器高 3.0 底径 9.6	口縁部は、上方に伸び、端部は丸い。 底部はやや浅く、丸味を帯びている。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、ヘラ切り未調整。 底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、やや密。 焼成、やや良好。 色調、灰白色。
蓋杯(蓋)	653	同上	口径 20.5 器高 1.9	口縁部は、垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は低く、中央でやや凹む。 中央に擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	655	同上	口径 15.4 器高 3.6	口縁部は、内傾し、端部はやや丸い。 天井部は高く、なだらか。中央に、薄い凹状のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ削り調整。 天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、粗。 焼成、やや良好。 色調、にぶい橙色。
同上	657	同上	口径 19.6 器高 2.9	口縁部は、やや外反し、端部は丸い。 天井部はやや高く、平ら。中央に、擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰白色。
蓋杯(身)	658	灰原採集	口径 16.8 器高 6.0 底径 10.1	口縁部は、上外方に伸び、端部は丸い。 底部はやや深く、丸い。底部端に、幅細く、低い八の字形の高台を付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面¼、回転ヘラ切り未調整。 高台部分に至るまで回転ヘラ削り調整。底部内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を多く含む。 焼成、良好。 色調、にぶい褐色。

20—Ⅱ号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯(身)	659	焚口	口径 13.6 器高 3.9 底径 9.8	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで若干外反する。端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。短く、ほぼ垂直な高台を付すが、中心より若干ずれ、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、内面ともに不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、明青灰色。
同上	661	同上	口径 11.2 器高 3.6 底径 7.7	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで若干外反する。端部は丸い。 底部はやや浅く、平ら。短く、ほぼ垂直に下がる高台を付す。ほぼ全面で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、回転ヘラ切り後、若干ナデ調整。底部内面、不整方向ナデ調整。他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。白色砂粒をやや多く含む。 含む。 焼成、良好。 色調、暗青灰色。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋	662	灰原灰層	口径 9.1 器高 1.8	口縁部は、短く垂直に下がり、端部近くでやや外反する。端部は丸い。 天井部は低く、平ら。大きく薄い扁平なつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 表面に灰が溶着。天井部内面、中央¾、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒をやや含む。 焼成、良好。 色調、暗青灰色。
蓋杯（蓋）	665	同上	口径 16.7 器高 2.4	口縁部は、下外方に短く下がり、端部は丸い。 天井部は低く、なだらか。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅙、回転ヘラ削り調整。 天井部内面¾、不整方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒をやや含む。 焼成、良好。 色調、灰白色。
同上	668	灰原採集	口径 14.9 器高 4.0	口縁部は、ほぼ垂直に下がり、端部は丸い。 天井部は、高く、なだらか。 大きい擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。 天井部内面、灰かぶり。 つまみはハリツケ。	胎土、密。白色砂粒をやや含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、暗青灰色。
蓋杯（身）	669	同上	口径 14.0 器高 6.1 底径 9.3	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反する。端部は丸い。 底部は深く、ややなだらか。 八の字形の細い高台を付す。 全面で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、内面、ナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、暗灰色。
同上	670	同上	口径 15.2 器高 5.3 底径 10.3	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで若干外反する。端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。 八の字形の高台を付し、内側で接地。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、内面、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
鉄鉢（仏鉢）	679	同上	口径 21.5 残存高9.6	口縁部は、内弯して伸び、端部は丸い。 体部は円弧を描いて上外方に伸びる。 底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面¼、回転ヘラ削り。 体部は内面タテ方向ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒をやや多く含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
甕	680	同上	口径 15.2 残存高5.4	口頸部は、外弯気味に外傾し、口縁部で外方へ屈曲させ、外面に肥厚する。端部は丸い。 肩部は口頸部と90°にひらく。 口頸部の破片。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外面、格子タタキ。肩部内面円孤タタキ。 他は回転ナデ調整。 口頸部内面にしぼり痕。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。
短頸壷	677	焚口	細片	肩部はなだらかにひらき、最大径の位置に、上方に屈曲する扁平な把手を付す。 肩部の破片。	焼成不良のため不詳。 把手はハリツケ。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。 焼成、不良。 色調、灰白色。
同上	678	同上	口径 5.9 残存高7.2	口頸部は短く、外反ぎみに立ち上がる。端部は丸い。 肩部は、大きく下外方に張り出し、屈曲して下内方へ伸びる。体部下方より欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 全体に回転ナデ調整。 肩部内面にしぼり目残る。 表面、灰が溶着。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、明青灰色。

20－Ⅲ号窯

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	680	灰原採集	口径 26.0 残存高7.4	口頸部は、上外方に外弯ぎみに伸び口縁部でやや屈曲して外方に伸びる。端部付近で下方に断面三角形の突帯をつくり出し、端面凹状を呈する。肩部は、口頸部より105°で開く。体部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部外面、格子叩き、内面、円孤叩き。他は回転ナデ調整。	胎土、密。焼成、良好、堅緻。色調、暗青灰色。
蓋杯（蓋）	681	窯体内最終ベース	口径 15.1 器高 3.5	口縁部は、短く垂直に下がった後、若干外反し、端部は丸い。天井部は高く、なだらかで、中央に薄い擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	胎土、密。砂粒をやや多く含む。焼成、良好。色調、明緑灰色。
同上	683	同上	口径 16.7 器高 3.1	口縁部は、短く、内傾した後、若干外反し、端部は丸い。天井部はやや高く、なだらかで、中央に擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。内面⅔、ナデ調整。他は回転ナデ調整。つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。砂粒を多く含む。焼成、良好。色調、明緑灰色。
同上	699	同上	口径 12.2 器高 1.7	口縁部は、短く、やや外反ぎみに下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。つまみはなし。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	胎土、密。若干砂粒を含む。焼成、やや不良。色調、灰白色。
同上	702	同上	口径 11.3 器高 1.4	口縁部は、短く内傾して下がり、端部は丸い。天井部は低く、平ら。つまみはなし。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面⅔、回転ヘラ削り調整。内面⅔、ナデ調整。他は回転ナデ調整。	胎土、密。白色砂粒を若干含む。焼成、良好、堅緻。色調、青灰色。
蓋杯（身）	705	同上	口径 10.4 器高 3.8 底径 7.6	口縁部は、上外方に伸び、端部近くで外反し、端部は丸い。底部は深く、平らで、底部端に八の字形の高台を付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面、内面ともにナデ調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	胎土、密。焼成、良好。色調、明青灰色。
同上	712	1次床面	口径 17.4 器高 5.8 底径 12.2	口縁部は、上外方向に伸び、端部は丸い。底部はやや深く、平ら。底部端に、八の字形のやや高い高台を付し、内側で接地する。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。高台はハリツケ。	胎土、粗。焼成、良好。色調、青灰色。
甕	719	同上	口径 31.3 残存高 11.7	口頸部は、上外方へ外弯ぎみに伸び口縁部で外側に肥厚し段をなす。端部は丸い。体部以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。内、外面とも回転ナデ調整。	胎土、密。焼成、良好、堅緻。色調、青灰色。
同上	720	2次床面	口径 23.3 残存高2.2	口縁部は、上外方にやや外弯ぎみに伸び、端部近くで外側に肥厚する。端部はやや鋭い。体部以下欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。内、外面とも、回転ナデ調整。	胎土、密。焼成、良好、堅緻。色調、灰色。灰がかぶっている。

器種	遺物番号	出土地区	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯（蓋）	729	灰原灰層	口径 16.6 器高 2.5	口縁部は、短くやや内傾し、端部は丸い。 天井部は低く、平ら。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面½、回転ヘラ切り、天井部内面½、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、やや粗。白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、外面、明青灰色。 内面、オリーブ灰色。
同上	728	同上	口径 15.3 器高 3.2	口縁部は、短く内傾し、端部は丸い。 天井部はなだらかで、高い。 擬宝珠様のつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面⅔、回転ヘラ切り、天井部内面⅔、不整方向のナデ調整。 他は回転ナデ調整。 つまみはハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、オリーブ灰色。
蓋杯（身）	733	同上	口径 17.7 器高 5.7 底径 12.7	口縁部は、やや内弯しながら、上外方に伸び、端部は丸い。 底部は深く、平ら。八の字形の高台を付し、全面で接地する。 底部中央欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内、外面とも回転ナデ調整。 高台はハリツケ。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。

補注

1. 観察表の作成は、実測図と現物とを対照して行った。色調は、「標準土色帖」によって判断した。
2. 形態、手法の特徴の表記は、原則として『陶邑』Ⅰ、Ⅱに従っている。
3. 法量については復元値によって記述しているものも多い。なお歪みの著しいものについては実測段階での復元図をもとに計測している。
4. 各自が行った観察を、文体、用語の統一を行っており、必ずしも当初の原稿の通りでないものもある。
5. 本作業は、大谷女子大学考古学研究会の協力を得て行った。

第5章　牛頸ハセムシ窯跡群の考古地磁気年代推定

中　島　正　志・長谷川　千　恵・三田村　憲　一
（福井大学教育学部）
夏　原　信　義（夏原技研）

牛頸ハセムシ窯跡群の窯床面から、考古地磁気年代推定用の試料を、昭和62年７月に採取した。その熱残留磁気測定結果および年代推定の結果について報告する。

１）考古地磁気年代推定の原理

磁石は北を指す。地球に磁場（地磁気）が存在するためである。地磁気はベクトル量で、ある地点における地磁気を記述するには、方向（偏角と伏角）と強度（全磁力）が必要である。一般に、磁気コンパスの示す北（磁北）は、真北（経度線方向）とずれている。この磁北と真北の間の角度が偏角である。磁針をその重心で支え、磁南一磁北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のＮ極が水平面の下になるように傾く。この傾斜角が伏角である。福岡県の現在の偏角は約６°西で、伏角は約47°である。また、全磁力は、約0.35エルステッドである。これらの地磁気三要素（偏角・伏角・全磁力）は観測する地点によって異なる値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気は、地球の中心に棒磁力を置いたときにできる磁場に近似される。この棒磁石の軸方向は、自転軸から約11.5°傾いている。この磁軸と地表との交点が地磁気北（南）極である。

地磁気は絶えず変動し、時代と共にその地磁気北極の位置を変える。従って、ある地点で観測される偏角・伏角の値も時代と共に変化する。方向だけではなく、強度（全磁力）も変化する。この変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

歴史時代の地磁気永年変化は、岩石や焼土の残留磁化の測定を基礎とする考古地磁気測定によって明らかにすることができる。どんな物質でも、ある（強）磁場中に置かれると磁気を帯び、そして磁場が取り除かれると、普通の物質からは磁気が消える。しかし、強磁性物質（磁石になる物質）では、外部磁場が消えても磁気が残る。これが残留磁気である。残留磁気の強さや安定性は、磁場中に置かれたときの状態によって異なる。残留磁気はその獲得方法の違いによっていろいろな名前で呼ばれる。考古地磁気学で地磁気の化石として最もよく利用するのは、熱残留磁気である。岩石には小量の強磁性粒子（赤鉄鉱や磁鉄鉱などの鉄の酸化物）が含まれている。火成岩では、高温のマグマの状態から冷えて岩石になる過程で、強磁性粒子がその時の地磁気によって磁気を帯び、冷えてからはその残留磁気を保持し続ける。これが熱残留磁気である。土も焼かれると、冷却の過程で同様の熱残留磁気を獲得する。熱残留磁気の性質

を簡単にまとめると、次のようになる。岩石の誕生時または土が焼かれた時の地磁気方向を記録していて、その強さは地磁気の強さに比例し、何億年もの長い期間でも変質しないと言うことになる。これらの性質によって、地磁気の化石として利用が可能なのである。広岡（1977）によって遺跡の焼土の熱残留磁気測定から得られた、過去2000年間の西南日本での、偏角一伏角の変化を図1に示す。偏角は20° Wから15° E、伏角は35° から60° の間で変化している。

時代のよく分かっている遺跡の焼土や火山岩などの熱残留磁気測定から、図1のような地磁気永年変化の標準曲線が得られると、逆に、年代の確かでない遺跡の焼土の残留磁化を測定し、永年変化曲線と比較することで、その年代の推定を行うことができる。これが考古地磁気による年代推定である。この方法は、^{14}C法やフィッション・トラック法のように、それだけで独立して年代が決定できるものではない。偏角と伏角の値から年代が独立に一つだけ決定されるということはないのである。普通、偏角と伏角の組合せで永年変化曲線から二つか三つの年代が出てくる。そのうちの何れを取るかは、考古学的推定に頼ることになる。

2）試料の採取と測定

考古地磁気データを計算するためには、試料が残留磁化を獲得したときの位置（地理的緯度、経度）、および方位（試料の一つの基準面の走行、傾斜）が判っていなければならない。

位置については、2万5千分の1程度の縮尺の地形図から、その遺跡の緯度、経度を読み取ればよい。方位は、焼土を遺構から切り離す前に適当な大きさにして、石膏で固め、その表面にアルミの板をあてて平面を出し、磁気コンパス（クリノメータを考古地磁気用に改造したもの）を使って測定している。磁気コンパスでの方位は、磁北に対するものなので、真北からの方位に直すためには、試料採取地点の現在の偏角分を補正する必要がある。現在の地磁気偏角は、国土地理院の偏角分布の実験式から求めることができるが、トランシットによる太陽方位の観測から試料採取地点の偏角を実測することが望ましい。

実験室に持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて、冷却水をかけながら1辺3.5㎝の立方体に切断する。切断面が崩れないように、1面ごとに石膏で補強し、しっかりした試料をつくる。

試料の残留磁化の測定には、夏原技研製のリング・コア型スピナー磁力計（SMM－85）を使用した。

測定にはいろいろな要因での誤差がつきものであるため、一つの窯跡から10～15個程度の試料を採取している。これらの試料の個々の測定で求めた偏角（Di）、伏角（Ii）から平均値（Dm, Im）を求めるのだが、このとき用いる統計学的方法は Fisher によって確立されたものである。各試験の測定値を、方向（Di, Ii）の単位ベクトルとして取り扱う。

まず、n組の（Di, Ii）より

$N = \Sigma\ cosIi \cdot cosDi$　　（北向きの成分）

$E = \Sigma\ cosIi \cdot sinDi$　　（東向きの成分）

$Z = \Sigma\ sinIi$　　（鉛直の成分）を求めると、

合ベクトルの大きさR，およびDm，Imは、

$R = (Z^2 + N^2 + E^2)^{1/2}$

$Dm = \tan^{-1}E/N$

$Im = \sin^{-1}Z/R$　で与えられる。

このとき、信頼度係数kは、

$k = (n-1)/(n-R)$となる。kが大きいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では100以上の値になる。

誤差角α_{95}は、危険率5％として

$\alpha_{95} = \cos^{-1}[1-(n-R)\{(1/0.05)^{1/n-1}-1\}/R]$で与えられる。$\alpha_{95}$が小さいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では数度以内になる。

α_{95}より、Dm，Imのそれぞれの誤差の幅として、

$dDm = \alpha_{95}/cosIm$　　（偏角誤差）

$dIm = \alpha_{95}$　　（伏角誤差）

が求められる。

以上のようにして得られた計算結果を、一つの窯跡を代表する考古地磁気データとしている。

なお、考古地磁気年代推定の原理や測定方法については、中島・夏原（1981）に詳しく解説されている。

3）熱残留磁気測定結果

牛頸ハセムシ窯跡群の18－2号窯（18－Ⅱ号窯、以下同じ）、18－5号窯、18－6号窯、18－7号窯、18—8号窯、19号窯、20—1号窯と20—2号窯から、計115個の考古地磁気用の定方位試料を採取した。試料の整形の時に3個破損したため、計112個の試料について、その熱残留磁気を測定した。残留磁気強度は10^{-3}～10^{-4}emuで、窯床からの試料としては少し弱い磁化強度であった。熱残留磁気測定結果を**表2**と**表3**にまとめた。**表2**は個々の試料の測定結果（Di，Ii）で、**表3**がその平均値（Dm，Im）と誤差角（α_{95}）および信頼度係数（k）である。現在の地磁気偏角の補正は、国土地理院の1980年の偏角分布式から求めた6.18° Wを使用した。20－1号窯を除くと、何れも誤差角が小さく、信頼度係数の高いよくまとまったデータとなっている。20－1号窯の測定結果は、上層（U）と下層（L）で磁化方向が少し異なる傾向があったので、それぞれの層で平均値を求めた（**表3**）。誤差角は、上層で15.1°、下層で4.0°となり、他の窯と比べてかなり大きな値となった。特に上層は年代推定には不適な試

料と判断するしかないが、磁化強度は他の窯とほとんど同じであり、焼成温度がこの窯だけ低かったとは考えられず、大きな誤差角となった原因については不明である。

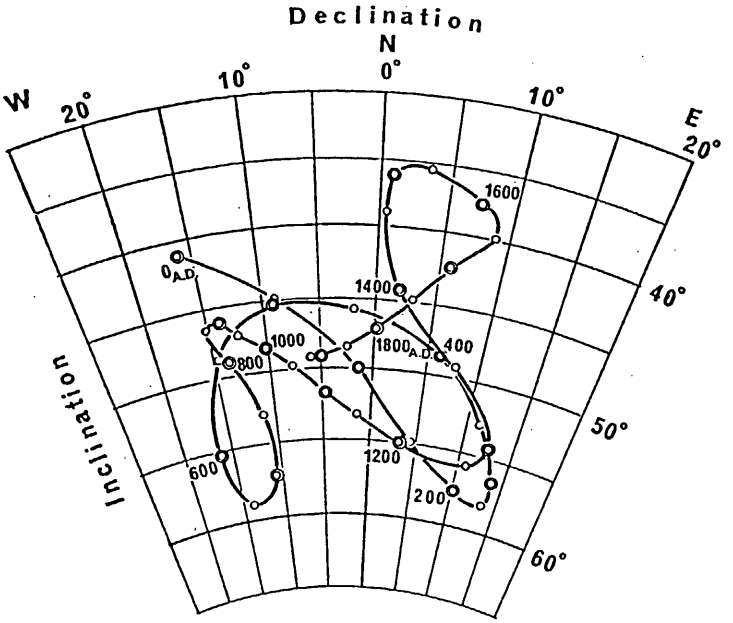


図30　西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた過去2000年間の地磁気永年変化

表2　牛頸ハセムシ窯の残留磁化測定結果

（A）18－2号窯

試料 No.	偏角 Di(°E)	伏角 Ii(°)
F101	−16.5	57.1
F102	−14.1	59.3
F103	−13.7	59.8
F104	− 8.6	58.4
F105	−13.1	55.8
F106	−10.9	57.4
F107	−13.3	54.8
F108	−12.6	58.8
F109	−17.1	59.5
F110	−10.8	59.1
F111	−13.2	58.9
F112	−10.8	57.6
F113	−12.1	58.5
F114	− 8.9	59.2
F115	−11.6	58.0

（B）18－5号窯

試料 No.	偏角 Di(°E)	伏角 Ii(°)
F 81	−19.1	61.2
F 82	−15.9	61.3
F 83	−12.1	58.3
F 84	−16.1	61.3
F 85	−19.9	61.5
F 86	− 7.9	62.6
F 87	− 7.5	61.6
F 88	−16.4	61.9
F 89	−40.4	61.2
F 90	−15.9	60.6
F 91	−12.9	61.6
F 92	−15.3	62.7
F 93	−13.7	60.7
F 94	−10.2	57.9
F 95	− 8.8	63.3

（C）18－6号窯

試料 No.	偏角 Di(°E)	伏角 Ii(°)
F121	−18.1	56.9
F122	−16.2	56.7
F123	−18.1	57.1
F124	−20.2	57.8
F125	−18.1	54.8
F126	−17.9	56.6
F127	−10.6	57.6
F128	− 6.4	56.0
F129	− 7.3	55.4
F130	−12.2	60.1
F131	−10.4	56.2
F132	−19.2	56.2
F133	−13.0	56.9
F134	− 8.7	54.3
F135	−10.5	52.5

（D）18－7号窯

試料 No.	偏角 Di(°E)	伏角 Ii(°)
F141	−17.3	54.7
F142	−13.3	47.7
F143	−11.8	52.7
F145	−16.6	50.7
F146	−15.2	49.8
F147	−16.7	50.9
F148	−15.4	49.2
F149	−15.3	50.1
F150	−17.2	50.7
F151	−16.7	52.1
F152	−12.0	49.9
F153	−17.1	49.5
F154	−15.6	50.8
F155	−18.3	52.3

（E）18－8号窯

試料 No.	偏角 Di(°E)	伏角 Ii(°)
F 61	−17.7	57.7
F 62	−13.8	58.2
F 63	−23.6	60.4
F 64	−15.2	56.7
F 65	−17.5	54.3
F 66	−16.1	56.8
F 67	−17.0	56.4
F 68	−19.3	55.4
F 69	−15.7	57.4
F 70	−17.9	58.2
F 71	−14.1	55.4
F 72	−21.7	48.6

（F）19号窯

試料 No.	偏角 Di(°E)	伏角 Ii(°)
F 1	−19.1	62.5
F 2	− 8.3	60.3
F 3	−14.1	59.3
F 4	− 9.4	60.6
F 5	−12.9	57.3
F 6	− 9.4	55.6
F 7	−10.0	57.6
F 8	− 3.6	57.4
F 10	− 9.4	69.2
F 11	−10.0	68.2
F 12	− 9.4	66.0
F 13	− 2.2	66.6
F 14	− 4.4	68.2

（G）20－1U号窯

試料 No.	偏角 Di(°E)	伏角 Ii(°)
F 21	−19.3	56.4
F 22	− 7.6	53.6
F 23	− 8.3	57.2
F 24	17.8	38.4
F 25	22.7	38.8
F 26	−27.8	10.5
F 27	−37.8	28.6
F 28	20.2	49.8
F 29	− 1.2	60.9

（H）20－1L号窯

試料 No.	偏角 Di(°E)	伏角 Ii(°)
F 30	− 5.2	51.1
F 32	−13.9	59.7
F 33	−13.5	57.0
F 34	−15.6	55.9
F 35	−16.6	58.5

（I）20－2号窯

試料 No.	偏角 Di(°E)	伏角 Ii(°)
F 41	− 9.8	54.8
F 42	−13.7	56.2
F 43	−14.6	57.4
F 44	−13.7	57.3
F 45	−11.7	60.8
F 46	−14.1	58.7
F 47	−14.1	59.9
F 48	−19.9	60.2
F 49	−10.6	60.7
F 50	−13.3	60.2
F 51	−15.1	59.9
F 52	−11.5	59.4
F 53	− 8.8	59.4
F 54	−13.6	58.7

表3　牛頸ハセムシ窯の考古地磁気測定結果

窯　名	試料数 (N)	Dm(°E)	Im(°)	α_{95}(°)	k	推定年代 (考古地磁気)
18－2号窯	15	−12.5	58.2	0.9	1844.7	660 ± 10
18－5号窯	15	−15.4	61.4	1.9	403.4	640 ± 20
18－6号窯	15	−13.7	56.4	1.5	674.5	610 ± 30
18－7号窯	14	−15.6	50.8	1.0	1439.8	560 ± 10
18－8号窯	12	−17.5	56.3	1.8	596.6	610 ± 30
19号窯	13	− 9.6	62.3	2.7	237.2	675 ± 25
20－1U号窯	9	− 5.8	46.1	15.1	12.5	
20－1L号窯	5	−12.7	56.5	4.0	369.7	650 ± 50
20－2号窯	14	−13.2	58.9	1.1	1276.9	650 ± 10

表4　九州地方の須恵器窯の考古地磁気測定結果

窯　名	試料数（N）	Dm(°E)	Im(°)	α_{95}(°)	k	推定年代（考古地磁気）	推定年代（考古学）
A2号窯*	16	−10.0	55.8	1.6	570	720 ± 20	6世紀末
A3号窯*	13	− 7.9	52.8	2.1	407	750 ± 23	6世紀末〜7世紀前半
4号窯**	16	−16.9	59.5	4.8	104.0	645 ± 25	8世紀
5号窯**	8	−11.0	58.5	4.4	159.9	675 ± 35	
瓦ケ迫窯**	14	−14.9	59.3	2.0	386.6	650 ± 25	6世紀後半〜末
草場窯****	29	−10.5	59.8	1.5	327.0	670 ± 20	7世紀前半

*　：大分県中津市伊藤田城山窯跡群（時枝・伊藤，1985）。
**　：福岡県大牟田市勝立窯跡（広岡，1978）。
***：大分県中津市伊藤田瓦ケ迫窯（時枝・伊藤，1984）。
****：大分県中津市草場窯（時枝，1988 私信）。

4）推定年代

表3の推定年代は、西南日本の地磁気永年変化曲線（図30）と表3のDm, Im, α95を比較して求めたものである。18−7号窯が560±10年と少し古い年代が得られたほかは、だいたい650年前後の年代値となった。

中村　浩氏から、考古学による推定年代と比べて、この考古地磁気推定年代は約100年古くなっているというコメントをいただいた。年代のずれの主原因は、地磁気永年変化の地域差であると考えている。西南日本という程度のひろがりの地域で地磁気永年変化を見るとき、その変化が地磁気の双極子成分そのものの変化によるものであれば、同時代の地磁気の要素（偏角や伏角）の地域差は、地域の両端で比べてもせいぜい2°以内である。従って通常は、図1の永年変化曲線で西南日本の地域内の年代推定が可能である。しかし、時代によっては非双極子成分の影響で地域によって地磁気要素が大きく異なる場合のあることが最近問題になってきた。広岡（1978）は、15世紀から18世紀にかけて西南日本の東西で偏角が大きく異なり、例えば九州の有田古窯跡の熱残留磁気の方向は、図30の変化曲線から期待される方向よりも数度西偏していることを報告している。考古地磁気による年代推定をより精度の高いものとするために、このような地域差に対応した地域ごと（例えば九州地方）の永年変化曲線を完成することが重要な課題となってきた。図30の永年変化曲線の基礎となった測定データの大部分は近畿および東海地方からのものである。特に、500年から1000年頃のデータのほとんどは、大阪南部の泉北丘陵に分布する和泉陶邑窯跡の熱残留磁気測定によって導かれたものである。そのため須恵器窯の時代に、大阪と福岡で地磁気の要素に大きな地域差があれば、推定年代はずいぶん違ったものになる可能性が高い。現在までに報告されている九州地方の須恵器窯についての考古地

磁気測定結果を表4にまとめた。考古地磁気による推定年代はいずれも図1の永年変化曲線から推定されたものである。陶邑の測定データ数から見るとまだまだデータ数が足りないけれど、すべて考古学の推定年代とは食い違った年代値となっていて、この時代に、地磁気に大きな地域差が存在したことは間違いなさそうである。牛頸ハセムシ窯跡の考古学の8世紀という年代が正しければ、8世紀には福岡での偏角は大阪より約3°西偏し、伏角は約5°深いという地域差があったことになる。しかし、表3と表4の九州の須恵器窯から地磁気永年変化曲線をもとめることはまだ無理なので、今後さらに考古地磁気測定データを蓄積することが必要である。現時点では、考古地磁気と考古学の年代のずれはそのままにしておいたほうが良いと思われる。

引用文献

広岡公夫（1977）考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向．第四紀研究，**15**，200－203．

広岡公夫（1978）古陶磁の年代決定に関する研究．自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究，昭和52年度年次報告書，53－65．

中島正志・夏原信義（1981）考古地磁気年代推定法．ニュー・サイエンス社，95p．

時枝克安・伊藤晴明（1984）瓦ケ迫窯跡一号窯考古地磁気調査．上ノ原遺跡群Ⅲ・伊藤田窯跡群Ⅱ，大分県教育委員会，28－29．

時枝克安・伊藤晴明（1985）伊藤田城山窯跡A地区2号窯及び3号窯の考古地磁気年代について．伊藤田城山窯跡群，中津市教育委員会，115－118．

あ と が き

日本の須恵器生産は、和泉陶邑窯にはじまったと考えられている。九州北部では、これに先行するとされる小隈窯、山隅窯跡など初期須恵器窯が検出され話題になっている。

これらの問題はさておき九州最大といわれる牛頸窯跡群は、これより少しおくれて生産が、開始されたものである。今回調査の対象となったハセムシ窯跡群は、奈良時代に遠つ都といわれた、太宰府をはじめ大野城などに須恵器を供給したと考えられる。

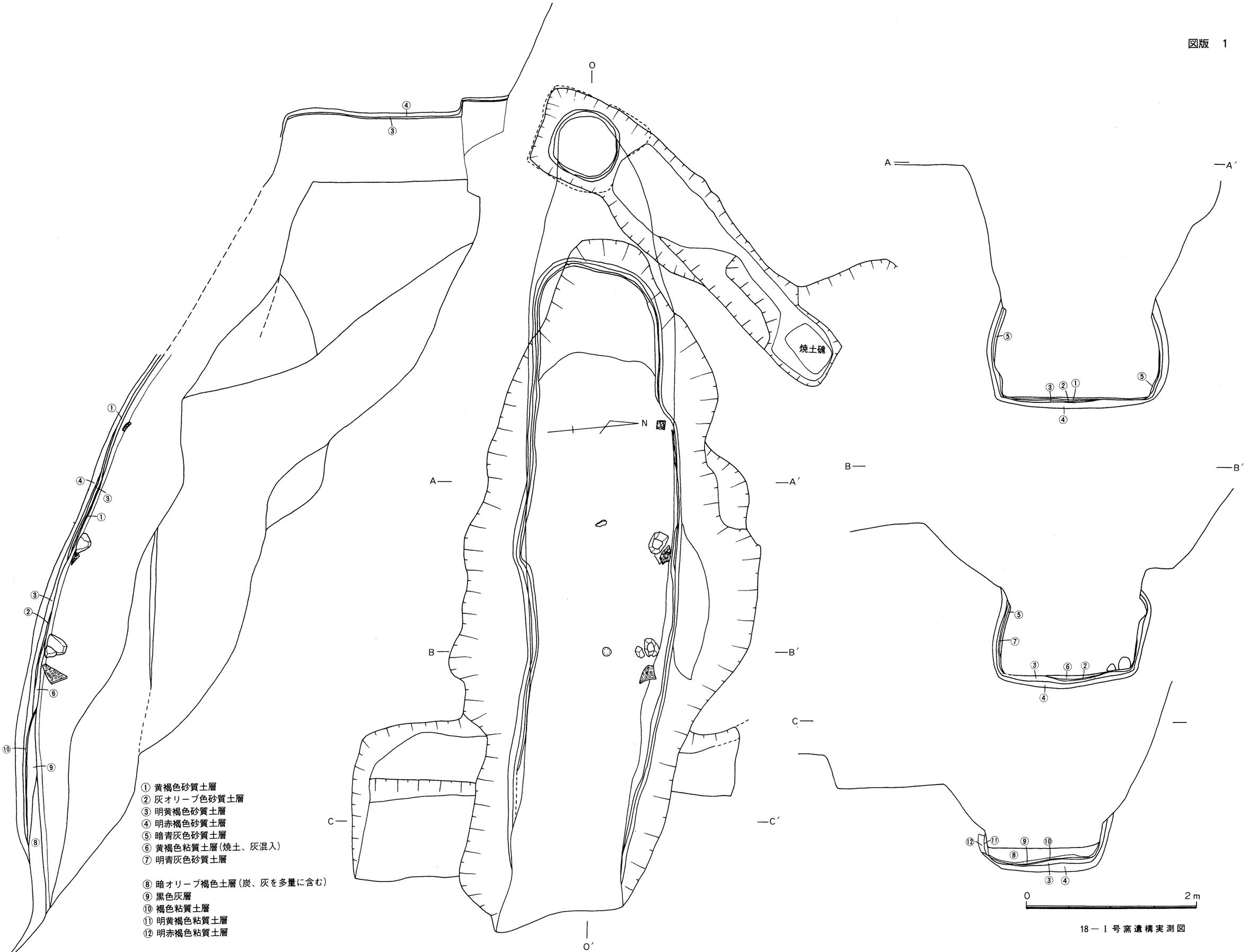
詳細は次回の報告はゆずることとするが、本報告も事実報告として一定の成果をおさめたと考えている。おそい梅雨の降雨になやまされながら調査作業に従事し、報告書作成に協力された各位の努力に感謝するとともに本書をいささかでも本窯跡群の理解に益することがあれば幸いである。

今回の調査の機会を考えられた大野城市教育委員会、㈱西洋環境開発、はもとより福岡県教育委員会文化課の方々、さらにこの契機を与えられ成果をまちながら今年1月に他界された故酒井仁夫氏に深甚なる謝意を表するとともに酒井氏のご冥福を祈る。　　中村　浩

なお、文末ではあるが、調査作業従事者名簿を掲げ、謝意を表する。

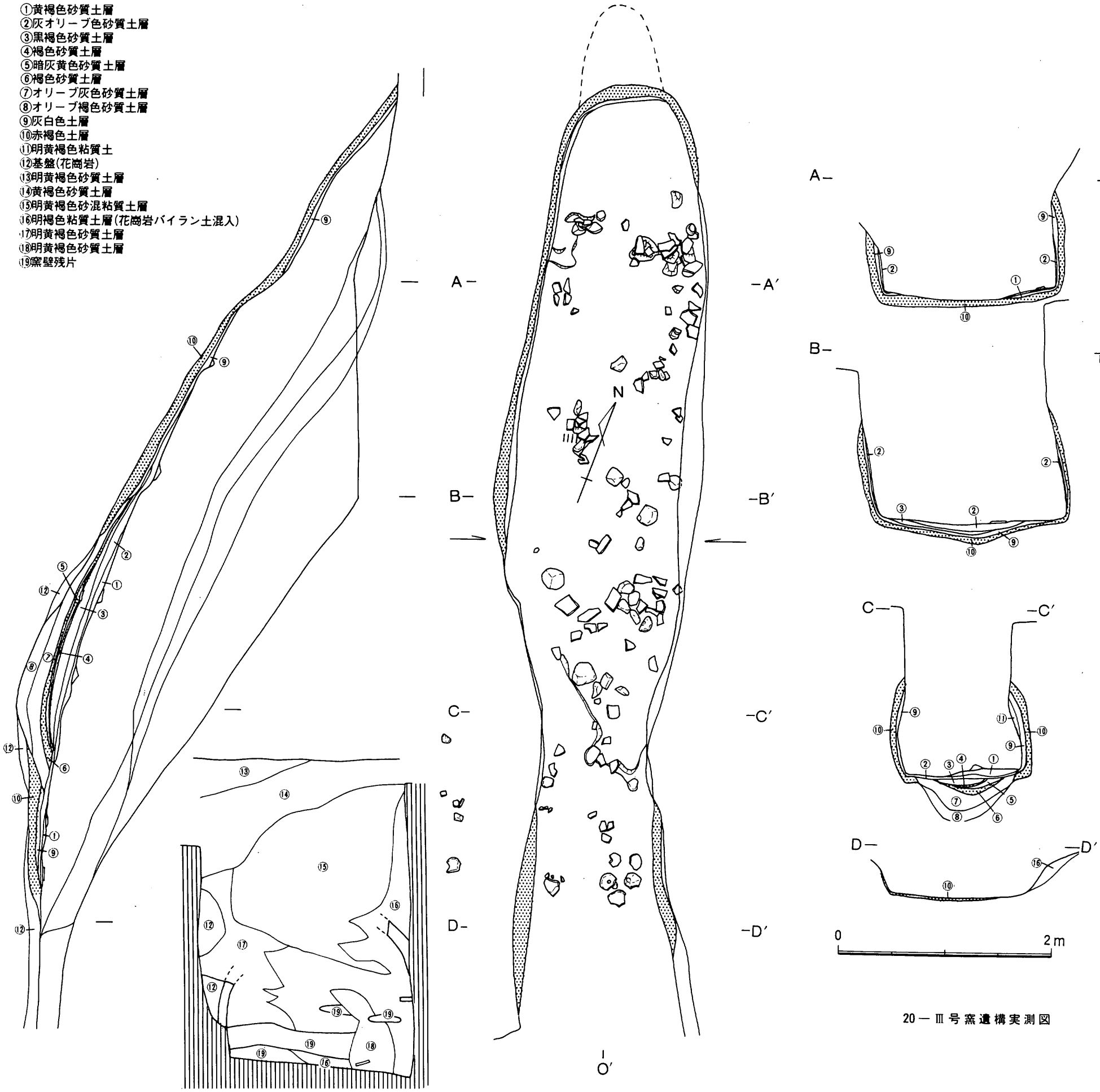
川辺　照子、川辺　満子、河野　房子、藤島ミトシ、中山三千代、田中　岩男、
川口　清己、手塚キヨ子、宮田フジノ、中山チエ子、中山さつき、福岡　麗子、
佐藤利恵子　他　　（敬称略、順不同）

図　　版

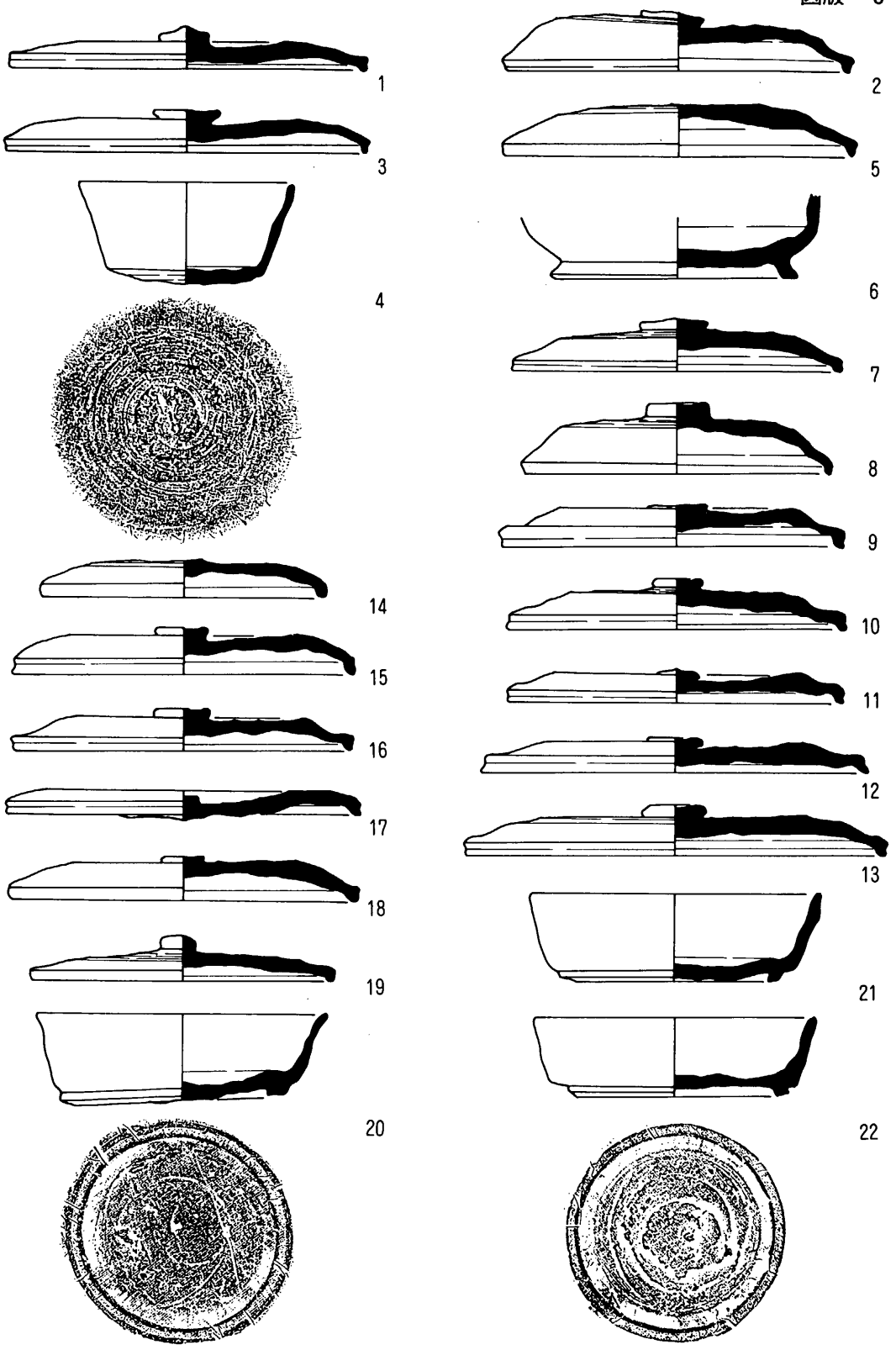

焼土礎
① 黄褐色砂質土層
② 灰オリーブ色砂質土層
③ 明黄褐色砂質土層
④ 明赤褐色砂質土層
⑤ 暗青灰色砂質土層
⑥ 黄褐色粘質土層(焼土、灰混入)
⑦ 明青灰色砂質土層
⑧ 暗オリーブ褐色土層(炭、灰を多量に含む)
⑨ 黒色灰層
⑩ 褐色粘質土層
⑪ 明黄褐色粘質土層
⑫ 明赤褐色粘質土層
0
2m

18－Ⅰ号窯遺構実測図

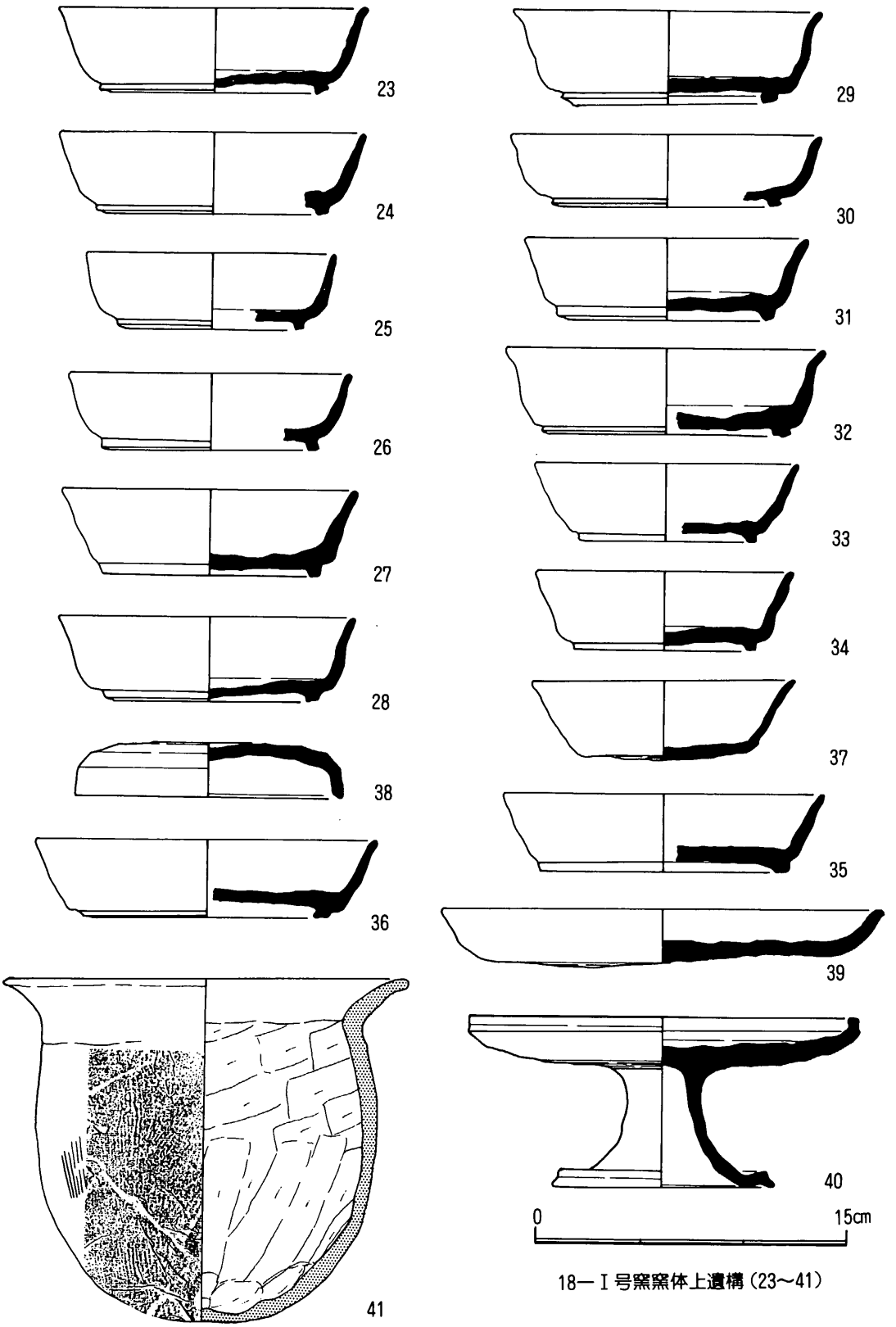
①黄褐色砂質土層
②灰オリーブ色砂質土層
③黒褐色砂質土層
④褐色砂質土層
⑤暗灰黄色砂質土層
⑥褐色砂質土層
⑦オリーブ灰色砂質土層
⑧オリーブ褐色砂質土層
⑨灰白色土層
⑩赤褐色土層
⑪明黄褐色粘質土
⑫基盤(花崗岩)
⑬明黄褐色砂質土層
⑭黄褐色砂質土層
⑮明黄褐色砂混粘質土層
⑯明褐色粘質土層(花崗岩バイラン土混入)
⑰明黄褐色砂質土層
⑱明黄褐色砂質土層
⑲窯壁残片



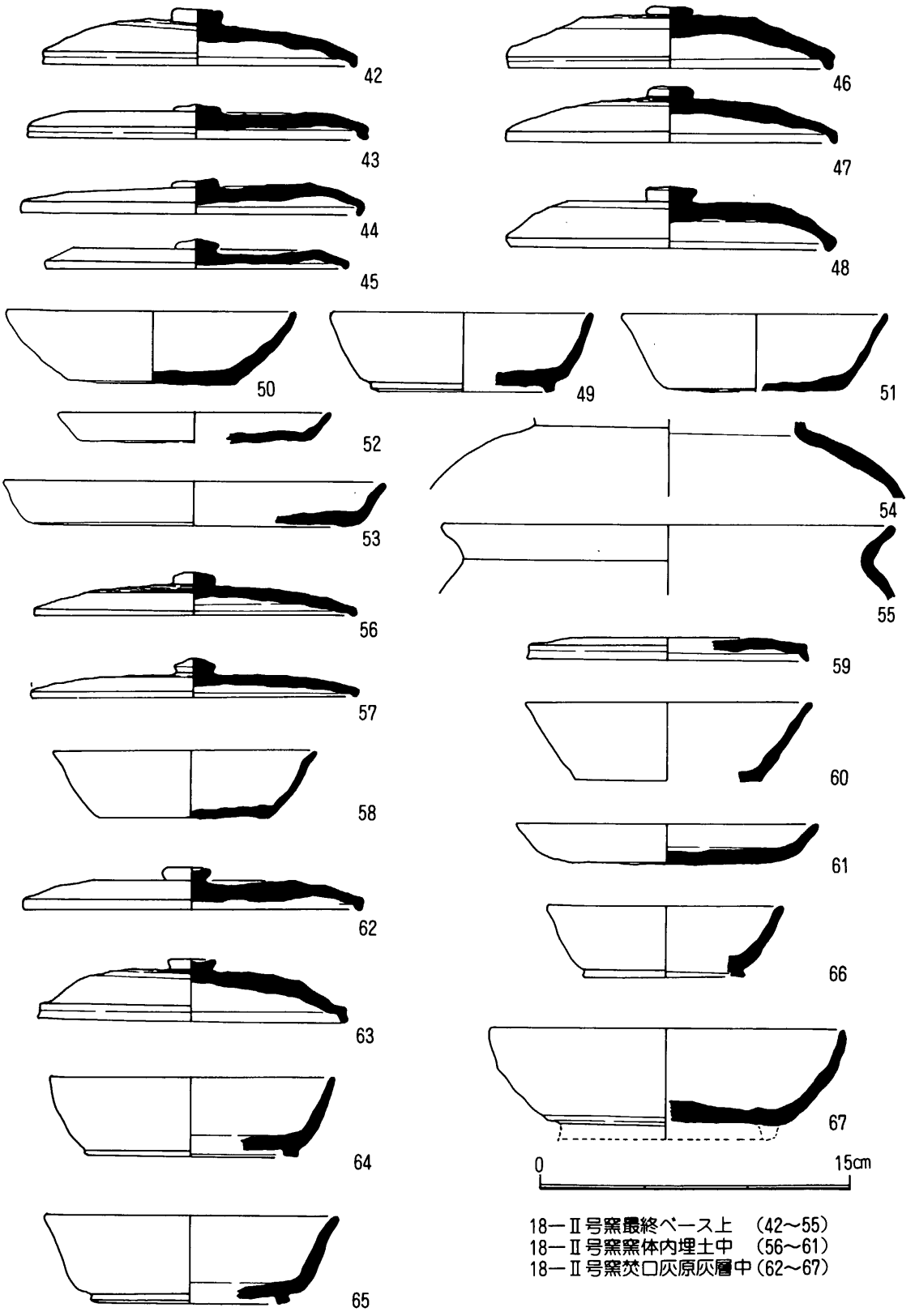
20－Ⅲ号窯遺構実測図



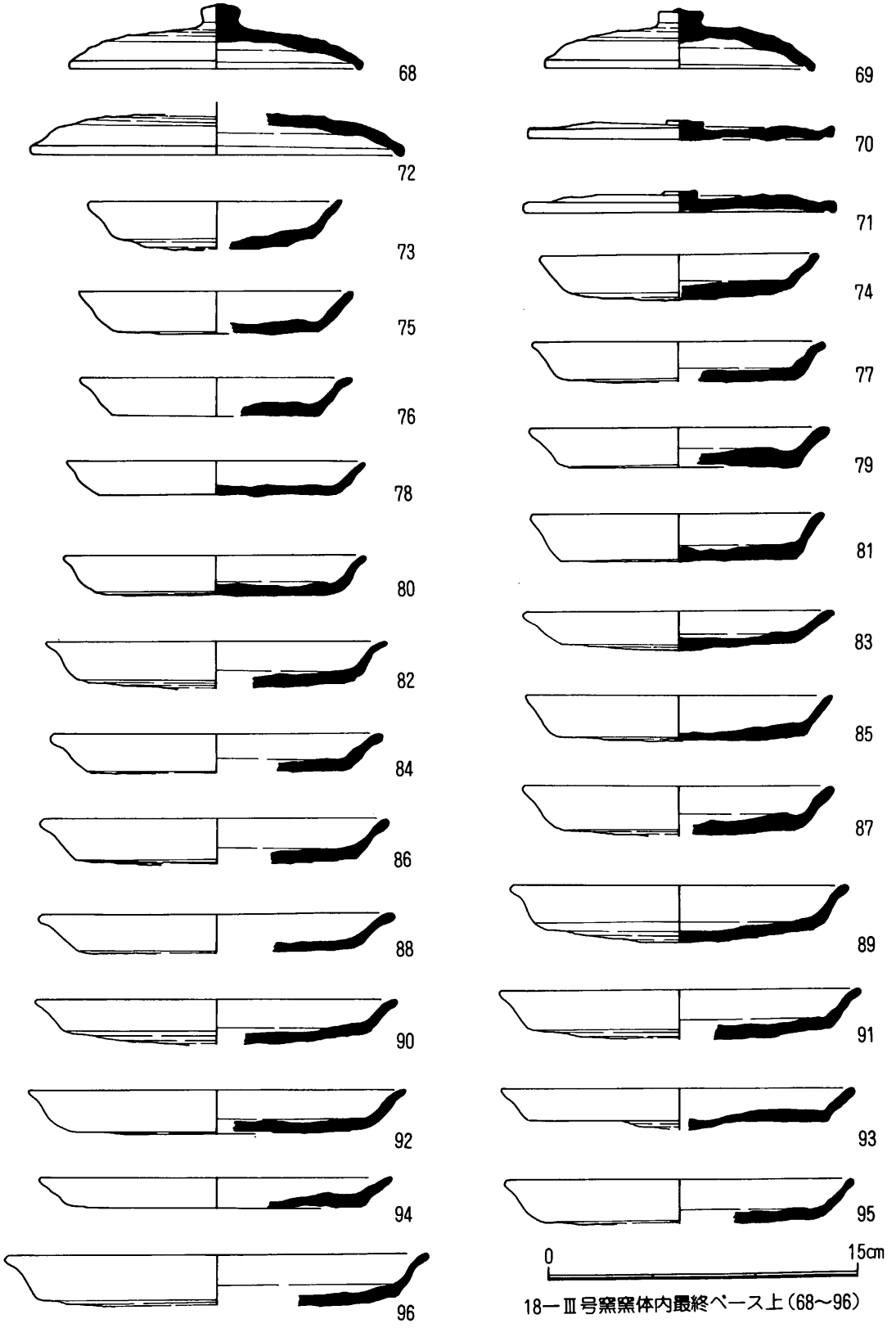
18—Ⅰ号窯煙出し右排水溝埋土中（1）
18—Ⅰ号窯窯体内最終ベース上　（2～6）
18—Ⅰ号窯窯体内　（7～22）



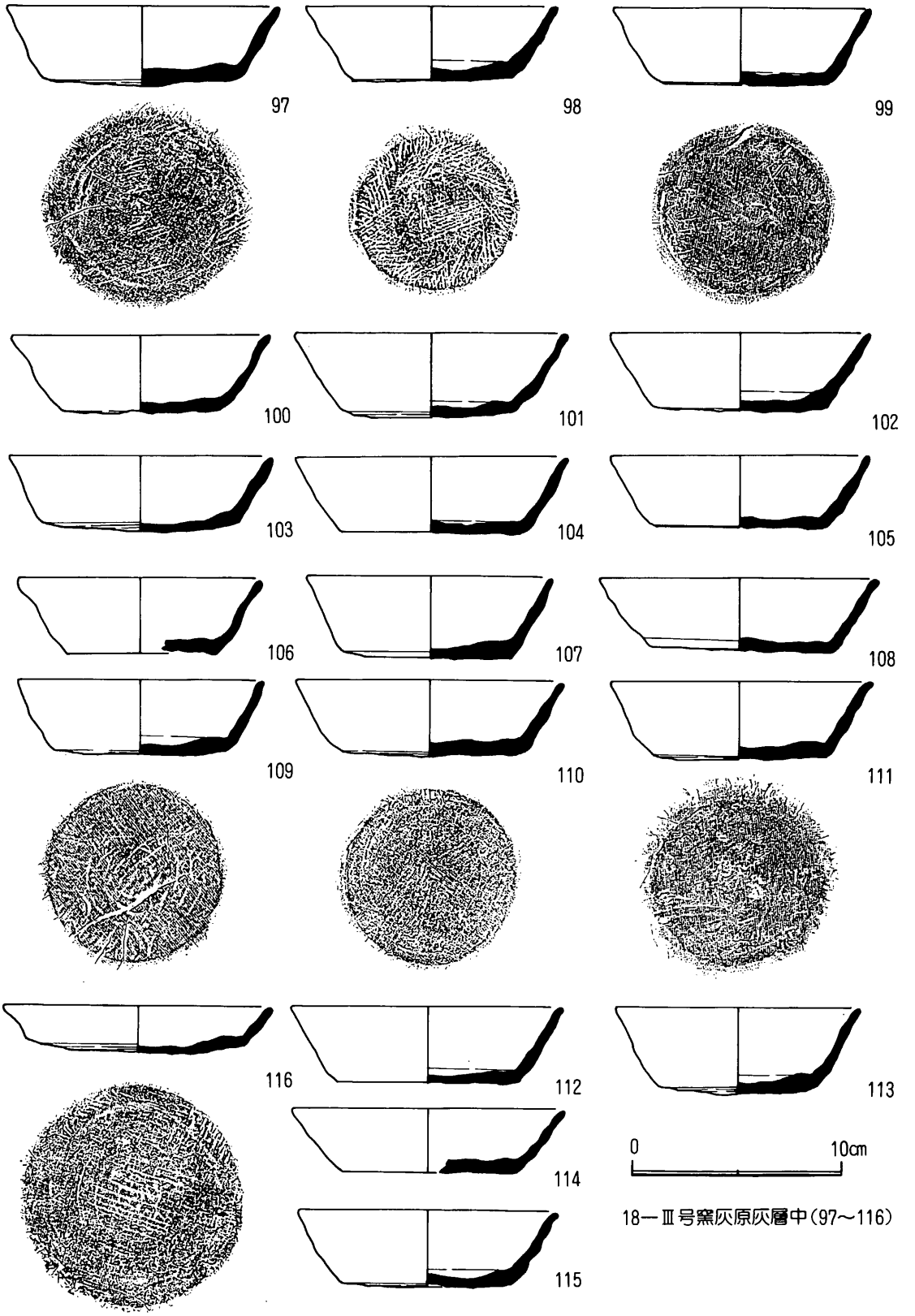
18—Ⅰ号窯窯体上遺構（23～41）



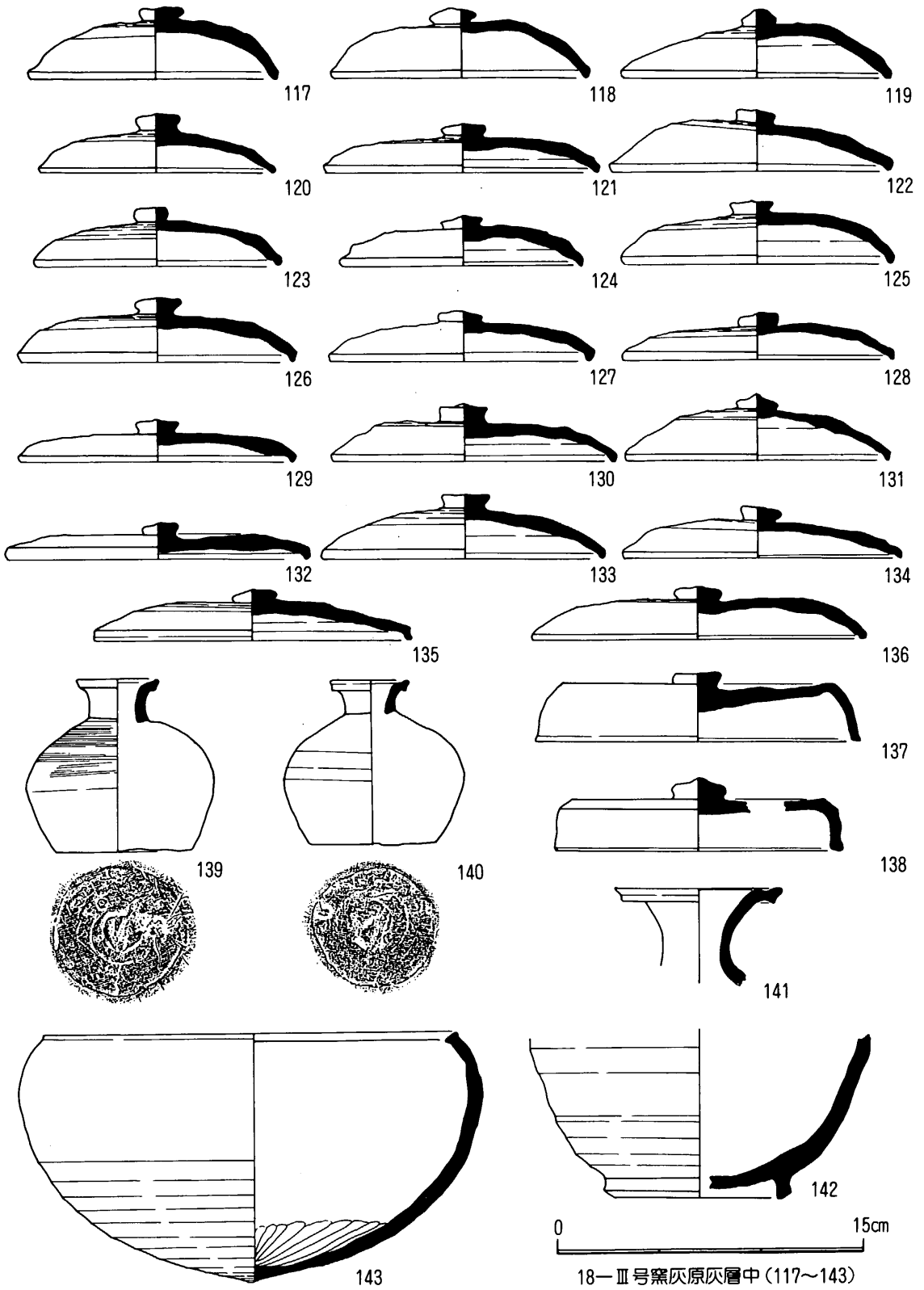
18－Ⅱ号窯最終ベース上　(42～55)
18－Ⅱ号窯窯体内埋土中　(56～61)
18－Ⅱ号窯焚口灰原灰層中 (62～67)



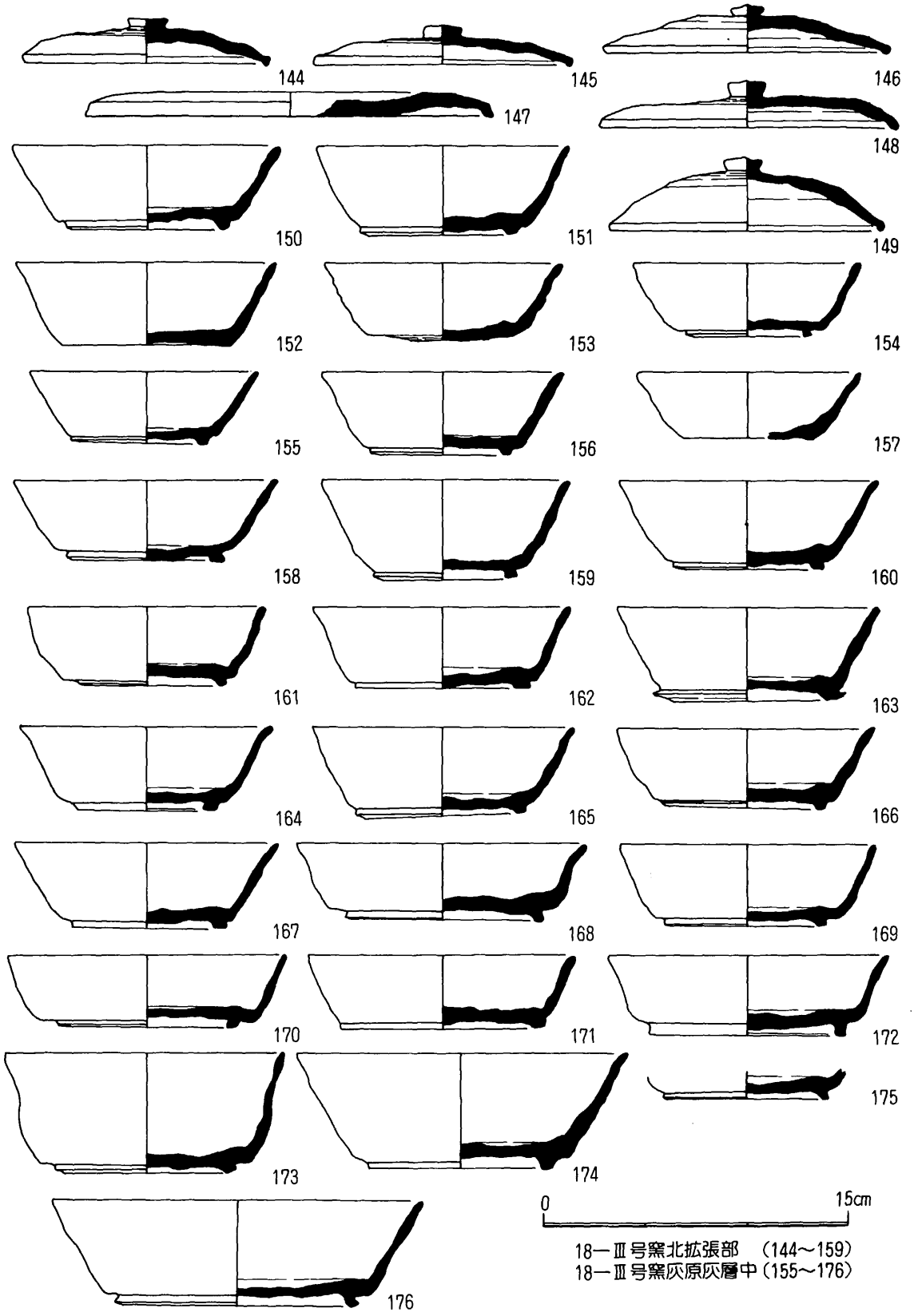
18—Ⅲ号窯窯体内最終ベース上（68～96）



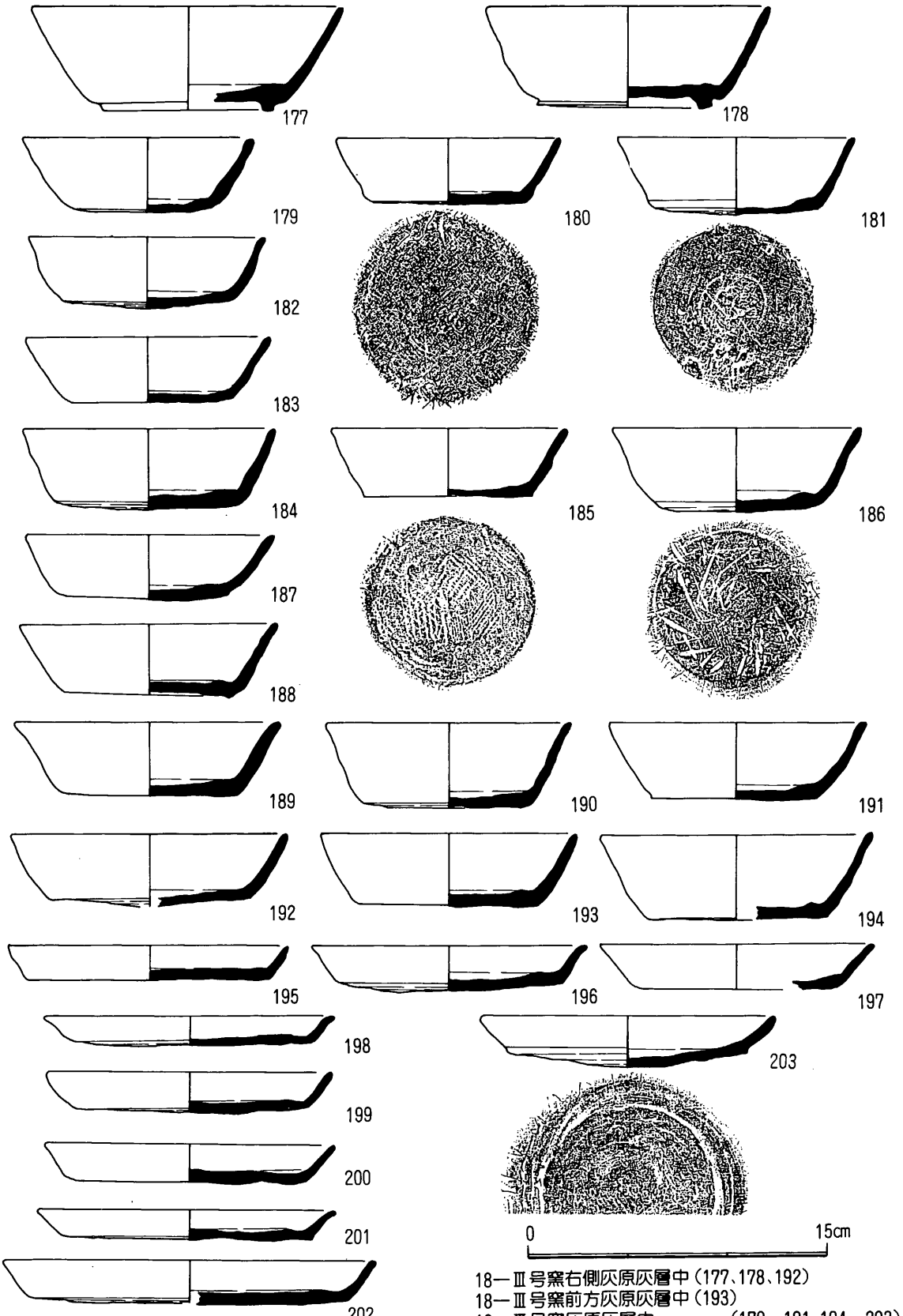
18—Ⅲ号窯灰原灰層中(97～116)



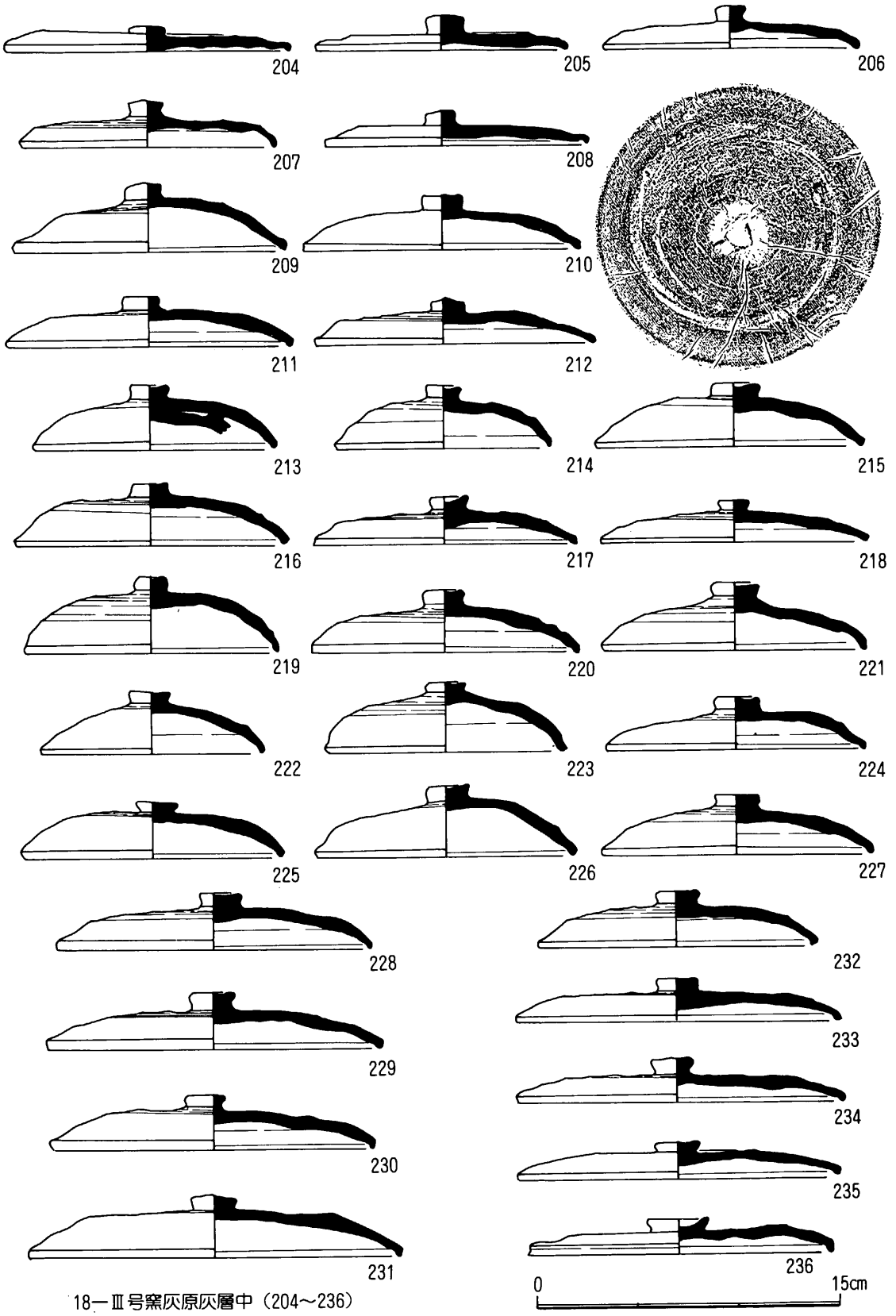
18—Ⅲ号窯灰原灰層中（117～143）



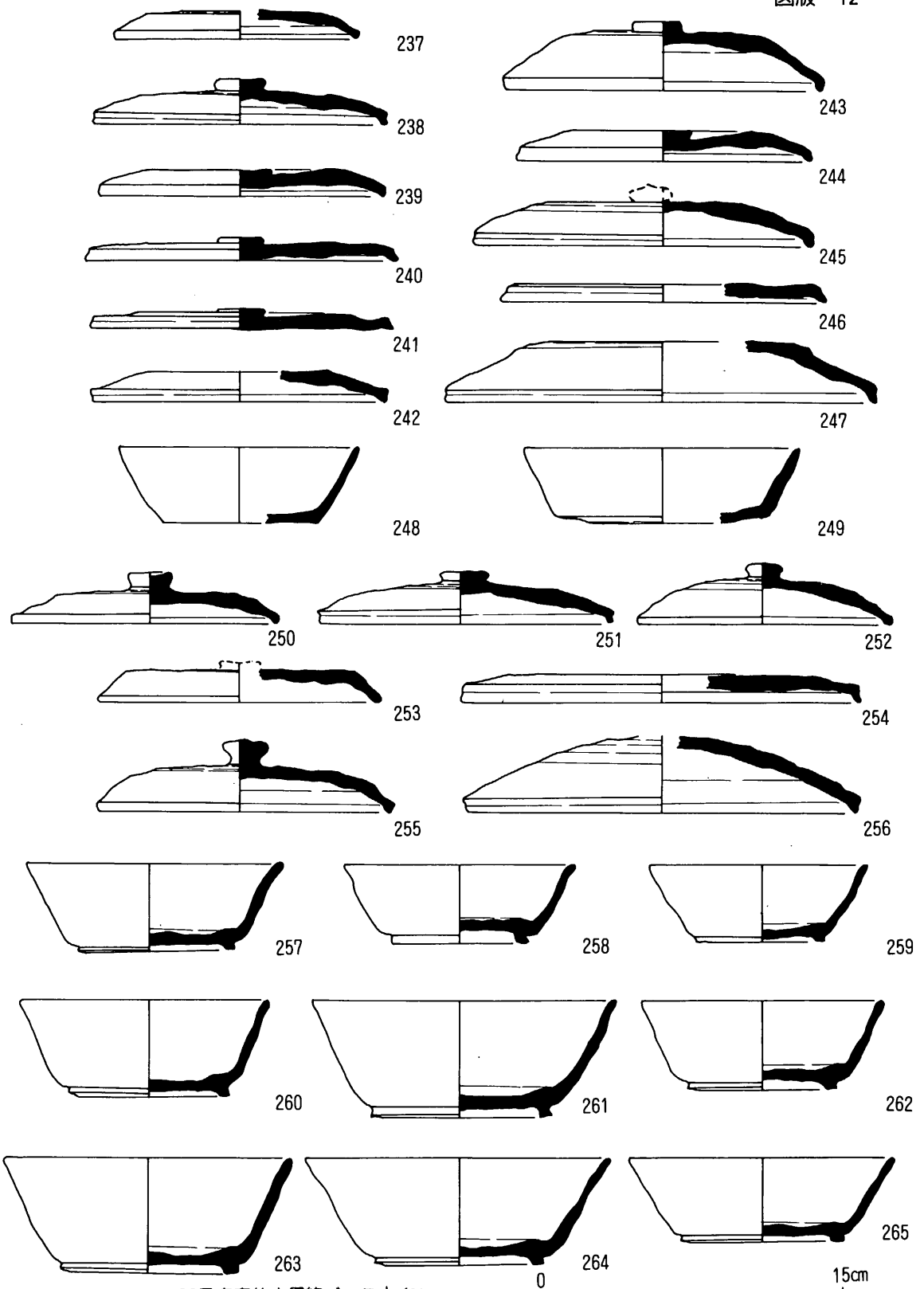
18—Ⅲ号窯北拡張部　(144～159)
18—Ⅲ号窯灰原灰層中 (155～176)



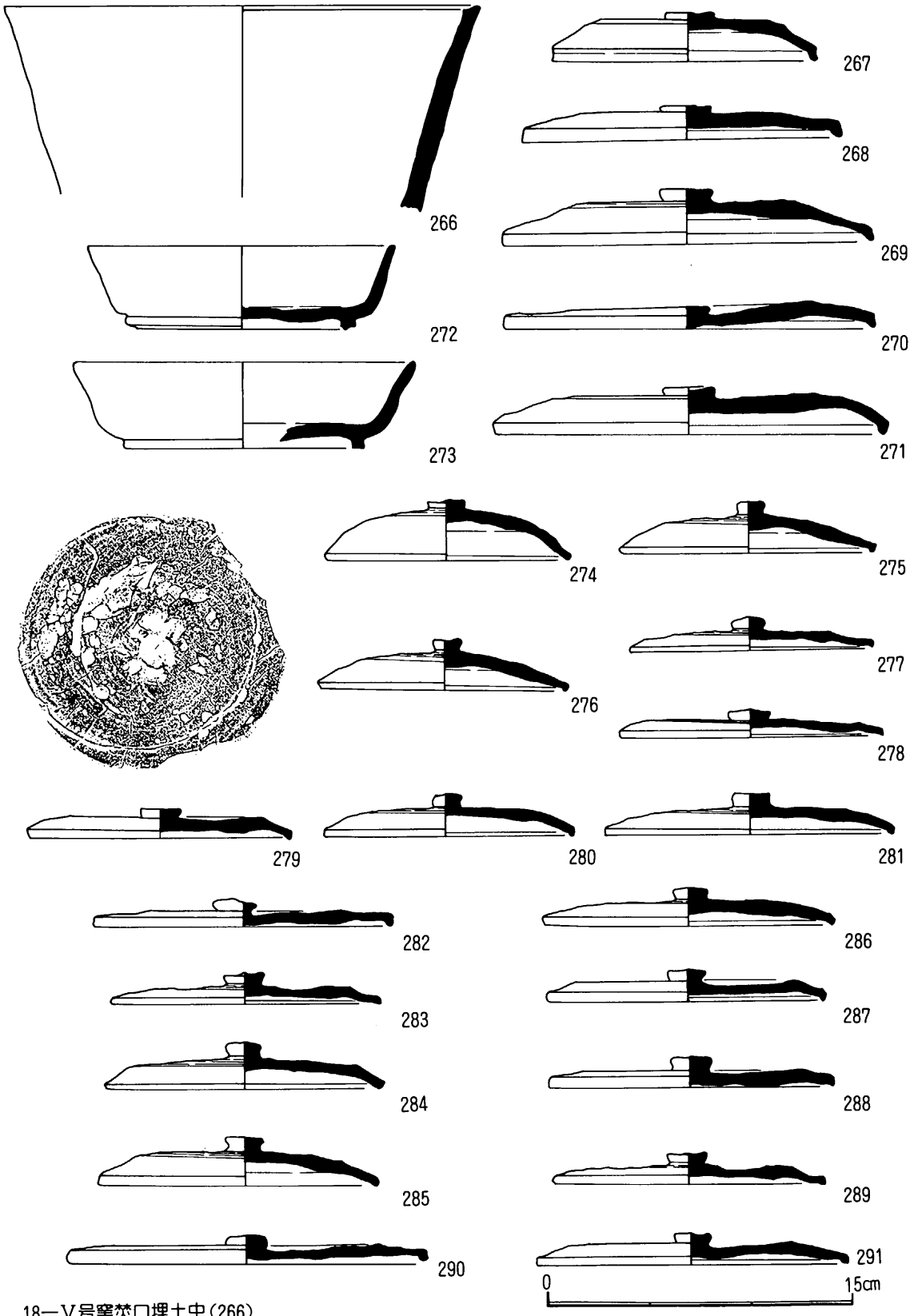
18—Ⅲ号窯右側灰原灰層中（177、178、192）
18—Ⅲ号窯前方灰原灰層中（193）
18—Ⅲ号窯灰原灰層中　　（179～191、194～203）



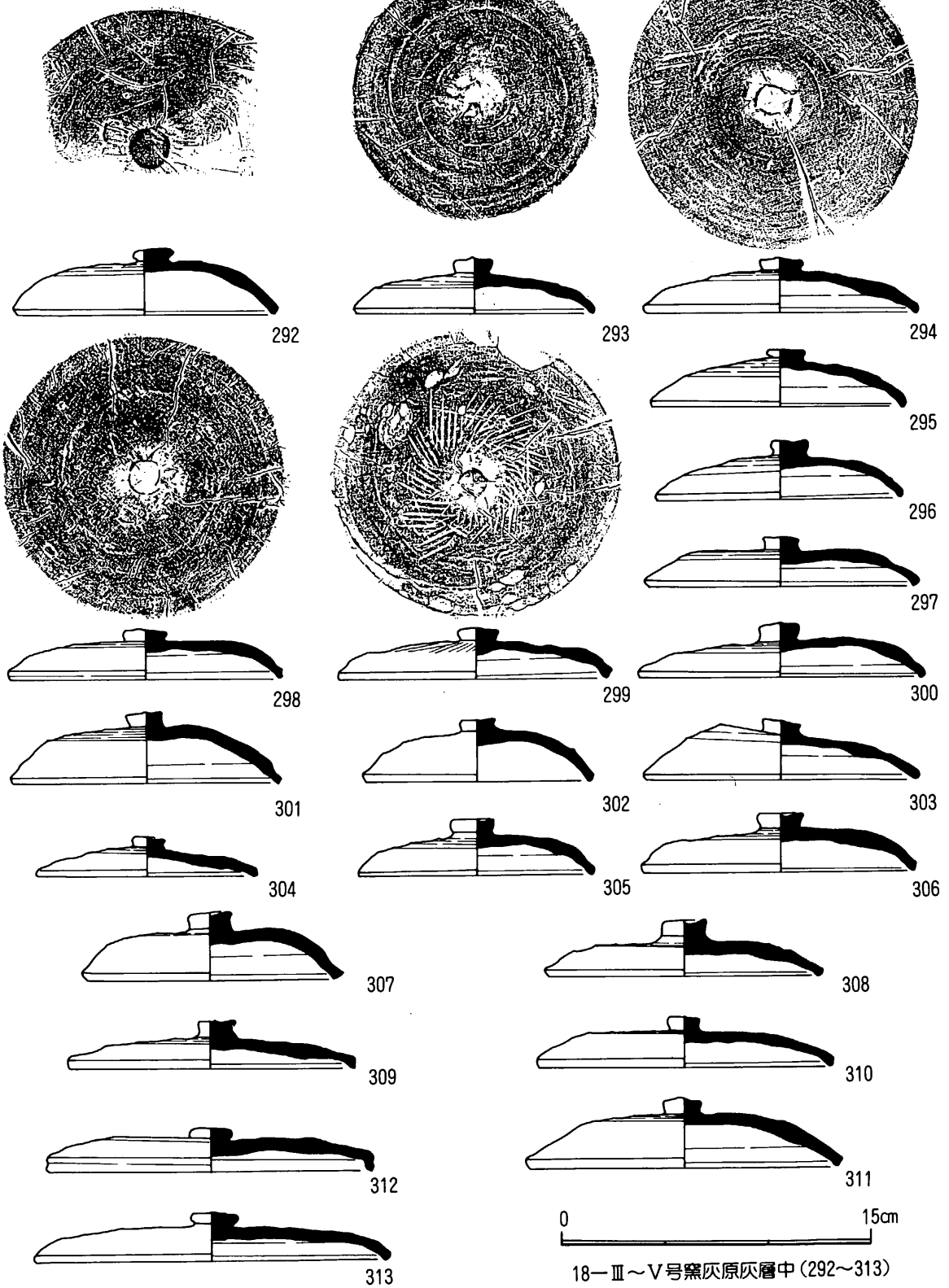
18—Ⅲ号窯灰原灰層中（204～236）



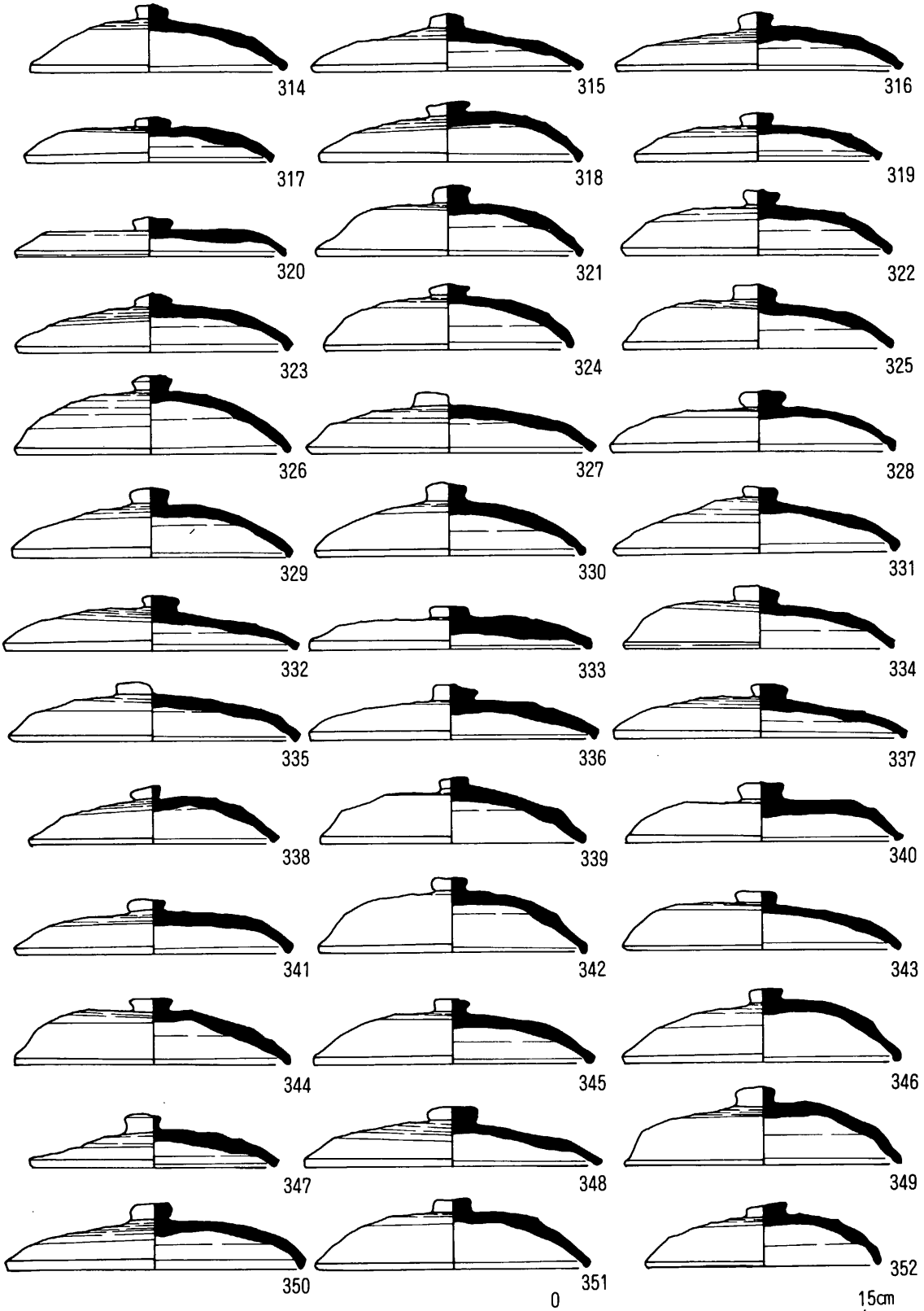
18—Ⅴ号窯窯体内最終ベース上（237～249）
18—Ⅴ号窯窯体内埋土中　　（250～265）



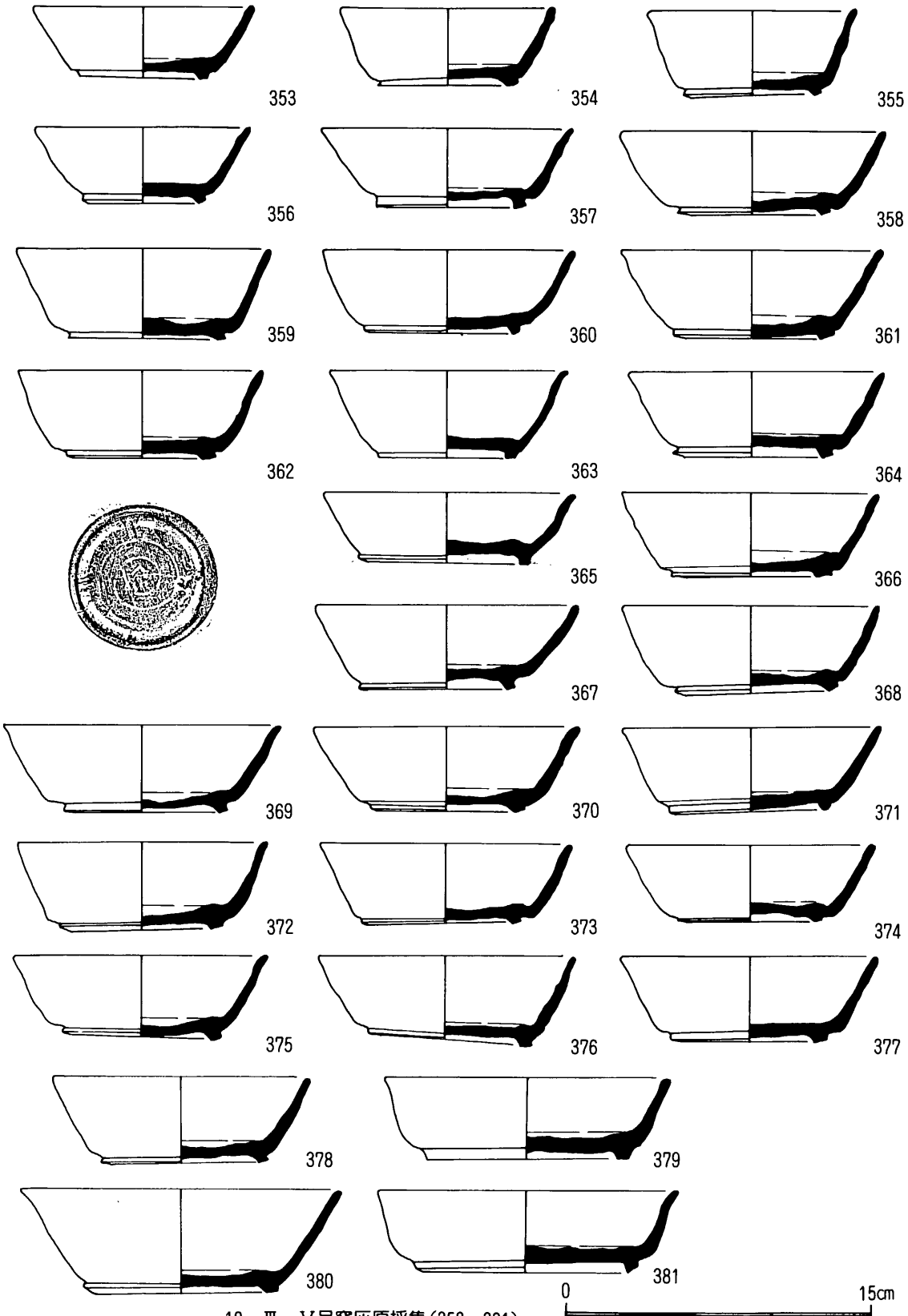
18—Ⅴ号窯焚口埋土中（266）
18—Ⅴ号窯灰原灰層中（267～273）　18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中（274～291）



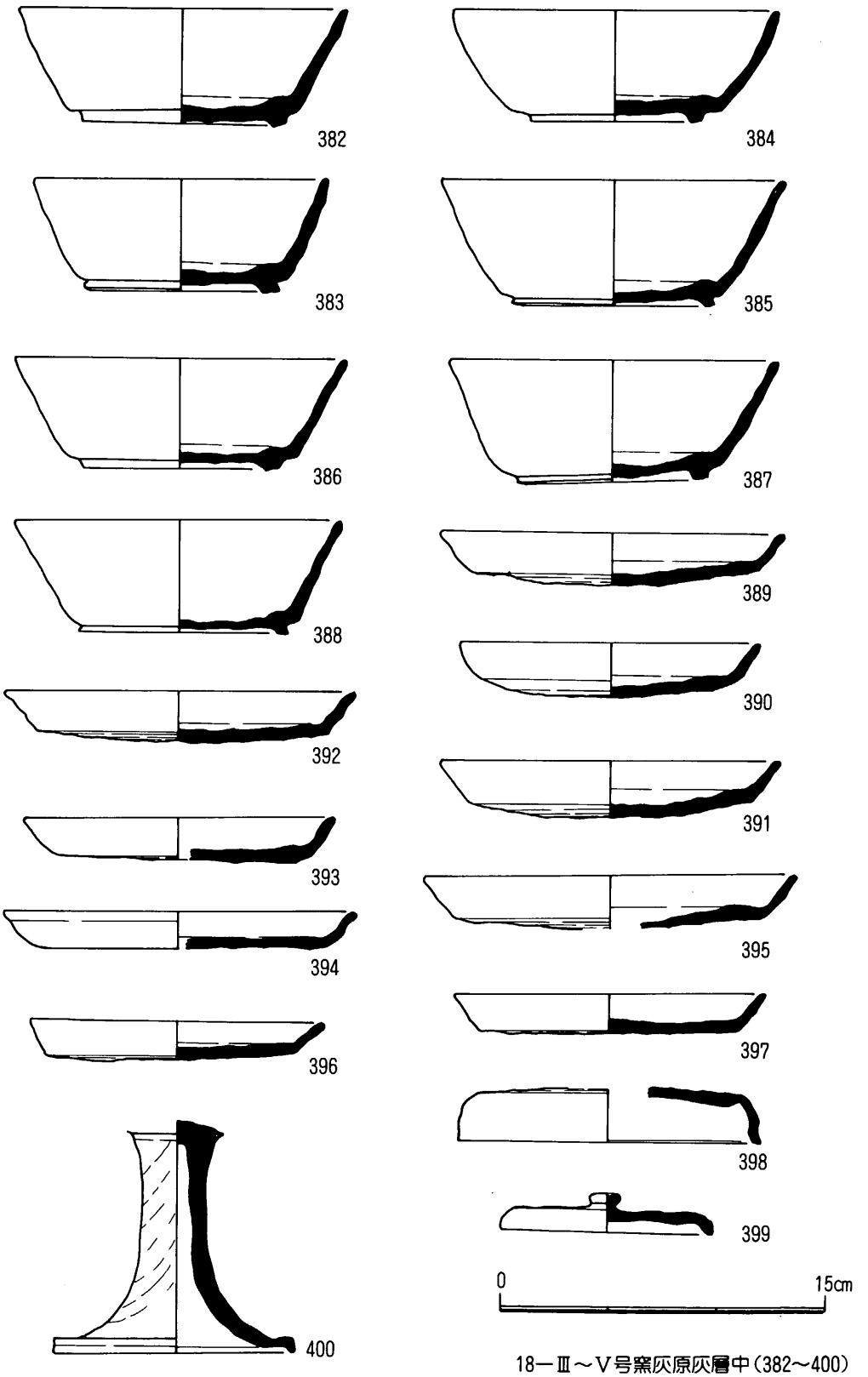
18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中（292～313）



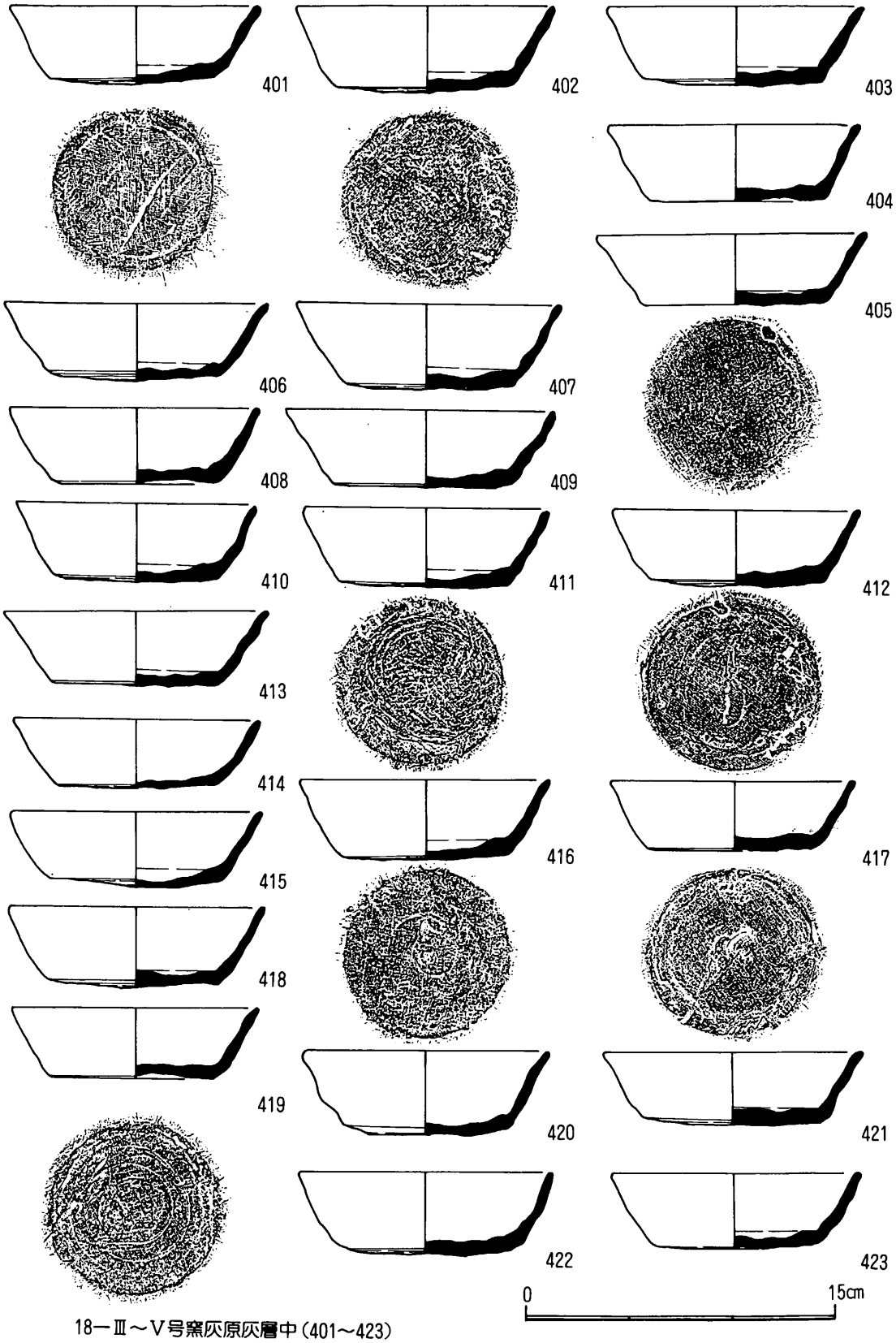
18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原採集（314～352）



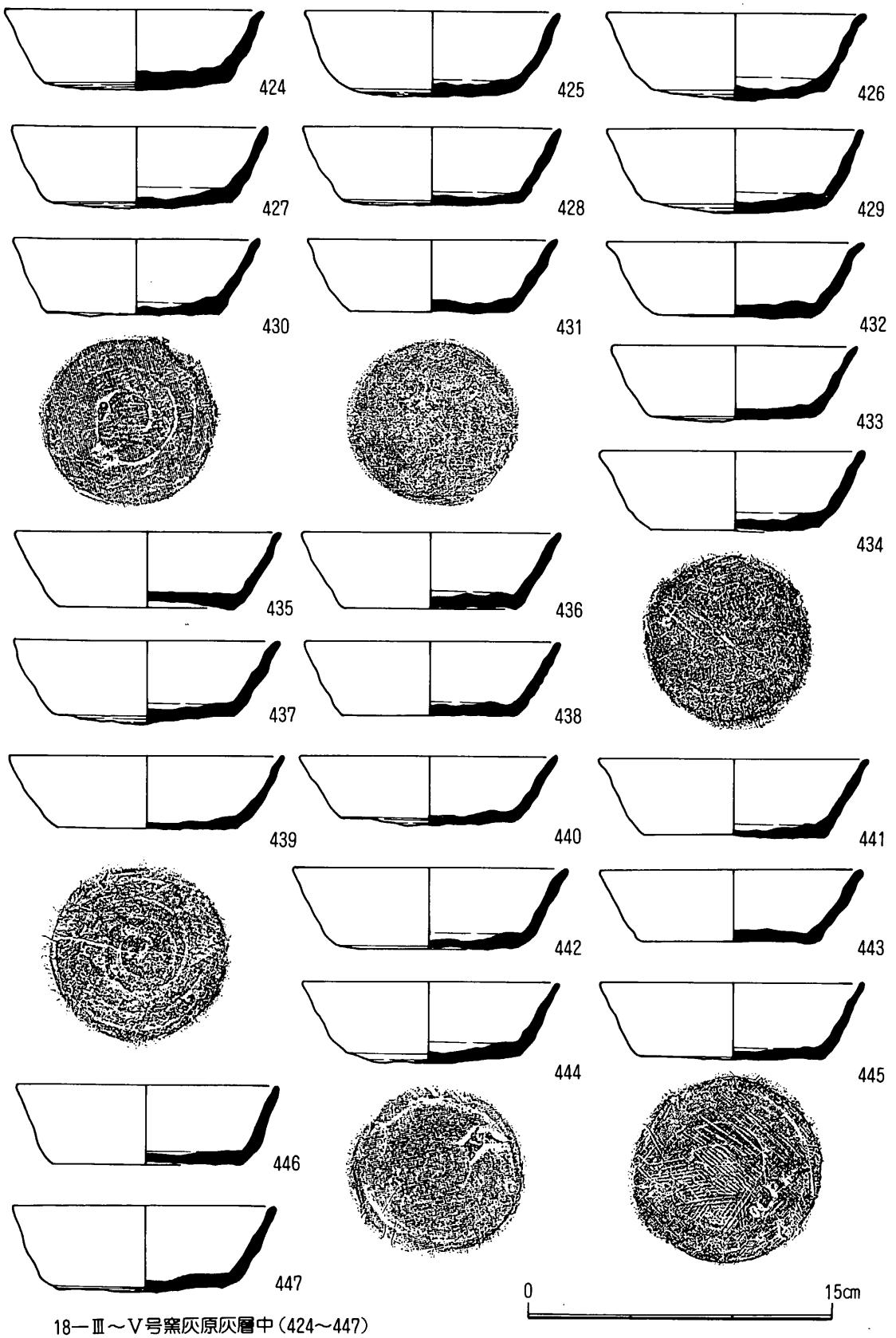
18－Ⅲ～Ⅴ号窯灰原採集（353～381）



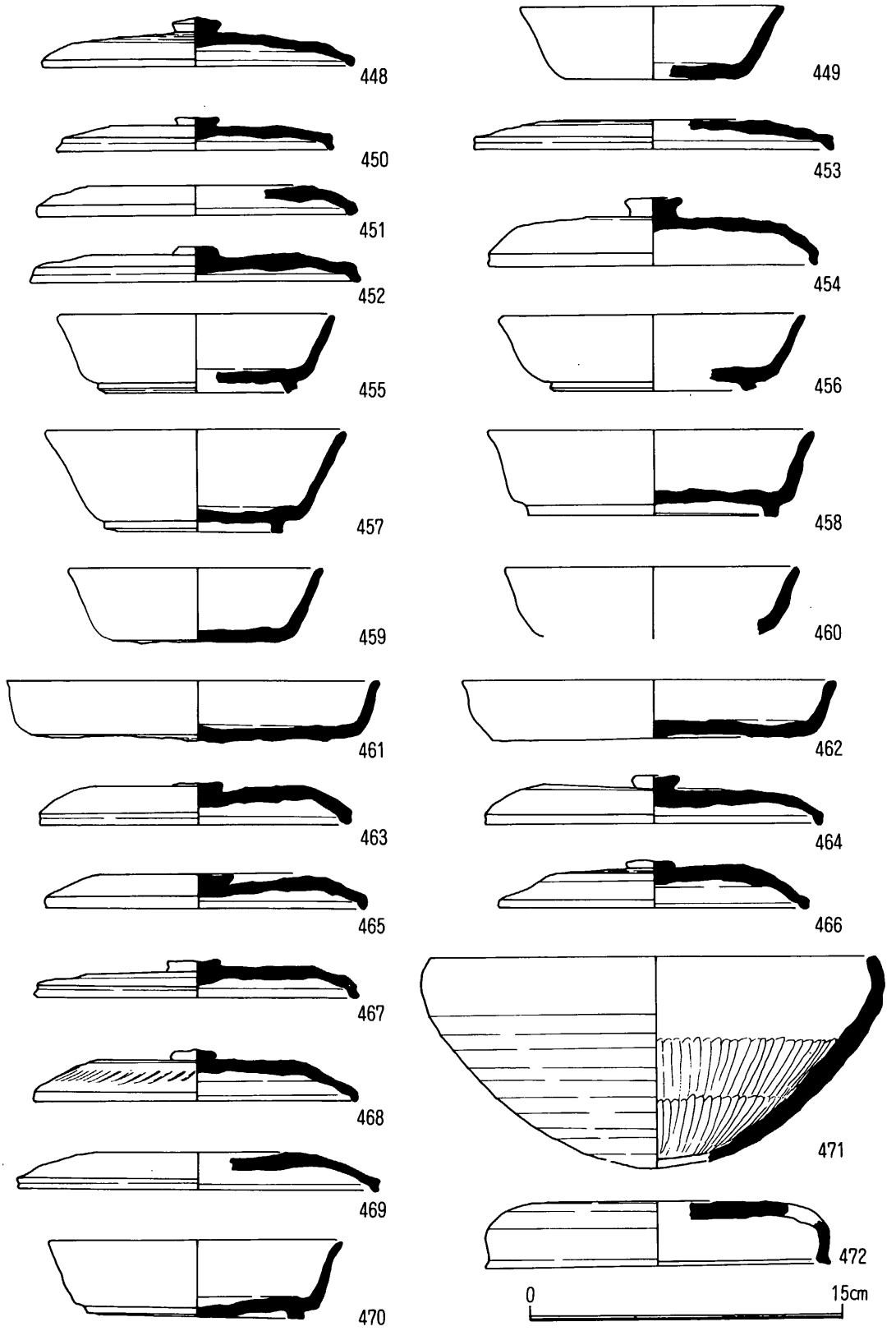
18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中（382～400）



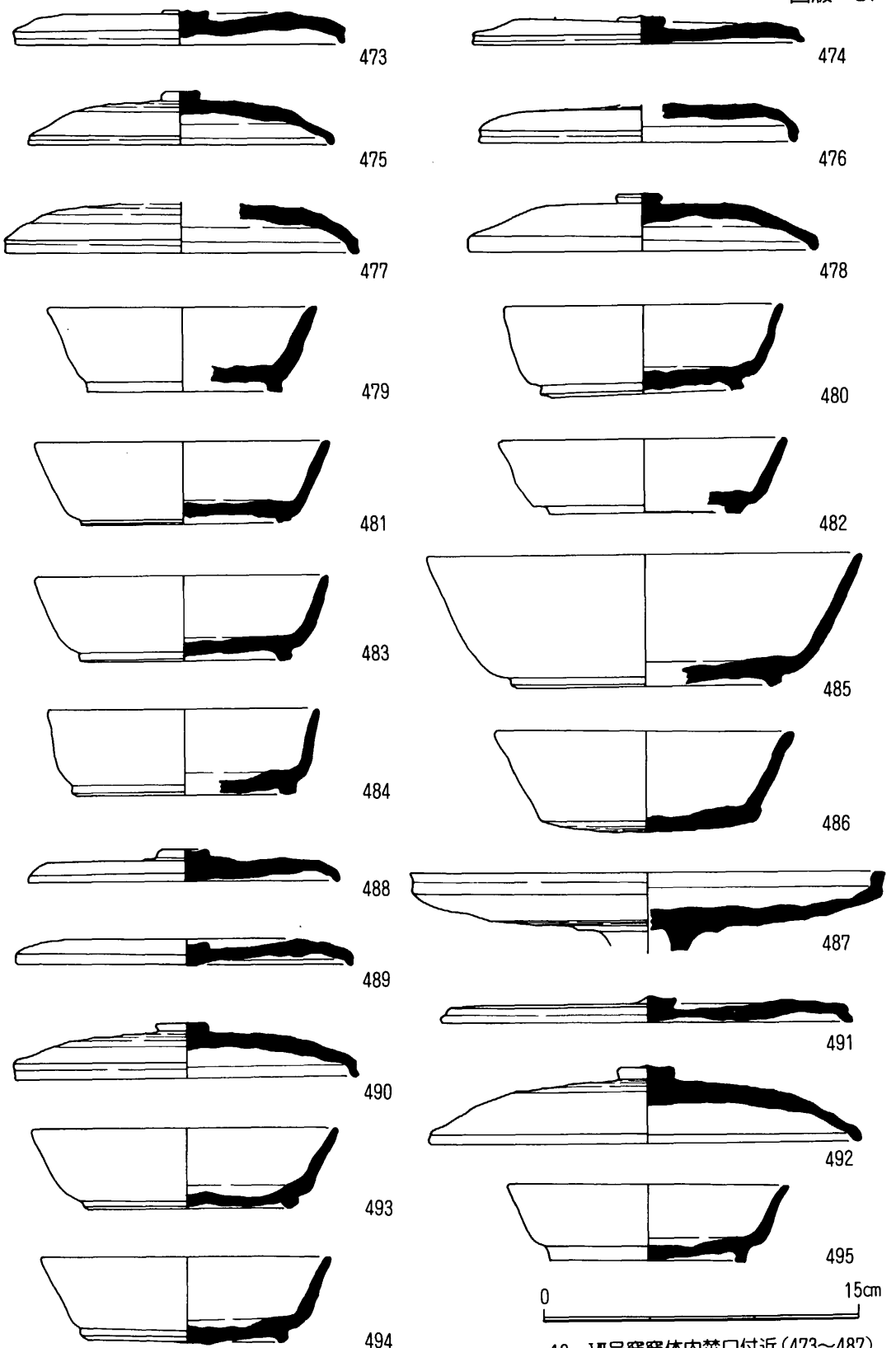
18－Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中（401～423）



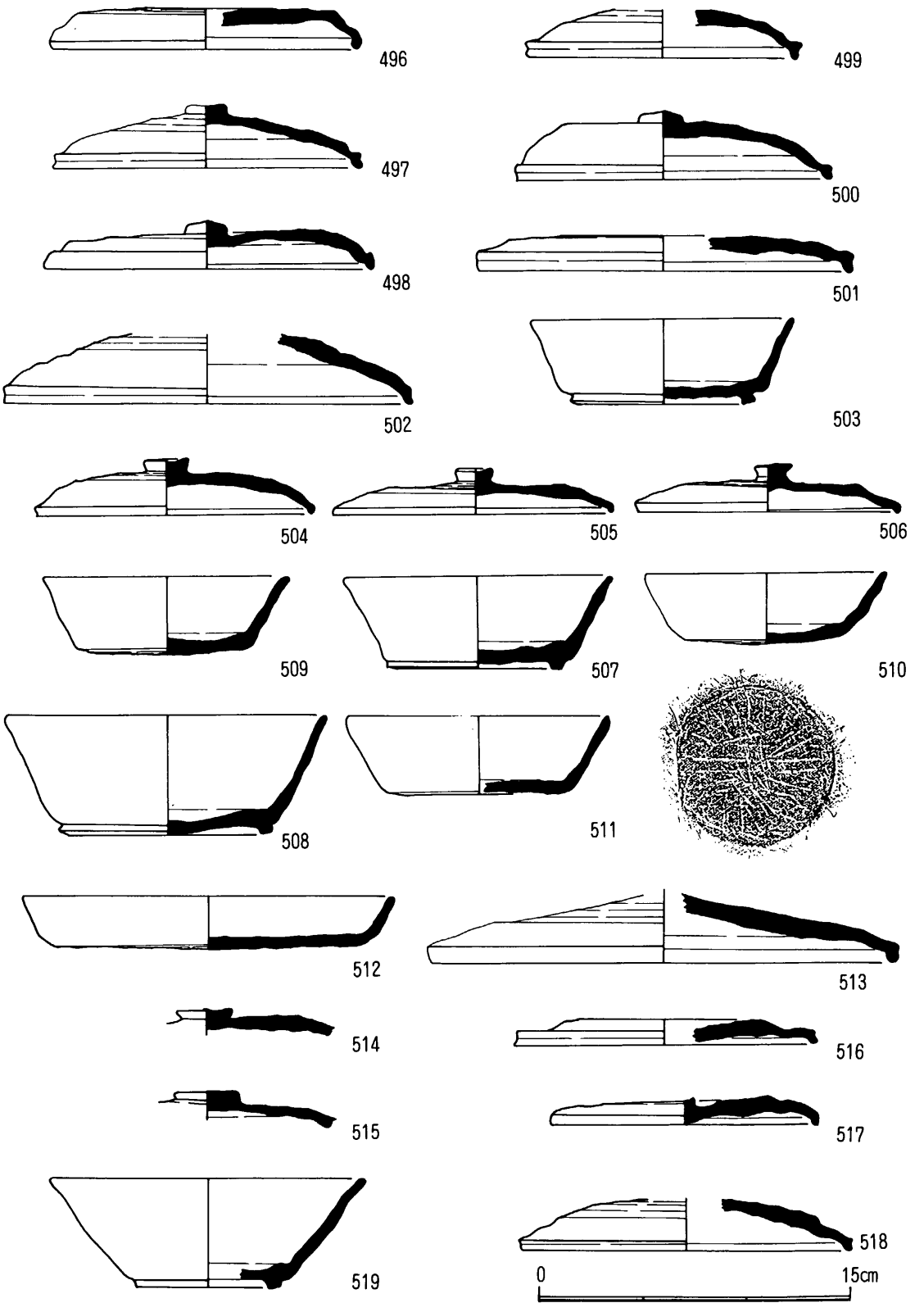
18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中（424～447）



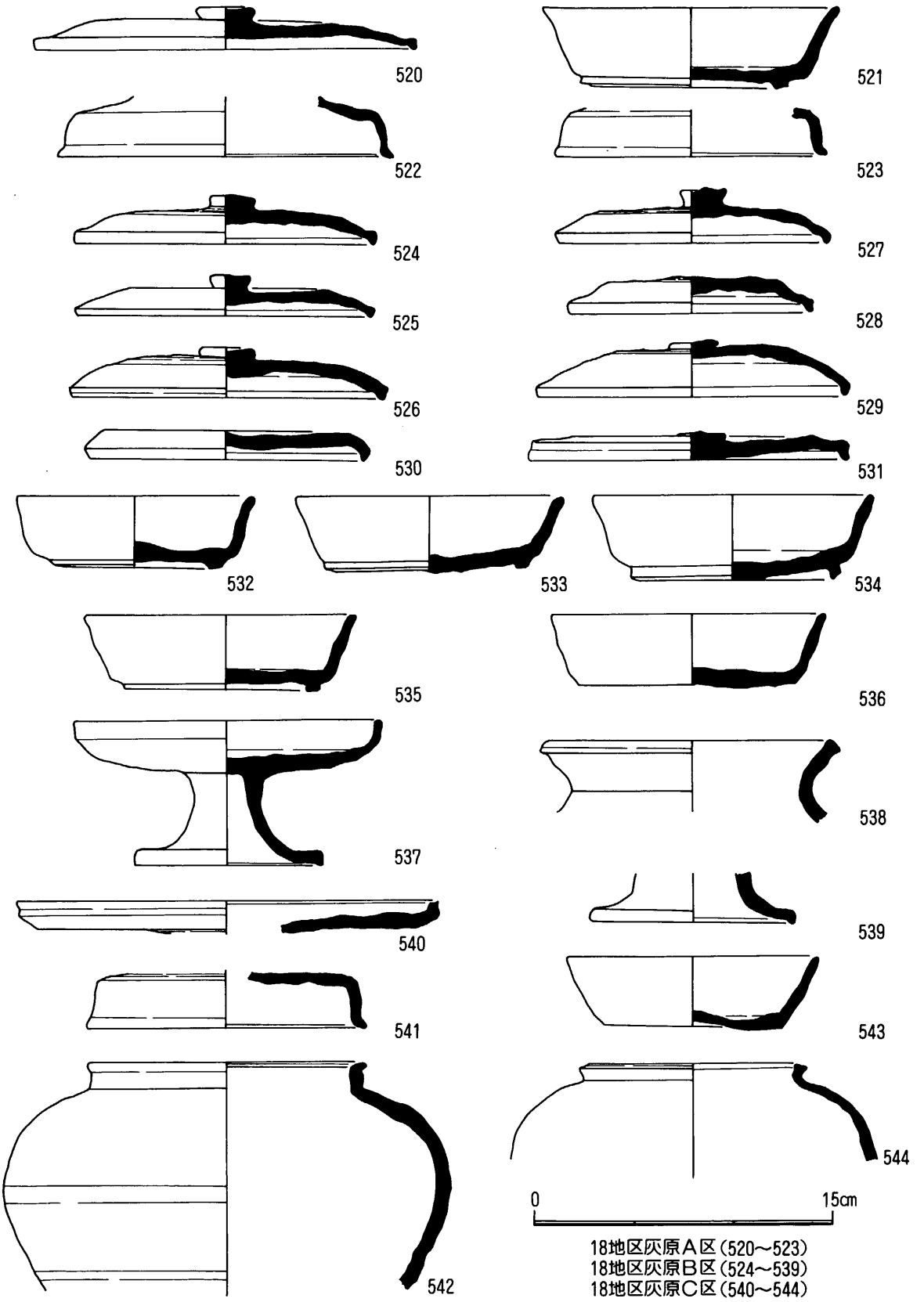
18—Ⅵ号窯窯体内最終ベース上（448～449）
18—Ⅵ号窯窯体内埋土中　（450～461）　18—Ⅵ号窯灰原灰層中（462～472）



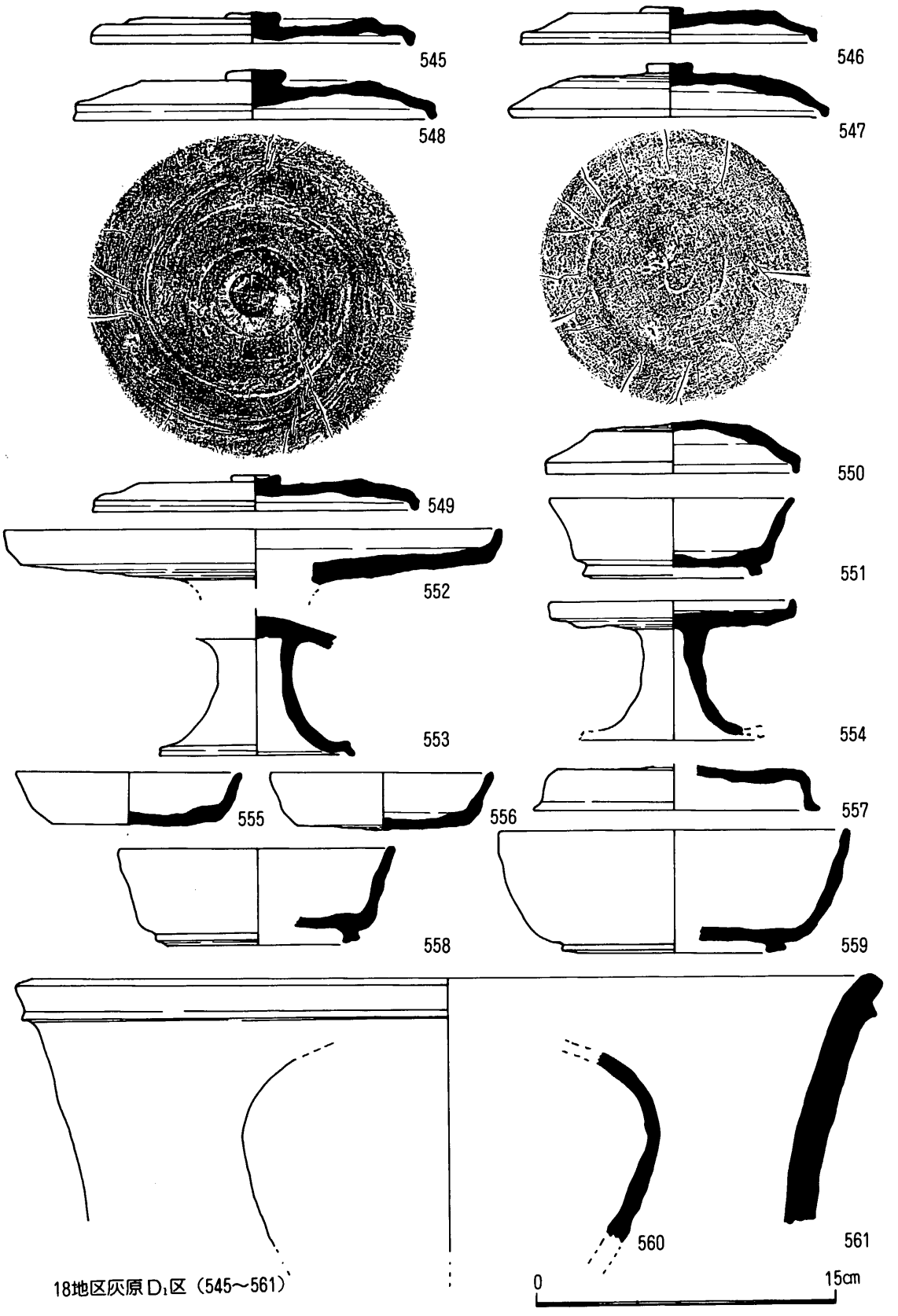
18—Ⅶ号窯窯体内焚口付近（473～487）
18—Ⅷ号窯下方灰原採集　（488～495）



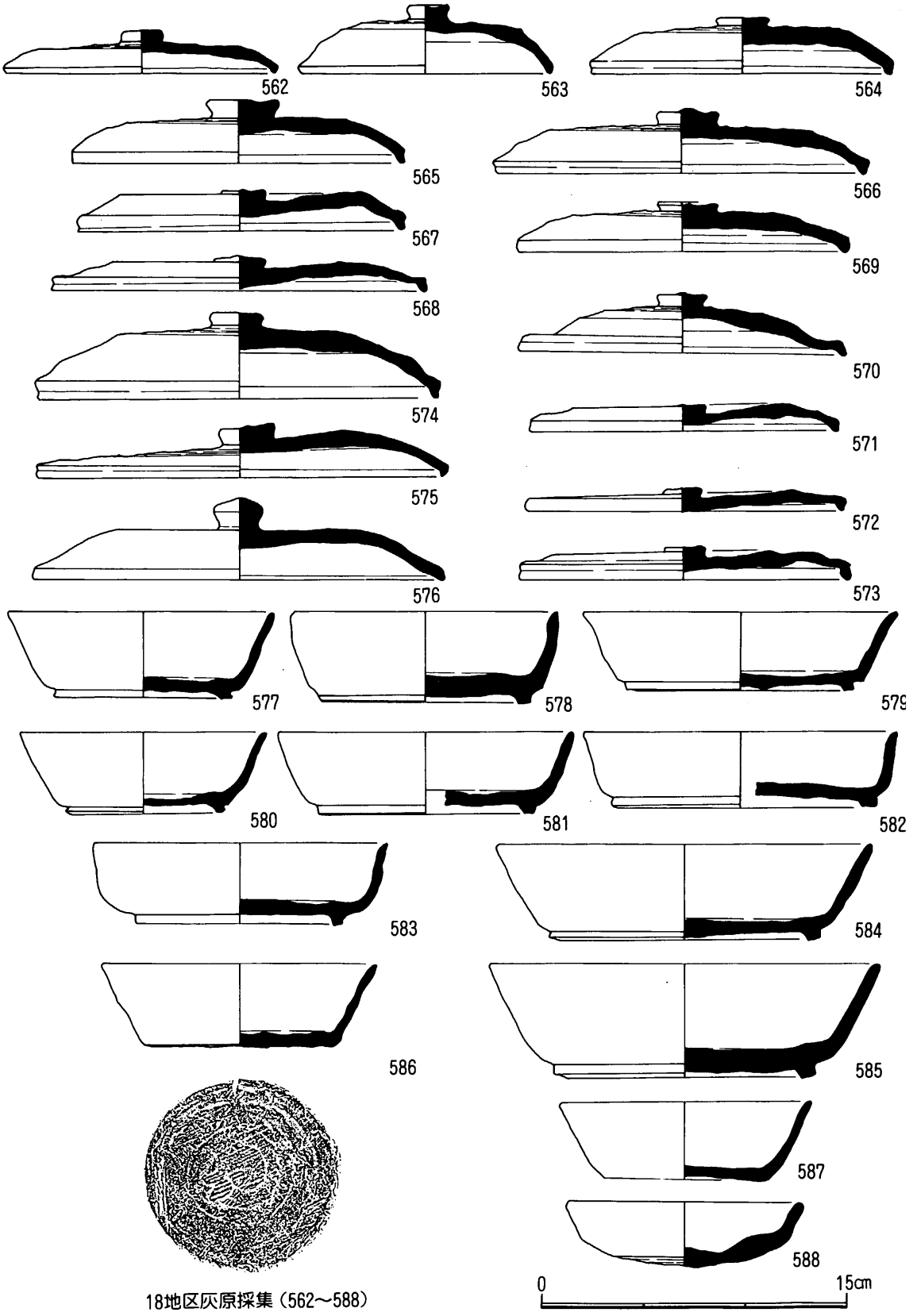
18—Ⅷ号窯窯体内最終ベース上（496～503）
18—Ⅷ号窯窯体内埋土中　（504～512）　18—Ⅷ号窯灰原灰層中（513～519）



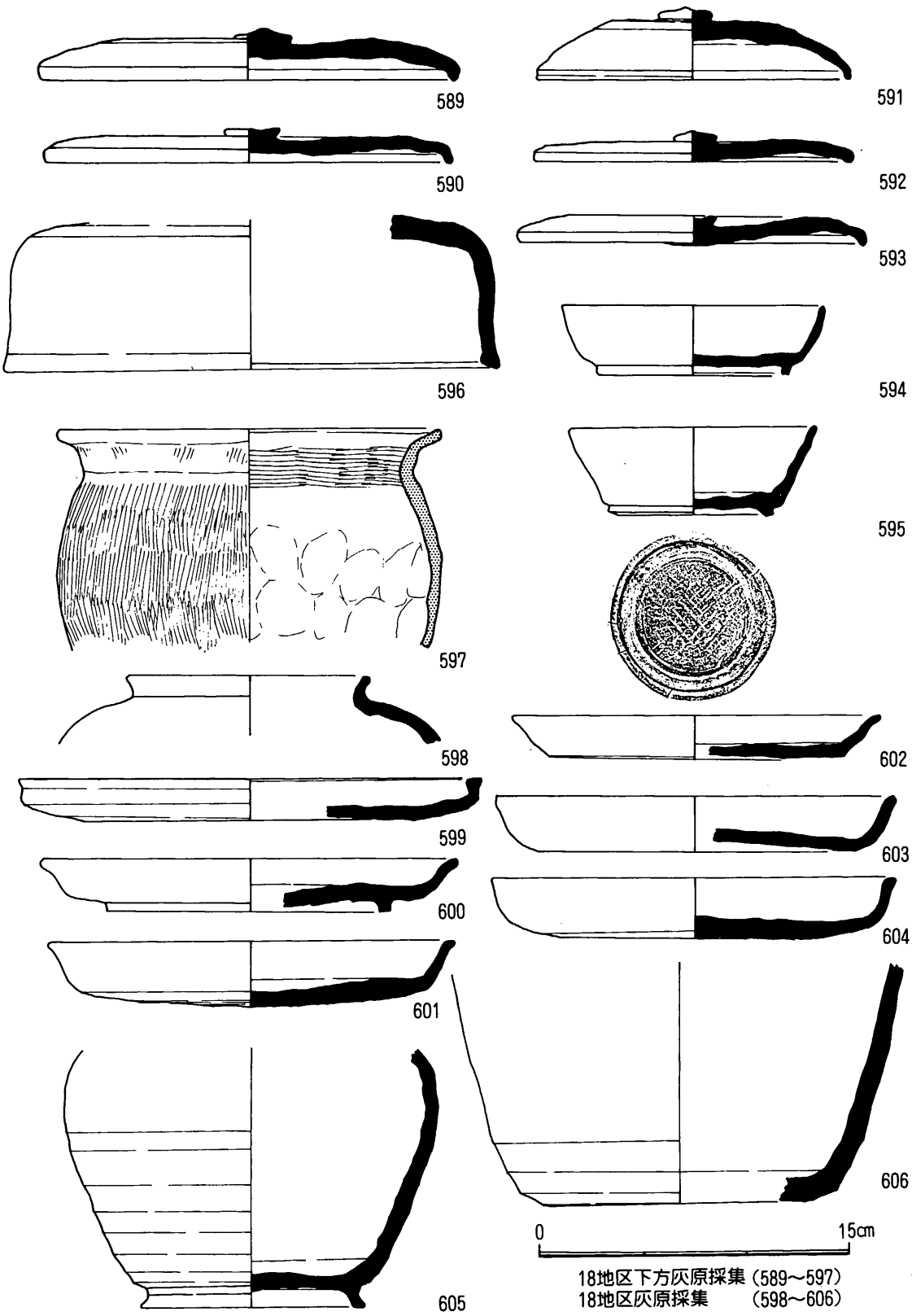
18地区灰原Ａ区（520～523）
18地区灰原Ｂ区（524～539）
18地区灰原Ｃ区（540～544）



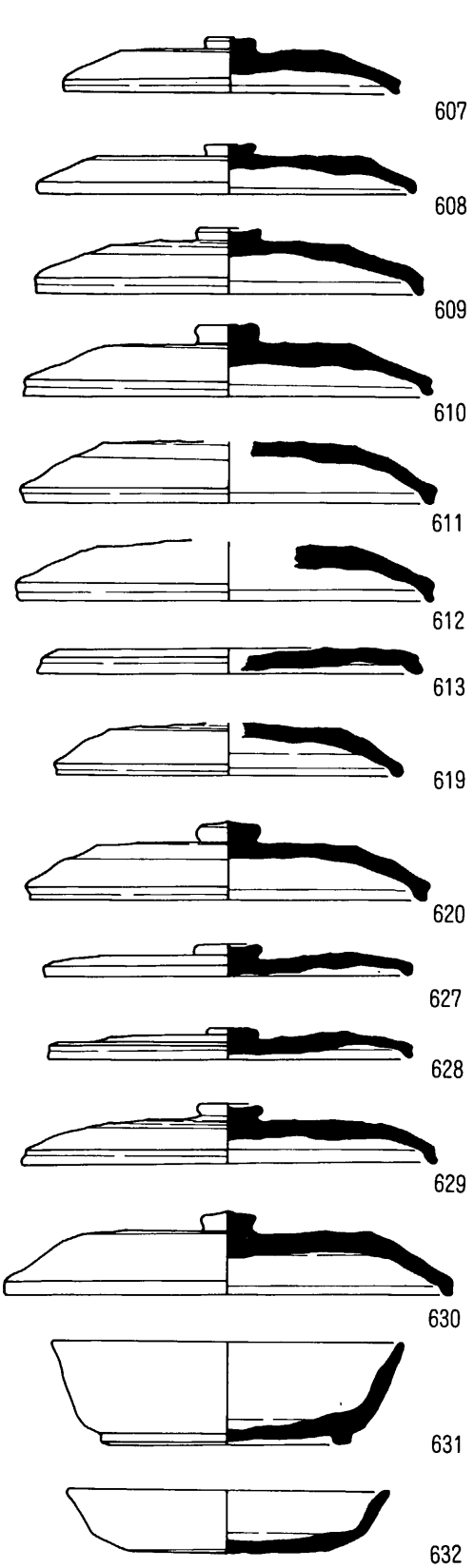
18地区灰原D₁区（545～561）

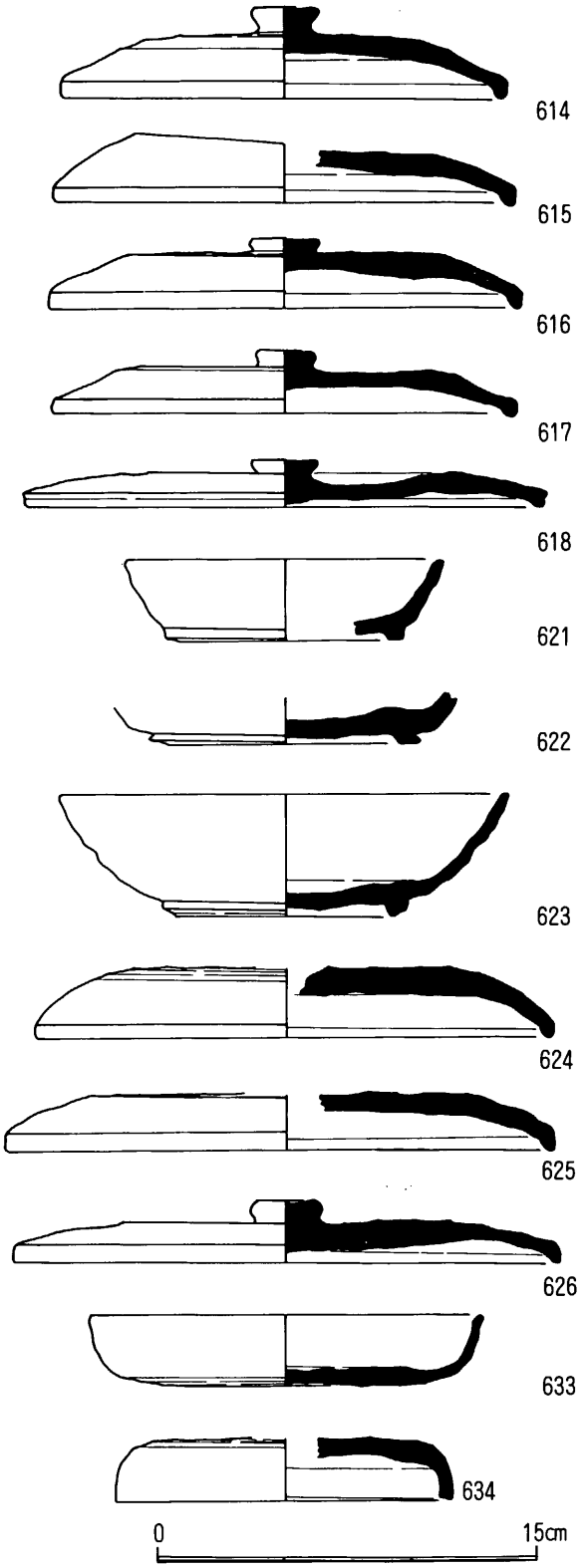


18地区灰原採集（562～588）

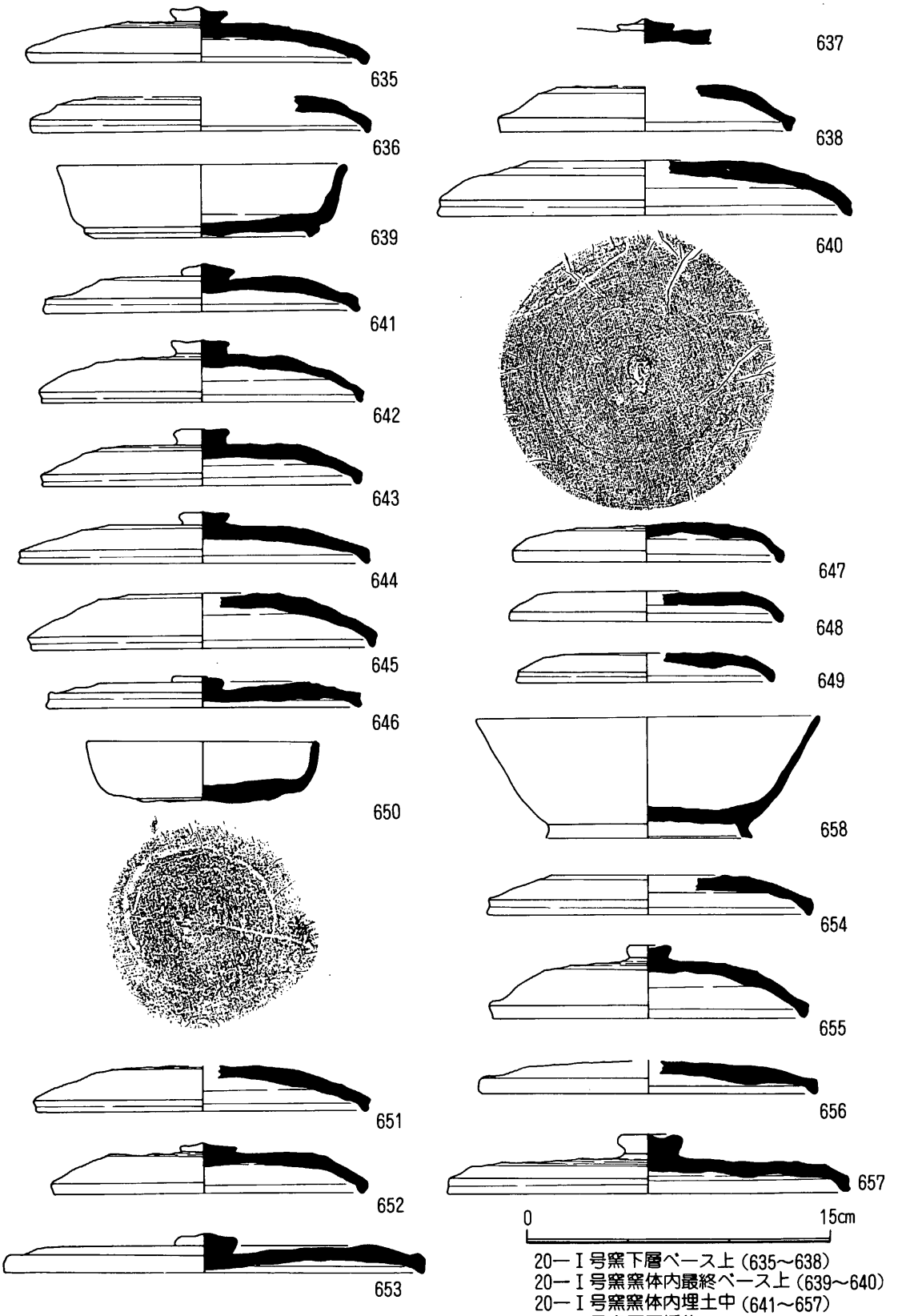


18地区下方灰原採集（589～597）
18地区灰原採集　　（598～606）

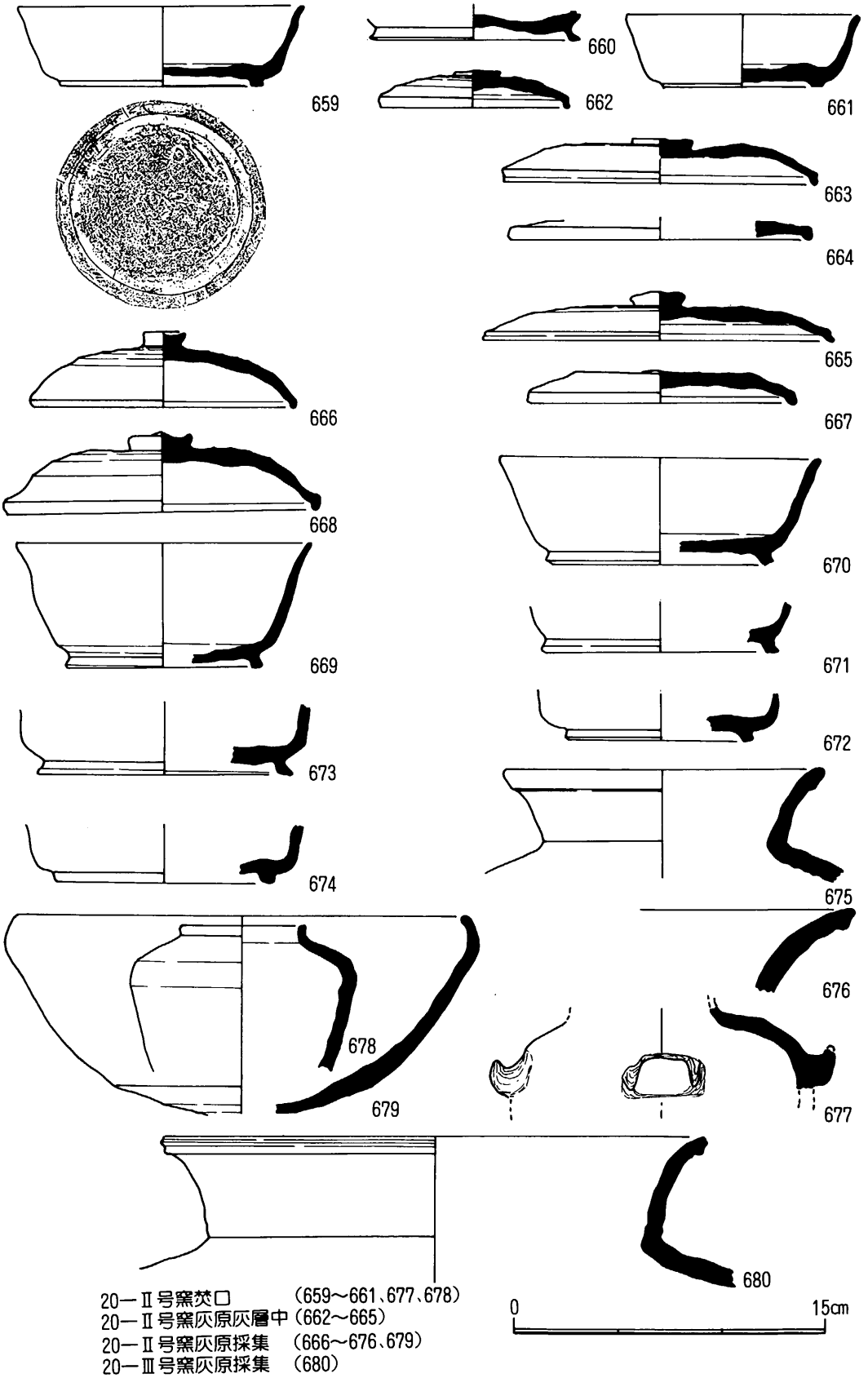




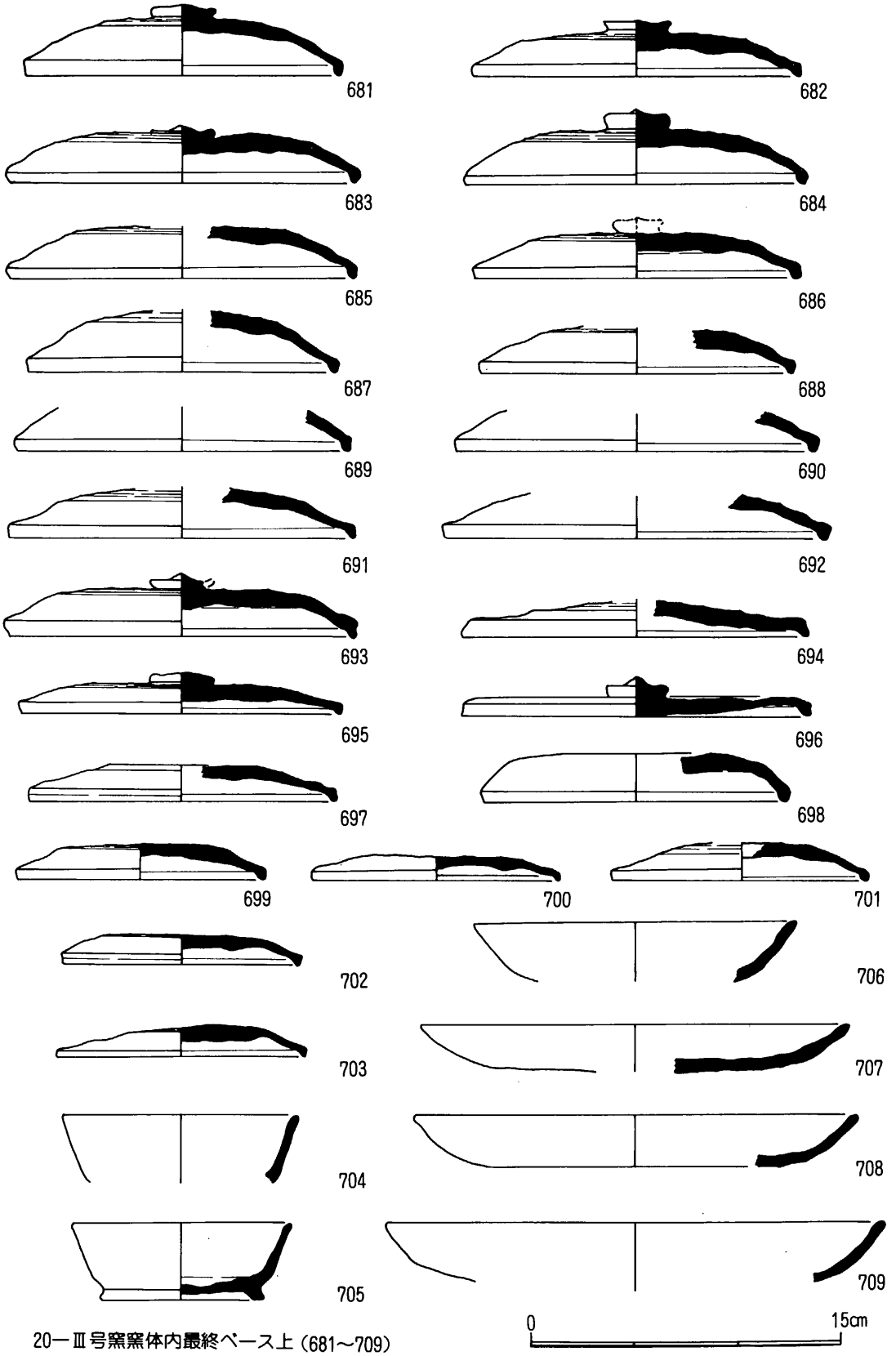
18地区灰原採集　(631)
19号窯窯体内最終ベース上　(607～623、632)
19号窯窯体内埋土中　(624～626、629、630、633、634)
19号窯灰原採集　(627、628)(631のみ18号下方灰原)



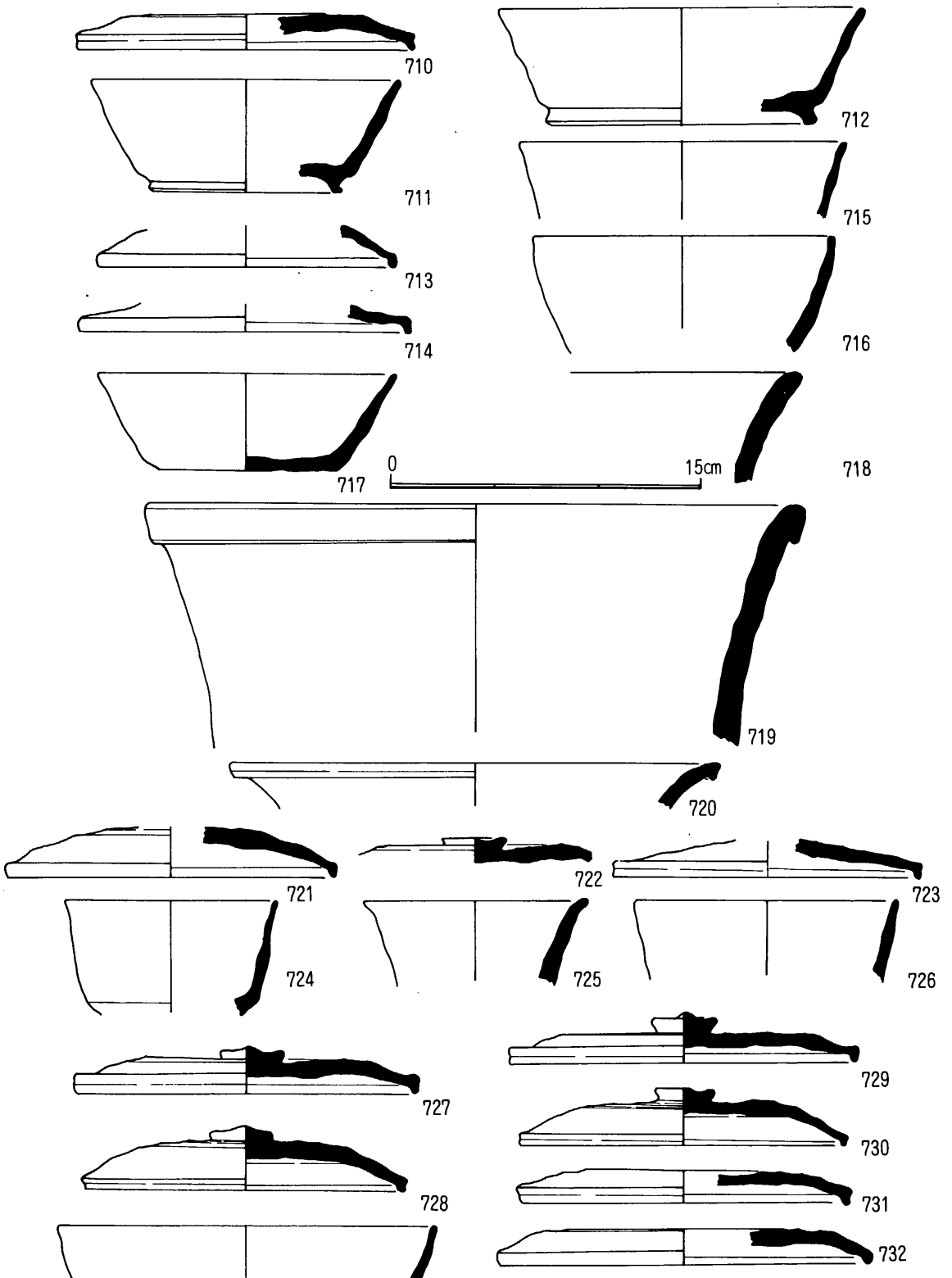
20—Ⅰ号窯下層ベース上（635～638）
20—Ⅰ号窯窯体内最終ベース上（639～640）
20—Ⅰ号窯窯体内埋土中（641～657）
20—Ⅰ号窯灰原採集　（658）



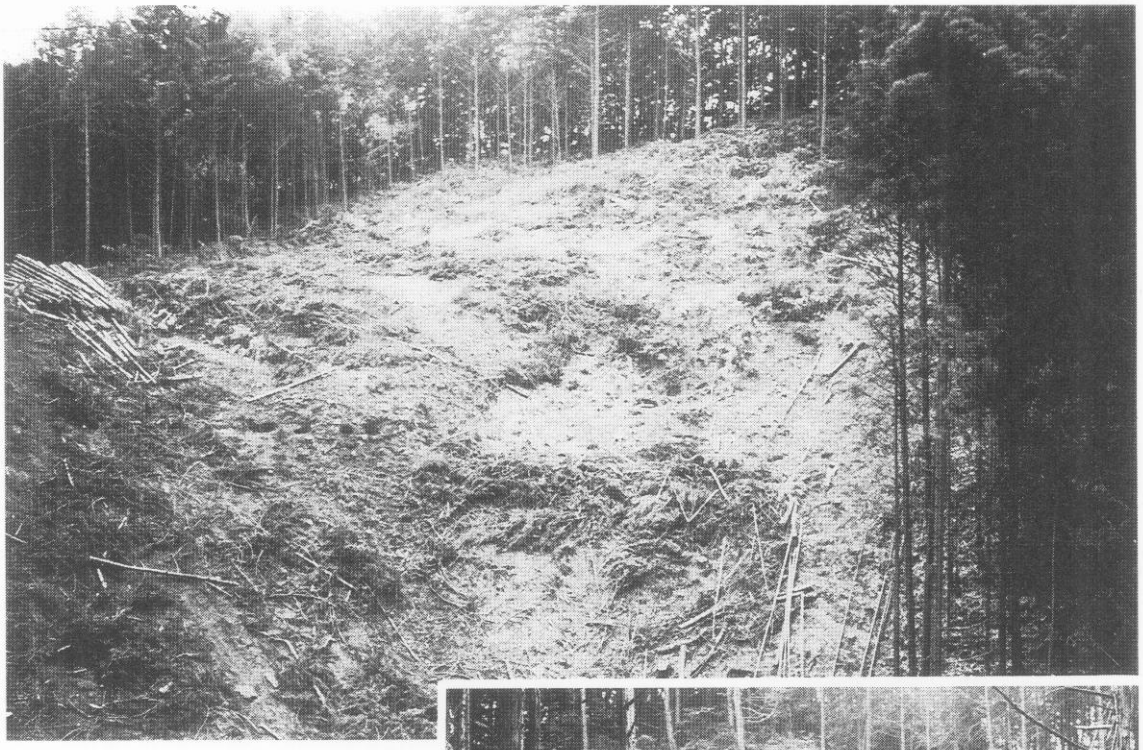
20—Ⅱ号窯焚口　(659～661、677、678)
20—Ⅱ号窯灰原灰層中　(662～665)
20—Ⅱ号窯灰原採集　(666～676、679)
20—Ⅲ号窯灰原採集　(680)



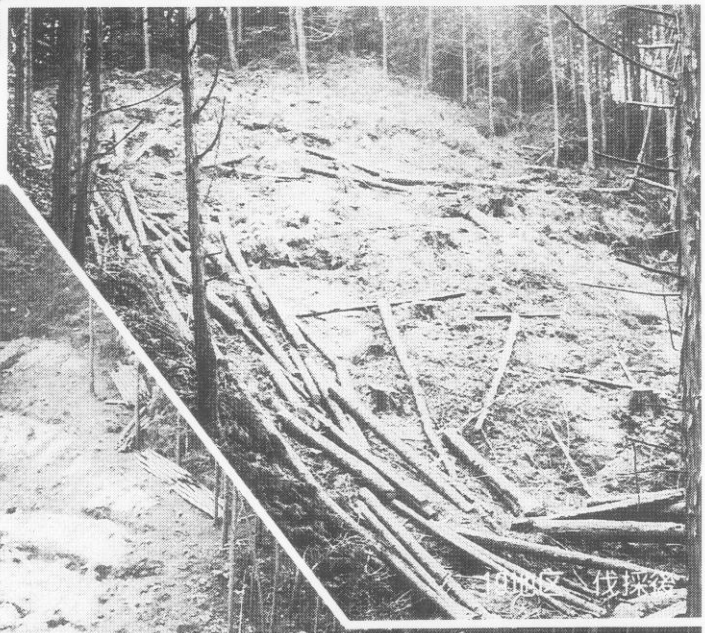
20—Ⅲ号窯窯体内最終ベース上（681～709）



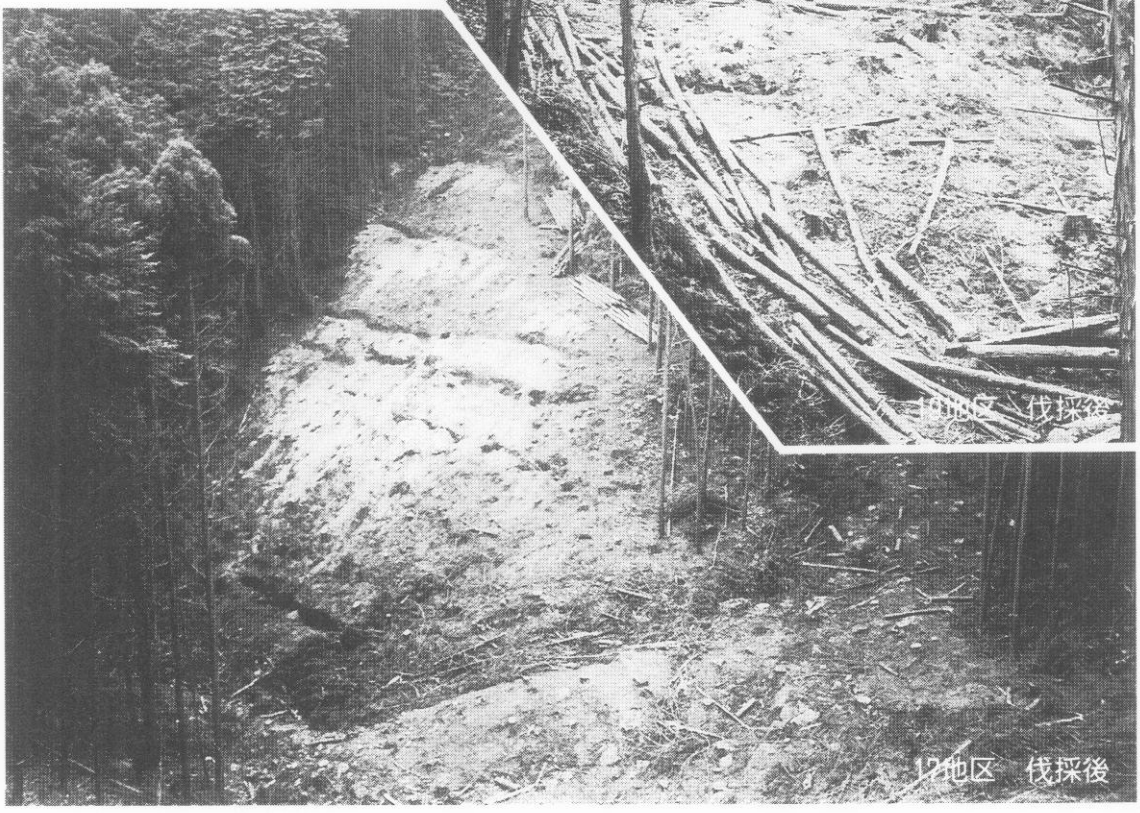
20—Ⅲ号窯 1 次床面　(710～719)
20—Ⅲ号窯 2 次床面　(720)
20—Ⅲ号窯窯体内舟底状ピット(第 7・8 層)　(721～726)
20—Ⅲ号窯窯体内埋土中　(728)
20—Ⅲ号窯灰原灰層中　(727、729～733)



18地区　伐採後

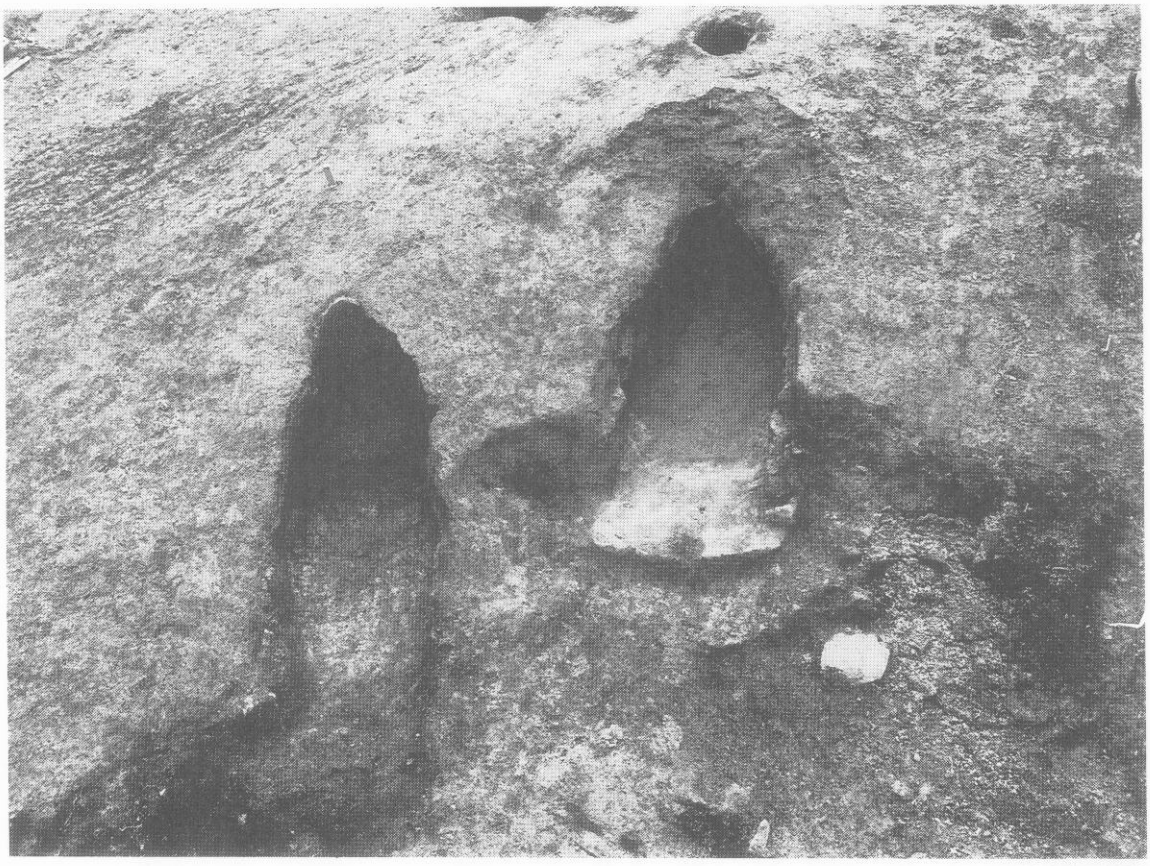


19地区　伐採後

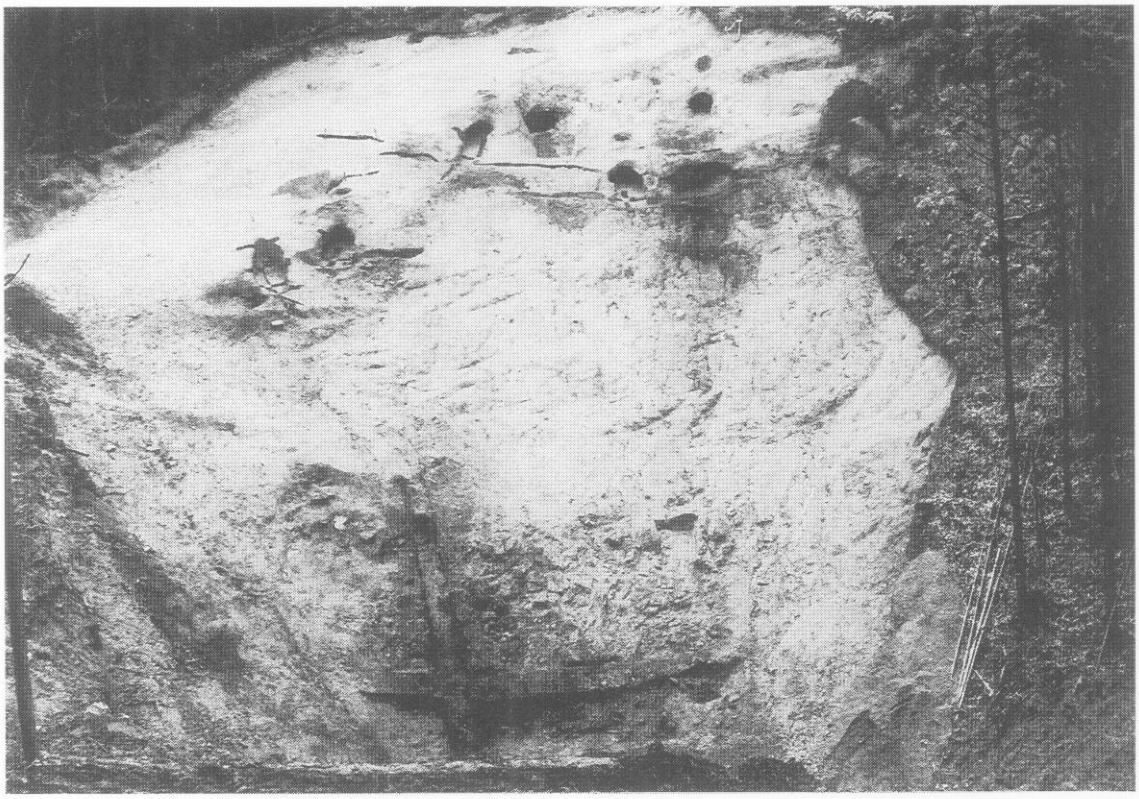


12地区　伐採後





18－Ⅵ．Ⅶ号窯遠景



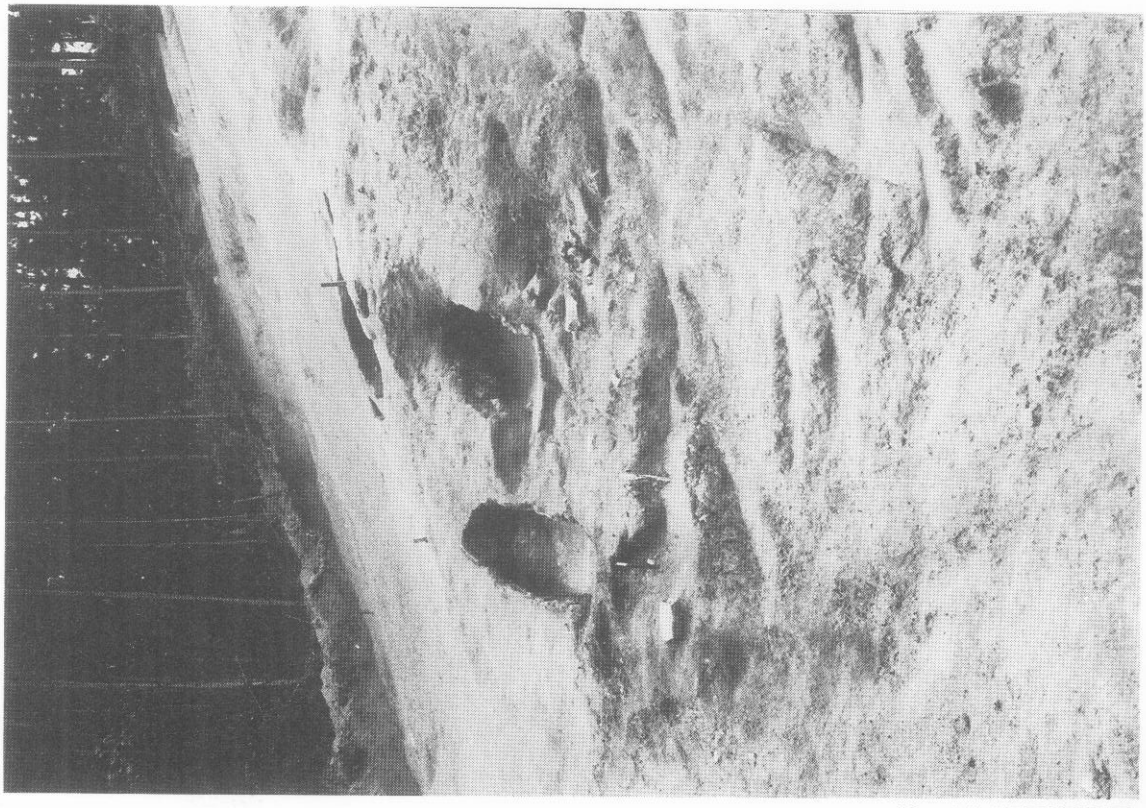
18地区遠景



18地区下方灰原



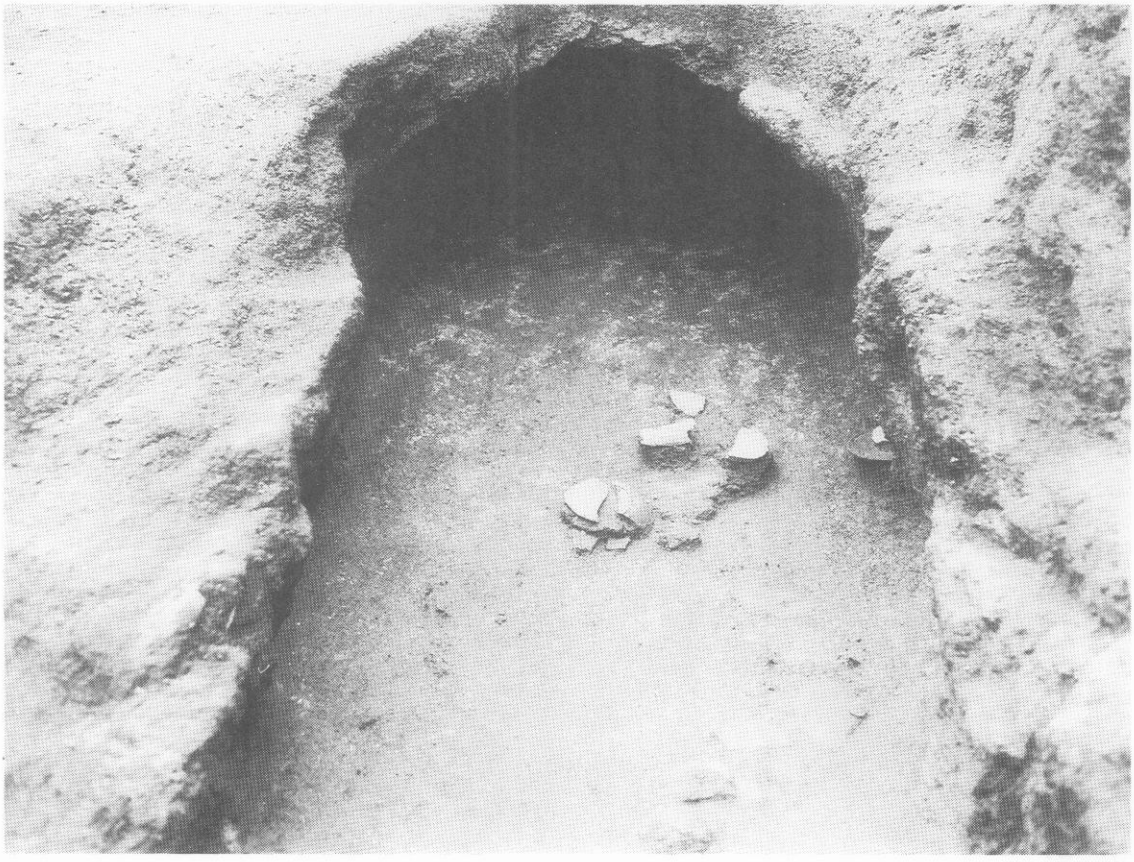
18－Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ.Ⅴ号窯遠景



18－Ⅵ.Ⅶ号窯遠景



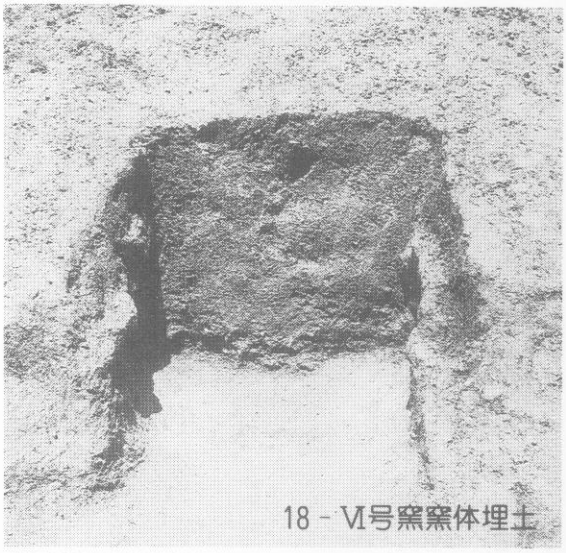
18地区遠景

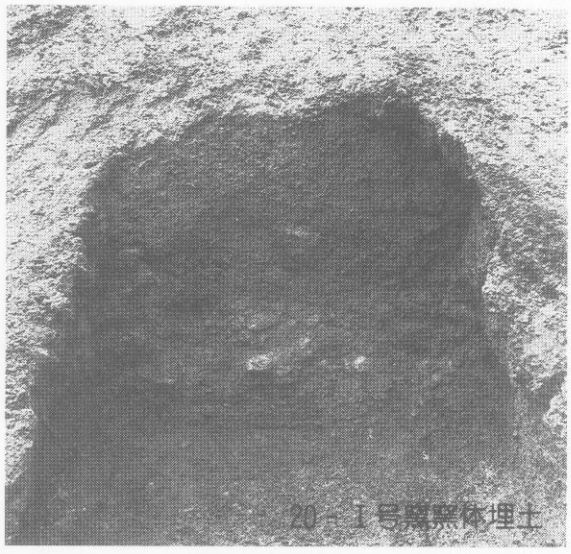


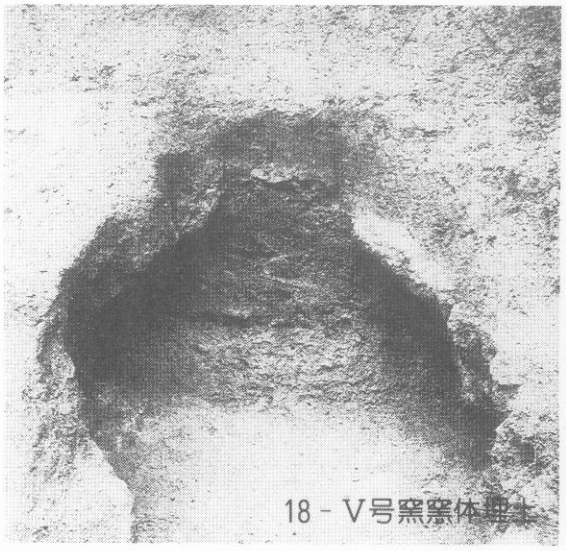
18-Ⅴ号窯


18－Ⅷ号窯窯体埋土


18－Ⅱ号窯窯体埋土


18－Ⅵ号窯窯体埋土

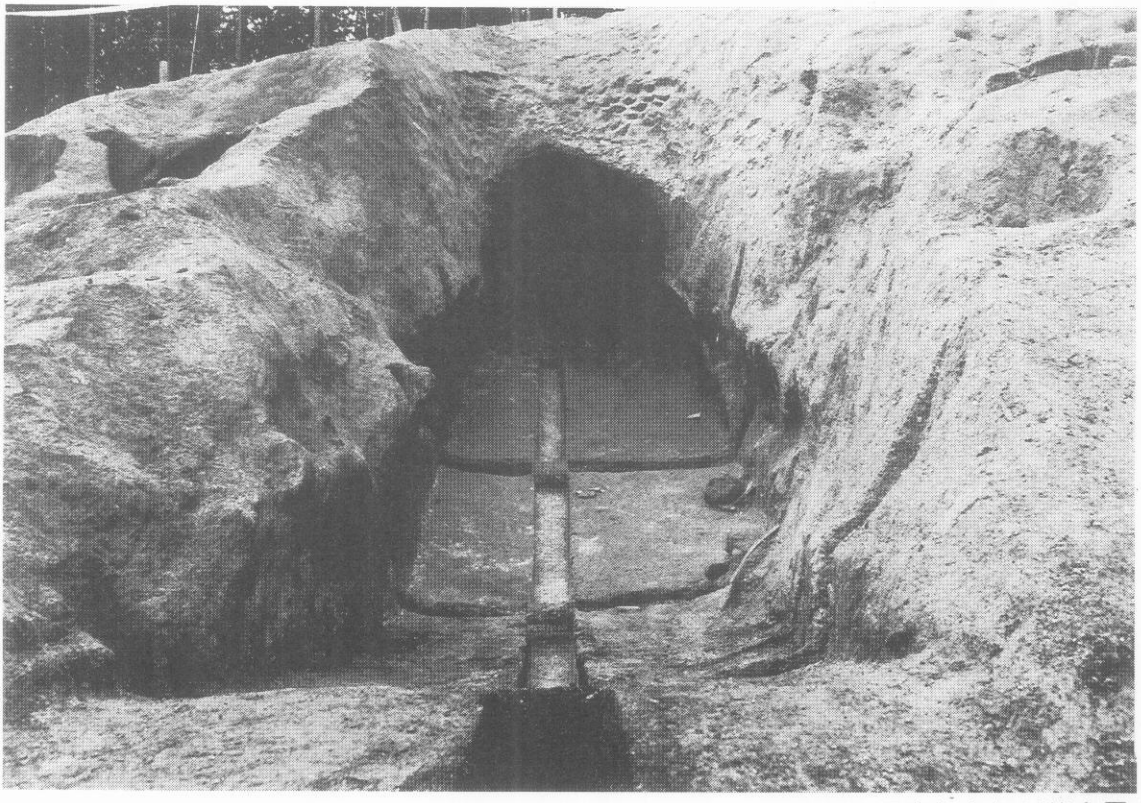

20－Ⅰ号窯窯体埋土


18－Ⅴ号窯窯体埋土


20－Ⅱ号窯窯体埋土



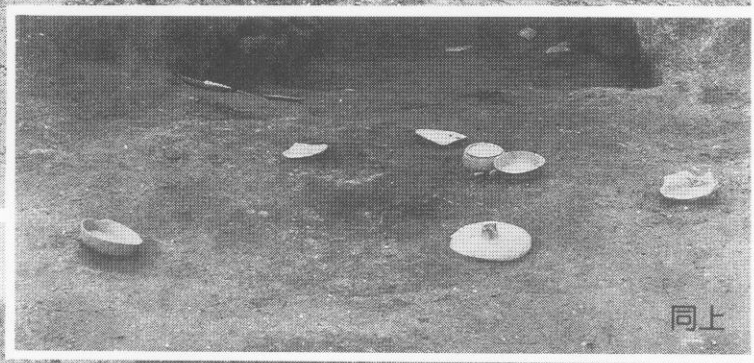
18－Ⅰ号窯全景



18－Ⅰ号窯たちわり後全景



18－Ⅰ号窯窯体上遺構



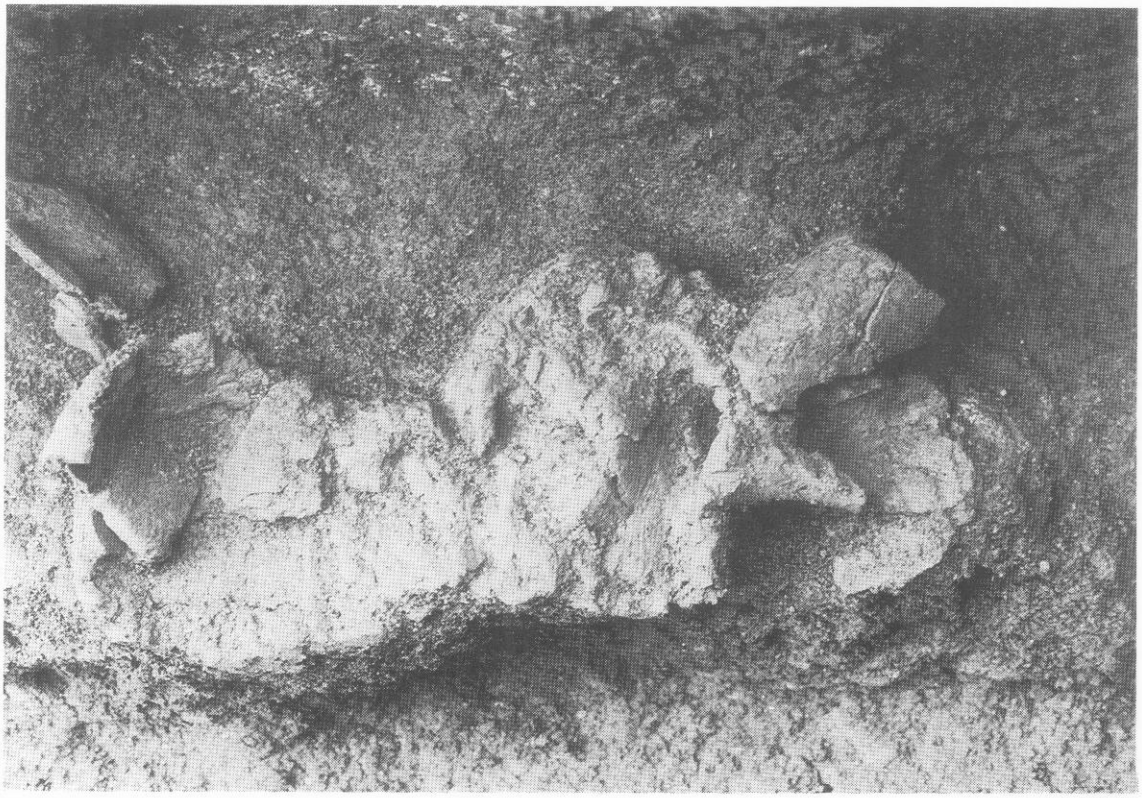
同上



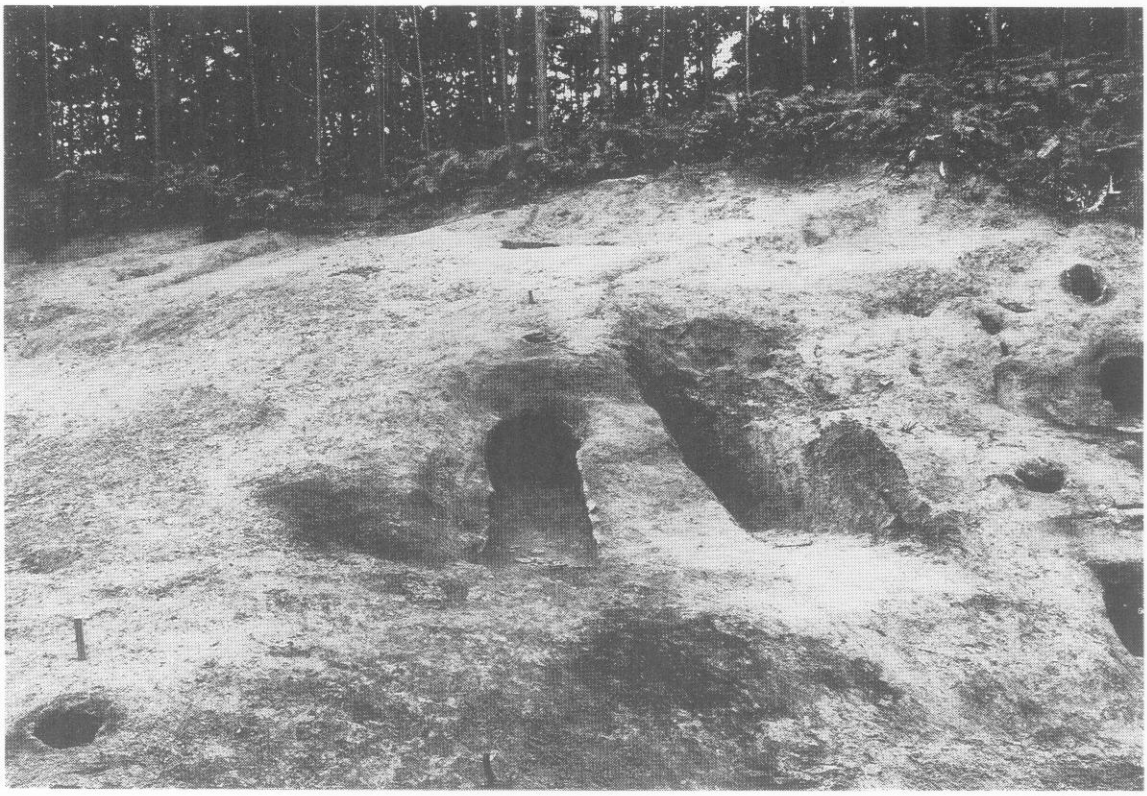
同上



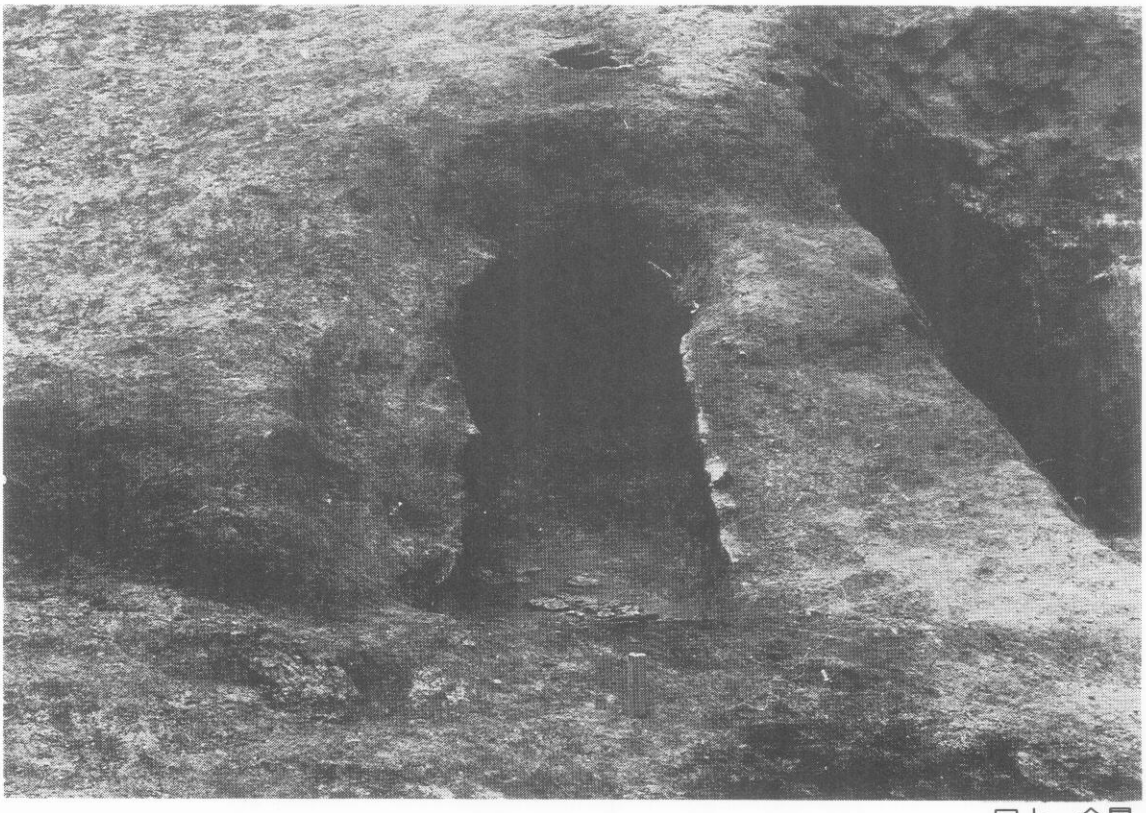
18-Ⅰ号窯窯体上遺構B-B′ライン断面



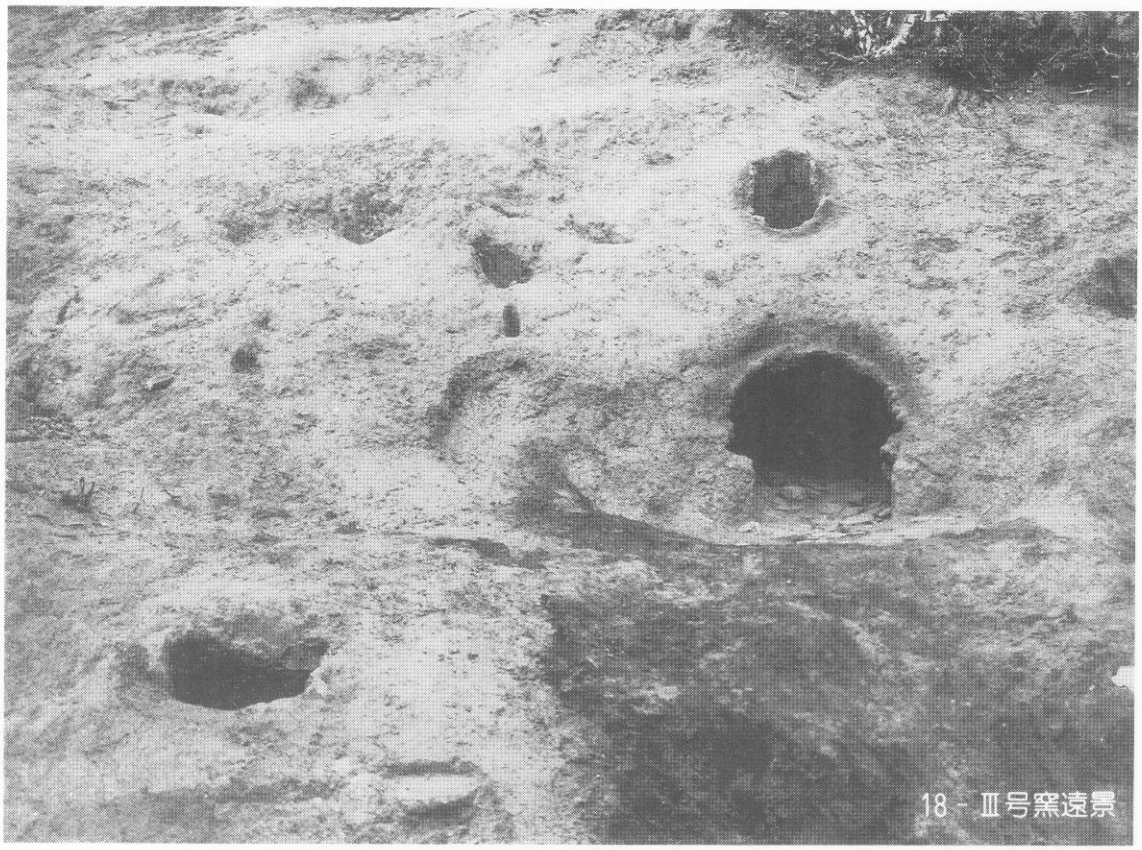
同上　未焼成土器群



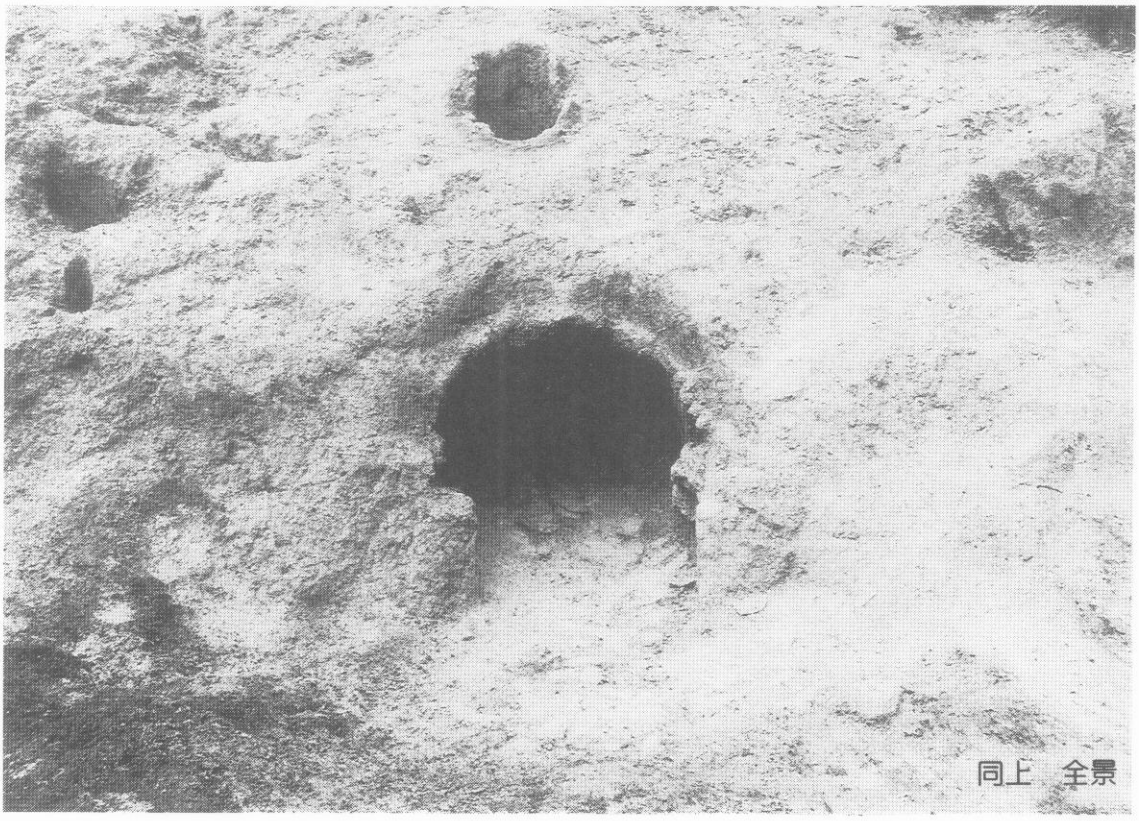
18 - Ⅱ号窯遠景



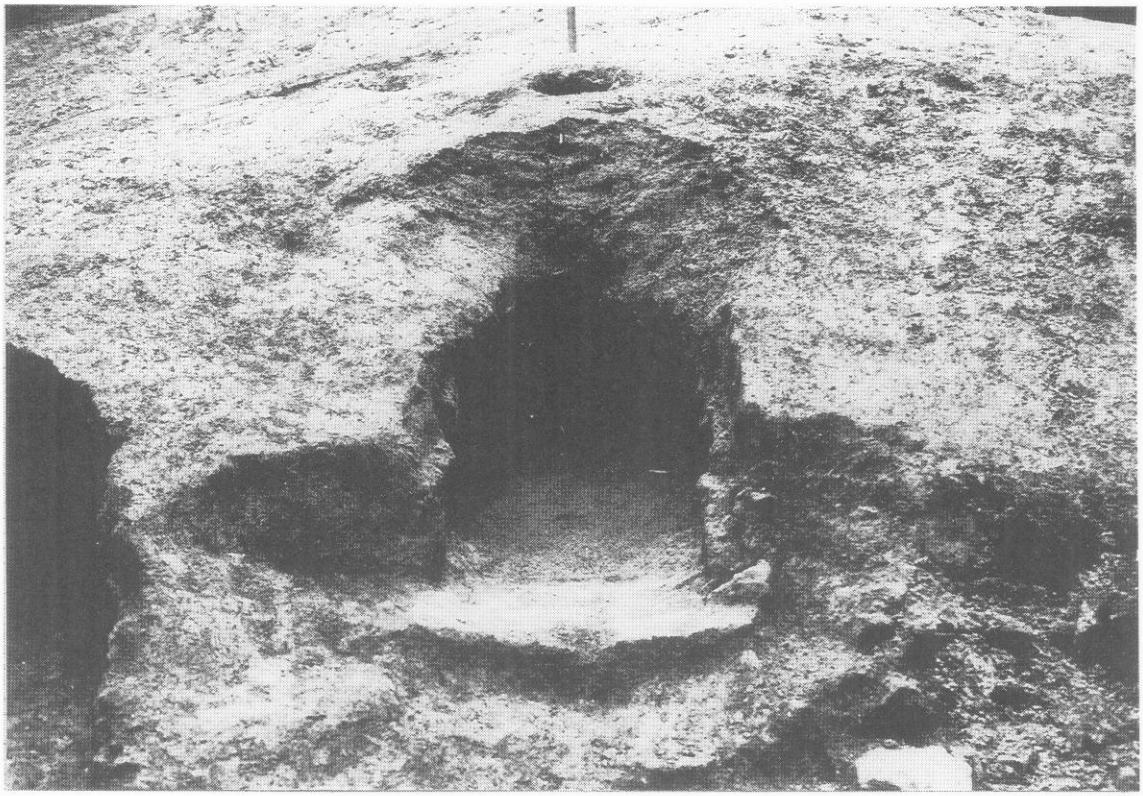
同上　全景



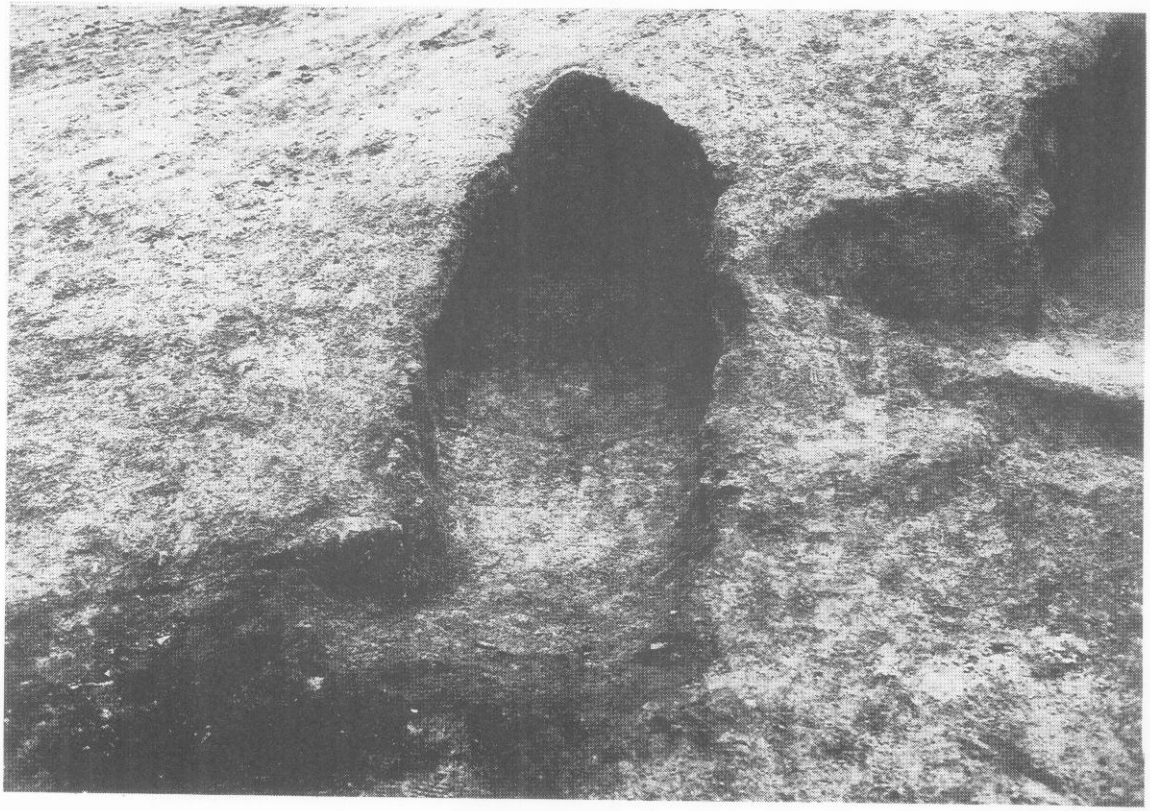
18 - Ⅲ号窯遠景



同上　全景



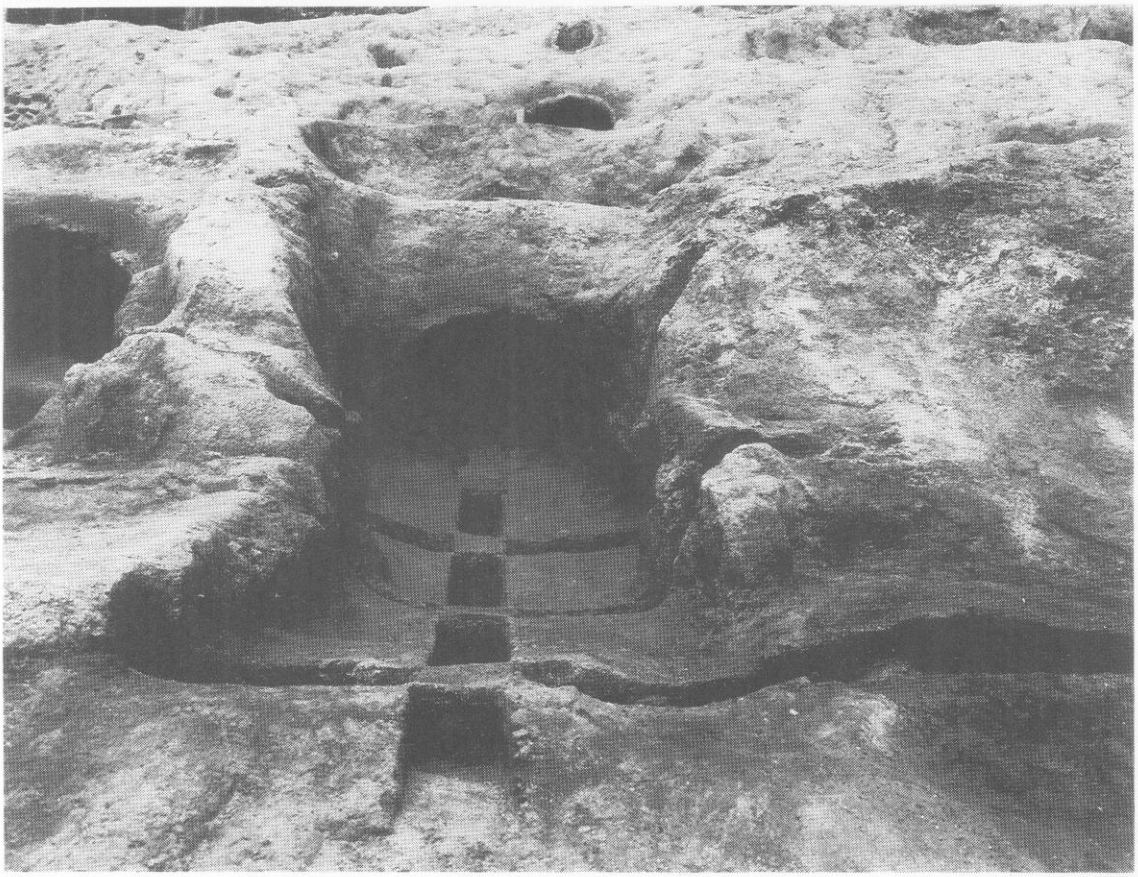
18 - Ⅵ号窯全景



18 - Ⅶ号窯全景



18 - Ⅷ号窯全景



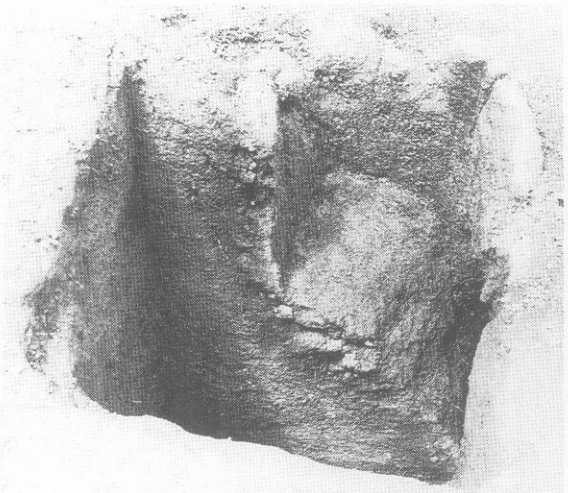
18 - Ⅷ号窯たちわり後全景



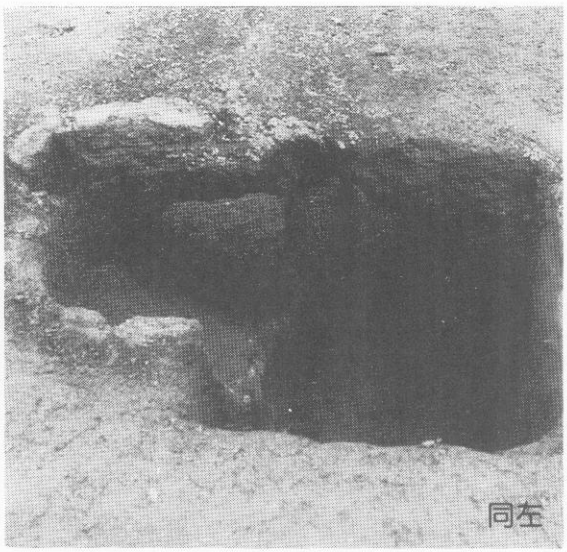
18 - Ⅷ号窯焚口部側景



同上焚口部下層ピット



18－Ⅱ号窯煙道たちわり



同左



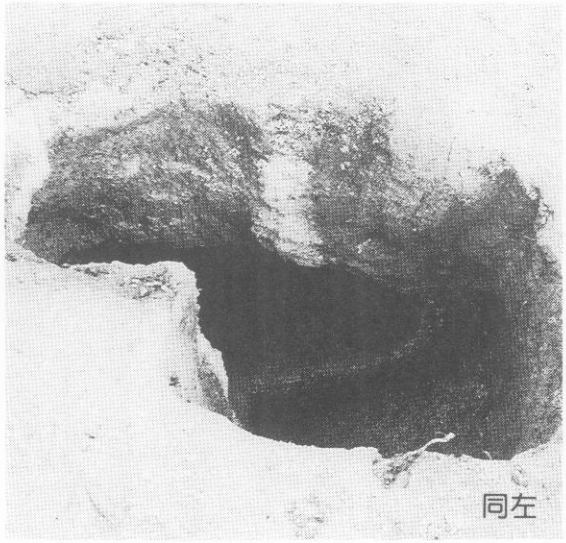
18－Ⅵ号窯煙道たちわり



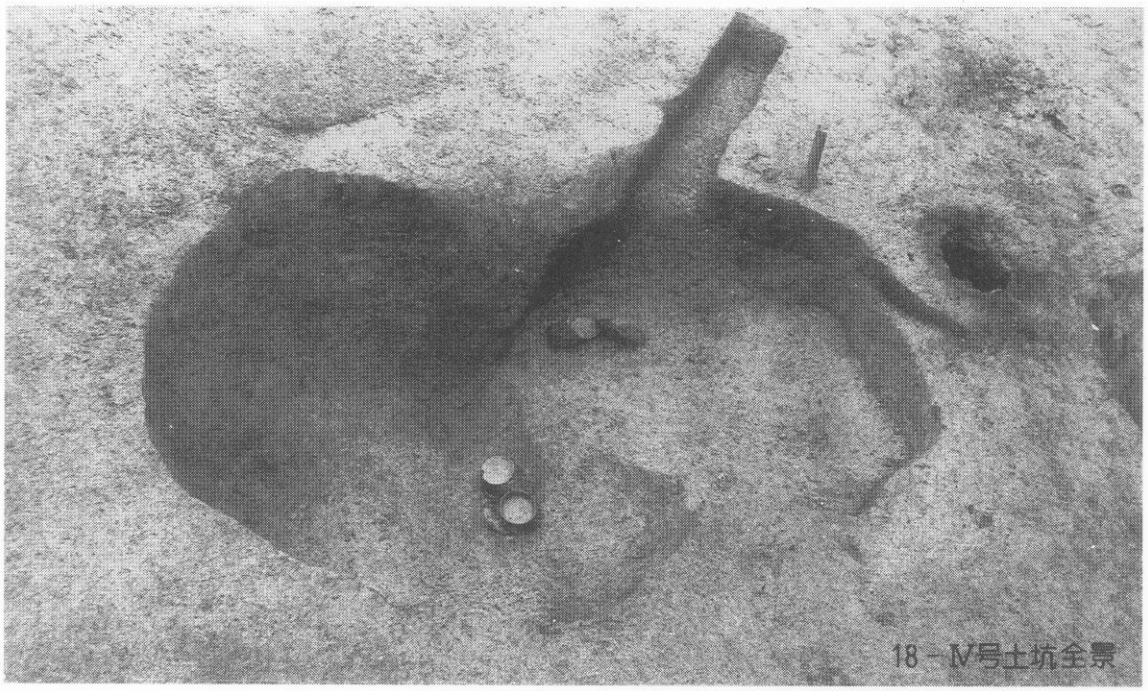
同左



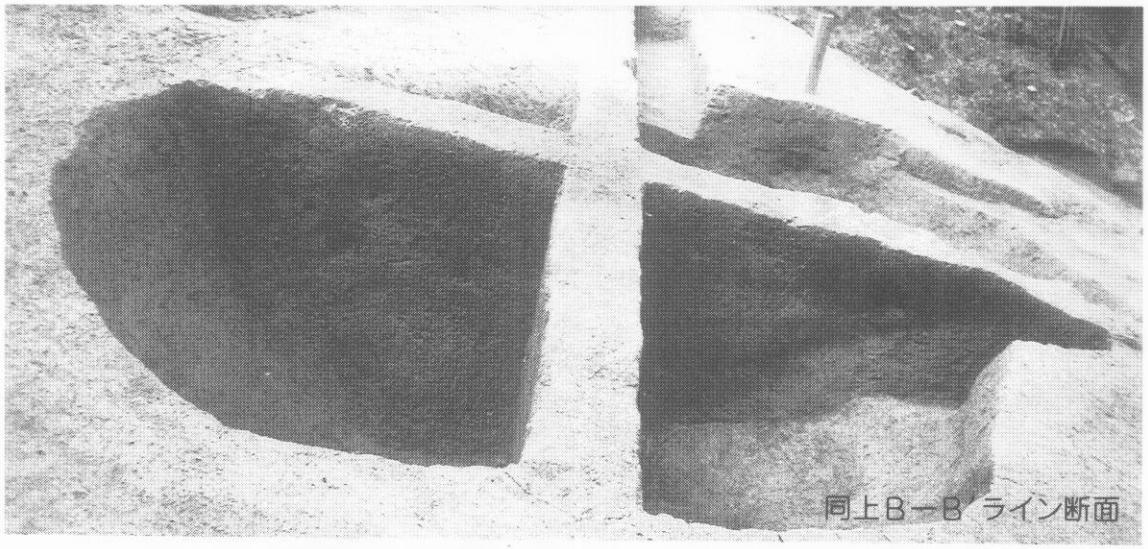
19号窯煙道たちわり



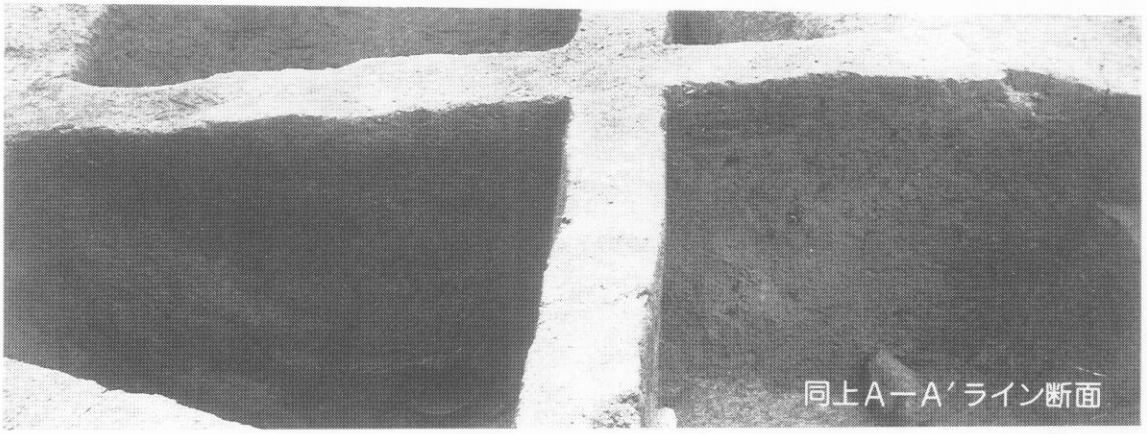
同左



18－Ⅳ号土坑全景



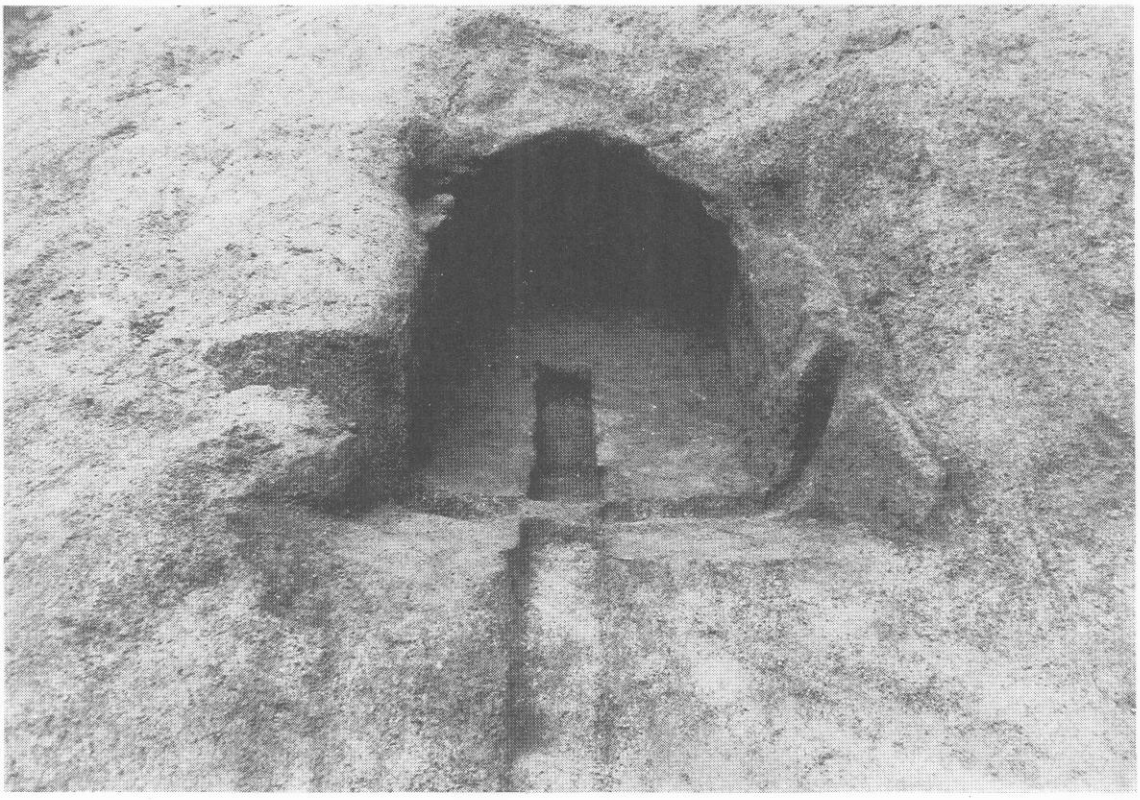
同上Ｂ－Ｂ′ライン断面



同上Ａ－Ａ′ライン断面



19号窯全景



同上たちわり後



19号窯最終ベース上土器群



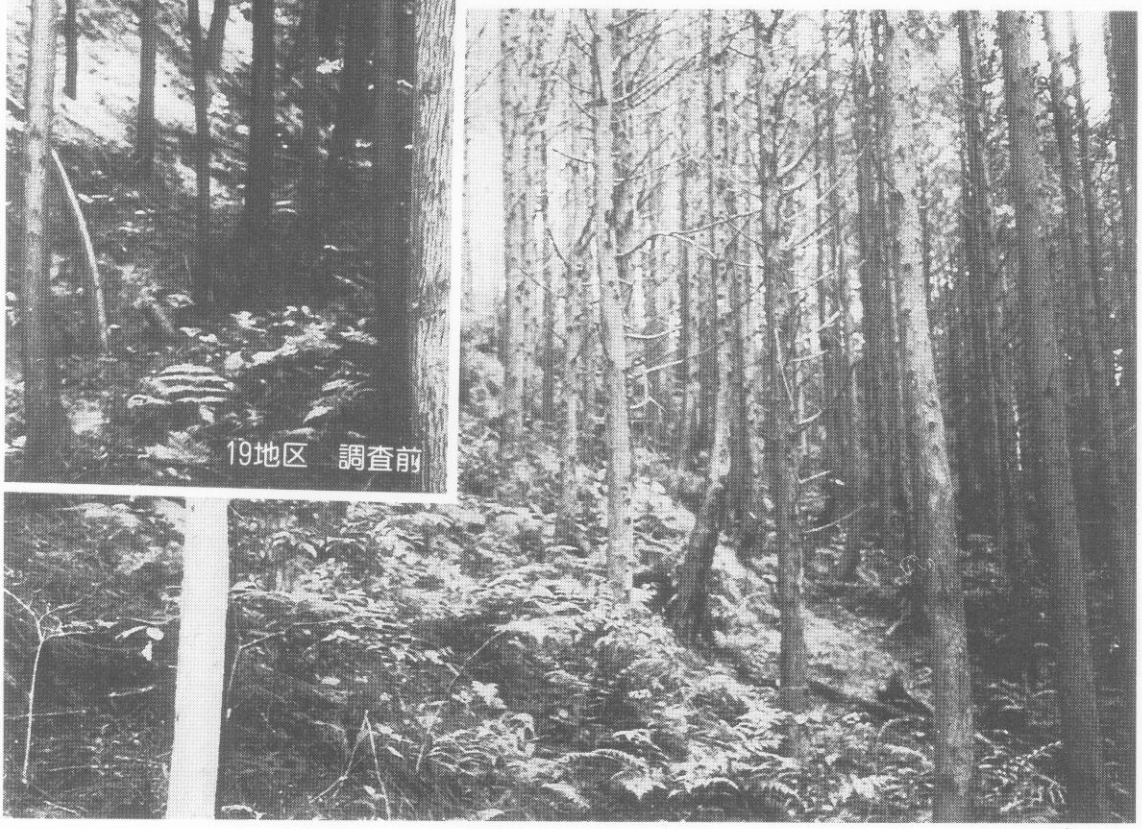
同　上



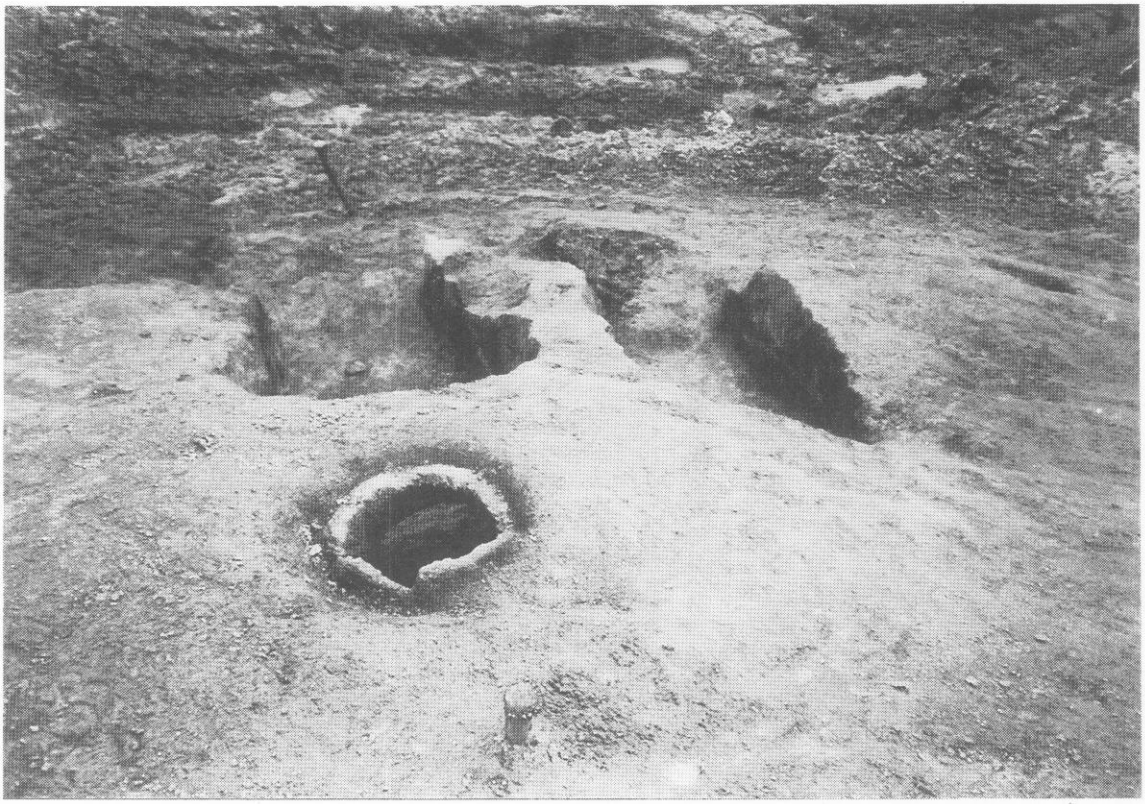
20地区　調査前



19地区　調査前



同　上



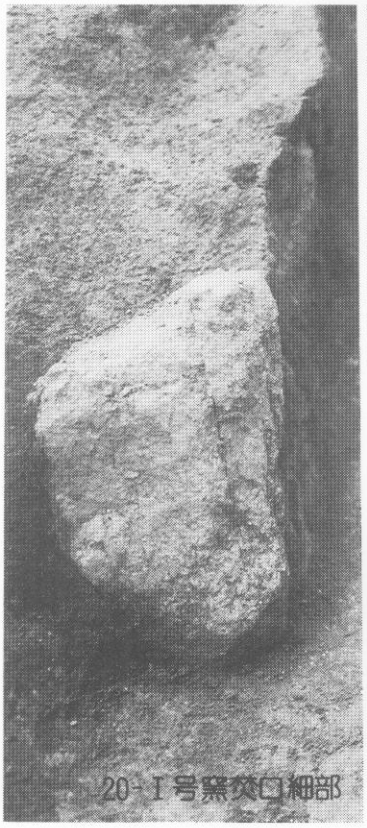
20－Ⅰ・Ⅱ号窯煙道部



同上たちわり後全景



20-Ⅰ号窯全景



20-Ⅰ号窯焚口細部



20-Ⅰ・Ⅱ号窯焚口部側景



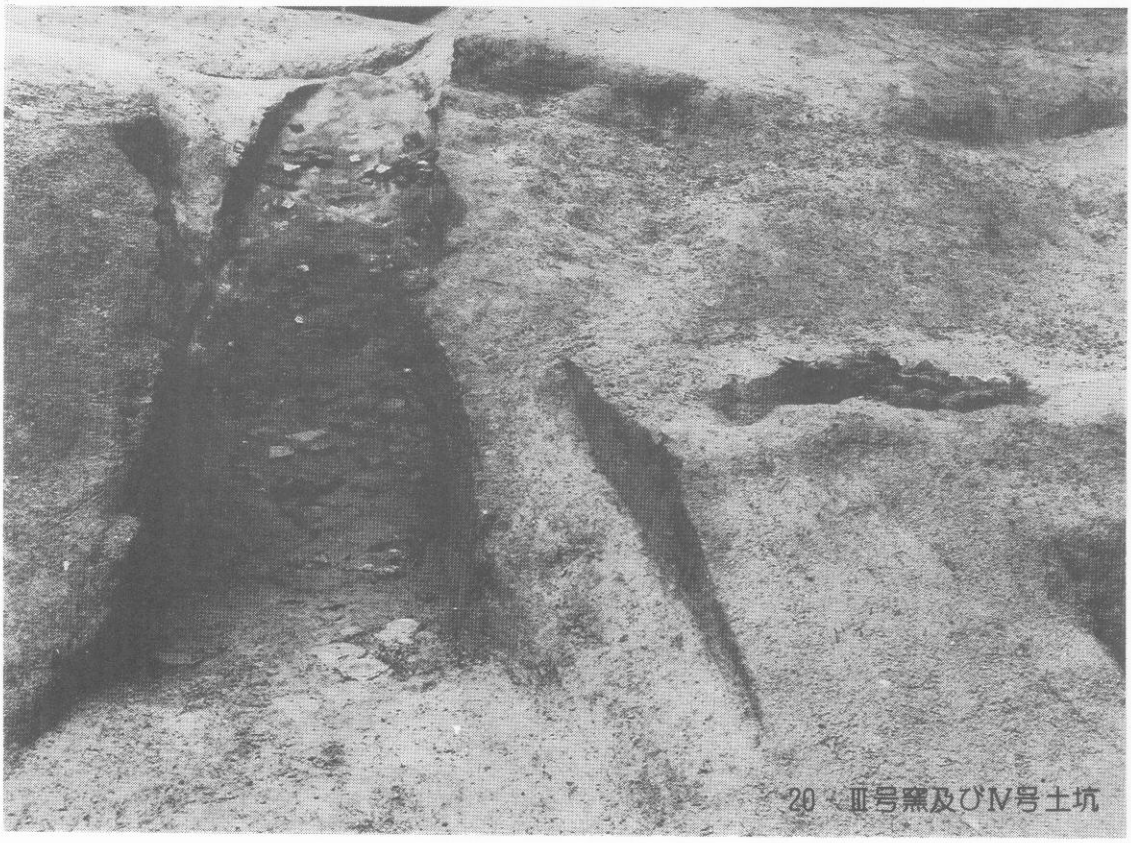
20－Ⅱ号窯全景



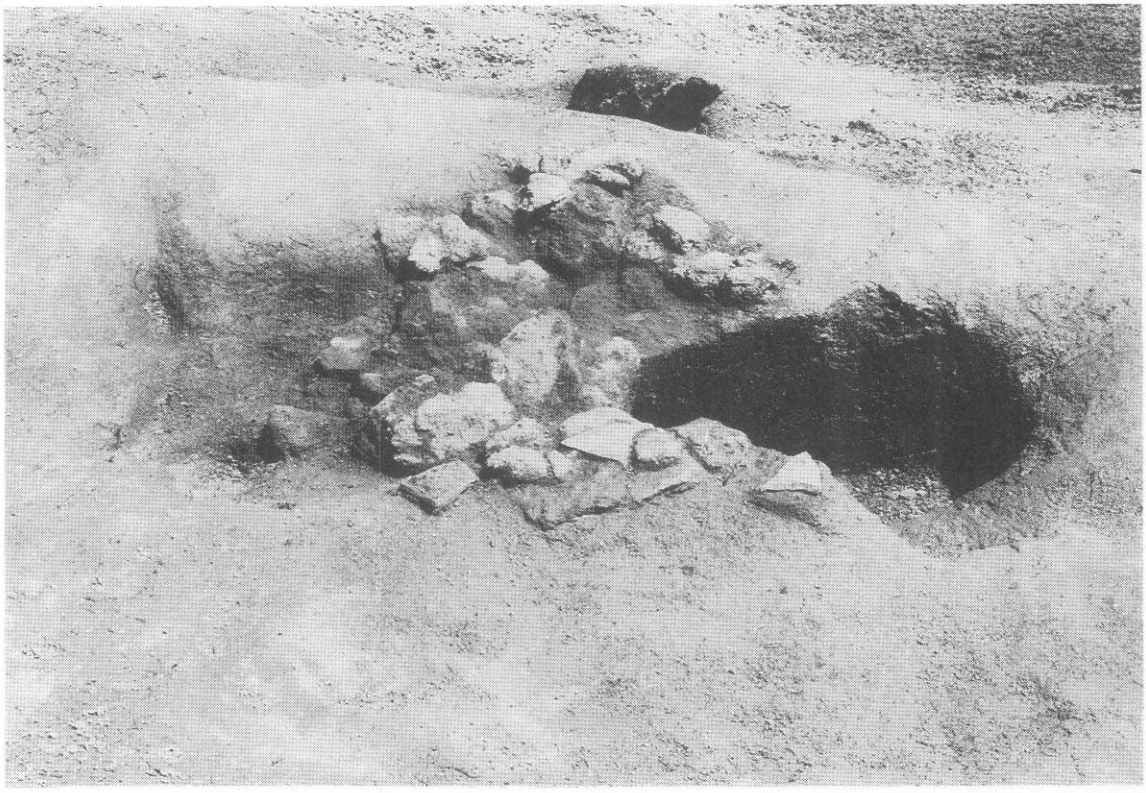
20－Ⅱ号窯たちわり後全景



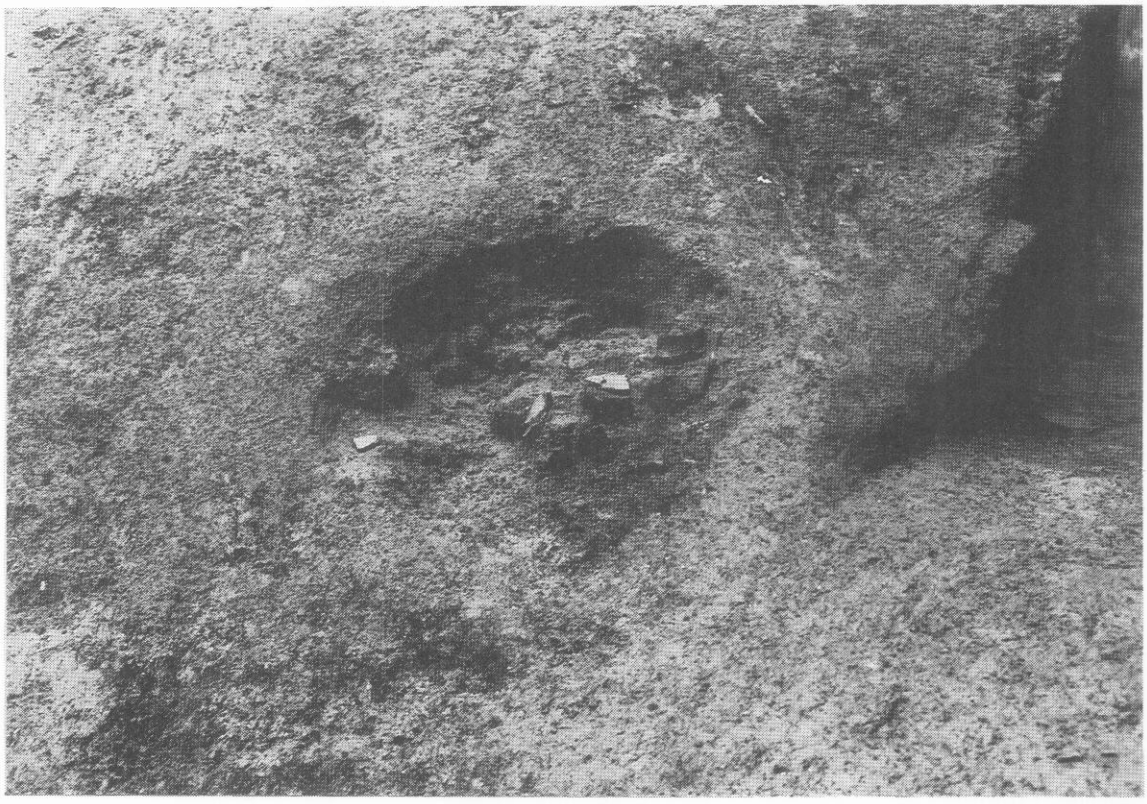
20　Ⅲ号窯全景及びⅥ号土坑



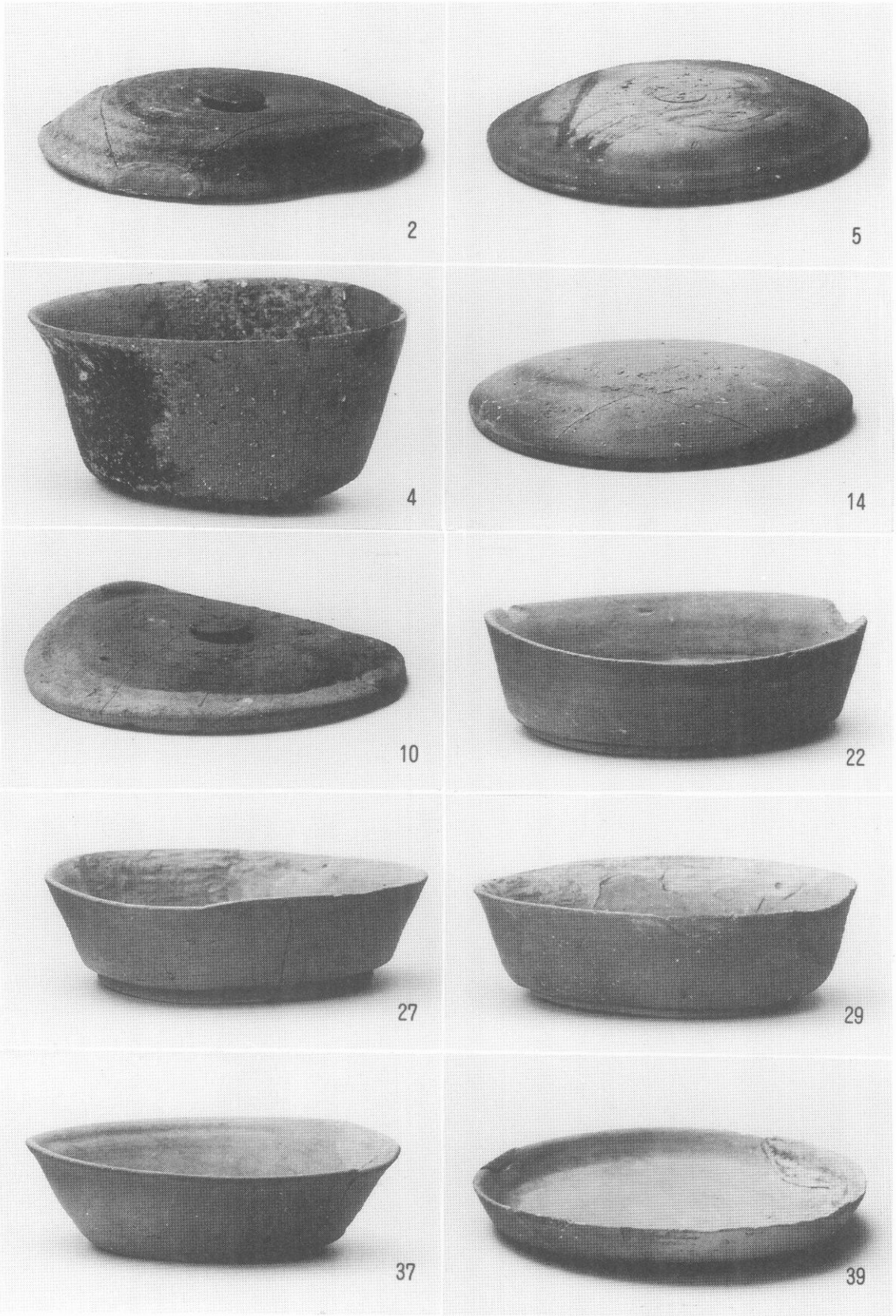
20　Ⅲ号窯及びⅣ号土坑



20—Ⅳ号土坑全景

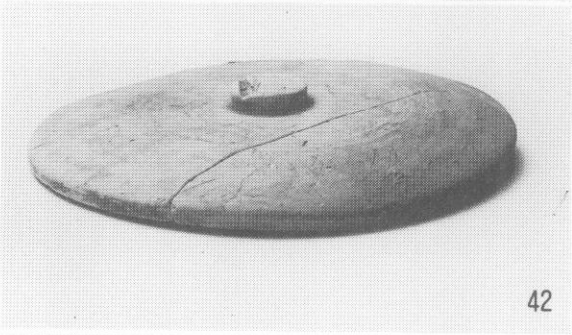


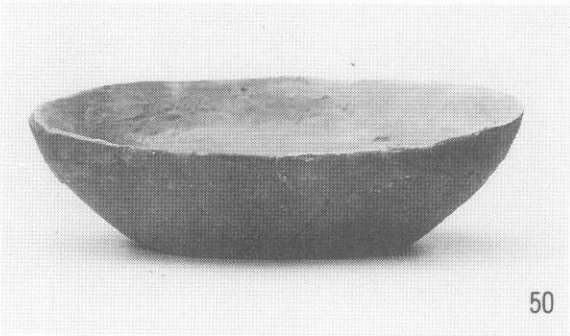
20—Ⅵ号土坑全景



18—Ⅰ号窯窯体内最終ベース上（2、4、5）
18—Ⅰ号窯窯体内（10、14、22）
18—Ⅰ号窯窯体上遺構（27、29、37、39）


40


42

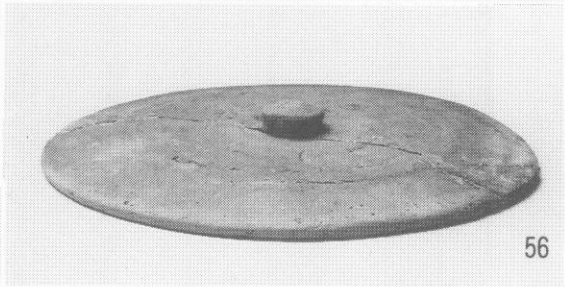

50

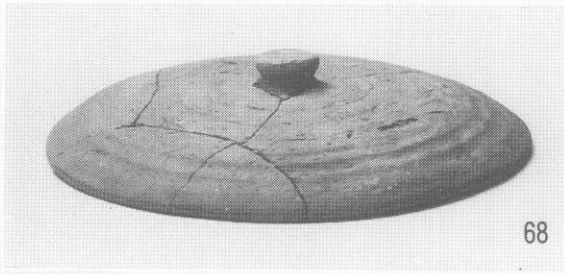

97


同上底部外面


41

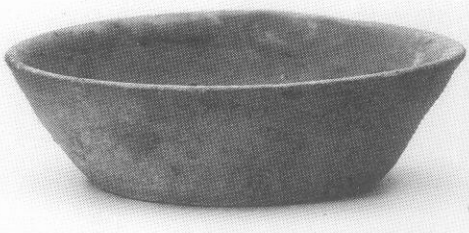

44


56

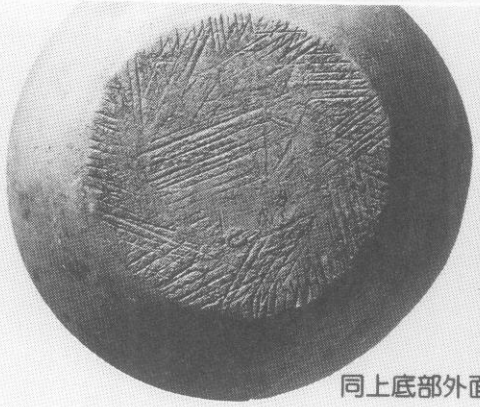

68


69

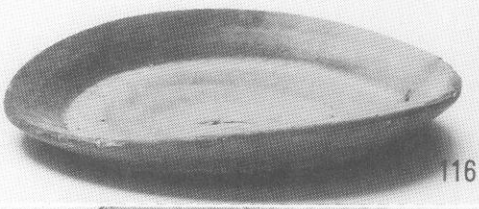
18—Ⅰ号窯窯体上遺構　（40、41）
18—Ⅱ号窯窯体内最終ベース上（42、44、50）
18—Ⅱ号窯窯体内埋土中　（56）
18—Ⅲ号窯窯体内最終ベース上（68、69）

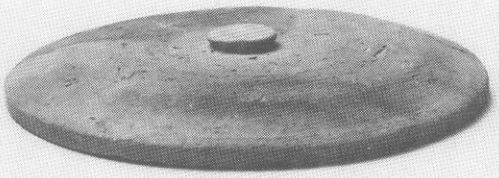

98


110

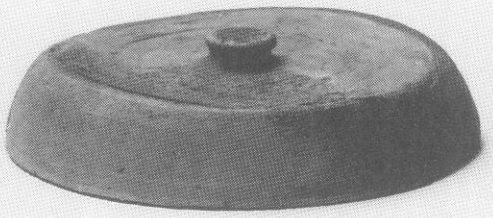

同上底部外面

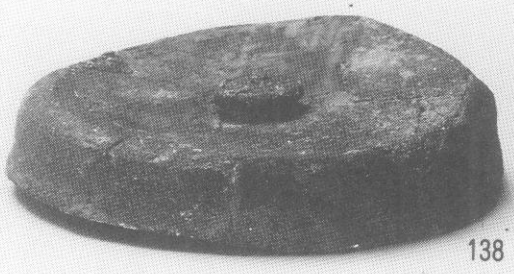

同上底部外面


116


135

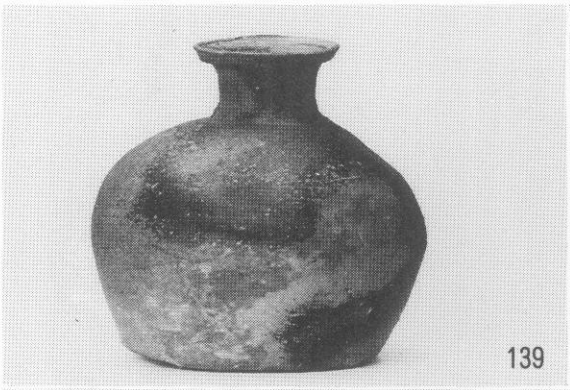

上底部外面


137


138

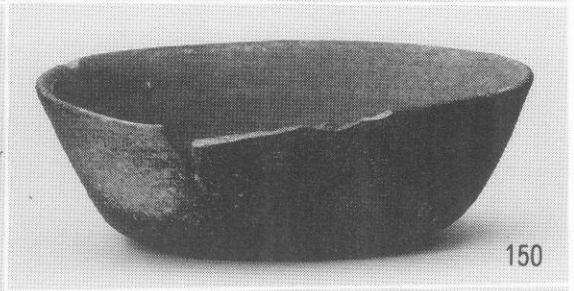

143

18—Ⅲ号窯灰原灰層中（98、110、116、135、137、138、143）


139


140


149

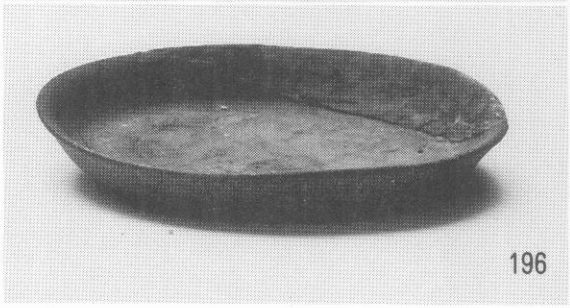

150


168


154


181

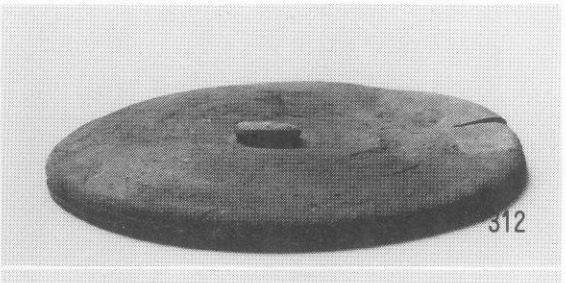

186

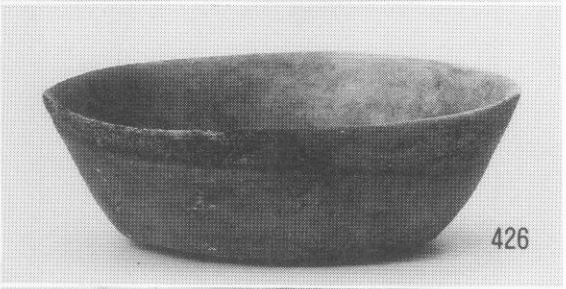

196

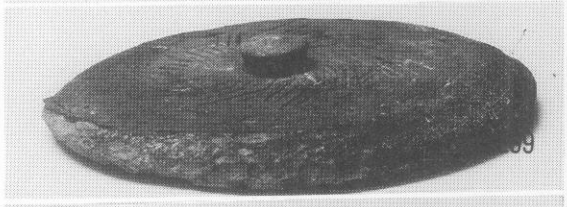

同上底部外面

18—Ⅲ号窯灰原灰層中（139、140、168、181、186、196）
18—Ⅲ号窯北拡張部　（149、150）


299


312


426




430


同上底部外面

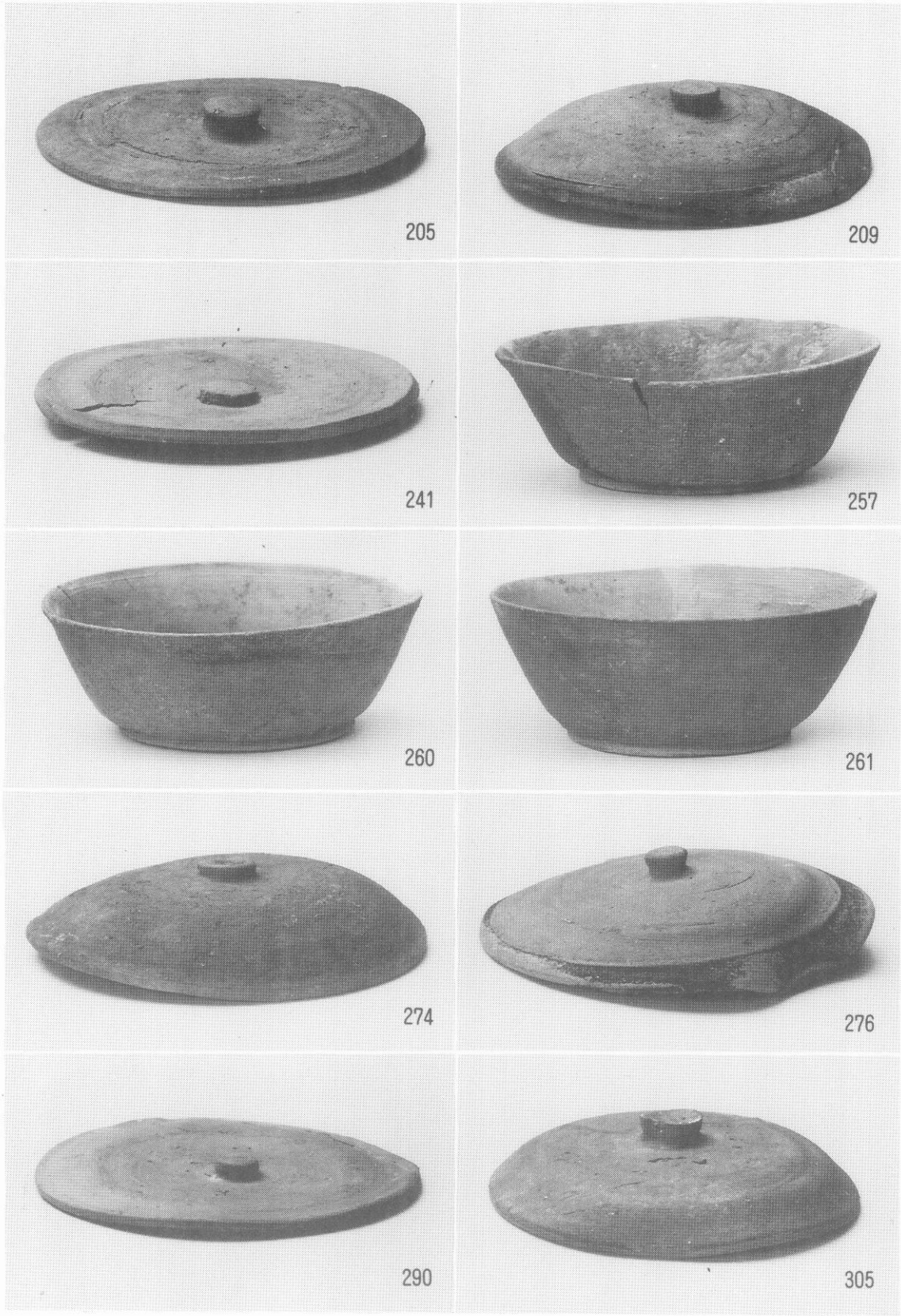

431


445


同上底部外面

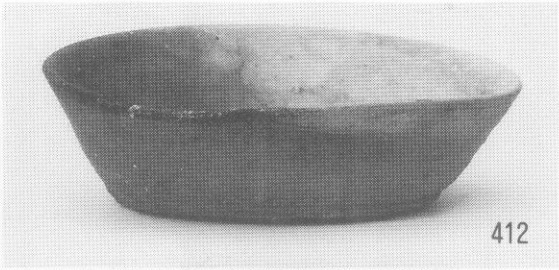

同上底部外面

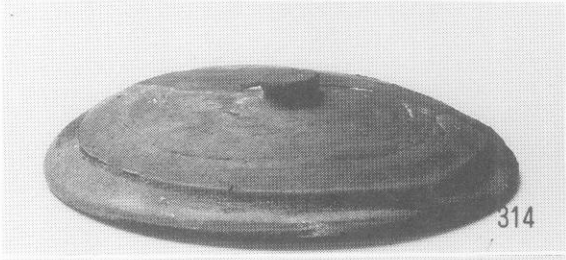
18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中（299、312、426、430、431、445）

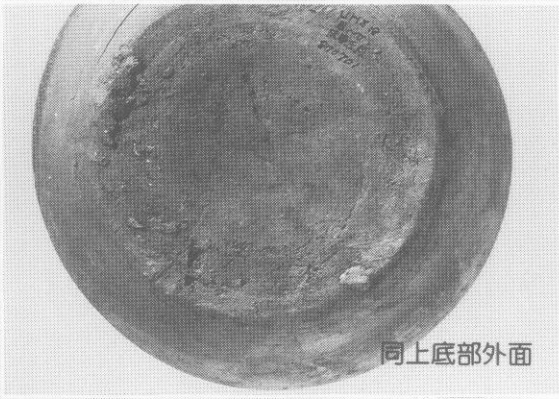


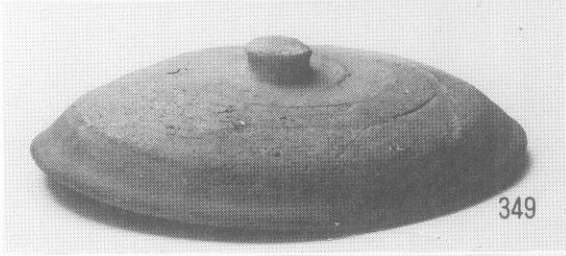
18—Ⅲ灰原灰層中　(205、209)
18—Ⅴ号窯窯体内最終ベース上　(241)
18—Ⅴ号窯窯体内埋土中　(257、260、261)
18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中　(274、276、290、305)


402


412


314


同上底部外面

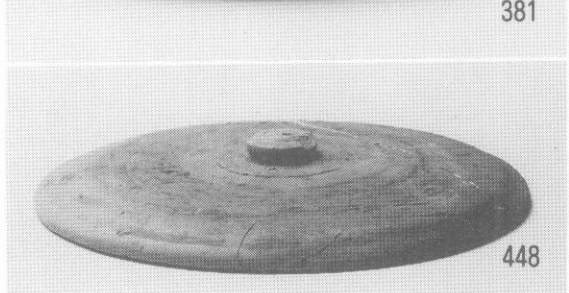

349


380


362


380

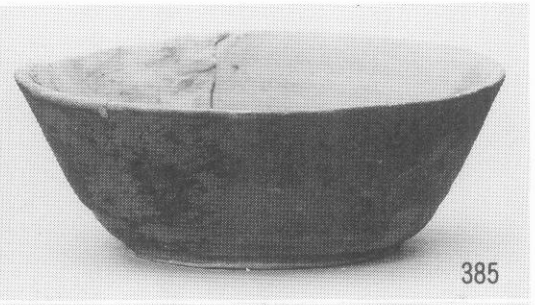

381

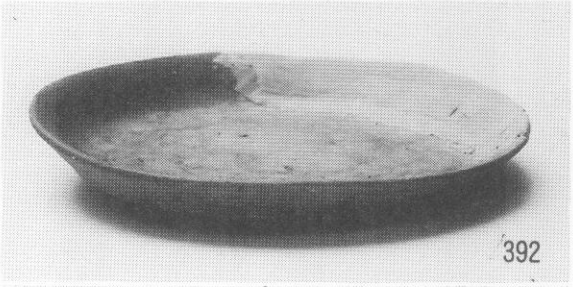

448


458

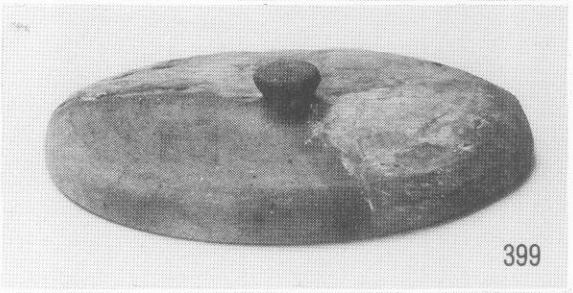
18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中（402、412、353）
18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原採集　（314、349、362、380、381）
18—Ⅵ号窯窯体内最終ベース上（448）
18—Ⅵ号窯窯体内埋土中　（458）


382


385


392


396


399


400

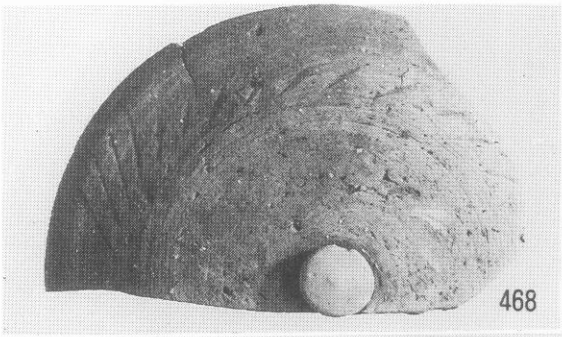

401


411

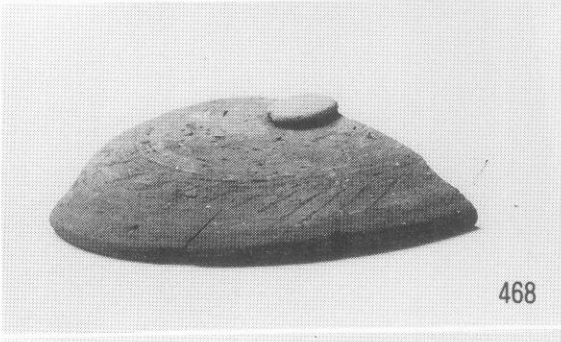

同上底部外面


同上底部外面

18—Ⅲ～Ⅴ号窯灰原灰層中（382、385、392、396、399、400、401、411）


468


471


468


480

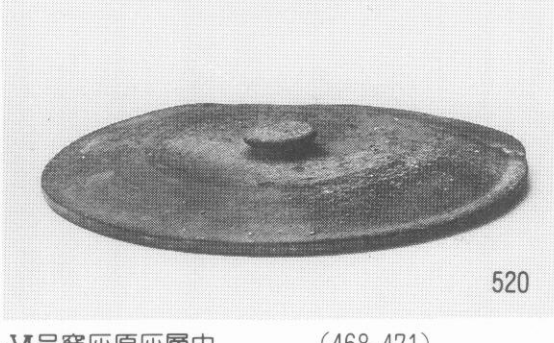

500


507

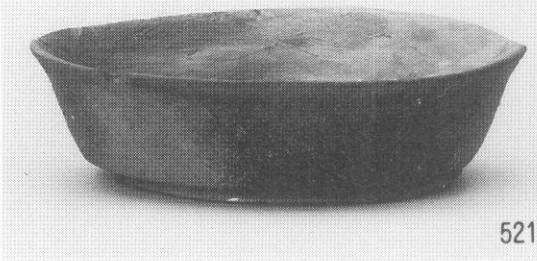

510

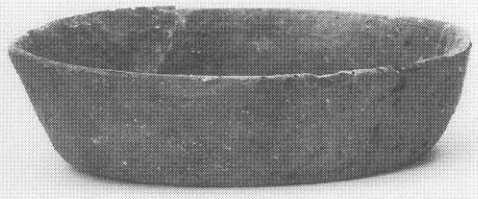

508


506

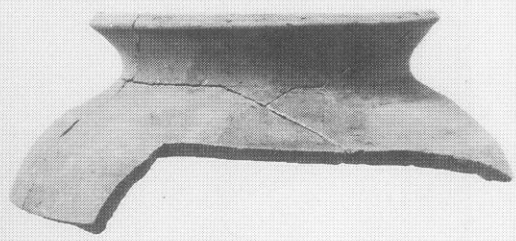

520

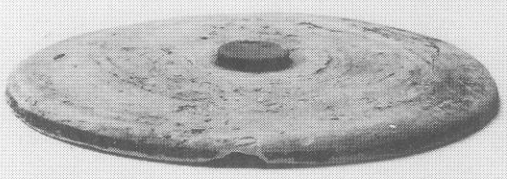
18—Ⅵ号窯灰原灰層中　（468、471）
18—Ⅶ号窯窯体内焚口付近　（480）
18—Ⅷ号窯窯体内最終ベース上（500）
18—Ⅷ号窯窯体内埋土中　（506、507、508、510）
18地区灰原Ａ区　（520）

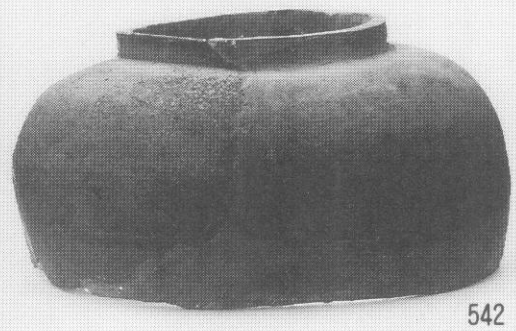

521


536

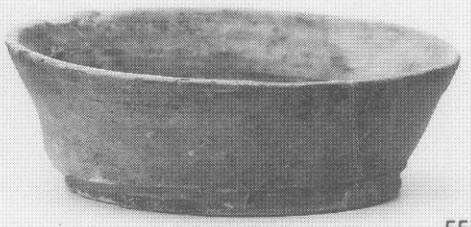

537


538


549


542

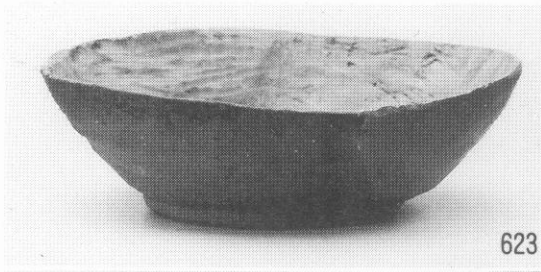

550

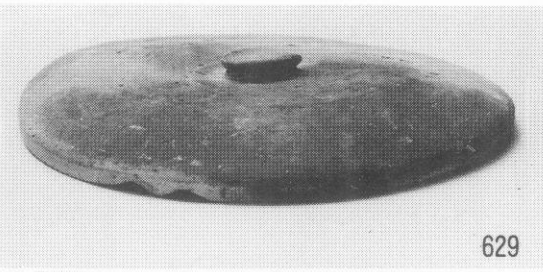

551

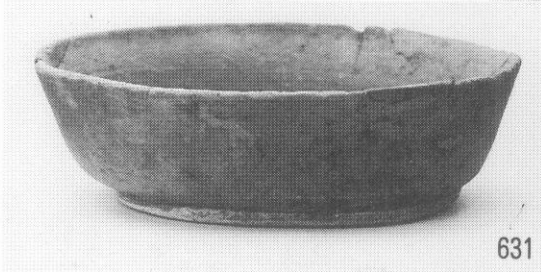

553

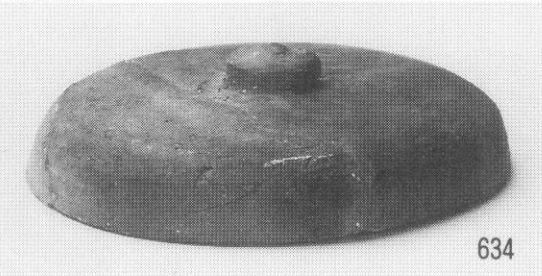

554

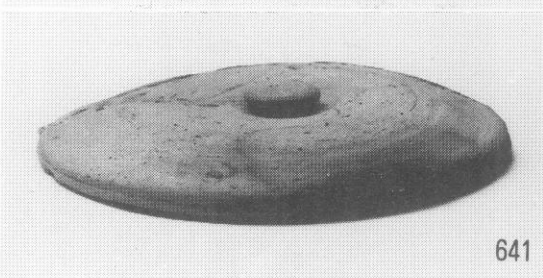
18地区灰原A区 (521)
18地区灰原B区 (536、537、538)
18地区灰原C区 (542)
18地区灰原D_1区 (549、550、551、553、554)

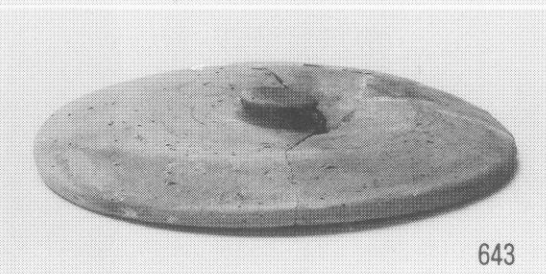

623

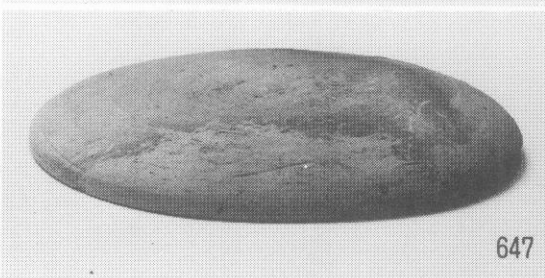

629

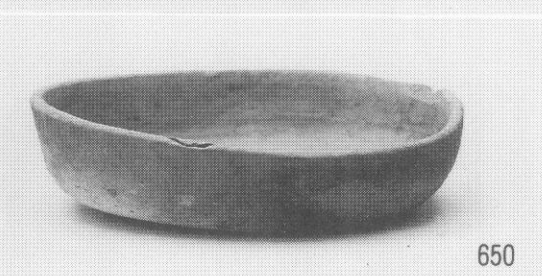

631

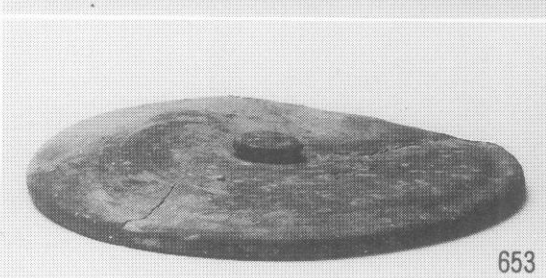

634


641


643


647


650


653


655

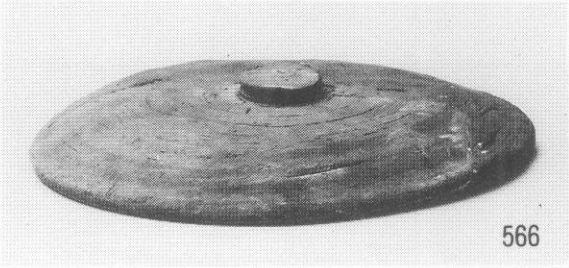

657


699

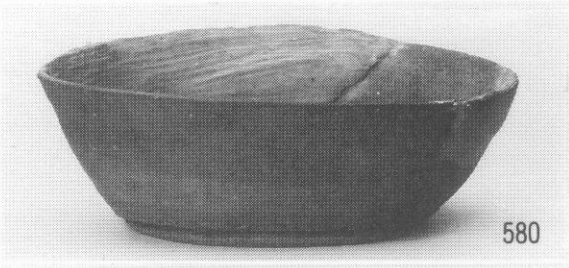
18地区灰原採集　（631）
19号窯窯体内最終ベース上　（623）
19号窯窯体内埋土中　（629、634）
20—Ⅰ号窯窯体内埋土中　（641、643、647、650、653、655、657）
20—Ⅲ号窯窯体内最終ベース上（699）

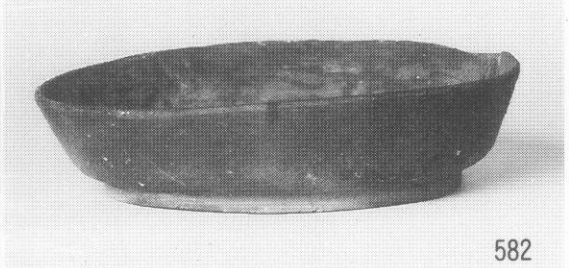

555


565


566

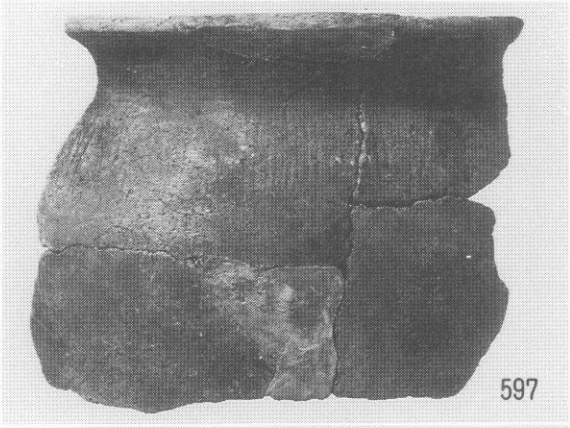

576

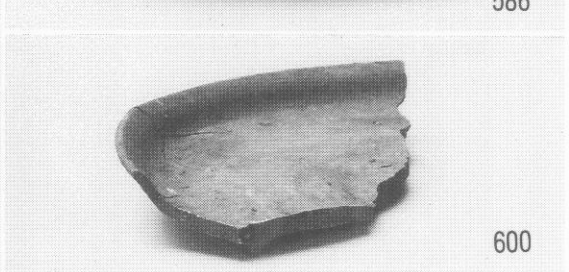

580

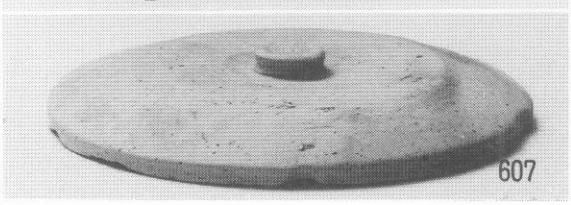

582

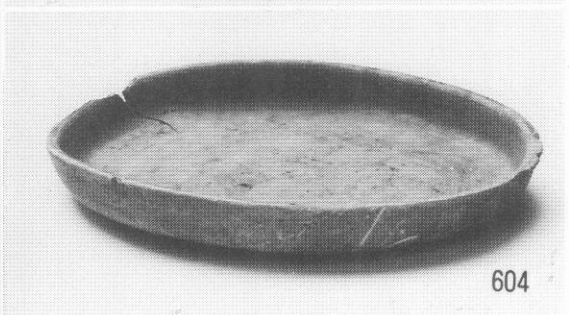

585


586


597

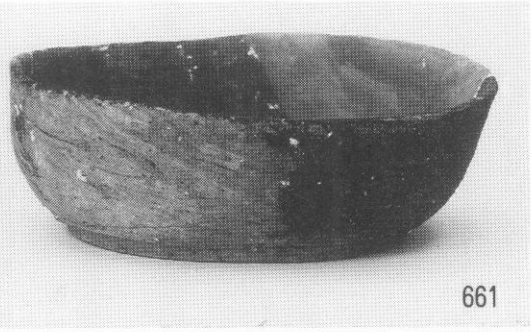

600

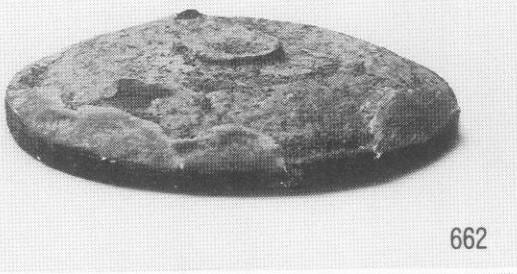

607

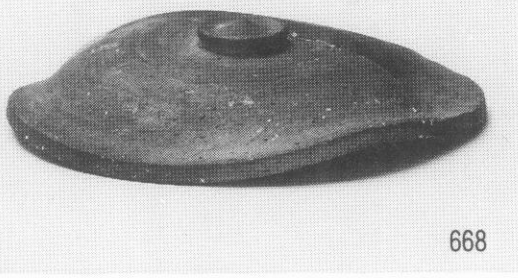

604

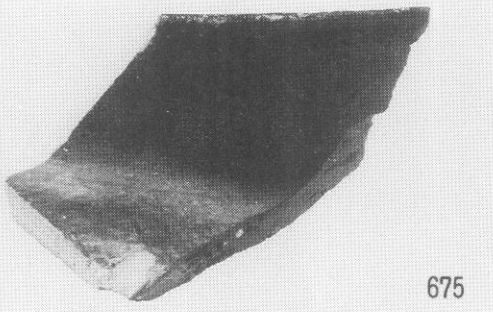
18地区灰原D1区　（555）
18地区灰原採集　（565、566、576、580、582、585、586、600、604）
18地区下方灰原採集　（597）
19号窯窯体内最終ベース上（607）

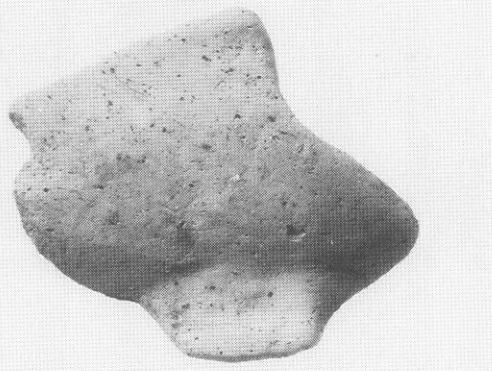

659

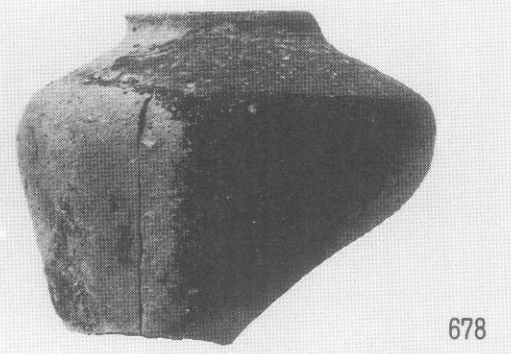

661

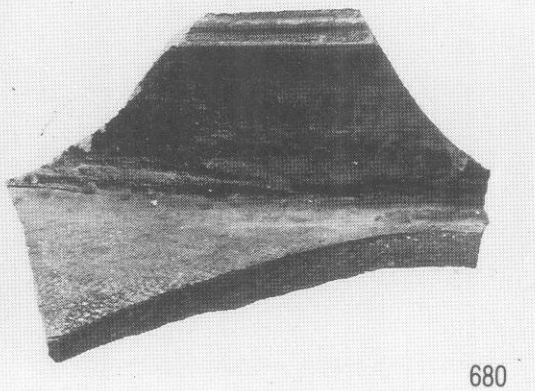

662

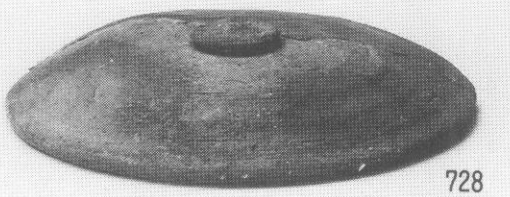

668


675


677


678


680


728

20—Ⅱ号窯焚口　（659、661、677、678）
20—Ⅱ号窯灰原灰層中　（662）
20—Ⅱ号窯灰原採集　（668、675）
20—Ⅲ号窯灰原採集　（680）
20—Ⅲ号窯窯体内埋土中（728）

大野城市文化財調査報告書
第23集

昭和63年3月31日

発　行　　大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2番1号

印　刷　　サンキ印刷株式会社